

石原貝塚・西和田貝塚

—大分県宇佐平野周辺の縄文時代貝塚の調査—

1979.3

宇佐市教育委員会

大分県教育委員会

序

文

昭和48・49年度に発掘調査を実施した、石原貝塚・西和田貝塚の調査報告書をここによりよく刊行することができました。

石原・西和田両貝塚は、以前発掘調査を実施した立石貝塚等とともに、東九州でもっとも貝塚遺跡が集中する周防灘沿岸の重要な貝塚であります。ともに大規模圃場整備事業という開発に伴う緊急調査でありましたが、考古学と人類学が協同して成果をあげることができました。なお、本報告書では、宇佐平野周辺の貝塚の資料についても集成し、周防灘沿岸（大分県分）の貝塚について全体的視点での考察を付しました。一部整理の時間的制約等で成果を掲載しえなかった分もありますが、本報告書が今後の調査研究、および文化財保護思想の啓蒙に広く活用されるものと信じております。

なお、調査から執筆にいたるまでご尽力をいただきました、別府大学賀川光夫教授および長崎大学医学部内藤芳篤教授をはじめ調査員諸氏、調査中に協力を惜しまれなかった地元の方々に対し、心よりお礼申し上げます。

昭和54年3月31日

大分県教育委員会教育長

矢 野 朔 雄

例 言

1. 本書は大分県教育委員会と宇佐市教育委員会が昭和48・49年度に実施した、宇佐市所在の石原貝塚および西和田貝塚の発掘調査報告書である。なお、宇佐平野の周辺の貝塚についても資料を集成し、考察を加えた。
1. 西和田貝塚は圃場整備事業の施行中に発見されたため、工事を中断し緊急発掘調査を行ったものである。石原貝塚は圃場整備と採土工事に先立って行なった緊急発掘調査である。
1. 本書の執筆は、賀川光夫・小倉正五・清水宗昭・坂本嘉弘・栗田勝弘・城戸 誠が担当した。人骨については、全面的に長崎大学医学部内藤芳篤教授にお願いした。
1. 本書は主として考古学部門と人類学部門の報告に限った。自然遺物については、整理中のため本書では省略した。
1. 遺跡・遺物の実測図作成は調査員および調査補助員があたり、製図は主として坂本が行なった。
1. 本書の編集は賀川光夫の指導のもと、小倉・清水・坂本が協議し、主として坂本が当たった。

目 次

I 宇佐平野の遺跡とその調査

1. 大規模圃場整備事業と遺跡調査……………(小 倉) …… 1
2. 豊前地方の縄文(後期)時代文化の研究……………(賀 川) …… 2

II 石 原 貝 塚…………… 5

1. 遺跡の立地と環境……………(清 水) …… 5
2. 遺 跡 の 調 査……………(清 水) …… 6
 - 1) 調 査 の 経 過…………… 6
 - 2) 調 査 区 の 設 定…………… 7
 - 3) 調 査 区 の 層 位…………… 9
3. 出 土 遺 物……………12
 - 1) 土 器……………(坂 本) ……12
 - (1) 縄 文 土 器……………12
 - (2) 弥 生 土 器……………18
 - 2) 石 器……………(清 水) ……20
 - 3) 玦 状 耳 飾……………(清 水) ……23
 - 4) 土 偶……………(坂 本) ……23
4. 人 骨 の 埋 葬……………(清 水) ……24
5. 石原貝塚出土の縄文時代人骨……………(内藤・分部) ……26
6. ま と め……………(清 水) ……32

III 西 和 田 貝 塚……………(坂 本) ……34

1. 遺跡の立地と環境……………34
2. 遺 跡 の 調 査……………35
 - 1) 調 査 の 経 過……………35
 - 2) 調 査 区 の 設 定……………35
 - 3) 遺跡の層位と貝層の範囲……………35
3. 出 土 遺 物……………37
 - 1) 土 器……………37
 - (1) 上層(貝層)出土土器……………37

(2) 下層（黒褐色土層）出土土器	43
2) 骨 角 器	57
3) 石 器	57
4) 土器片利用品（メンコ）	61
5) 攪乱層出土遺物	61
(1) 土 器	61
(2) ナイフ形石器	63
4. ま と め	63
IV 宇佐平野周辺の縄文遺跡	
1. 入 垣 貝 塚	（坂 本） 65
2. 植 野 貝 塚	（ “ ） 66
3. 高畑（中津南高グラウンド）遺跡	（ “ ） 67
4. 立石（貝塚）遺跡	（栗 田） 68
5. 来 縄 貝 塚	（坂 本） 70
6. 森 貝 塚	（ “ ） 70
7. ワラミノ遺跡	（ “ ） 79
8. 石 町 遺 跡	（城 戸） 80
V 考 察	84
1. 宇佐平野の貝塚概観	（清水・坂本） 84
2. 宇佐平野周辺出土の縄文後期土器	（坂 本） 86
1) 阿高系凹線文土器について	86
2) 瀬戸内系土器について	88
3) 鐘ヶ崎系土器について	90
4) 後期後半から晩期の土器について	93
3. 宇佐平野周辺の縄文後期土器編年	（坂 本） 94
VI 総 括	（賀 川） 98

Ⅰ 宇佐平野の遺跡とその調査

1. 大規模圃場整備事業と遺跡調査

石原・西和田貝塚の調査について述べる前に、調査の原因となったところの宇佐市の大規模圃場整備事業と、それに対して行ってきた遺跡調査について簡単な説明を加えておくことにする。

宇佐市域の中央部を流れる^{ヤツカン}駅館川は、九州有数の河川であり、その流域には広大な水田地帯を発達させている。しかし、河川の水利施設は乏しく、例年干ばつや水害の被害が発生した。昭和39年、上流部のダム建設、井堰の統廃合など水利施設を完備するとともに、機械化による農業の近代化をめざして、用排水路、及び道路によって区画される大規模圃場整備事業が計画された。この事業は、市内の水田地帯のほぼ全域に相当する 5,300haを対象に進められてきた。工事が本格化したのは昭和45年度以降であったが、その以前にも、宇佐市発足前の旧町時代から、部分的な圃場整備事業は実施されていた。

この大規模開発に対して、遺跡保護のための対策がとられはじめたのは昭和45年度からである。大分県教育委員会はこの年、別府大学、市教育委員会の協力によって、市内の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、300余の遺跡が確認され、遺跡の保存に対する関係者の認識を新たにさせた。以後、53年度事業が実施された今日まで、毎年市内各地で遺跡の発掘調査が実施されてきた。この事業は他の開発と異り、広大な面積を作付期間内に完了させ、しかも事業費が一部農民負担を伴うなど、あらゆる面で遺跡の調査保存にとって条件の悪い開発事業であった。ために、記録保存の名のもとに多くの遺跡が消滅した。しかし一方では、別府遺跡の朝鮮式小銅鐸の発見など、宇佐の古代史研究が一連の調査によってかつてない進展を見せたのも事実である。研究の進展は進行する遺跡破壊と相俟って、市民の遺跡保護に対する意識を喚起し、川部・高森地区の古墳群を中心とした風土記の丘建設、法鏡寺廃寺跡の買収保存、及び部落の用地寄附による京徳遺跡の保存などが実現した。

このように、弥生時代以降についての研究と遺跡保護は、一応の成果をあげることができた。しかし、それ以前の時代については多くの問題をのこしている。とりわけ、市内には縄文後期の貝塚が多く発見されており、立石貝塚が46年と52・53年、石原貝塚が48年、西和田貝塚が49年に、いずれも圃場整備事業に伴って調査がなされた。大規模圃場整備事業は、55年度工事をもってほぼ完了しようとしている。この機に刊行される本報告書は、両遺跡を記録的に復元するばかりではなく、数少なくなった当地方の縄文遺跡について研究を深め、縄文遺跡の保存について市民の理解を得るための資料ともならねばならない。

2. 豊前地方の縄文(後期)時代文化の研究

中津、宇佐一帯の先史時代研究は東木竜七氏の「旧森湾」と題する先史地理的考察(東木1927)からはじまる。この研究は、桂川(田染川)、寄藻川など、豊後高田市、宇佐市などの水系をあつめて形成される周防灘東南部の沖積平野に対する研究で、周辺の地形を参考としながら貝塚と貝塚を結んで汀線とする。桂川の河口から約4 kmにある森貝塚(縄文後期)を湾の深部とするところから「旧森湾」なる想定がなされたものと考え。こうした科学的根拠にもとづく研究をふまえて、樋口清之、入江英親の両氏による森貝塚の調査(樋口1931)がおこなわれ、「旧森湾」一帯における縄文後期貝塚の分布と概要が明らかにされた。樋口清之氏の森貝塚の調査は、豊前一帯に点在する縄文後期遺跡・遺物の性格を明確にしめし、今日問題とされている所謂磨消縄文文化の特徴をあげた。

磨消縄文の研究を九州で学史的にみてみると、福岡県宗像郡玄海町上八にある鐘ヶ崎貝塚(田中1936)をあげて「鐘ヶ崎式土器」という名称がつけられた。一方小林久雄氏は、「肥後縄文土器の編年」という論文を発表し「御手洗B式」(小林1935)をあげ、磨消縄文研究の先駆的研究をなしている。九州の磨消縄文土器の大系は、後に「小池原式土器」という名称で四国平城貝塚の土器(鎌木1957)と対比(賀川1964)されることでいおうの確立をみた。この間、三森定男、小林久雄の両氏などの研究によって更に磨消縄文土器の西日本全域の広がりが見出され(三森1938、小林1939)された。このように所謂鐘ヶ崎式、御手洗B式、小池原式という名称の磨消縄文が、「磨消縄文Ⅱ式土器」(賀川1965)という名称で統一されて、それぞれの類型を把握することができれば今後の研究に統一した見解のもとで問題の整理と新たな問題を見出すことができると考えている。

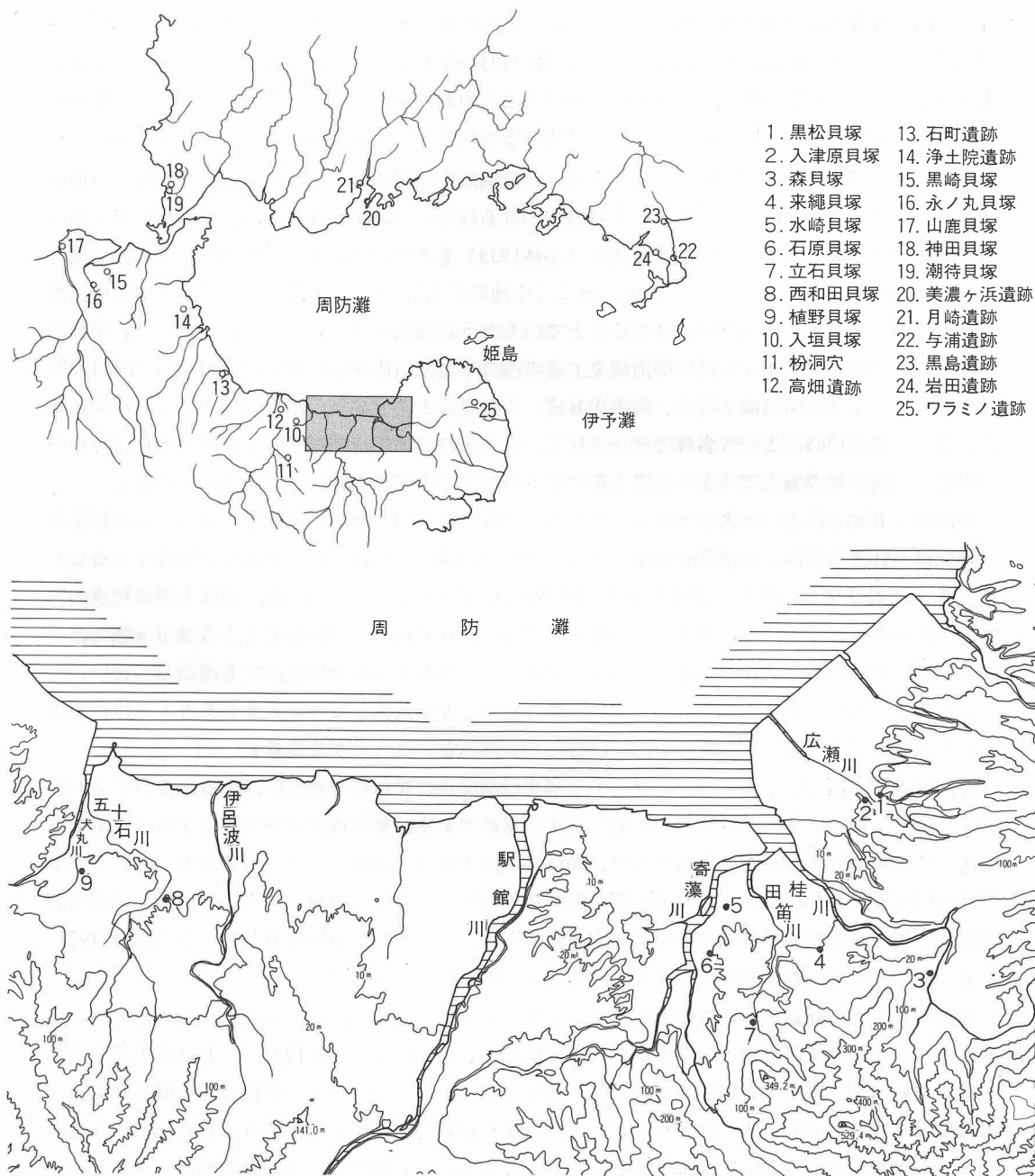
磨消縄文Ⅱ式土器という名称で統一してみると口縁部断面が朝顔状に肥厚し、頸部に橋状把手を取り付けた鉢形土器に、磨消縄文を施文するという一般論的見解は、各所で意見の相違をみることになる。これまでの研究が、飾られた土器の集成的傾向が強いところから、同類土器の組成的研究の欠除があったことは否定できない。加えて文様や、施文技法の単純観察による類型分類であったことで、正確に科学的根拠にもとづいての分析であったかどうかという点でも問題なしといえない。そのような視点で磨消縄文Ⅱ式土器の系類をもう一度みなおしてみる必要があることは確かである。最近の研究者はそうした問題を主として検討しつつあるといえることができる。

近次、瀬戸内西部の泥海性沿岸に立地する縄文後期文化の性格を子細に検討する風潮があらわれてきた。中・四国にまたがる共通の問題に対する整理である。磨消縄文を施文する土器の源流の空間的、時間的流動や経過を考えるうえで、瀬戸内海沿岸地域との対比研究は重要であった。その中で磨消縄文Ⅱ式文化の対比に東九州と西四国の相対的検討は興味をひいた。大分市小池原貝塚の磨消縄文土器と、愛媛県平城貝塚の出土土器の相違点は、黒曜石などの原産地からの交易(木村1978)など、土器以外の分野の研究にも派生して興味深い問題を提起しつつある。

磨消縄文文化の経過についての関心を高めようとするれば、当然源流の問題にふれねばならぬ。中国地方での磨消縄文確立期は、岡山県倉敷市玉島黒崎、中津貝塚(水原1935)における土器形式である。口縁部「く字」形、胴上半がしめる深鉢形土器を主に、磨消縄文、巻貝による擬似縄文、沈線文などを刻むもので、広島県帝釈峡寄倉遺跡(帝釈峡調査団1964)などでみられる縄文に沈線文を施し磨消技法をみない中期末土器から発展が考えられる。瀬戸内一帯に磨消縄文の盛期をむかえるのは岡山市福田貝塚出土の福田KⅡ式(松崎・間壁1969)で植木鉢形・皿形の器形に三本線の

沈線を施し、その間に縄文をみるという文様構成をなす。この土器の盛期にややおくれて縁帯文として磨消縄文が施される。津雲A、彦崎K Iなどがそれである。瀬戸内海沿岸では、磨消縄文の直線化という形式で、口縁部と、胴部に沈線文間の磨消縄文がみられるが、その標式を岡山県児島市灘崎町彦崎貝塚（山内1951）にみることができる。

中国地方、瀬戸内海沿岸地方の磨消縄文を、大別して確立期、盛期、縁帯文化期、直線期の4時期



第1図 宇佐平野と周辺の縄文時代遺跡位置図

に分類し、これを九州のそれにあてるとなれば、磨消縄文Ⅰ式（確立期・盛期）磨消縄文Ⅱ式（縁帯文化期・鐘ヶ崎）磨消縄文Ⅲ式（直線文期・西平）と分類できる。磨消縄文Ⅰ式が、瀬戸内の確立期、盛期と二分できるかどうかについての検討は九州各地でいまひとつ研究を重ねなければならない。

さて、中津、宇佐両地域での縄文後期遺跡の調査は、1971年以来相継いで重要な貝塚の調査が実施された。宇佐市域では、1971年に「旧森湾」一角の立石貝塚（賀川他1974）（その後集落地に点在する多数貝塚が扇状地に馬蹄形に存在することがわかる。1977～1978年にかけての調査）が調査されたのをはじめ、1973年石原貝塚、1974年西和田貝塚の調査がおこなわれた。これらの調査はいずれも駅館川大規模圃場整備事業による農地の構造改善事業で、造成中において発見されたものや、造成直前における緊急調査によるものであって、当初から特定の問題追求による調査と異なり、ある程度問題を残した発掘であった。これらの調査を通じて、豊前海沿岸、特に中津、宇佐地域での縄文後期磨消縄文土器の系譜がいくらか明かになったことは大きな収穫であった。もともと中国地方の瀬戸内海沿岸で、磨消縄文確立期とされる中津式系統の土器についての東九州での研究は、1956年植野貝塚（賀川1956）の調査で、豊前地方にその存在が明らかとなり、興味をひいた。また磨消縄文盛期とされる福田Ⅱ式は、1974年以降調査が進められている山国川支流屋形川沿岸粉洞穴Ⅲ層（賀川他1978）において確認されている。この確立期、盛期の単純出土の状態が、層位的に把握されると磨消縄文の豊前地方での源流が明かとなり、瀬戸内西部沿岸一帯での研究に大きな前進をみることになる。

宇佐市田笛川流域付近の扇状地に立地した立石貝塚や、沖積平野に近く低い河岸段丘における石原貝塚では、中津、福田Ⅱ式が発見され、桂川流域の森貝塚などと明確な対照をみせる。特に注目すべきことは、中津式（磨消縄文確立期）に先行する凹線文施文、口縁部山形隆起の中期末土器が出土していることである。この土器が京都府北白川小倉町出土土器（梅原1935）を東限として、前述の帝釈峠寄倉洞穴の中国一帯の中期末土器、九州における阿高系土器との関係を含めて直接磨消縄文の確立期土器の祖型としてたどれるとしたら興味深い。西和田貝塚出土の下層式ともいえるべき凹線文主体の阿高系土器の出現も、磨消縄文の源流をたどるための問題としては注目すべきである。

磨消縄文土器の出現と交流については、瀬戸内西部中国地方の対比は勿論であるが、四国西部一帯の後期遺跡にも注目の必要がある。前述の如く愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚出土の磨消縄文の一部は、大分市小池原貝塚のそれと対比されて、磨消縄文Ⅱ式土器の典型である。最近愛媛県北宇和郡広見町岩谷遺跡（広見町教委1979）の調査で多数の配石遺構が調査され、磨消縄文確立期からその終息までの遺物が出土している。

西四国一帯の磨消縄文を出土する遺跡は不思議と姫島産黒曜石が出土する。特徴のある姫島産黒曜石の交易については木村剛郎（木村1978）・日高正輝（日高1976）の両氏他の興味ある論文がある。縄文後期の時期は姫島産黒曜石が各地に広く分布した時代であり、姫島産出の黒曜石の分布と西日本の磨消縄文文化の関係について細部の考察ができれば、問題は更に充実したものになる。

最近黒曜石などの原産地の石材と、遺跡出土の石器についての蛍光X線による元素組成の研究がすすめられている。こうした研究成果が今後の考古学研究にとって重要であることは間違いない。姫島産出の特異な黒曜石の役割りが、縄文後期磨消縄文文化の成生にとって欠かすことができないことは議論の余地がない。今後この分野での理化学的研究を期待しなければならない。

Ⅱ 石 原 貝 塚

1. 遺跡の立地と環境

瀬戸内海に丸く突き出ている国東半島の両方のつけ根にあたる一帯は、東九州でも特に縄文時代遺跡が多い地域である。ことに、つけ根部北側にあたる、宇佐市・豊後高田市地域には、県内の縄文時代貝塚の大半が集中している。

この地域は、開析された火山と傾動山塊に加えて河川の侵蝕、堆積等の地史の積み重ねによって他に見られない複雑な地形の様相を示している。すなわち、国東半島の主要部は径20kmに及ぶ一大開析火山であり無数の放射状谷を四方に展開し、その南側は華ヶ岳の傾動山塊にぶつかって、桂川というこの地域最大の河川を西流させている。その結果、この流域では途中において水田の発達をみるいくつかの湖成盆地と、下流の両岸に10～30mの高さの平坦な洪積世台地を形成している。

これと同様なことは、宇佐市の側においてもいえる。同じく開析された火山体である御許山系に源を発した寄藻川は、駅館川によって堆積された広大な宇佐原の隆起三角州の南辺を東流し、華ヶ



第2図 石原貝塚周辺地形図

岳山塊と御許山塊の谷を北流してきた向野川と合流し、さらに河口部で桂川とも合流して周防灘にそそぐ。そして桂川の下流部と同様に、向野川との合流点付近では、両岸に10～20mの洪積世台地の発達をみることができる。

東木竜七氏によって提唱された「旧森湾」（東木1927）はこれらの河川の下流部一帯に発達した洪積世台地の縁端の線と一致するもので、この地域の貝塚のほとんどは、それらの台地の突端部もしくは辺端部に立地しているものである。

先年（昭和46・52・53年）発掘調査が行われた立石貝塚（賀川他1974）は、華ヶ岳山塊に源を発する田笛川が山麓部で形成した小扇状地上に立地する。縄文後期初～中葉を主とする同貝塚は、この地域の貝塚の中では最も高位（標高20m）に位置するためか、田笛川の湾入部よりもさらに奥まった地点にあって、貝層の発達も顕著なものではない。この立石貝塚より北東2kmに縄文後期の来縄貝塚（樋口1931）が旧森湾の南辺部に位置し、来縄貝塚より東2km、旧森湾の最も奥まった部分に森貝塚（樋口1931）が立地する。さらに、来縄、森貝塚の北約3kmの位置に、広瀬川がつくる「旧草地湾」ともいうべき低地の湾入があり、その湾口に当たる位置に黒松貝塚と入津原貝塚（大分県教委1973）が対峙している。

石原貝塚は、こうした国東半島のつけ根部の貝塚群の中では最も西端にあたり、寄藻川と向野川の合流点をのぞみ、田笛川との間に挟まれる封戸台地の西縁下に形成された標高3～4mの微高地上に立地する。この微高地はおそらく背後の洪積世台地の崩壊によって形成されたとみられ、寄藻川沖積地にカギ形に突出する形の東西120m、南北170mの範囲の中におさまる。貝塚はこの微高地の中心部から台地直下にかけて広がるとみられ、この地域の貝塚の中では最も良好な保存状態を示すものである。こうした立地は、この貝塚の北1kmにある水崎貝塚にも共通し、桂川・広瀬川水系の貝塚が台地の縁辺上にある立地ときわだった対比をなしている。

2. 遺跡の調査

1) 調査の経過

〔遺跡の所在地〕 宇佐市大字青森字石原

〔調査期日〕 第1次 昭和48年10月9日～10月23日

第2次 昭和48年10月29日～11月6日

第3次 昭和49年2月4日～2月14日

〔調査団の構成〕

○調査主体 第1次・第2次 大分県教育委員会

第3次 宇佐市教育委員会

○調査委員 賀川 光 夫 （別府大学文学部教授）

橘 昌 信 （別府大学文学部助教授）

坂 田 邦 洋 （長崎大学医学部助手）

矢 野 朔 雄 （県教育庁文化課長）

岸 原 富士男 （宇佐市教育委員会社会教育課長）

平 野 昭 彦 （大分県教育庁文化課文化財専門員）

- 調査員
 - 島 井 大 山 (宇佐市教育委員会社会教育課文化財係主事)
 - 小 倉 正 五 (“ 技師)
 - 後 藤 宗 俊 (県教育庁文化課主任)
 - 清 水 宗 昭 (“ “ 主事)
 - 橋 爪 啓 史 (“ “ 嘱託)
- 調査補助員
 - 入 学 正 敏 (宇佐市文化財調査員)
 - 坂 本 嘉 弘 (別府大学文学部学生)
 - 平之内 幸 治 (“)

以上のほか、発掘調査区については地元の高橋義兼・高橋高志氏に特別なご協力をいただき、作業員のお世話については区長の高橋 豊氏のお手数をわずらわした。ここに厚く感謝申し上げる次第である。また、岩尾松美(故人)・小田富士雄・岩野 勝・山口真樹・真野和夫・天本洋一各氏および、別府大学文学部の学生諸君の来訪があり、多くの御教示などをいただいた。

現地の調査は主として小倉正五と清水宗昭が担当した。また第1、2次の庶務については吉良正利(県文化課庶務係長)が担当した。

以下は発掘調査の経過の概略を記す。

〔第1次調査〕

- 10月9日 発掘作業開始、グリッドの杭打ち作業を行なう。
- 11月12日 貝塚の層位をみるため、遺跡中央空地地の北側と東側の土層断面の実測を行なう。
- 10月14日 J-16・17区の掘下げを行ない、新たに空地地土取り断面に近い第1グリッドの掘下げを行なう。
- 10月16日 J-16・17区の貝層をほぼ掘上げる。G-6区にて秋状耳飾発見。
- 10月17日 みかん畑内の試掘を行なう。平板による地形測量を開始する。
- 10月19日 J-16・17、L-15・16区の拡張を行なう。今後の調査について協議を行なう。
- 10月23日 貝層上面露出状況の写真撮影を行なう。第2次調査について、駅館川開発事務所、市教委と協議を行なう。
- 10月24日 各グリッドの土層実測の後現地撤収。

〔第2次調査〕

- 10月29日 J・L区南側に新しく調査区(第2区)を設け発掘する。
- 10月31日 第2区貝層上部の掘下げを行なう。土偶胴部を発見。
- 11月3日 1号人骨の実測と取り上げを行なう。第1次調査グリッドの埋戻しを行なう。
- 11月6日 2号人骨の実測と、取り上げを行なう。現地撤収。

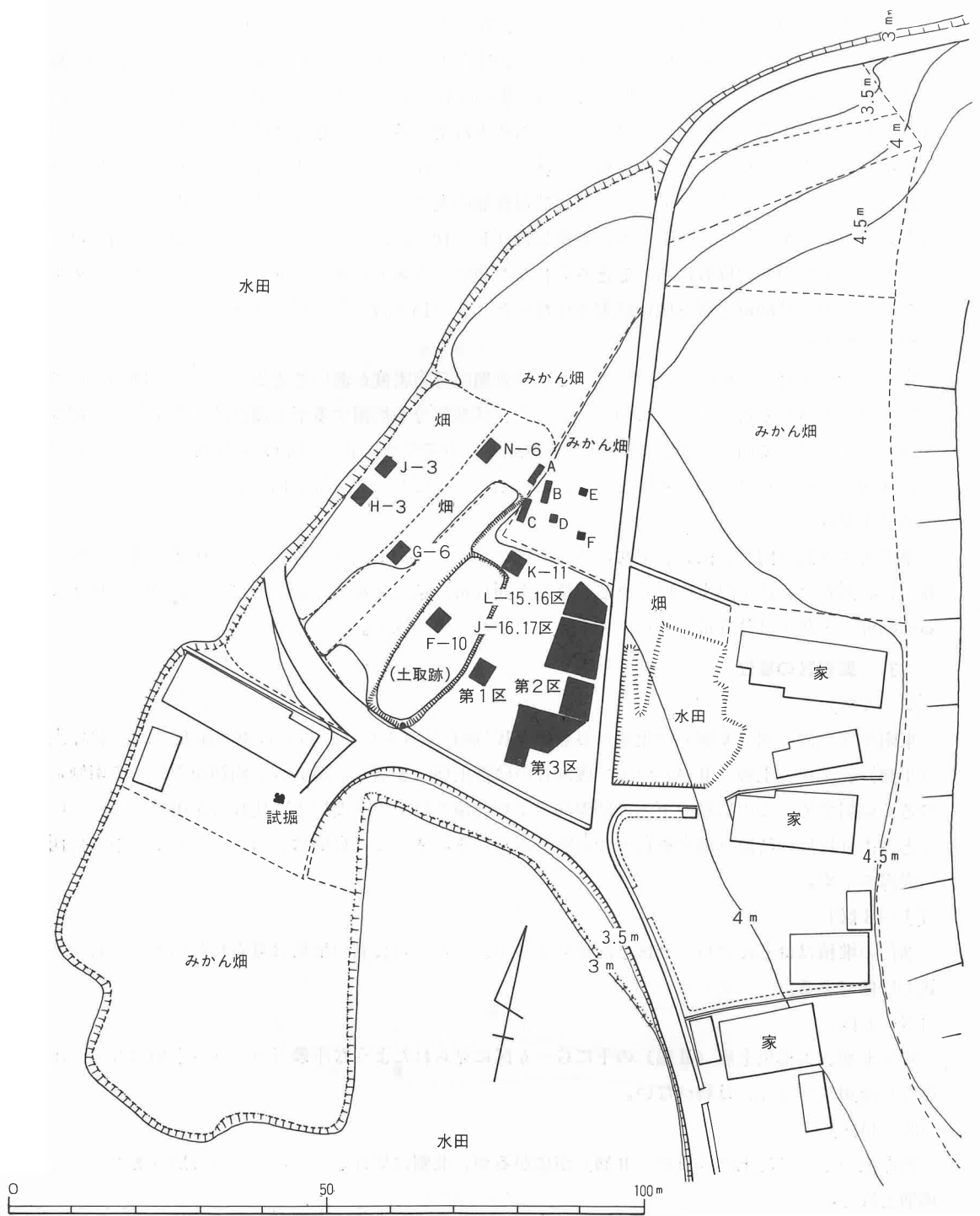
〔第3次調査〕

- 2月4日 第2区南側の盆栽畑に設定する。(第3区)
- 2月6日 2・A区第1貝層より土偶頭部出土。
- 2月14日 土層の実測・写真撮影を行ない、現地撤収。

2) 調査区の設定

〔第1次調査〕

貝塚の遺跡としての範囲確認を目的として、貝層の断面が露出している空地地を中心に、南北に



第3図 石原貝塚地形実測図

通じる市道の西側一帯に計17ヶ所のトレンチを設定した。

トレンチの大きさは畑地の作付状況に応じて設定したために統一しなかった。このため、調査範囲の中で高い位置にある北側のみかん畑は最少限の1 m トレンチ 7ヶ所、計13m²の面積にとどめた（A～F区）。寄藻川に近い畑は自然堤防状に残されているが、旧地形は東側の畑と同一レベルでつづいていたとみられ、5ヶ所、27m²を発掘した（G-6、H-3、J-3、N-6）。中央の空閑地は、すでに土取りによって、貝層および包含層の大部分は失われているものとみられたが、念のため2 m × 3 m のトレンチ 1ヶ所を設定した（F-10）。市道に接する南側の畑地は貝層の遺存が最も良好かつ中心的位置にあたとみられたために、3 m × 6 m トレンチ 2ヶ所、3 m × 4 m トレンチ 2ヶ所の計60m²と最も広い試掘を行なった（J-16・17、L-15・16区）。

〔第2次調査〕

第1次の発掘調査の結果、市道に接する畑の貝層の分布密度が濃いことと、同地区が圃場整備事業により削平される可能性がつよいところから、試掘部分を拡幅する形で調査区を設定した。調査範囲は市道に接して南区16m、東西5～8mを3ヶ所に分け、計約100m²の完掘を行なった。なお、3区分した境界はいずれも層位観察のため土手として残した（第1区・第2区）。

〔第3次調査〕

第2次調査区の南側、南北、東西の道路に挟まれる畑で、土地所有者の土取り作業に先立って実施した。調査は、最少限土を取られる部位の東西12m、東西9mの完掘を行なった。道路に挟まれる約80m²の三角部は盆栽畑のため発掘をみあわせた（第3区）。

3) 調査区の層位

〔G-6区〕

東南隅部の礫砂層（V層）の上部に貝層が（IV'層）がみられた。貝層は東側断面では、耕作土（I層）、茶褐色土層（II層）の下の礫混りの砂質土層（III層）に覆われ、約20cmの厚さで南側にゆるく傾斜する。この貝層の下部の砂礫層中より、鐘ヶ崎系の土器片と玦状耳飾が出土した。このことにより貝層の時期は縄文後期中葉以降とみられる。またこの貝層は、調査グリッドの中では西の限界を示す。

〔J-3区〕

層位の堆積はほとんどG-6区と同様であるが、ここでは貝層の堆積は見られなかった。H-3区も同様である。

〔N-6区〕

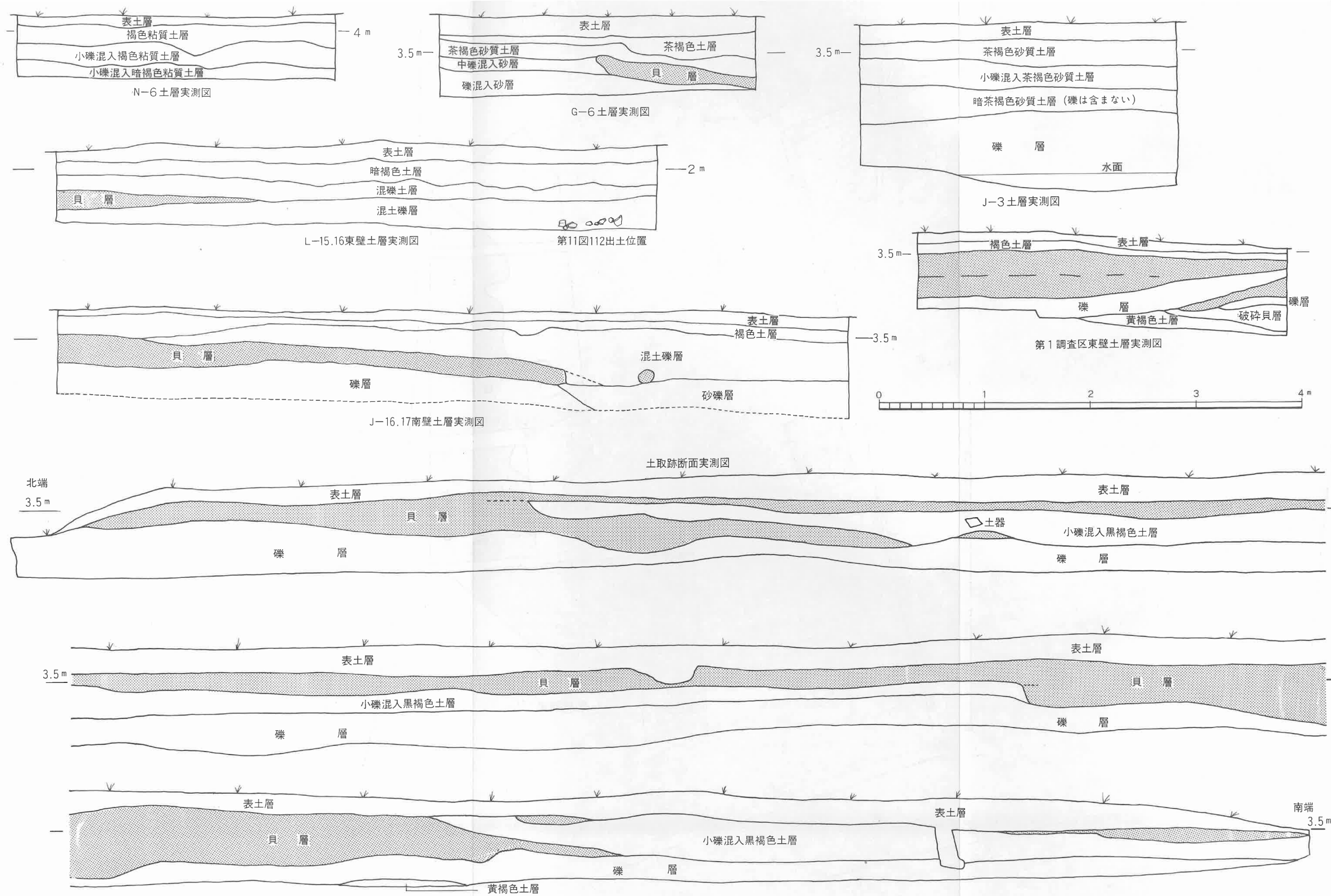
耕作土層、茶褐色土層（II層）の下にG-6区に見られたような小礫混りの砂質土層はなく、小礫混り砂層につづく。貝層はない。

〔K-11区〕

耕作土の下部に混土破碎貝層（II層）が広がるが、北側は切れる。その下部は貝層（III層）、砂礫層と続く。

〔（A～F）みかん畑区〕

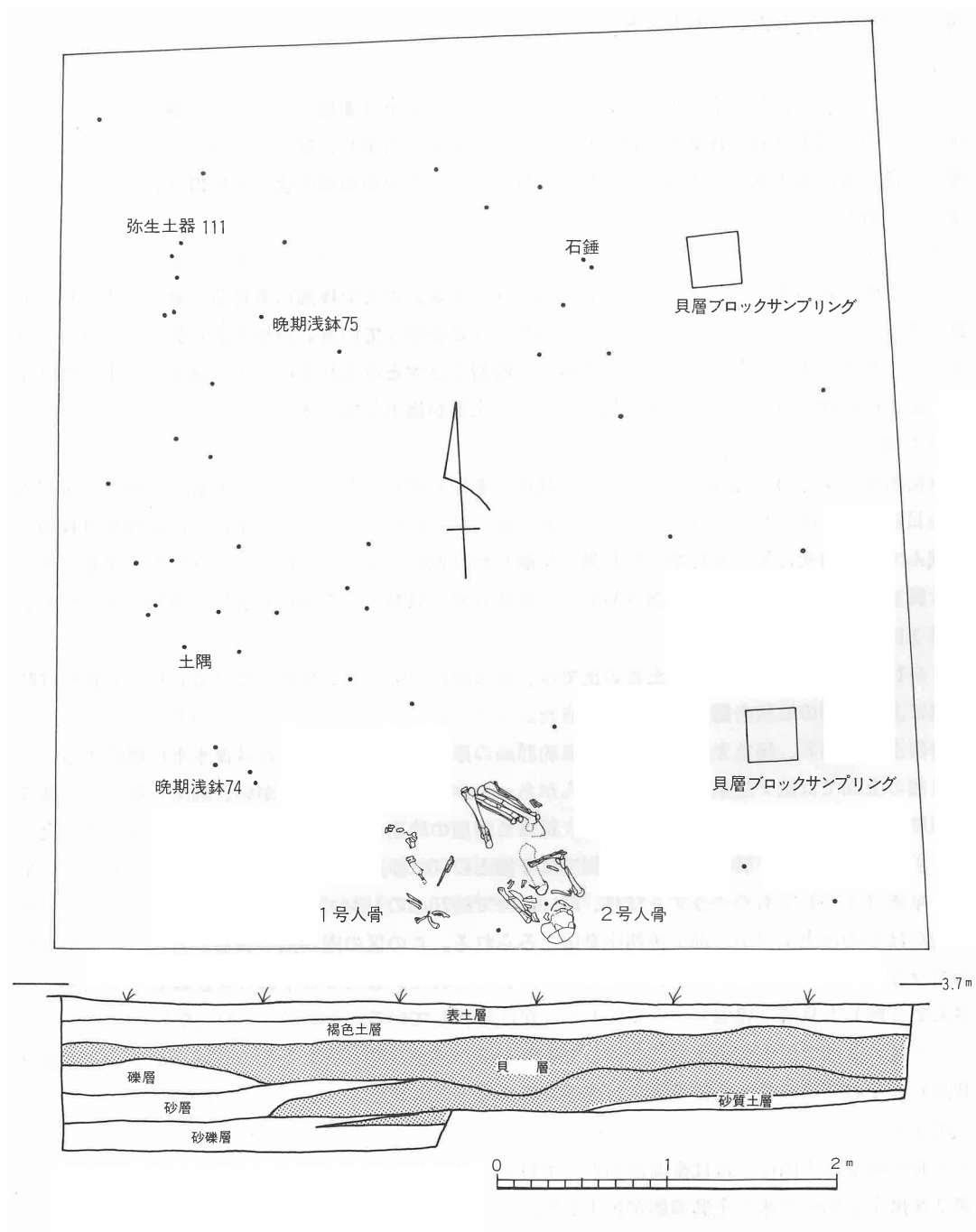
西側のA・C区の表土下に破碎貝層がみられた。これはL-11と別のブロックをなすものとみられる。D区では上部に破碎貝層はみられないが、地表より-80cmの南側に貝層がみつめられた。この層の直上より鐘ヶ崎系の土器片が出土しているので縄文後期の貝層とみてよい。これはこの時期



第4図 石原貝塚土層実測図



第5図 石原貝塚主要調査区位置図



第 6 図 石原貝塚第 2 調査区主要遺物出土位置図

の貝層の北限を示すものとみられる。E・F区には破碎貝層・貝層ともにみつめられない。

〔F-10区〕

調査区のほぼ中央にあたる。土取りによって削平された空閑地の中心部に設定した。層位は砂礫層のみで、貝層は検出されなかった。

〔L-15・16区〕

南側の断面では、耕作土（Ⅰ層）、褐色土（Ⅱ層）混礫土（Ⅲ層）の下に貝層がみられた。これはその下部の混土礫層（Ⅳ層）に挟まれるもので、東側（山手）に厚く（約20cm）、西側ではうすくなって消える。この貝層は南側のJ-16・17区で弥生時代中期初頭の土器が検出されているので、ほぼこの時期とみてよい。

〔J-16・17区〕

南側断面の堆積状況はほぼL-15・16区と同様である。ここでⅣ層にあたる貝層は、J-15・16区よりもさらに西側に延びており、平均25cm程の厚さを保っている。貝層中より弥生中期城ノ越系カメ形土器の口辺が出土しており、この貝層の時期を示すとみられる。この貝層下の混土礫層（Ⅴ層）および砂礫層（Ⅵ層）からも下城系のカメ形土器が出土している。

〔第1区〕

東側断面では、Ⅰ・Ⅱ層の下部に破碎貝層（Ⅲ層）が厚く堆積する。この層の下半部は混礫の破碎貝層（Ⅲ'層）となり、上半部は瓦器・磁器等の混入がみられる。この下部には砂礫層（Ⅳ層）を挟んで古墳時代の須恵器片を含む貝層（Ⅴ層）が南側から北側に流れ込むように堆積する。その下は縄文後期土器を含む混土礫層（Ⅵ層）、破碎貝層（Ⅶ層）、混礫砂質土層（Ⅷ層）とつづく。

〔第2区〕

J-16・17区の南側に設定したこの区では、ほぼ全面的に貝層が分布している。そして貝層は時的に上下二層の堆積を認めることができた。

耕作土（Ⅰ層）、褐色土（Ⅱ層）の下に約25cmの厚さの貝層（Ⅲ層）がほぼ水平に堆積する。この貝層の上面では城ノ越系の土器片の混入があったが下位にいくにしたがい、縄文後期末から晩期初頭にかけての黒色磨研土器で占められ、ほぼこの層の時期を示すとみられた。この下部は、土をやや多く含む貝層（Ⅴ層）があり、西側ではⅢ層との間に砂層（Ⅳ層）をはさんで消える。このⅤ層は東側（山手）でもややうすくなり、厚い部分で約20cmのレンズ状に近い堆積を示す。この貝層の時期はその出土土器から縄文後期中葉頃とみられる。この区の南西隅の貝層が舌状に突き出す部分でマガキを主体としたブロックが径約1mほどみられた。またこの下部にも砂礫層（Ⅵ層）をはさんで分解した貝層（Ⅶ層）がうすいレンズ状に堆積している。

この区のⅢ層で黒色磨研土器に共伴して土偶胴部が出土した。また下部の貝層（Ⅴ層）と砂層（Ⅳ層）にそれぞれ人骨が頭位を南にして埋葬されていた。

〔第3区〕

北側の第2区と同様、ほぼ全面にわたって貝層の堆積がみられた。また貝層（Ⅲ層）中より、第2区出土と同一個体の土偶頭部が出土した。

3. 出土遺物

石原貝塚の調査で出土した遺物は、貝塚の規模・発掘面積に比較して、決して多量とはいえない。しかし、縄文時代後期から弥生時代、古墳時代と各時代の遺物が見られ、貝塚の形成期間の長さがうかがわれる。

1) 土器

貝塚から出土した土器は、縄文後期初頭から晩期前半の土器が主体を占め、これに弥生前期後半から中期前半の土器が加わる。この他わずかに須恵器、瓦器、磁器等もみられるが小片で多くは磨滅している。

(1) 縄文土器 (第7～10図)

縄文土器は東九州の後期初頭から晩期前半までの土器が一部の形式を除きほぼ出揃っている。

1～13. 阿高式土器系の凹線文土器で口縁部に刻み目を有するものと、無いものの2種類がある。器面はいずれも横方向の条痕文で調整し、凹線文を施文している。出土した破片で見える限りでは、凹線文は全て直線的である。出土位置はJ-16・17調査区、第2調査区、第3調査区の貝層の下部に集中する。4は第2調査区貝層下部から出土したもので、粗い条痕で内外面ともに調整され、太い凹線文が施文されている。5は第3調査区の貝層下部から出土し、条痕による器面調整の後、横撫でにより、条痕を撫で消し、器面を滑らかに仕上げている。このことはJ-16・17区出土の6・8についても言える。また、第3調査区出土の9・10は粗い条痕文の後、9は先端が不揃いな施文具で、10はへら状の施文具で文様が施文されている。以上の土器は、全体的に焼成も良く、胎土には砂粒をあまり含まない。色調も1・10が明褐色であるのみで他は茶褐色を呈する。

14. みかん畑内を試掘したBトレンチの貝層上面から出土した土器である。破片は全て接合するが、口縁部が小さいため、胴部から口径を推定すると約21cmになる。沈線内はRの細い縄文で埋められ、他は内外面ともに入念に研磨されている。黒色で砂粒をあまり含まない。器形は鉢形になると思われ、瀬戸内地方の中津式土器に類似する。

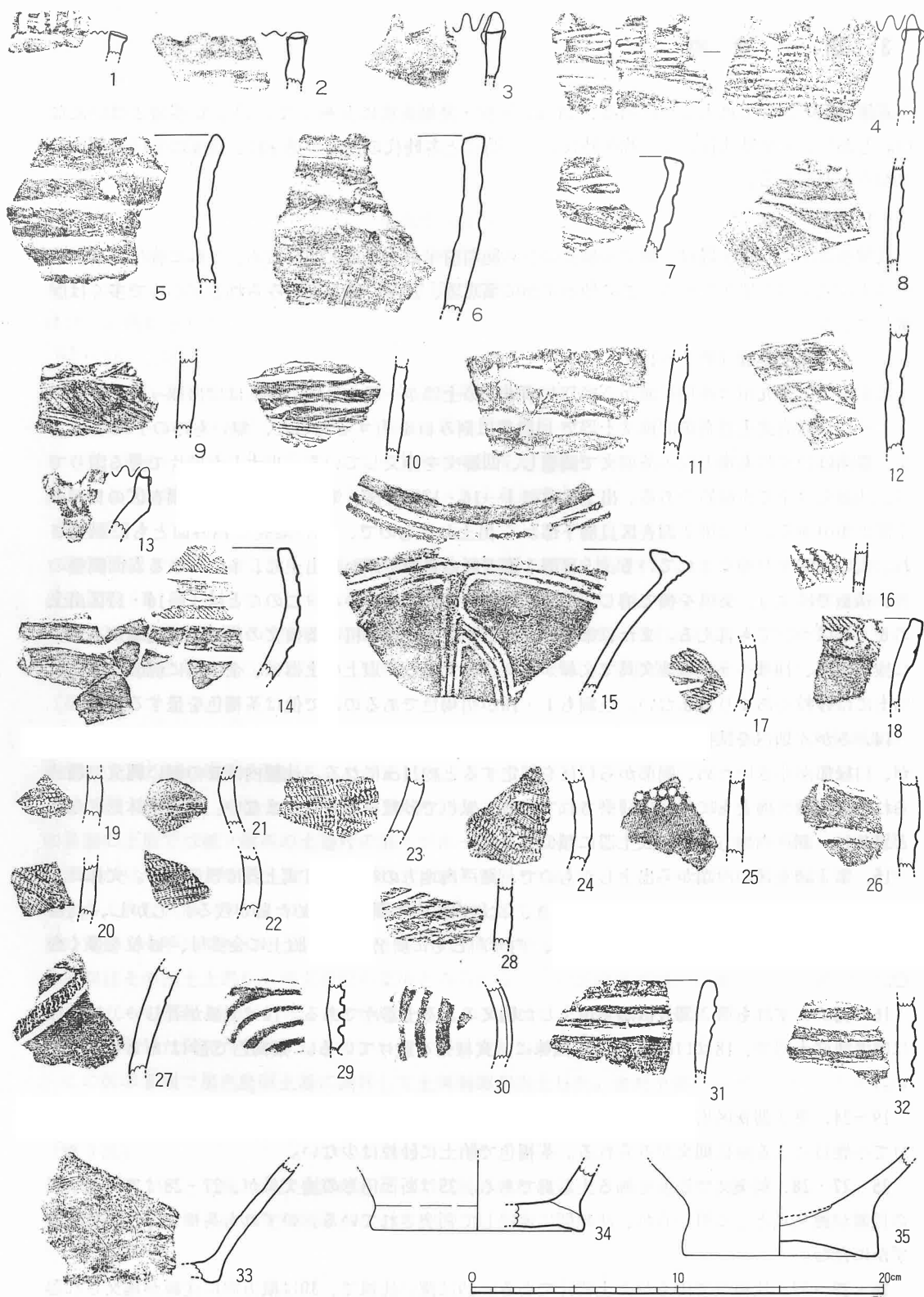
15. 第3調査区の西端から出土したもので、瀬戸内地方の福田KⅡ式土器に類似する。文様は太目の3本単位の沈線で直線的な文様を描き、沈線内に赤色顔料を埋めた跡が残る。しかし、沈線間には縄文は見られない。器面は褐色で、内外面ともに研磨され、胎土に金雲母、砂粒を多く含む。

16～18. いずれも第3調査区から出土した縄文のある土器片である。16は磨滅が著しい、17・18は磨消縄文土器で、18は口縁部を肥厚気味にし文様帯を設けている。茶褐色で砂はあまり含まない。

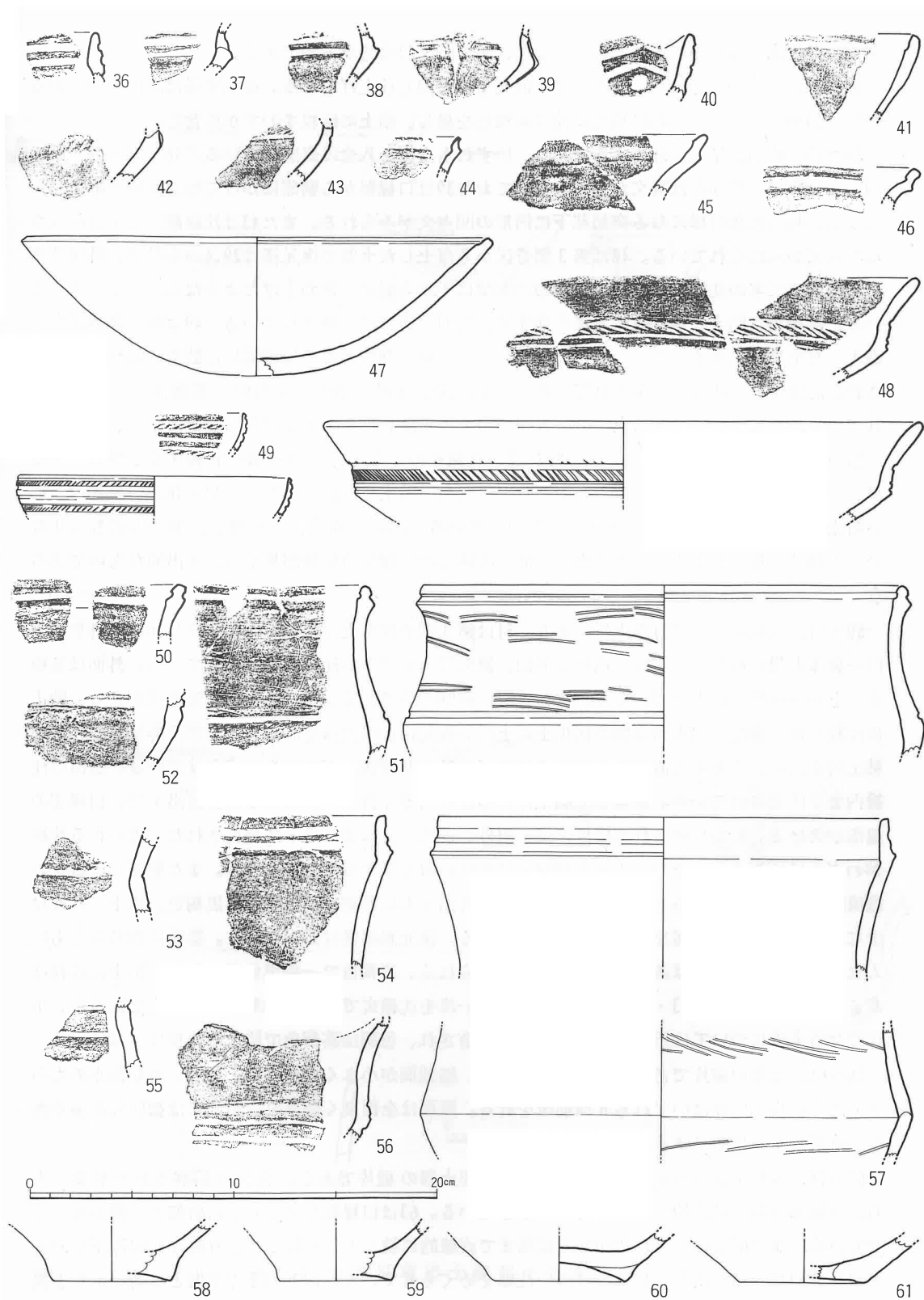
19～24. 第3調査区出土の土器で全て同一個体と思われる。口縁部は欠けるが頸部から胴部にかけて小巻貝による擬似縄文がみられる。茶褐色で胎土に砂粒は少ない。

25・27・28. 刺突文で器面を飾る土器群である。25は断面円形の施文具が、27・28はアナダラ属の貝殻が施文具として用いられ、沈線間に連続して刺突されている。いずれも茶褐色で、砂粒をわずかに含む。

26・29～32. 沈線文で飾られた土器片である。29は深い沈線で、30は縦方向に沈線が施文され器面は入念に研磨されている。31・32は、口縁部に平行に数条の沈線がめぐらされている。いずれも



第7図 石原貝塚出土縄文土器実測図 (1)



第8図 石原貝塚出土縄文土器実測図 (2)

茶褐色で胎土に砂粒をわずかに含む。なお、26・31・32は時期不明である。

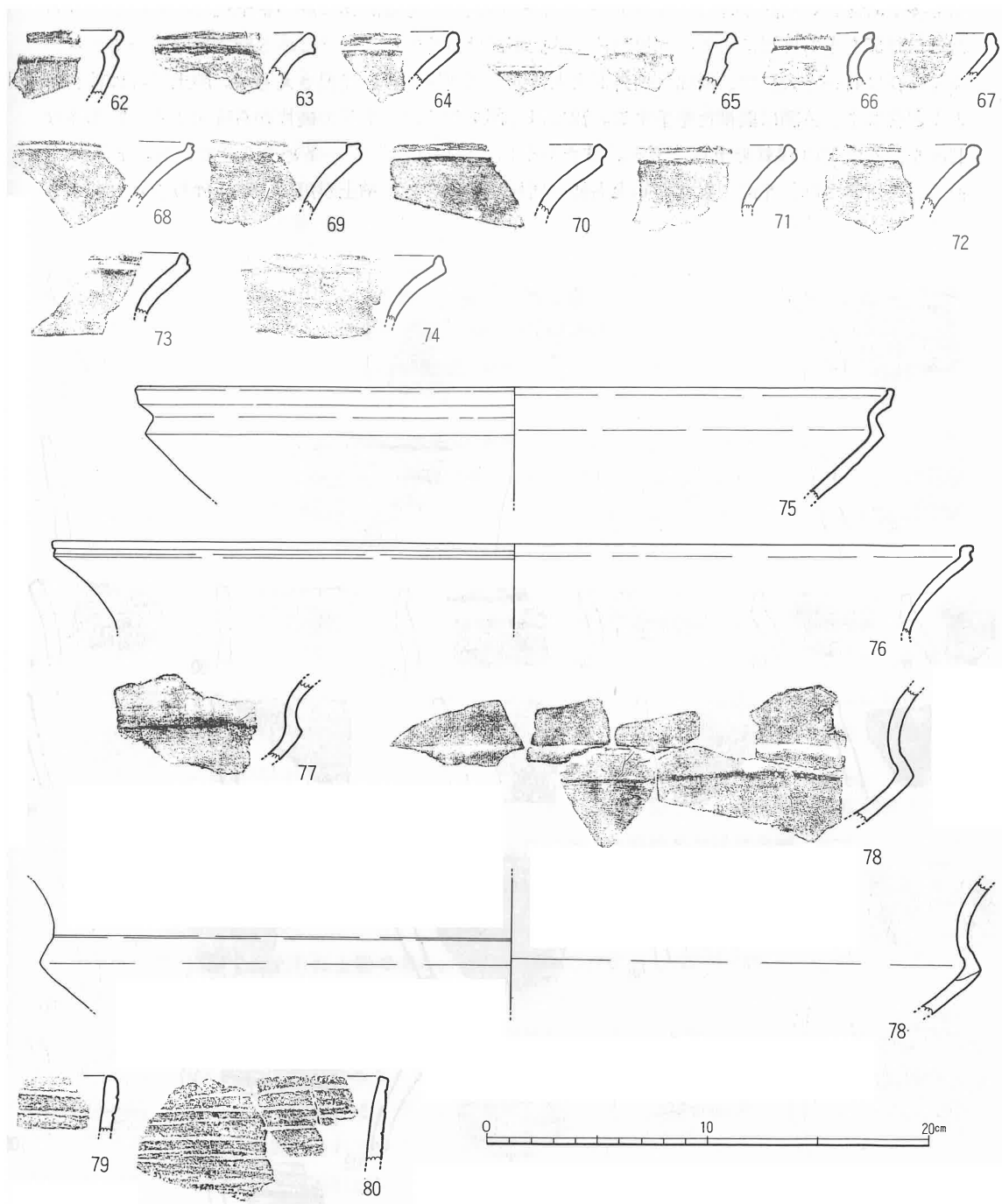
33～35. 底部の砂片である。器面は条痕文を撫で消し仕上げている。復元底径は33は不明であるが他は10cm前後である。33は褐色で他は茶褐色を呈し、胎土に砂粒をわずかに含む。

36～49. 後期後半の浅鉢形土器であり、いずれも全面を入念に研磨している。36～41・43・47・49の口縁部には整った沈線文がめぐらされており39は口縁部から胴部にかけて短い沈線が縦方向に刻まれ、40は波状口縁になる突起部下に円形の凹点文がみられる。また43は沈線間に刷毛目のような羽状文が入れている。48は第3調査区から出土した土器で復元径は29.6cmを計り、外反する口縁部下に三本の沈線をめぐらし、上の二本間に下から斜めに跳ね上げたような羽状文を施文している。茶褐色で胎土には砂粒をあまり含まず、器面は入念に研磨されている。49は第2調査区から出土した小破片である。復元口径13.5cmの小形の浅鉢で器壁は薄く口縁部には数条の沈線がめぐらされ、沈線間に羽状文が施文されている。茶褐色で、胎土に砂粒は少ない。器面は入念に研磨されている。47は第2調査区出土で、41と同類の土器と思われる。器形は浅い皿状になり、復元口径は23cmである。口縁部の内側には一条の浅い沈線をめぐらす。器壁は他に比較すると厚目であるが、器面は入念に研磨され、滑らかである。茶褐色で胎土に砂粒は少ない。44～46の口縁部は、細い粘土紐をめぐらし外反するタガを作り出している。器面は横方向に研磨し、胎土に砂粒は少ない。色調は茶褐色を呈する。この土器は他の浅鉢とは口縁部の形態が異なり、後出的なものであろう。

50～57. 後期後半の深鉢形土器である。51は第3調査区出土の土器で復元口径23.6cmを計り50と同一個体と思われる。口縁部の内側と外側、肩部に太目の深い沈線をめぐらしている。外面は条痕文の上から研磨し仕上げているが、内面は粗い研磨のみである。茶褐色で一部黒色斑があり、胎土に砂粒を多く含む。54も第3調査区出土の土器で復元口径は22cmを計る。口縁部は外反する頂部に粘土帯を付け、タガ状に直口させ、その外側に二条の凹線状の直線文をめぐらせている。器面は沈線内まで研磨されている。茶褐色で胎土には微砂粒を多く含む。56は第2調査区出土で、口縁部の端部が欠ける。しかし残された破片には、内外面ともに口縁部に沿って施文されたと思われる沈線がわずかに観察され、それによると口縁部は波状口縁を呈することがわかる。また胴部には数状の直線的な沈線文がめぐらされている。器面は内外面ともに研磨され、色調は黒褐色、胎土に砂粒は少ない。57は第2調査区出土の胴部の破片である。復元胴部径は23cmを計る。器面は内外面ともに入念に研磨され、内面は条痕文状の研磨痕がみられる。茶褐色で一部黒色斑があり、胎土に砂粒はあまり含まない。52・53・55はいずれも器面の一部を沈線文で飾る深鉢形土器の破片であるが、小片のため全体については不明である。器面は研磨され、色調は茶褐色で胎土に砂粒は少ない。

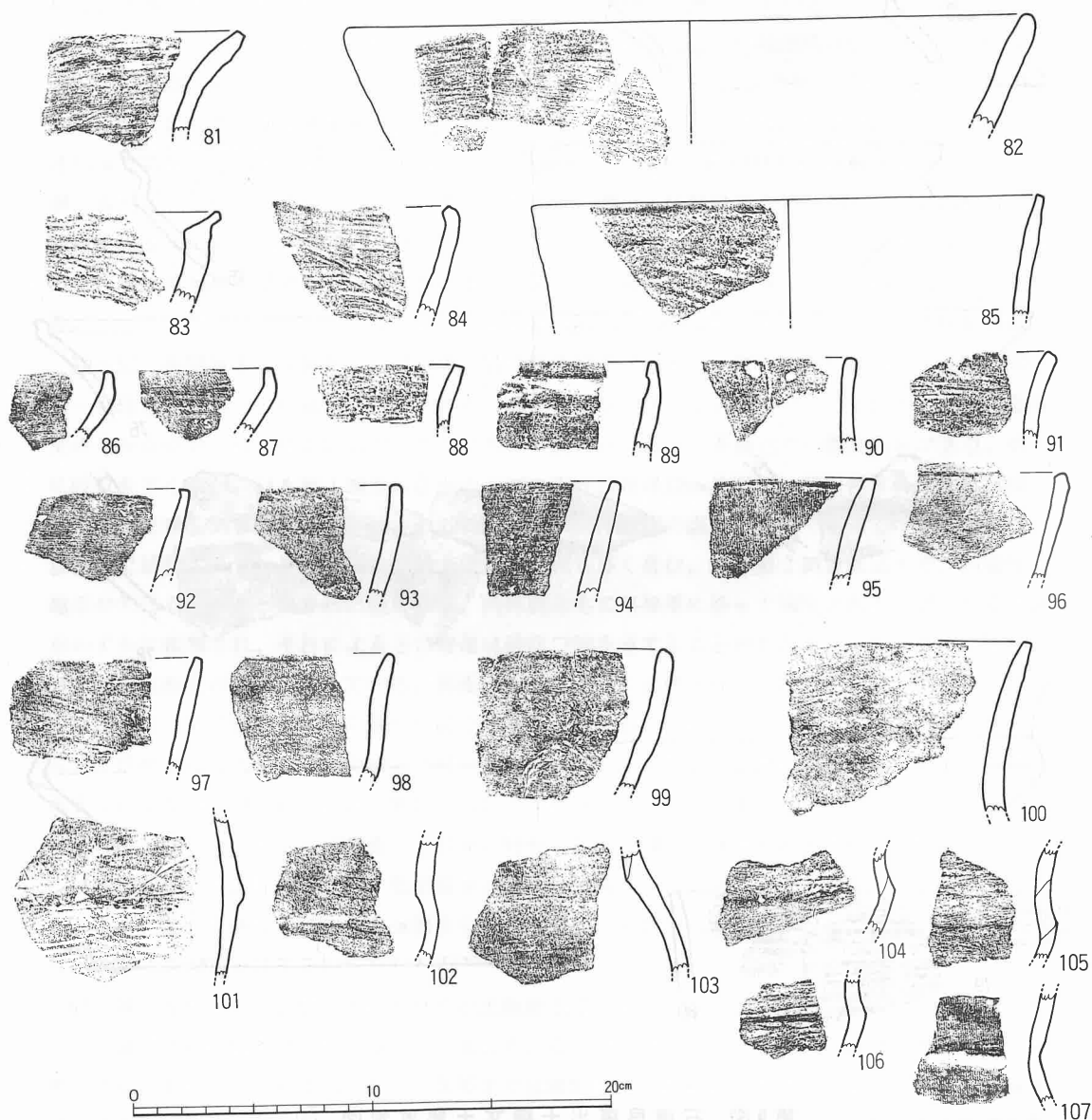
58～61. 底部の破片であるが、底部端が尖り、接地面が小さく揚げ底状となる。後期後半のものと考える。復元底径はいずれも6cm前後を計る。器面は全面良く磨かれ、胎土には微砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。

62～78. 後期末から晩期前半にかけての浅鉢形土器の破片である。黒色で研磨された特徴を持ち、口縁部は細い粘土紐をめぐらせて形成している。63は口縁部が外反し、口唇部に沈線をめぐらせている。また65は内側は起伏がなく底部まで直線的に続くと思われるが、外側は口縁部下を凹ませ頂部と肩部を造り出し、肩部には浅い沈線をめぐらせている。以上の2点が他とは若干形態を異にする。75は、第2調査区から出土した最大の破片であるが、復元径は34cmを計る。口縁部はやや



第9図 石原貝塚出土縄文土器実測図 (3)

外反し、頸部は短く、胴部は稜をもつ。器面は内外面ともに横方向によく研磨され、胎土には微砂粒を多量に含む。色調は外面は薄い茶褐色で内面は黒色である。76は細い粘土紐で作られたタガのある口縁部をもち外側に一条の沈線がめぐる。頸部は長く延び、器壁は約5mmでほぼ均一である。復元口径は41cmと大型で、器面は内外面ともに入念に研磨され、光沢さえもつ。胎土には砂粒をほとんど含まず、色調は黒褐色を呈する。78は口縁部を欠くが、胴部の破片から復元すると胴部径は42cmを計る大型の浅鉢形土器である。また肩部には浅い凹線文を一条めぐらせている。器面は全面、良く研磨され、光沢をもつ。胎土も他と同様、精選された粘土が用いられ、砂粒をほとんど含



第10図 石原貝塚出土縄文土器実測図 (4)

まない。色調は黒褐色を呈する。

79・80. 晩期の深鉢形土器の口縁部の破片である。石原貝塚では、晩期の深鉢形土器は浅鉢形土器と比較すると極端に少なく、これは数少ない例である。79は口縁部に平行に数条の細い沈線文がめぐらされている。茶褐色で胎土に砂粒を含む粗製土器である。80は同一個体と思われる2破片である。口縁部下には細い平行沈線文が雑に施文されている。器面調整は内面が比較的滑らかに仕上げられているのに対し、外面は雑である。茶褐色で胎土に砂粒を多く含む。

第10図は、無文、条痕文土器の破片である。大部分は、深鉢形土器の破片である。

81～85. 器面は条痕文で整えられ、器壁が他にくらべると不均一で厚く、後期前半の時期と推測される。81は口縁部が外反し、83は口縁端部のみ外反する。また84は内湾気味になる。82は第3調査区出土で、復元径は29cmを計る、外反する口縁部である。器面は内外面ともに小巻貝による横方向の条痕文で調整されている。茶褐色で胎土には砂粒を含む。85は、第2調査区出土の土器で、復元口径は21.6cmを計る。器面の内面は横撫で、外面は条痕文の上から横撫でを加え調整している。茶褐色で胎土には細い砂粒を多く含む。

86～100. 器面を撫で、粗い研磨等で調整し、器壁はほぼ均一である。また口唇部の仕上げも丁寧であり、後期後半の土器と思われる。器形は他の遺跡の例等から推測すると、外反する口縁部から、直線的に頸部に続き、胴部が丸味を持ってふくらむと考えられる。器面は86～90が横方向の撫でで調整され、他は、粗いヘラ研磨で仕上げられている。胎土は細い砂粒を多く含む。また色調は87～89が明褐色の他は茶褐色を呈する。

101～107. 破片の屈曲から推測すると、前述の土器の胴部の破片と思われる。しかし、101は胴部の最大径部下と内側に横方向の整った条痕文がみられ、また胴部も稜をもって張る等他とは異なる。107は頸部で段をつくり、全面横方向に入念に研磨された精製土器である。胎土は砂粒が少なく、色調は黒褐色である。晩期の土器であろう。他は器面を粗く研磨した土器で、胎土には細い砂粒を多く含む。色調は104、105が明褐色で、他は茶褐色を呈する。

以上が石原貝塚出土の縄文土器であるが、遺物の大部分は第5図で示した主要調査区で出土したものである。その时期的な分布状況は厳密にはいえないが、後期前半がほぼ全域、後半が第3調査区を中心に、晩期は第2調査区から多く出土する傾向がみられた。

(2) 弥生土器 (第11図)

107. J-16・17区で出土した土器である。口径は20cmで口縁部は断面三角形の粘土紐をめぐらせている。器面は口唇部から内側にかけて横方向、底部に近くになるにつれて縦方向のヘラ研磨、外面は突帯部周辺を横撫で、他は斜方向の粗い刷毛目で調整されている。明褐色で粘土に砂粒は少ない。

108. 第3調査区出土の土器である。口径は20cmで、口縁部はL字状に外反し、胴部には断面三角形の貼り付突帯をめぐらせている。器面の調整は、内面は横撫で外面も突帯部まで横撫ででそれ以下は縦方向の刷毛目で調整されている。明褐色で胎土には細い砂粒を多く含む。

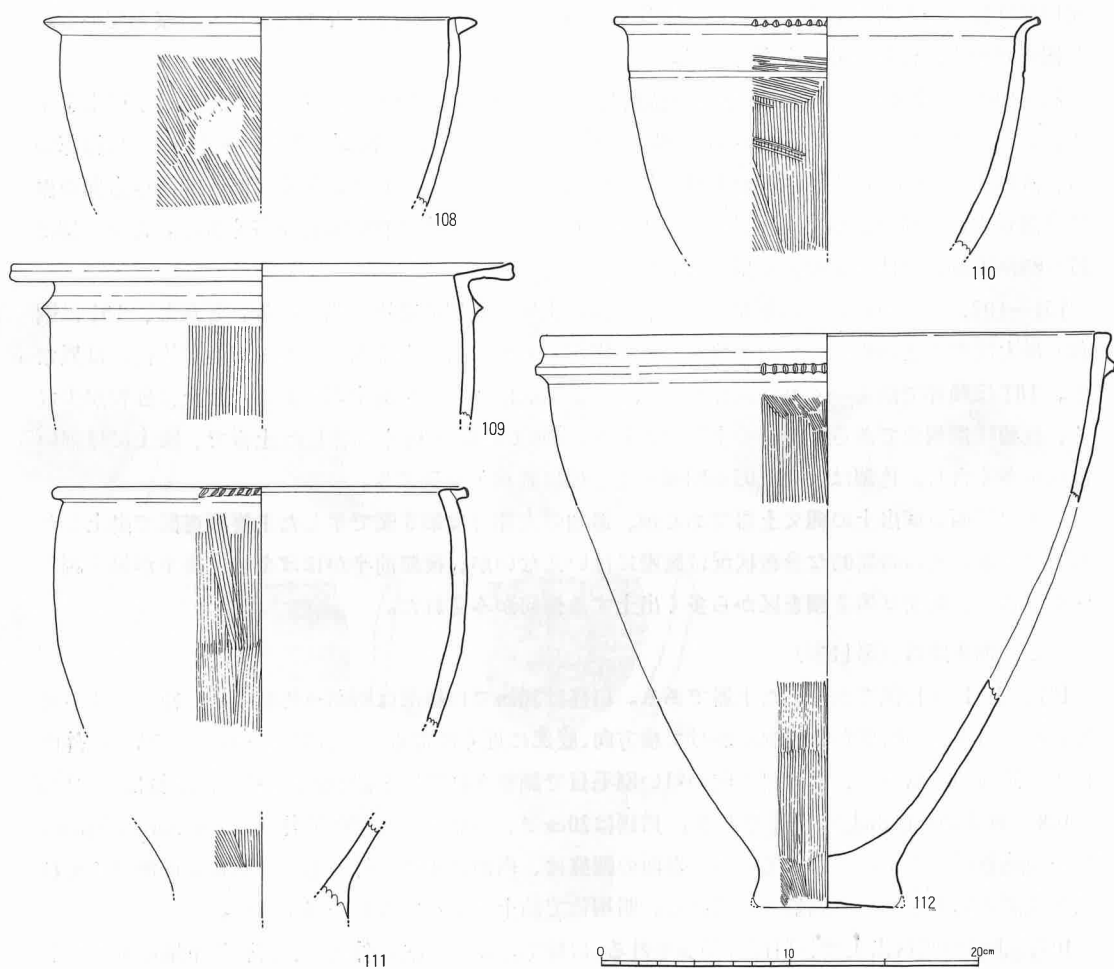
109. J-16・17区出土で、口径は20cmを計る。口縁部は如意形状に外反し、口唇部下端に刻み目が施されている。また胴部には一条の沈線がめぐる。器面は内面が縦方向のヘラ撫で状に仕上げられているのに対し、外面は粗い刷毛目で口縁部周辺は横方向に、沈線文より下位は縦方向に条痕文状に調整されている。暗褐色で胎土には砂粒を多く含む。

110. 第2調査区出土の土器で口径は19cmを計る。内湾する口縁部外側に108と同様な断面三角

形の貼り付け突帯をめぐらせ、その先端に刻み目を加えている。器面の調整は内面は撫で、口縁部には指圧痕が残る。外面の胴部は細い縦方向の刷毛目がみられる。茶褐色で胎土には砂粒をあまり含まない。

112. L-15・16区出土の土器で、口径は30cmを計る。口縁下に断面三角形の貼り付け突帯を一条めぐらせ、その先端に刻み目を加えている。また同一個体と思われる底部は径8cmを計る。器面は内面を撫で、外面は口縁部から突帯にかけては横撫で、それ以下は細かい刷毛目で調整されている。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

以上の石原貝塚出土の弥生土器は110に最も古い様相が認められるが時期的には前期後半から中期前半の時期に比定される。



第11図 石原貝塚出土弥生土器実測図

2) 石器 (第12・13図1～11)

石原貝塚出土の石器は、姫島産黒曜石を素材とする剥片石器が主体を占め、その他に若干の礫器が見られた。

剥片石器は、石鏃・石匕のほかは定形的な石器は少なく、むしろ剥片を有効に生かした不定形の石器が多数であった。石材は姫島黒曜石のほか、サヌカイト、ガラス質安山岩（姫島産）、黒色黒曜石がわずかに使用されている。

石 鏃 (第12図1～11)

1・2は姫島黒曜石使用の両面加工の石鏃。1は三角鏃、2は脚部欠損。1・2ともにJ-16・17区第Ⅱ層出土。3はサヌカイト製のくり込みの浅い石鏃。4は姫島黒曜石製のものでやや大きめの脚が外に開く。3・4ともにJ-16・17区第Ⅲ層出土。5は姫島黒曜石製の片脚を故意に欠いたとみられるものである。J-16・17区第Ⅳ層出土。6は姫島黒曜石製の薄手の三角鏃、第1区第Ⅱ層出土。7は姫島黒曜石製の大型鏃の先端部、第1区第Ⅲ層出土。8はサヌカイト製の胴部がややくびれる薄手の鏃。L-11区第Ⅱ層出土。9は姫島黒曜石製の脚部の短かい小型鏃。L-11区第Ⅲ層出土。10は姫島黒曜石製で、胴・脚部を欠く。第2区Ⅲ層出土。11はサヌカイト製の小型鏃、第3区第Ⅱ層出土。

石 錐 (第12図12)

漆黒色黒曜石の幅の広い剥片を素材とした石錐、突出先端部の断面はほぼD字型に近い。突出部のつくりは両面におよび、突出部と反対方向のエッジには使用痕とみられる細かい剥離面が連続している。第3区第1貝層出土。

石 匕 (第12図13～15)

13、14、15は横型の両面加工の石匕である。いずれもサヌカイト製で、欠損品である。13はJ-16・17区の第Ⅱ層、14は第Ⅲ層出土。15は第3区第1貝層出土。13はとくに刃部の磨滅が著しく、Side-scraper（削器）として使用されたものであろう。

搔 器 (第13図1～5)

1・2・3・4・5は、いずれも剥片の端部片側に鋭角な細かい加工を施した、End-scraperとしての機能をもつものである。とくに1・2・3は縦長剥片の末端部に加工が集中している。1・3・4・5は姫島黒曜石製、2は介在物の多い黒色黒曜石を使用。1・5は第3区第1貝層、2は第2区第Ⅲ層、3・4はJ-16・17区第Ⅲ層出土。

抉りのある削器 (第13図6～8)

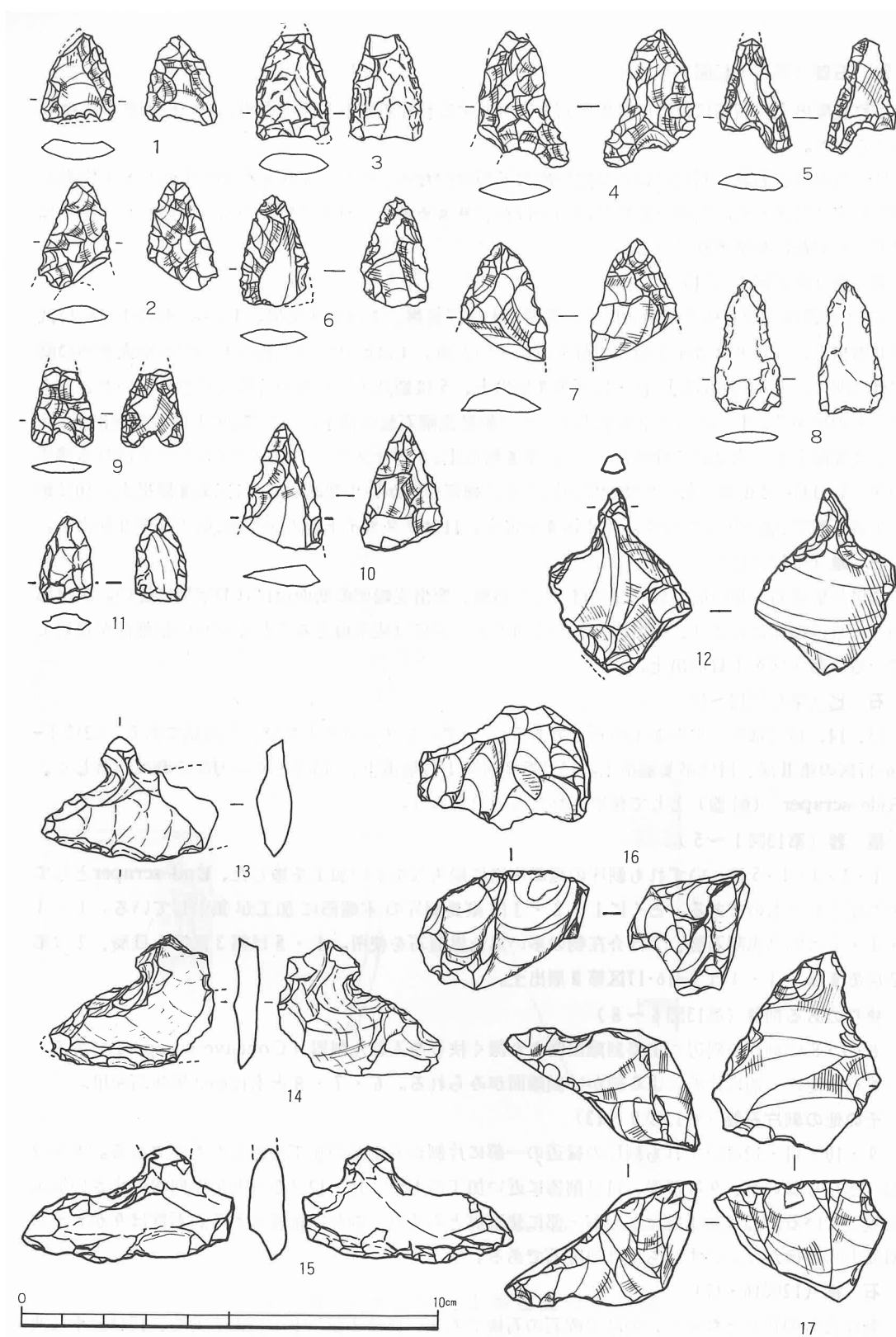
6・7・8は剥片の側辺に主要剥離面側より深く抉りを入れた削器（Concave-scraper）である。いずれも他の一端に使用による細かい剥離面がみられる。6・7・8ともに姫島黒曜石使用。

その他の剥片石器 (第13図9～13)

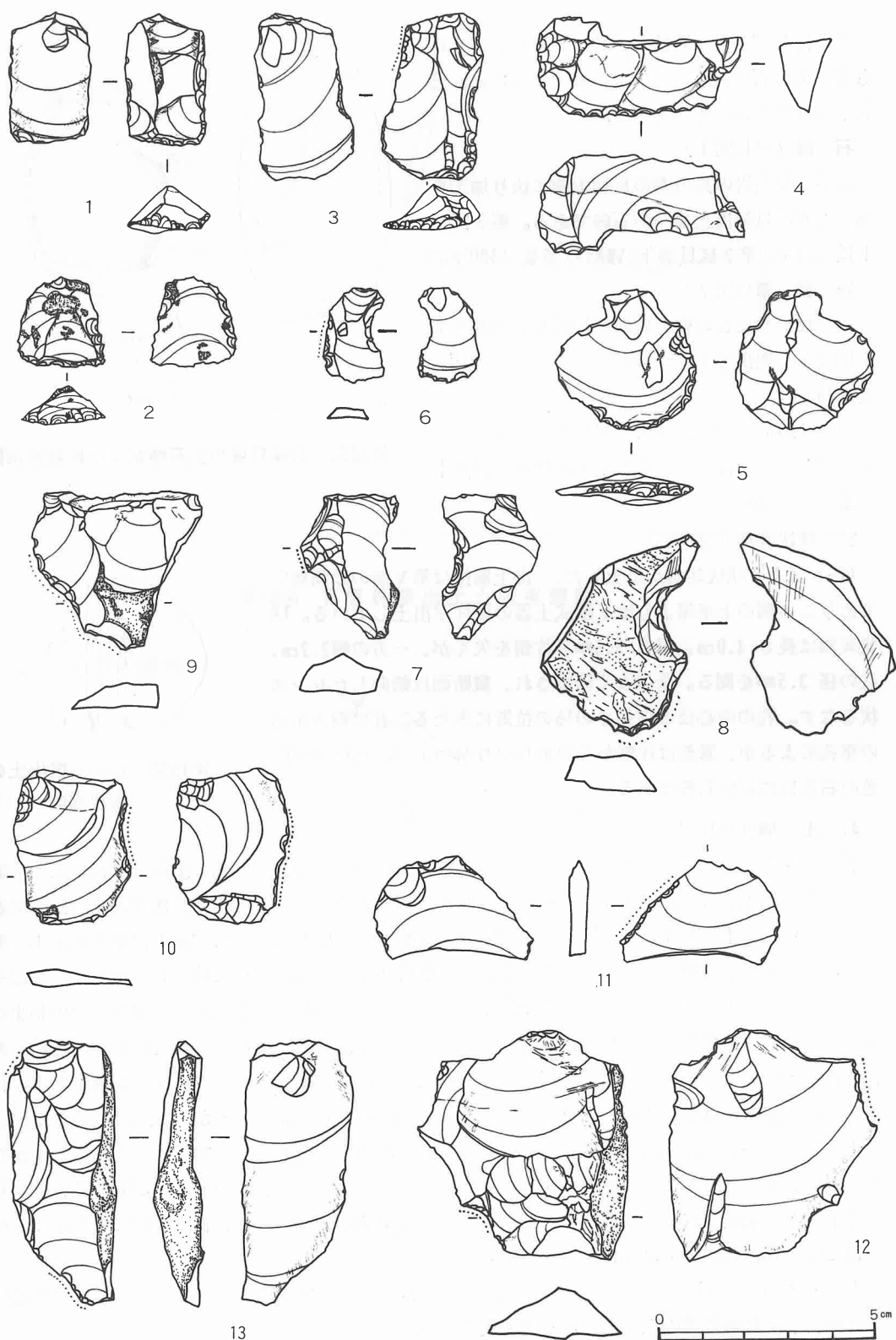
9・10・11・12はいずれも剥片の縁辺の一部に片側から細かい加工を施したものである。用途ははっきりしないが、9は搔器、11は削器に近い加工をもつ。10・12は2ヶ所に錯向状に小さい加工を施している。13は加工痕はないが一部に使用痕とみられる細かい剥離がある。石質は9がガラス質安山岩のほかは、いずれも姫島黒曜石である。

石 核 (12図16・17)

剥片石器の母材となった、姫島黒曜石の石核である。16は2面以上の打面をもち、17は扁平な舟底状をなす。いずれも幅広い小型の縦長剥片を作り出す母材といえるであろう。



第12図 石原貝塚出土剝片石器実測図（その1）



第13図 石原貝塚出土剥片石器実測図 (その2)

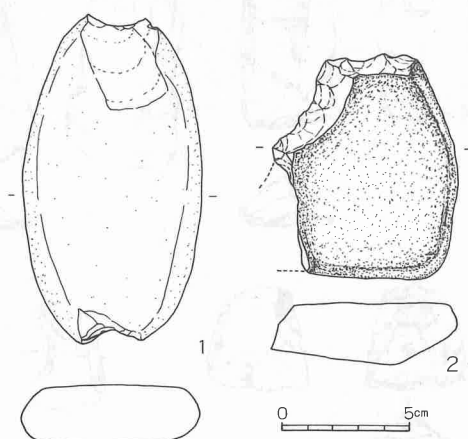
このほか不定形な石核が十数点あるが、いずれも姫島黒曜石であり、中には角礫のままほとんど剥離されていないものもある。

石 錘 (第14図1)

扁平な安山岩の長円礫の長軸両端に挟り加工を施した石原貝塚出土唯一の石錘である。第3区第1貝層出土(第2区貝層下(VII層))重量は300g。

礫 器 (第14図2)

扁平なやや硬質の安山岩礫に片側からのみ刃部を形成した突出部をもつ礫器である。第3区出土。重量250g。

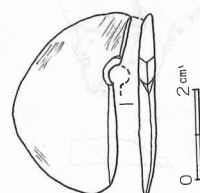


第14図 石原貝塚出土石錘および礫器実測図

このほかにJ-16・17区第V層から、サヌカイト製の突出部に磨耗痕がみられる尖頭状礫器が出土している。(図版8右下)

3) 玦状耳飾 (第15図)

G-6区より玦状耳飾が出土した。出土層位は第V層の砂礫層中でありこの層の上半部より鐘ヶ崎式土器の破片が出土している。玦状耳飾は長さ4.0cm、厚さ3.5mm、片側を欠くが、一方の幅2.2cm、孔の径3.5mmを測る。全体よく研磨され、縦断面は錯向したレンズ状をなす。孔の中心はほぼ長さの1/2の位置にあたる。孔は両方からの穿孔によるが、溝部は片側からの擦り切りがつよい。石材は灰白色の石灰岩に近い石質である。



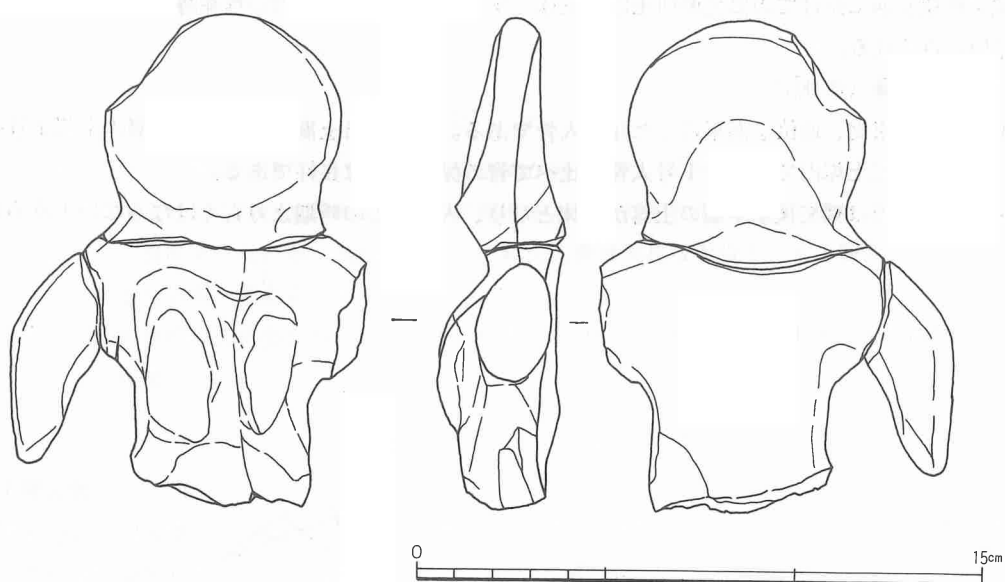
第15図 G-6区出土の玦状耳飾

4) 土 偶 (第16図)

石原貝塚出土の土偶は下半身を欠くが、残された上半身は写実的で九州の土偶の特徴をよく表わしている。出土位置は、頭部が第3調査区、胴部が第2調査区から、そして腕部は表土中からであった。頭部は右上をわずかに欠失しているがほぼ完形で、径6.2cm、厚さ1.7cmの円盤状の粘土を胴部に継ぎ、背後から補強して形成している。また胴部は2つの粘土を横に接合し、胸部から腹部をつくり、さらに他の扁平な粘土を背部につけ、厚さ約2cmに仕上げている。乳房は2つの粘土を縦に長く貼り付けて形成しているが、先端部は欠けている。また、腹部も欠けているが、宮崎県陣内遺跡の土偶のように、横方向に粘土を貼り、隆起させ、妊婦を表わしたものが剥落したように感じられる。腕部は、右のみであるが断面円形の粘土を接合し形成し、細かい細工はみられない。

土偶の表面は、さほど入念に調整された観はなく、胸部から腹部にかけて縦に粘土の接合線が残り、胴部、後頭部ともに荒い撫で仕上げのまま終っている。しかし、顔面にあたる部分は、他よりやや滑らかに調整されている。また、頭部、顔面部、胸部の乳房から上、背部の肩にあたる部分の周辺には赤色顔料が塗られた跡がみられる。

土偶の時期は、第2調査区の側から考えると、貝層中から出土し後期後半であることは間違いはないが、いずれの型式の土器に伴うかは不明である。

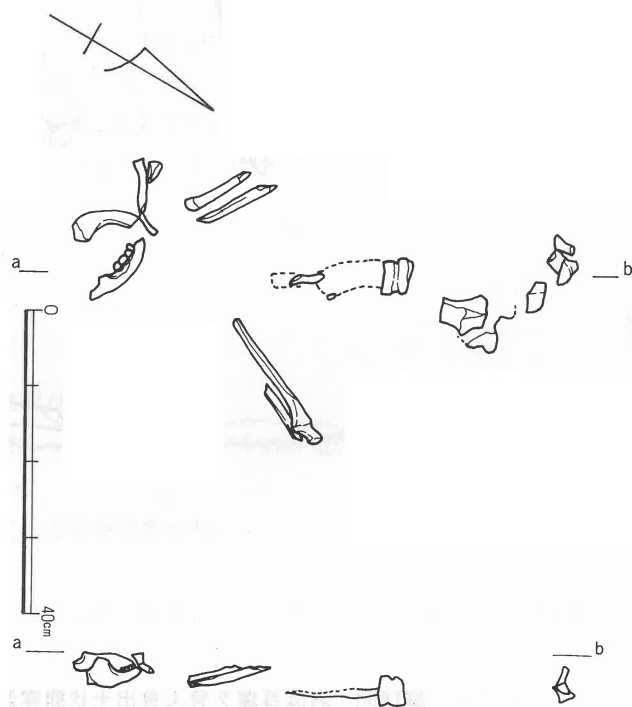


第16図 石原貝塚出土土偶実測図

4. 人骨の埋葬

1) 1号人骨(第17図)

第2区南側壁面近くの貝層中より、頭位を南東にした人骨が出土した。貝層内であるため土坑の掘込みは把みえなかった。また骨の保存状態も不良で、下顎のほか上肢・軀幹骨盤と下肢の一部が残されているだけである。一見散乱しているような状態に見えるが、ほぼ原位置のままであるとみてよい。足骨の一部が寛骨に接している状況から、屈葬ではないかとみられる。



第17図 石原貝塚1号人骨出土状態実測図

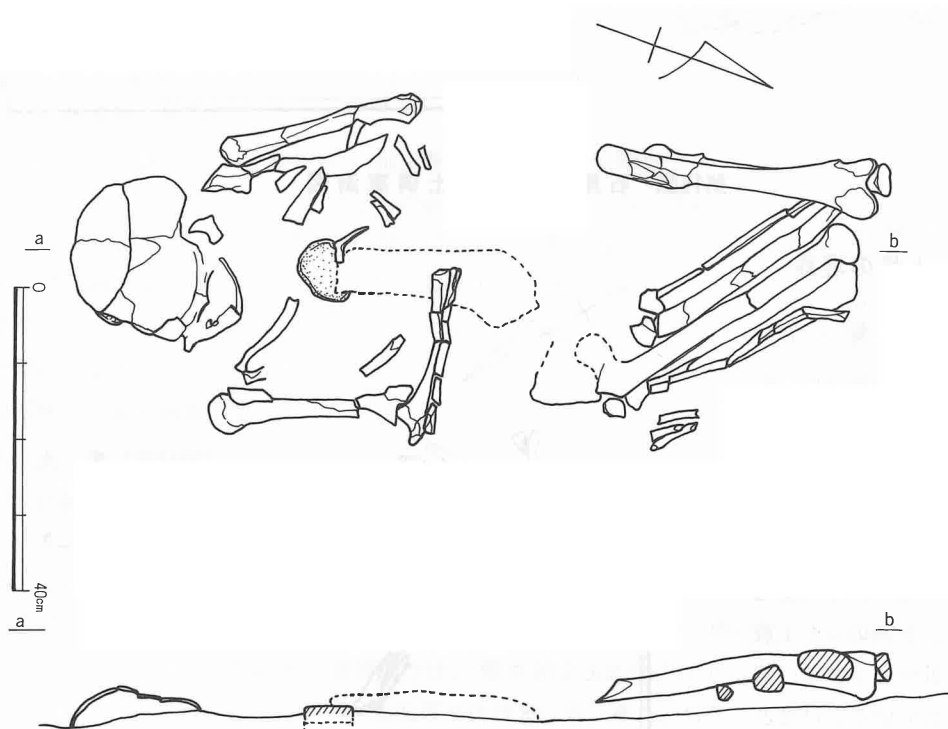
人骨が埋葬されていた貝層は、縄文後期後葉か

ら縄文晩期初頭にかけての黒色磨研土器を主体とする時期であり、人骨の埋葬時期は縄文晩期を遡らないとみられる。

2) 2号人骨(第18図)

1号人骨の東側、頭位を南東にした屈葬人骨である。人骨の出土層位は、中部貝層の下部より砂層に掘り込んだ土坑内であり、1号人骨に比べて骨の保存状態は良好である。

中部貝層下部は縄文後期中葉の土器が主体となり、人骨はこの時期より古くはならないとみられる。



第18図 石原貝塚2号人骨出土状態実測図

5. 石原貝塚出土の縄文時代人骨

内 藤 芳 篤・ 分 部 哲 秋

は じ め に

石原貝塚の第1次調査(1973)において人骨2体が出土した。人骨は別項に記載されているように考古学的所見より縄文時代後期および晩期に属するものそれぞれ1体ずつである。これらの保存状態は必ずしも良好ではないが、九州地方からの縄文人骨は現在なお少なく、その整備が急がれているとき誠に貴重な資料と考えられる。

著者らは本人骨研究の機会を与えられ、その観察および計測の結果、興味ある二・三の知見を得たのでここに報告したい。

資 料

1号人骨

縄文時代晩期 初頭、貝層中に南頭位で仰臥し、上肢は肘関節を屈していたが、下肢は骨破損のため葬位を確認することはできなかった。

保存状態は悪く、下顎骨、上肢骨の一部等が比較的よく残っていたが、下肢骨および軀幹骨はほとんど破損していた。

なお下記の所見より女性・熟年骨と推定されたものである。

2号人骨

縄文時代後期中葉、土坑中より南頭位で、葬位は仰臥屈葬であった。

保存状態は比較的良好で、脳頭蓋および下顎骨の他、上・下肢骨が残っており、大腿骨および脛骨はある程度の計測が可能な資料であった。軀幹骨はほとんど破損していた。

また下記の所見より女性・壮年骨と推定されたものである。

所 見

1号人骨

(1) 頭 蓋 骨

1. 脳頭蓋

右側の側頭骨岩様部および鼓室部が残っていた。

乳様突起は比較的小さいものであったが、錐体はやや大きい。

2. 顔面頭蓋

左側上顎骨の前頭突起が残っているのみであった。

3. 下顎骨

骨体の前部、両側の関節突起および左側の筋突起を欠いていたが、本例のうちでは最も良く保存されているものであった。

下顎骨全体としては余り大きいものではないが、骨質は厚く、比較的頑丈な感じである。骨体は厚く、顎舌骨筋線も鋭く隆起しているが、歯槽部には歯周疾患によるものと思われる骨萎縮が見られ、後方に傾き、高さも低くなり、オトガイ孔は左右共にP₂の下で、中央より僅かに高く存在している。下顎枝も後方へ傾斜し、下顎角は広がっているが、幅は広く高さは低い。また下顎切痕

4. 齒

$$\begin{array}{c|c} \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup \diagup & \diagup \diagup \diagup \diagup \text{P}_2 / \text{M}_2 / \\ \hline \text{M}_3 \text{M}_2 \text{M}_1 \text{P}_2 \otimes \diagup \diagup \diagup \diagup & \diagup \diagup \diagup \diagup \bigcirc \text{M}_1 \times \times \end{array}$$

○齒槽開存
 ⊗拔去
 ×齒槽閉鎖
 ・カリエス
 ※遊離齒
 /不明（齒槽破損）

歯槽部について観察すると、 $\overline{P_1}$ の部分の歯槽は閉鎖し、歯槽上縁の高さは遠心側の部分と同じで、骨萎縮は認められない。また近心側の $\overline{C_1 I_2 I_1 I_1 I_2 C_1 P_1}$ に当る部分は破損しており観察できない。 $\overline{P_2}$ の部分は歯槽開存し、死後の脱落であるが、 $\overline{M_2}$ より遠心側の $\overline{M_2 M_3}$ に当たる部分は閉鎖しているのみならず骨萎縮が見られ歯周疾患によるものと思われる。

(2) 四肢骨

上肢骨では鎖骨（左）、上腕骨（右）、橈骨（右・左）、尺骨（右・左）および指骨の骨片が残っていたが、骨端はほとんど破損して骨体が部分的に残存しているのみであった。

右側の骨体大部分が残っていた。

上腕骨全体としては小さくて細いが、三角筋粗面はよく発達し、著しく扁平である。ほぼ中央と推測される部位において計測すると、最大径が21mm、最小径が13mm、周径は58mm、最小周は54mmある。骨体断面示数を求めると 61.90となり、数値の上からも細くて扁平性が強いことが解る。

いま骨体断面示数（女性・右側）について縄文、弥生両時代人骨と比較してみると次のとおりである。

石原 人 骨 (内藤他、1979)	61.90
津 雲 人 骨 (清野他、1928)	69.0 (20例)
吉 胡 人 骨 (大庭、1935)	71.2 (25例)
三 津 人 骨 (牛島、1954)	77.12 (6例)
土井ヶ浜人骨 (財津、1956)	75.9 (29例)

すなわち石原縄文人骨は他の縄文、弥生兩人骨よりも明かに小さい示数値を示し、著しい扁平性を表わしているものと言える。

前腕骨のうち右側尺骨が遠位骨端を欠くのみで、比較的よく残っていた。

尺骨全体は余り大きくないが、扁平で骨間縁が鋭い。また尺骨粗面が広く、かつ陥凹しているのが目立っている。

下肢骨は保存状態が悪く、僅かに寛骨（右）、腓骨（左）、距骨（左）、踵骨（左）等の一部が残

っているに過ぎなかった。

寛 骨

右側寛骨の大坐骨切痕の上縁から内側縁に当たる部分が僅かに残っているが、切痕の形状は円形に近いものと推測され、性別判定の上から貴重な部分である。

(3) 軀 幹 骨

椎骨の椎体片が残っているのみであった。

2 号 人 骨

(1) 頭 蓋 骨

1. 脳頭蓋

頭蓋冠がよく残っていたが、その他には右側の側頭骨より後頭骨の一部が残存していた。脳頭蓋の主径を計測することは不可能であったが、観察により多少の形状を知ることができた。顔面頭蓋は骨片のみであった。

頭蓋冠の骨壁は薄く、縫合は内板では部分的に癒着しているが、外板には癒着はなく離開している。形態的には前頭部が膨隆し、頭蓋上面は丸く、長さの割りに幅が広く、短頭の傾向が強く表われており、頭型としては短頭ないし過短頭に属するものであろう。また側頭骨の乳様突起および錐体はいずれも小さい。

2. 下顎骨

下顎骨は骨体の左側が一部欠如し、右側の下顎角、関節突起、両側の筋突起など部分的に破損していたが、全体として一応接合することができた。

下顎骨の形状は諸径が小さい。骨体もやや薄く、高さもかなり低い。オトガイ孔は左右共にP₂の下で、ほぼ中央に位置しているが、孔は大きい。下顎枝は僅かに後方に傾いているが、幅は広く、高さは低い。下顎切痕も浅くて広い。

3. 歯

下顎骨に3本の歯が残っていた他に、右側の上顎骨歯槽突起の一部と共にM₂M₁が残っており、また遊離してI₁、M₁の2本が見いだされた。これらを歯式で示すと次のとおりである。

○ M ₂ M ₁ / / / / /	※ I ₁ / / / / /	● M ₁ / / /
M ₂ M ₁ ○ ⊗ ⊗ / / /	/ / / / /	P ₂ / / /

○ 歯槽開存
⊗ 抜 去
● カリエス
※ 遊 離 歯
/ 不明 (歯槽破損)

歯の咬耗度はBrocaの2度であるが、P₂のみは咬耗の程度が弱い(1度)。またI₁は近心より遠心へ向って斜め上方に磨耗しているが、咬合面は広く、鉗子状咬合を推測させるものがある。M₁にはカリエスが認められる。

下顎の歯槽部を観察すると、P₂の部分は開存し、これは死後脱落と思われるが、P₁Cの部分は閉鎖して上面に弱い癒合線が見られ、また歯槽上縁の高さも遠心側のそれとほぼ同じである。

I₂I₁I₁I₂C P₁の範囲は破損しているので観察できない。

問題はP₁Cの歯槽の状態であるが、対称部位の破損もあって断定は難しいが、抜歯の可能性をもつ例と考えられる。

(2) 四 肢 骨

1) 上肢骨

上腕骨(右・左)、橈骨(右)、尺骨(右・左)、手根骨(右側の小多角骨、有鉤骨、左側の舟

状骨、有頭骨)、中手骨(右側のⅠ～Ⅴ、左側のⅡ、Ⅴ等の一部)、指骨の骨片等が残っていたが、その大部分は骨体のみで、骨端は破損していた。

上腕骨 上腕骨の右側は骨体の下半部のみが残り、左側は両骨端および骨体後面を欠如していたので計測は不可能であった。

観察上では、比較的細いが、その割には長い。三角筋粗面は女性としてはよく発達しており、また扁平性も認められる。

2) 下肢骨

下肢骨では寛骨(右側の一部)、大腿骨(右・左)、膝蓋骨(右・左)、脛骨(右・左)、腓骨(右・左)、足根骨(両側の距骨、踵骨、舟状骨、右側の内側および外側楔状骨)、中足骨および趾骨の骨片等が残っていたが、大部分はその一部のみで、本例の中では、右側の大腿骨および脛骨が比較的良好に残存していた。

1. 大腿骨

右側の大腿骨は内側顆が破損していたが、ほぼ完全に近いものに復原できた。

全体の形状としては女性例として見る限り比較的長くて、必ずしも細くはない。彎曲は見られない。頸部は短かく、頸体角は小さい。殿筋粗面は余りはっきりしないが、この部分に一稜が見られ、粗線の外縁につづいている。粗線は広くて発達も良いが、柱状形成の像は認められない。

計測値は、最大長が(399mm)、全長が(396mm)、中央周は(77mm)で、長厚示数を求めると(19.44)となる。骨体中央の矢状径は(25mm)、横径は(24mm)で、断面示数は(104.17)となる。また上骨体部の横径は29mm、矢状径は21mmで、断面示数は72.41となっている。

これらの計測値を縄文、弥生両時代人骨の右側大腿骨のそれと比較してみると、次のとおりである。

	1. 最大長 (mm)	8. 中央周 (mm)	8/2長厚示数	6/7中央断面示数	10/9上骨体示数
石原人骨(内藤他、1979)	399	77	19.44	104.17	72.41
津雲人骨(清野他、1928)	382.9 (16例)	77.4 (26例)	20.5 (16例)	103.9 (19例)	76.6 (25例)
吉胡人骨(石 沢、1931)	384.8 (18例)	80.7 (66例)	20.7 (18例)	107.7 (66例)	78.7 (59例)
三津人骨(牛 島、1954)	406.50 (2例)	81.77 (13例)	19.90 (2例)	101.45 (13例)	93.72 (11例)
土井ヶ浜人骨(財津、1956)	399.5 (14例)	79.6 (33例)	20.1 (10例)	102.8 (33例)	75.3 (31例)

最大長では、石原縄文人骨は津雲、吉胡の縄文群より長く、三津、土井ヶ浜の弥生群に近いが、中央周では両群よりも劣っている。長径、周径の値から考えられるように長厚示数では石原縄文人骨は両群よりも小さく、縄文群との差が目立っている。骨体の中央断面示数では両群と大差はないが、上骨体断面示数では両群より小さい値を示し、とくに三津弥生人骨との差が著明である。

すなわち石原縄文人骨は縄文群よりは長くて細く、骨体中央の断面では差がないが、上骨体部にはより著しい扁平性をとどめている。弥生群に対しては、長さは似ているが、僅かに細い。また骨体中央の断面では著差を見ないが、上骨体では著しい扁平性が表われている。

2. 脛 骨

右側の脛骨の骨体上部三分の二が残っていた。

脛骨の骨体は太くて扁平であり、後面のヒラメ筋線は著明でないが、かなり強い一稜を形成しており、ヒラメ筋線との間は溝状になっている。

計測値は、ほぼ中央と推定される部位において最大径が(30mm)、横径が(21mm)、従って断面示数は(70.00)となり、中央周は(80mm)である。また栄養孔の部位では最大径が33mm、横径が21

mmで、断面示数は63.64となり、周径は86mmである。諸径がかなり大きく、扁平性も強く、稜線も鋭いので一見すると男性縄文人骨を思わせるものがある。

これらの計測値と縄文、弥生両群とを比較すると次のとおりである。

	10. 中央周 (mm)	8. 中央最大径 (mm)	9. 中央横径 (mm)	9/8 断面示数
石原人骨 (内藤他、1979)	80	30	21	70.00
津雲人骨 (清野他、1928)	72.3 (22例)	26.8 (22例)	17.7 (22例)	65.4 (23例)
吉胡人骨 (石 沢、1931)	75.5 (55例)	27.5 (56例)	18.4 (56例)	67.3 (56例)
三津人骨 (牛 島、1954)	77.50 (12例)	27.67 (12例)	20.04 (12例)	72.78 (12例)
土井ヶ浜人骨 (財津、1956)	71.8 (27例)	26.0 (28例)	19.0 (28例)	70.8 (28例)

石原縄文人骨は中央の最大径、横径、周径共に縄文、弥生両群よりも明かに大きい。また中央断面示数では縄文群より大きく、弥生群より小さいが、数値の上からはむしろ弥生群に近い値を示している。

すなわち石原縄文人の脛骨は縄文、弥生両群よりも骨体の諸径が明かに大きい、扁平性は数値で見る限り両群の中間値を占め、むしろ弥生群に近い値を示している。

3. 腓 骨

左右共に骨体のみが残っていた。

腓骨の骨体は必ずしも大きくはないが、稜線が鋭く発達し、溝状形成が認められる。

(3) 軀 幹 骨

椎骨の椎体断片が残っているのみであった。

(4) 推定身長値

右側大腿骨を用いて、Pearson の方法により推定身長値を求めると、(150.45cm) となり、津雲 (147.32cm、16例)、古胡 (147.69cm、18例) の縄文群よりは明かに高く、三津 (151.91cm、2例)、土井ヶ浜 (149.97cm、16例) の弥生群との間には著しい差が見られない。

総 括

石原貝塚出土の縄文時代人骨 2 体は、女性・熟年骨 (縄文晩期) および女性・壮年骨 (縄文後期) と推定されるものであるが、これらの形質については各項目にわたって記載したとおりである。

以上述べたことがらを総括すれば次のとおりである。

(1) 形 質

1 号人骨

1. 頭蓋の形状は不明である。下顎骨は余り大きくはないが、頑丈である。歯槽部に骨萎縮が見られ、歯周疾患によるものと考えられる。
2. 歯は咬耗がひどく、カリエスも認められる。咬合型は不明である。
3. 右側の下顎第 1 小臼歯 ($\overline{P1}$) の歯槽は閉鎖し、抜歯の可能性が考えられる。
4. 上腕骨は小さくて細いが、三角筋粗面の発達良好で、著しい扁平性が認められる。
5. 寛骨の大坐骨切痕の形状は円形に近いものである。
6. 性別および年齢については、以上の諸形質より女性・熟年と推定した。

2 号人骨

1. 頭蓋は前頭部がよく膨隆し、主縫合は内板では部分的に癒着しているが、外板では離開したままである。頭型は短頭ないし過短頭に属しているものと推測される。

2. 下顎骨の形状は小さく、骨体も低い。歯槽部の骨萎縮は見られない。
3. 歯の咬耗度は軽く、鉗子状咬合と推測されカリエスも認められる。
4. 右側の下顎犬歯および第1小臼歯($\overline{P_1C}$)の歯槽部分は閉鎖し、上面には癒合線が見られ、抜歯の可能性が考えられる。
5. 上腕骨は細いが比較的長く、扁平性が見られる。
6. 大腿骨は長くて比較的太く、彎曲も見られない。柱状形成の像は認め得ないが、骨体上部には扁平性が表われている。
7. 脛骨は著しく太く、後面に一稜が形成され、扁平性も認められる。
8. Pearsonの方法により右側大腿骨を用いて推定身長値を算出すると、150.45cmである。
9. 性別および年齢については、以上の諸形質より女性・壮年と推定した。

(2) 風習的抜歯

1号人骨の右側下顎第1小臼歯($\overline{P_1}$)および2号人骨の右側下顎犬歯、第1小臼歯($\overline{P_1C}$)の歯槽部の状態から抜歯の可能性があることはすでに述べたとおりであるが、兩人骨共に下顎骨の対称部分および上顎歯槽突起が破損しているため充分なる観察ができないし、抜歯型式を決めることもできない。また1号人骨の場合、歯周疾患による骨萎縮の部分もあることを考え合わせるとき、断定することは難しいが、下顎第1小臼歯ないし犬歯の抜去を含む風習的抜歯の可能性がある例としてここに記載しておきたい。

(3) 縄文および弥生人骨との比較

1号人骨の上腕骨に見られる強い扁平性、2号人骨大腿骨の骨体上部における扁平性や脛骨後面の稜形成など石原人骨の四肢骨に表われている特徴は従来言われている縄文人骨のそれとよく一致するものである。また歯の咬耗状態や咬合型、あるいは下顎第1小臼歯ないし犬歯を含む風習的抜歯の可能性などを考え合わせるとき、本人骨が縄文時代後、晩期の資料であると言う考古学的所見に何の疑問も抱かないものである。しかしながらまた一面、2号人骨大腿骨の長さ、さらにこれより求められる推定身長値などは、ただ1例のみの数値ではあるが、津雲・吉胡の縄文人骨よりも大きく、三津・土井ヶ浜の弥生人骨に近いものであった。

(擲筆するに当たり、本研究の機会を与えていただいた大分県教育庁および宇佐市教育委員会ご当局に感謝の意を表します。)

文 献

- 1) Martin—Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart. : 429—597.
- 2) 鈴木 尚、1939: 人工の歯牙の変形. 人類学・先史学講座、12. 雄山閣、東京.
- 3) 清野謙次・平井 隆、1928: 津雲貝塚人々骨の人類学的研究. 第3部 上肢骨の研究・人類誌、43(第3附録): 179—301.
- 4) 清野謙次・平井 隆、1928: 津雲貝塚人々骨の人類学的研究. 第4部 下肢骨の研究・人類誌、43(第4附録): 303—390.
- 5) 大庭秀夫、1935: 吉胡貝塚人々骨の人類学的研究. 第4部 上肢骨の研究. 人類誌、50(第9附録): 1—24.
- 6) 石沢命達、1931: 吉胡貝塚人々骨の人類学的研究. 第3部 下肢骨の研究. 人類誌、46(第1附録): 1—30.
- 7) 牛島陽一、1954: 佐賀県東彼杵村 三津遺跡 出土弥生式時代人骨の人類学的研究. 人類学研究、1: 273—303.
- 8) 財津博之、1956: 山口県土井ヶ浜 遺跡 弥生前期人骨の四肢長骨に就いて. 人類学研究、3: 320—349.

6. ま と め

石原貝塚における貝層の分布 (第19図)

発掘調査は、全面調査でないため、また採土等による消滅と攪乱も部分的にあるので、貝層の広がりや正確には把握できない。しかし、大半の調査区で1枚以上の貝層の堆積がみられたので、ほぼ時期毎の広がりを推定することはできた。各々の貝層は、時期的にはほぼ次のように分けることができる。

第1貝層 表土下もしくは暗褐色下の土・礫を混じる破碎貝層である。みかん畑A・B区、K-11南側、第1区にみられ、磁器・瓦器を混入する。おそらく中・近世の畑地造成の際の二次堆積によるものであろう。

第2貝層 第1区でみられた純貝層である。古墳時代須恵器を含み、第1区南東部にブロック状に堆積しているとみられる。

第3貝層 L-15・16区、J-16・17区の西側に堆積する純貝層である。貝はハマグリ主体で、含まれる土器(城ノ越系甕)からみて弥生時代中期の形成とみられる。西側の道路部分および畑、水田部にかけて分布するようである。

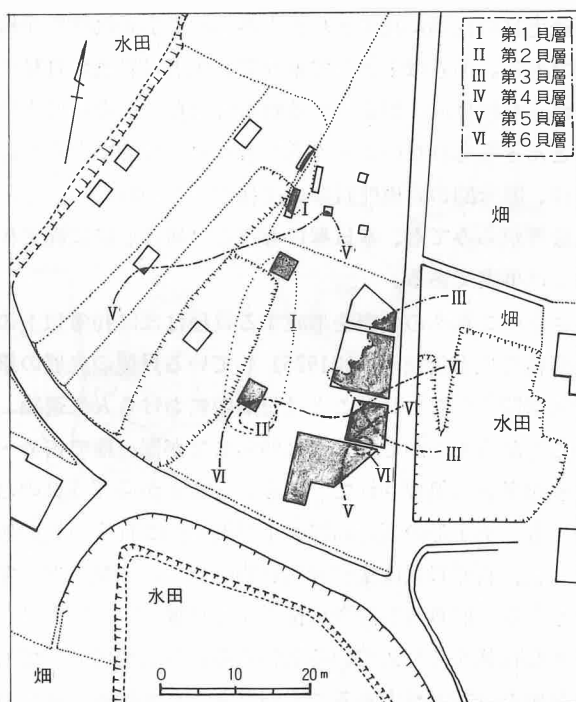
第4貝層 第2区、第3区のほぼ全面に分布する縄文後期末～晩期初の純貝層である。第Ⅲ貝層との面的境界は把握できなかったが、第2区においては上下に重複した状態である。

第5貝層 第2区南東部と第3区東側に堆積がみられる。縄文後後半の土器を主体に含む貝層である。分布の中心は東側道路および水田下にあるとみられる。なお、G-6区およびみかん畑D区の下部に見られた貝層も出土遺物からこの時期の堆積と思われるが、この両区の関係は現状では把握がたい。

第6貝層 第2区の南側断面中央にうすいレンズ状に堆積した分解寸前の貝層である。上部の第5貝層との間に砂礫層を挟み、後期初頭の時期と思われる。

このほかに、調査区南側に舌状に張り出す畑地部において、昭和45年に試掘を行なったが、この箇所において、表土、暗褐色土下にハマグリ単純貝層が検出された。地元の話によれば、この地区はほとんど全面的にそうした分布がみられるということである。ただ土器の発見がないため、時期の決定はできないが、その安定した堆積状態から前述の第3～第5貝層の時期に対応できるかもしれない。

以上のように石原貝塚では、少なくと



第19図 石原貝塚における貝層の推定分布図

も縄文時代後期初頭から古墳時代にかけて、五期以上の貝層の形成があったとみることができる。今回の調査では、各々の時期の貝層の全体の広がりをつまむまでに至らなかったが、その縁辺の一部を検出しえた成果は大きいと考える。

とくに旧森湾周辺の貝塚はそのほとんどが縄文後期前半の時期に限られていることからみれば石原貝塚の貝塚形成の存続期間はきわだって長期にわたっているといえることができる。

石原貝塚の立地と漁撈活動

石原貝塚の貝層堆積部の立地が、周辺の他の貝塚遺跡と著しい相違をなすことは、前にふれたが、若干周囲の地形と関連して述べてみたい。

石原貝塚と立石貝塚(賀川他1974)を除く他の貝塚は、桂川、寄藻川下流域に広がる平坦な洪積世台地端部(標高10m前後)の傾斜面に貝層の堆積が見られるという点ではほぼ共通する。これに対し立石貝塚は田笛川扇状地の扇央部(標高20m)、石原貝塚は洪積世台地下の微高地(標高3m前後)上に貝層の分布がみられる。

石原貝塚の東側背後には標高約10mの平坦な洪積世台地が広がり、湧水をもつ谷は溜池として台地のところどころに分布する。貝塚の西側は寄藻川の堆積による低湿地が水田(標高0.5~1m)として利用されている。東側台地の端部傾斜部には貝層の分布はないが、台地上には土器片、黒曜石などが散布していることから、台地下の貝塚部と関連する住居跡等の遺跡が存在する可能性が大きい。また西側の水田部は、標高が1m以下であるところから、当時干潟であったであろう。このことが、本貝塚に残された貝類のほとんどがハマグリを主体とする砂泥性のものに限られるということの大きな自然的制約となったとみられる。

石原貝塚において、その漁撈活動を直接的に示唆する遺物は少ない。わずかに鉦りに利用された石錘と貝の採捕に利用されたと思われる尖頭状礫器が検出されたにすぎず、骨角器にいたっては皆無である。前者は主として網漁業、後者は岩礁性貝類の採捕(山崎1975)の道具と考えられるが、それらを積極的に想定する数量ではない。そのことは、自然遺物の中に岩礁性貝類および魚骨がほとんどみられないことから裏づけられるであろう。ただし、第2区でみられたマガキのブロックは、部分的に岩礁性貝類の採捕が行なわれたことを示すものと考えられる。いずれにせよ、遺物の出土量等からみても、本貝塚における貝層の形成は縄文後期後半(第4・第5貝層)が主体であったことは事実である。

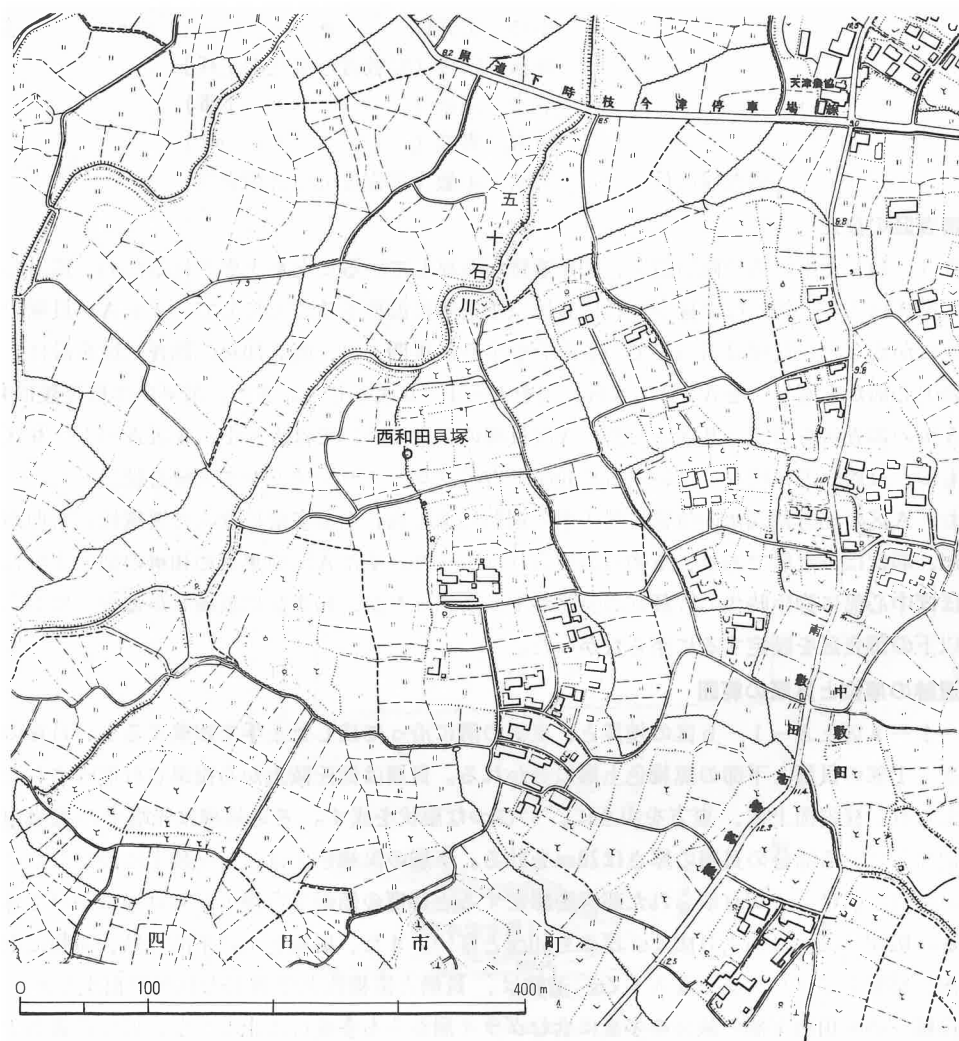
さらにこれらの貝層を形成する貝種はほぼ90%以上の比率で同一種が占めている。このことは、山崎純男氏が指摘(山崎1975)している貝塚の発展の第Ⅲ段階にみられる。「……貝類捕獲が多量で短期間に行なわれたことは貝層中における人工遺物、他の自然遺物(獣骨・魚骨)が非常に少ないことからわかる。貝種は99%までが同一種で占め…」という特徴に符合する。氏はまた同一の貝種が多量に処理されているということから『「貝のむきみ」生産』を考えているが、本貝塚においても、不定形の剥片石器および剥片がこれらの貝の処理に使用された可能性もある。

以上、石原貝塚はまだ自然遺物を充分に分類整理していない段階での報告であるが、周防灘南岸いわゆる「旧森湾」沿岸に位置する貝塚の一つであり、その立地と貝層形成の存続期間という点で大きな特徴をそなえているといえる。各貝層においても若干の攪乱はみられたが、ほぼ五期にわたる貝層の分布を想定することができ、なお調査区外に良好な貝層の遺存を推定しえた。自然遺物については、残された種々の課題とともに将来の研究に委ねたい。

Ⅲ 西和田貝塚

1. 遺跡の立地と環境

西和田貝塚は宇佐市中敷田字西和田に所在する小規模な貝塚である。貝塚のある宇佐市西部は南部の山岳地域から北の周防灘に向って延びる尾根を北流する犬丸川、五十石川、伊呂波川が侵食するため、標高10mを境に低丘陵がみられ複雑な地形を呈している。当貝塚も巾100m、水田面との比高差約1.5mほどの北に張り出した舌状の低丘陵西側斜面に形成されている。周辺には、西方約100mを流れる五十石川を狭んで対峙する中津市植野の丘陵に縄文後期の植野貝塚があり、約500m北方の下敷田には、弥生時代終末から古墳時代にかけての石蓋土坑墓が多数発掘された京徳遺跡がある。また、貝塚のある低丘陵上も工事のため削平されていたが、弥生土器片が多数散布し、一部貯蔵穴の跡も認められた。



第20図 西和田貝塚周辺旧地形図（圃場整備前）

2. 遺 跡 の 調 査

1)、調査に至る経過

当貝塚は圃場整備事業の工事中に地元の中学生によって発見された。このため、現地を訪れた時には、すでに、低丘陵と水田部との間に深く水路が刻まれ、また貝層も上部がブルドーザーにより削られ、露出しているという状況であった。調査は緊急を要するため、工事を一時停止し、10日間の予定で開始した。

2)、調査の経過

〔遺跡の所在地〕	宇佐市大字中敷田字西和田
〔調査期日〕	昭和49年4月15日～4月27日
〔調査団の構成〕	調査主体・大分県教育委員会
調査指導員	賀川 光夫（別府大学文学部教授）
調査員	島井 大山（宇佐市教育委員会社会教育課文化財係主事）
	小倉 正五（ ” ” ” ” 技師）
	後藤 宗俊（県教育庁文化課主任）
	清水 宗昭（ ” ” 主事）
	坂本 嘉弘（ ” ” ” ” ）
調査補助員	入学 正敏（宇佐市文化財調査員）

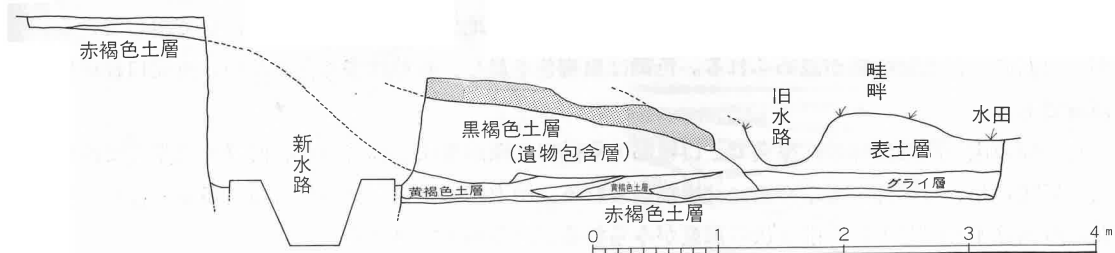
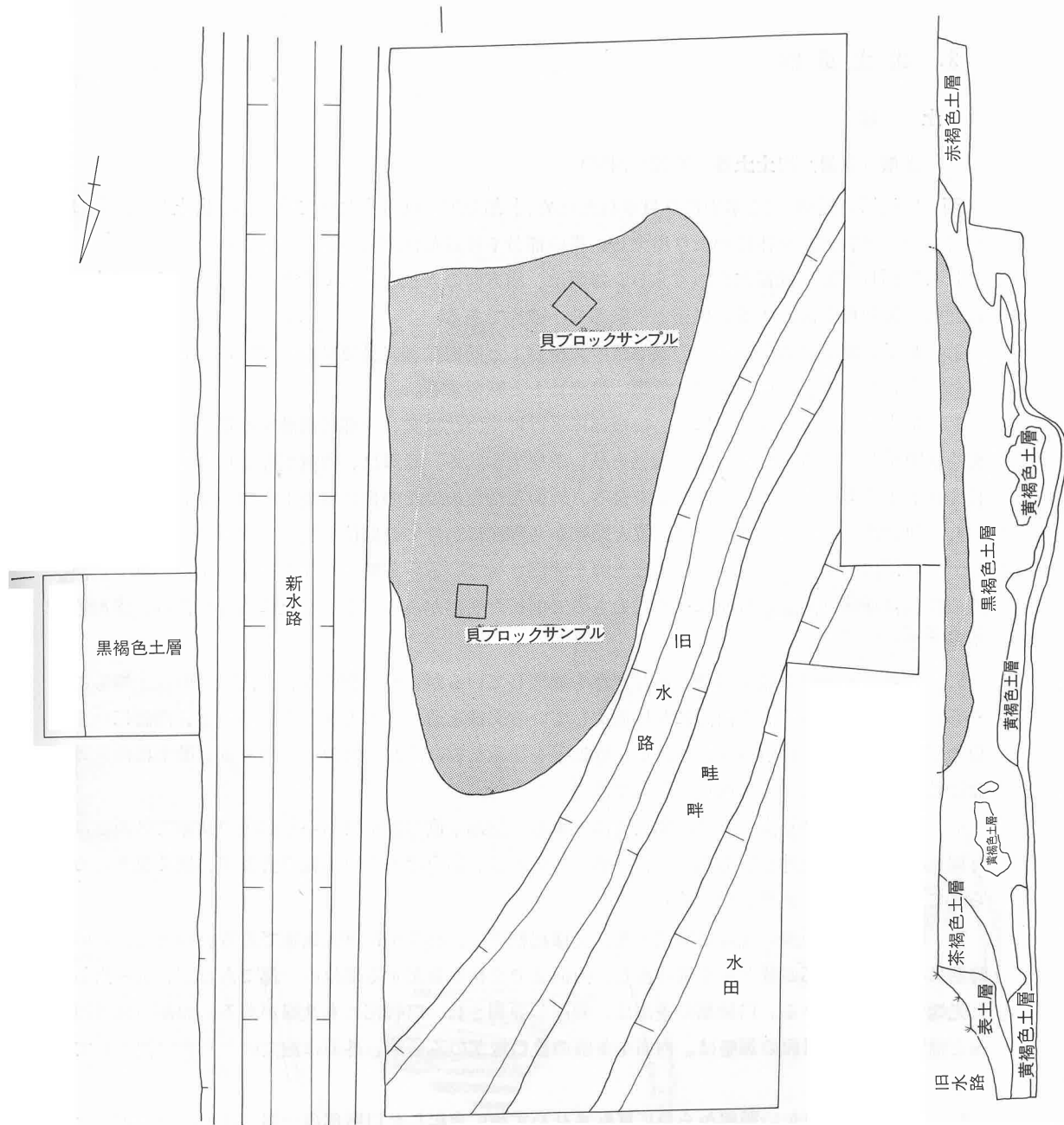
3)、調査区の設定

調査は、削平途中の低丘陵周辺に、まだ遺跡が残存していることも予想されるため、露出している貝塚をA区とし、新たに発見されればB区以下を順に仮称することにして、まずA区貝塚の調査区設定にかかった。貝塚は露出している部分を中心に東西4m、南北10mの調査区域を設け、南北10mの中心部から南半分をA-1-a区、北をA-1-b区とした。また、削平中の低丘陵にも1.5×1.5mの調査区を設定しB区とした。A区貝層の調査についてはA-1-a区A-1-b区の両区ともに、貝層の遺存状況の良い場所に30cm平方のブロックサンプリング区域を設定した。

なお、A区の北方約20mの位置に溝工事の掘削により黒色土を多量に含んだ遺構状の断面がみられたが、形状は不定形であり、遺物も認められなかった。またA区の東方約30mの削平された丘陵部のほぼ中心部に弥生時代の貯蔵穴の痕跡が1ヶ所あったが、わずかに数cmしか遺存しておらず、C区以下の調査区を設定するに至らなかった。

4)、遺跡の層位と貝層の範囲

A-1-a区とA-1-b区の境界と、東側の溝に沿って残した土手で観察すると、貝塚の層位は大きく上部の貝層と下部の黒褐色土層に分かれる。貝層は低丘陵上から投棄され形成されたものと考えられ、緩斜面上に、東方を中心に、いびつな扇状を成す。その規模は先端での最大巾約6m、遺存している部分の貝層の厚さは20cmを計る。下層の黒褐色土は、低丘陵上に設定した3区でも認められ、溝により切り取られた部分を想定すると45度の傾斜で丘陵上から低地にかけて堆積している。広がり、貝層より広く、厚さも60cmと厚い。また、黒褐色土の下部には、遺物は含まない。褐色粘質土がブロックで混入する。遺物は、貝層と黒褐色土で良好な状況で出土した。この他、丘陵下の水田面下層の鉄分を多量に含むグライ層からも多量に出土したが、近世の磁器等と共に出土し、攪乱状態であった。



第21図 西和田貝塚平面断面図

3. 出土遺物

1) 土器

(1) 上層（貝層）出土土器（第22～24図）

西和田貝塚の貝層は、工事中に発見されたため、上部を削られ薄くなっていたが、出土した遺物は少ない。遺物は、全体にわたり出土し、集中部分や特殊な状態は認められなかった。

1. 断面U字形の沈線文をめぐらし、器面は、横方向の入念な研磨で仕上げられている。胎土には白色の微砂粒を混入する。黒褐色の胴部の小破片である。

2. 胴部に鐘ヶ崎式土器特有の渦巻状の文様が1と同様な施文具で描かれている。胎土に金雲母をわずかに混入し、器面の調整、色調、焼成は1と類似する。

3. 横方向の条痕文を地文にし、口縁部に平行に浅い沈線文、一部に渦巻文を描き、外面の条痕文を撫で消している。内面は、灰褐色を呈し条痕文が残る。器形は、内湾気味の口縁部から底部へ続く鉢形土器であろう。胎土に砂粒を含み、外面茶褐色の焼成の良い粗製土器である。

4. 口縁部外面の口唇に沿った部位と頸部から胴部にかけての部位に断面U字形の沈線をめぐらし、口縁部内面をつまみ上げ、口縁部先端を強調させている。調整は外面を条痕の上から撫で、内面の頸部は逆時計回りの方向にヘラ状のもので削った痕跡がみられる。胎土に雲母を含み、赤褐色を呈する。

5. 先端の不揃いな施文具で、雑な文様を施文しているが、その構成は、小池原上層式土器等にみられる口縁部の外面から内面にかけ施文している文様と通じるものがある。器面は、内側にヘラ状の工具で研磨した跡がみられるほか、特に手を加えた痕跡のない粗製土器である。胎土に白色の微砂粒を多量に混入する赤褐色の土器である。

6. RLの縄文で施文した磨消縄文土器である。胴部下位の破片であろうが浅い沈線で区画された縄文部以外は、内外面ともに入念に研磨されている。胎土はあまり砂粒を含まず、硬く焼きしめられている。色調は褐色を呈する。

7. 断面U字形の深い沈線で施文され、文様起結点は、わずかに押え気味である。破片は、この時期に特有な口縁部の数ヶ所を張り出し、内面まで文様を施文する部位の一部であるが、張り出した先端部が欠けている。口縁部の先端は、肥厚し強調され、口唇部にも沈線がある。頸部の径は22cmと推定される。器面の調整は、内面を条痕の後口縁部のみ研磨、外面は施文のため撫で消されている。

8. 口縁部は、短い頸部から急に反転させわずかに突起した口唇部の一部には短い沈線による文様がみられる。胴部は、先端の丸い棒状の施文具で深く渦巻状の沈線文が施文され、胴部最大径の部位以下まで飾られている。調整は横方向の条痕文を地文とし、内外面ともに撫で消しているが、内面の一部には痕跡が認められる。色調は黒褐色を呈し、砂粒は多く含まない。復元口縁径は25cmである。

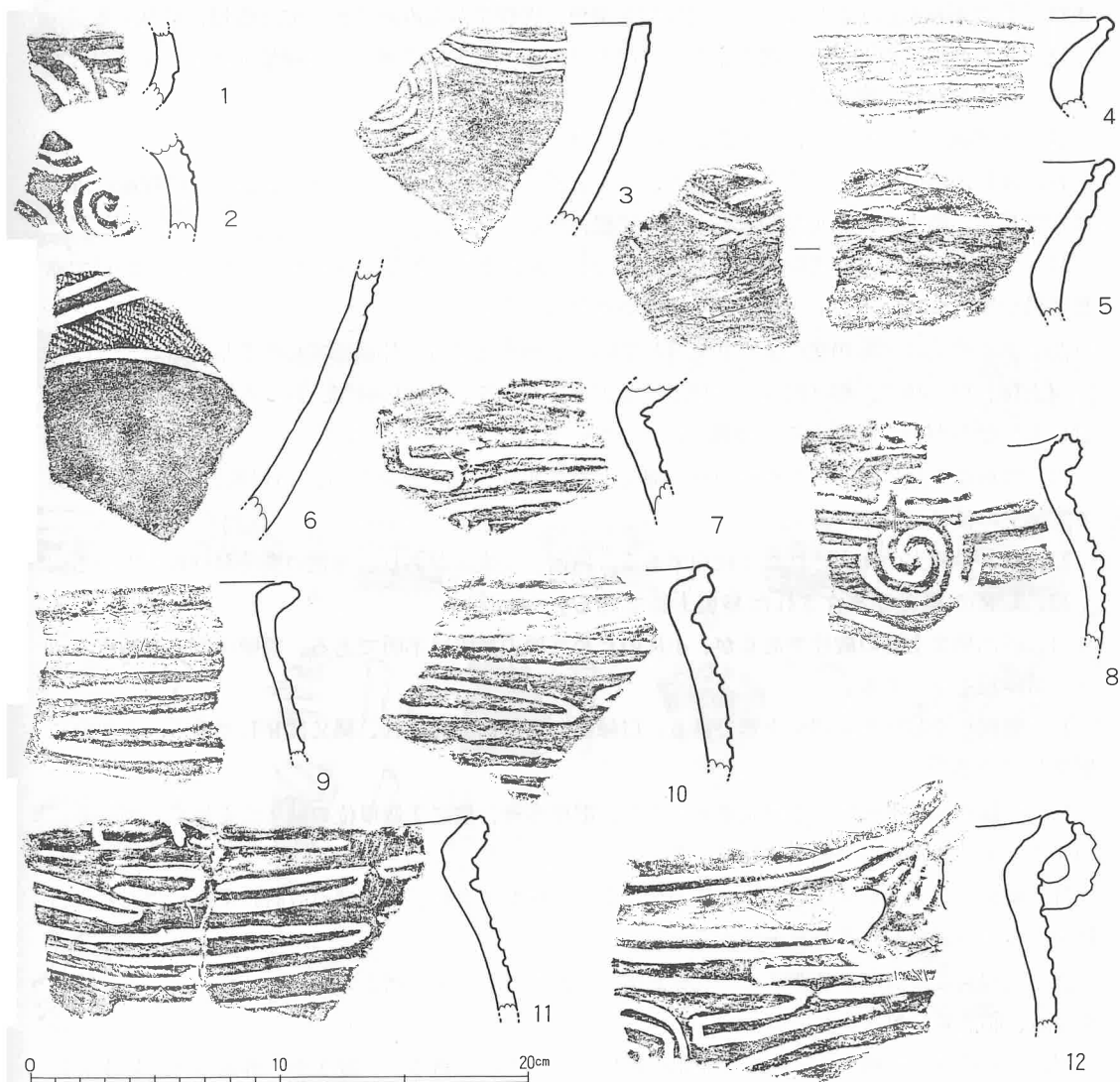
9. 幅の広い凹線気味の沈線文で、口縁部に平行に文様が構成されている。口縁部は先端で跳ね上り気味にし、口唇部にも巾の広い沈線がみられる。胎土には黒色の細かな結晶を多量に含む。器面の内面は4と同じ方向の削り状の調整がみられる。淡茶褐色を呈する。

10. 口縁部は短かく外反し、器面には、先端のやや鋭利な施文具で、平行沈線や「つ」の字状の

沈線をめぐらしている。内面には横方向の条痕文が認められるが、外面の調整は不明である。褐色を呈し、砂粒の少ない硬く焼かれた土器である。

11. 頸部の無い口縁部をわずかに外反させた鉢形土器である。口縁部のわずかに突起する部位は、浅い沈線文で飾られ、胴部は、口縁部に平行に長い「つ」の字状の沈線文がみられる。器面の内面は逆時計回りの方向に、削り状の荒い調整がみられるが、外面の文様以外の部分は滑らかに仕上げられている。胎土に砂粒は少なく、茶褐色を呈する。復元口縁径は30.4cmである。

12. 胴部から口縁部にかけての把手を持つ。口縁部は、外反し、内面を連続して押えることにより、口縁端部を跳ね上り状にしている。文様は口唇部、把手、胴部と破片の全面にわたり、沈線文で飾られ、地文の条痕文は内外面ともに入念に撫で消されている。胎土に砂粒を混入し茶褐色を呈



第22図 西和田貝塚上層出土土器実測図 (1)

する焼成の良い土器である。復元口縁径は32.4cmを計る。

以上第22図に示した資料は、鐘ヶ崎式土器系の土器である。磨消縄文が6の1点しかなく他は沈線文で文様を構成するのみである。器形も、頸部が短かく、小池原上層式、平城式土器とは異なる。また、10、11にみられる「つ」の字状の文様は、立石貝塚、福岡県黒崎貝塚、同寿命貝塚にもみられ、大きくは鐘ヶ崎式土器の一部に含まれるものであろう。

13. 口唇部を沈線で飾った土器である。胎土に石英の砂粒を多量に含む。文様帯に縄文状の文様がみられるが識別不能である。

14. 口唇部の文様を中心に二本の沈線で飾られ、内外面ともに研磨された土器である。茶褐色を呈し、胎土には砂粒をあまり含まない。

15. 入念に研磨された土器である。文様部位は、前2者と同様であるが、器形は大形である。胎土に石英の石粒をわずかに含む。外面は明茶褐色、文様帯から内面にかけては黒褐色を呈する。

16. RLの縄文をもつ磨消縄文土器の口縁部である。入念に研磨し、口縁部下に焼成後の穿孔がある。硬く焼かれ、黒褐色を呈する。

17. 磨消縄文土器の小破片である。内面を研磨し、縄文はRLである。

18. RLの幅の広い磨消縄文帯をもち、よく研磨されている。内面には稜があり、口縁部に近い破片である。胎土には石英の砂粒をわずかに混入する。

19. 内外面ともに入念に研磨された黒褐色の磨消縄文土器である。沈線文から縄文部にかけて赤色顔料が塗られている。石英の砂粒をわずかに混入する。

20. 2本単位の沈線が底部まで施文されている。内面は黒色、外面は茶褐色を呈する。

以上16、18～20は、瀬戸内地方の福田KⅡ式土器である。16は口縁部、18は内面の稜、19は文様帯に赤色顔料が塗られ良くその特徴を表わしている。

21. 器面を入念に研磨した黒色の磨消縄文土器である。縄文はRLの、口縁部に近い破片である。胎土の砂粒は少ない。

22. RLの縄文の施文された小破片である。内面に条痕文があり、黒色の煮汁が付着している。

23. LRの縄文の施文された精製土器である。

24. 磨消縄文土器の破片であるが、小片のため文様の構成は不明である。器壁は厚く、胎土に白色の微砂粒を混入する。

25. 灰褐色をした磨消縄文土器である。口縁部に平行に施文され、縄又はRLである。全体的に磨滅している。

26. 口縁部に粘土紐による凹帯をめぐらし、肥厚させ、縦に2個単位の刺突文を施文している。内面には条痕により器面調整されている。

27. 断面「V」字形の沈線と円形刺突文により文様が施され、地文は斜方向の条痕文である。口唇部にも刻み目があり茶褐色を呈する。

28. 沈線文と不規則な刺突文とで文様が構成され、器面は撫でにより調整されている。淡茶褐色を呈し、胎土に砂粒は少ない。

29. 器面に浅い凹線文を施文した胎土に砂粒を含む土器である。口縁部から外面は撫でにより調整されている。茶褐色を呈する。

30. 縦方向に2本の沈線が入り、器壁は薄い。暗黄褐色を呈する。

31. 断面V字の凹線文をめぐらせ、内外面とも撫で調整がみられる。胎土には砂粒をあまり含まず、茶褐色を呈する。

32. 先端の不整いな施文具で凹線文を平行にめぐらせ、内外面ともに撫でで仕上げられている。茶褐色を呈する。

33. 浅い凹線で文様を構成し、内面には条痕文が残る。黒褐色を呈する。

34. 断面U字形の凹線で施文し、内面は条痕文で調整され、明褐色を呈し、外面は黒色である。



第23図 西和田貝塚上層出土土器実測図 (2)

35. 口唇部には短かい間隔で刻み目、胴部には凹線文をめぐらせる。胎土には砂粒をあまり含まず、条痕文を撫で消している。暗茶褐色を呈する。

36. やや鋭り気味の口唇部に浅い刻み目を入れ、口縁部に平行して、先端の不そろいな施文具で凹線文を施文している。淡茶褐色を呈する。

37・42. 口唇部に太目の刻み目を加え、内面は斜め方向の条痕による器面調整が施されている。37は明茶褐色、42は灰褐色を呈し、あまり砂粒を混入しない。

38. 波状口縁部の頂点部にのみ刻み目を施文し、器壁は1 cm以上ある。茶褐色で胎土に砂粒を多く含む。

39. 口縁部の一部が突起し、その先端に1点のみ楕円形の刺突文がみられる。器面は横方向の条痕で仕上げられている。

40. 波状口縁の先端に1ヶ所刻み目を入れている。茶褐色で胎土にあまり砂粒を含まず、薄手である。

41. 口唇部を斜めに刻み、器面は撫でにより調整されている。明褐色で砂粒を含む。

43・44. 口縁部はわずかに肥厚し周辺に2本単位に沈線をめぐらせる。器面は内外面ともに横方向の条痕で調整し、いずれも明褐色で砂粒を含む。

45. 口縁部下に断面四角形の凸帯をめぐらせ条痕文で器面を調整している。明茶褐色を呈する。

46. 口縁部に平行に2本の沈線を施文した茶褐色の土器である。胎土に石英の砂粒を混入し、器面は研磨されている。

47. 断面U字形の沈線で文様を構成する。口縁部は波状になり、端部は尖る。器面を研磨し、石英質の石粒を含む。

48. 条痕文の地文の上から入念に研磨している。暗茶褐色で砂粒をあまり含まない精製土器である。

49. 全面研磨で黒褐色を呈する。研磨方向は横方向が多く、砂粒はあまり含まない。

50. 口唇部は丸く仕上げられ、横方向に入った条痕は、内外面とも一部撫で消されている。明茶褐色を呈する。

51. 外反する口縁部の破片である。外面は条痕が残るが、内面はなめらかに仕上げられている。明褐色で砂粒を含む。

52. 頸部から、外反する口縁部が、先端でわずかに内湾する。器面は小巻貝状の施文具で横方向を主体とした細い条痕で整形されている。黒褐色で砂粒を含む。

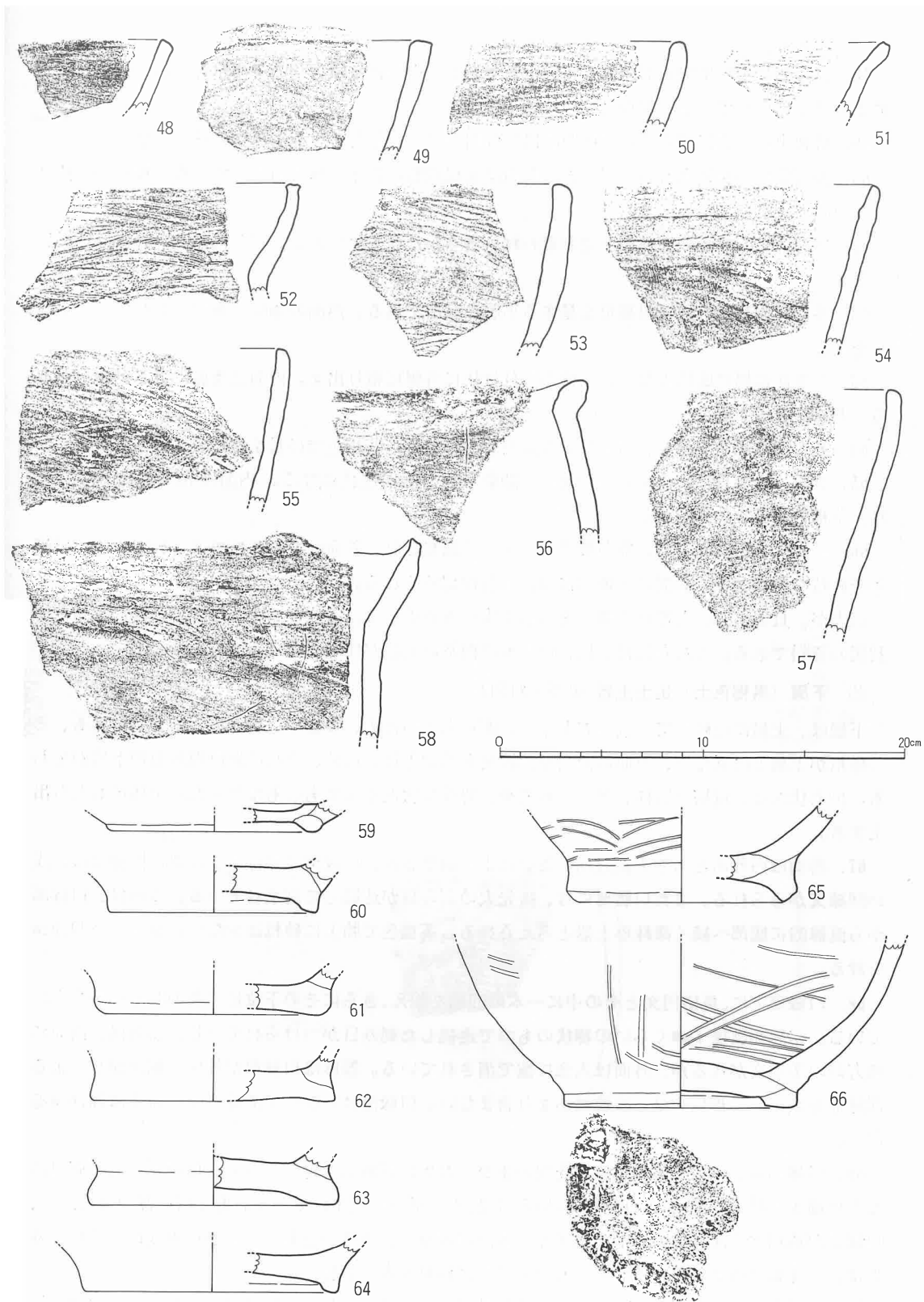
53. 内外面ともに横方向の条痕による器面調整の粗製土器である。胎土に砂粒を含み、焼成はよく茶褐色を呈する。

54. 口縁部に沿って内外面とも指撫でにより仕上げている。黒褐色で胎土に砂粒を含む。

55. 内外面とも小巻貝状のもので条痕、調整がみられるが、外面は撫で消されたためか不鮮明である。淡黒褐色で砂粒が多い。

56. 第22図の鐘ヶ崎式土器の文様を無くした器形と考えられる。外面は研磨により、条痕を消しているが内面は横方向の条痕が残る。茶褐色で砂粒を多く含む。

57. 内外面ともに、地文の条痕は撫で消されている。器形は口縁部から直線的に底部へ続くと考えられる。外面は淡黒褐色、内面は茶褐色で砂粒を多く含む。



第24図 西和田貝塚上層出土土器実測図 (3)

58. 口縁部の一部に突起部のある粗製土器である。内面には横方向の条痕が残るが、外面は撫でにより仕上げられている。茶褐色で砂粒を含む。

59. 精製土器の底部である。揚げ底状になり内面には稜がある。茶褐色で砂粒は少ない。

60. 揚げ底状の粗製土器の底部である内面は条痕調整のあと、撫で消されている。褐色で砂粒は少ない。

61. 内外面とも粒子の細かい粘土でおおわれ、滑らかな仕上げである。明茶褐色の平底に近い形態を呈する。

62. 外面赤褐色、内面淡黒褐色を呈する平底の底部である。内面の条痕は撫で消されている。砂粒を含む。

63. わずかに揚げ底状となり、円盤張り付け状に外側に張り出す。内面は条痕による調整痕がある。茶褐色を呈する。

64. 高台状の形態を呈し、器面は雑な調整がみられる。茶褐色で砂粒を含む。

65. 器面は小巻貝による横方向の条痕で調整され、揚げ底状になる。内面は滑らかに仕上げられ、茶褐色を呈し砂粒を含む。

66. 器面は、内面横方向、外面縦方向の条痕で調整され、外面はさらに撫で消されている。黒褐色で砂粒を多く含む。底部の接地面には、圧痕が認められる。

以上が、貝層出土の土器の主要であるが主体を占めるのは、より安定した状態で多数出土した第22図の資料である。これらに13、14、15の瀬戸内系の土器が伴うと考えられる。

(2) 下層（黒褐色土）出土土器(第25～31図)

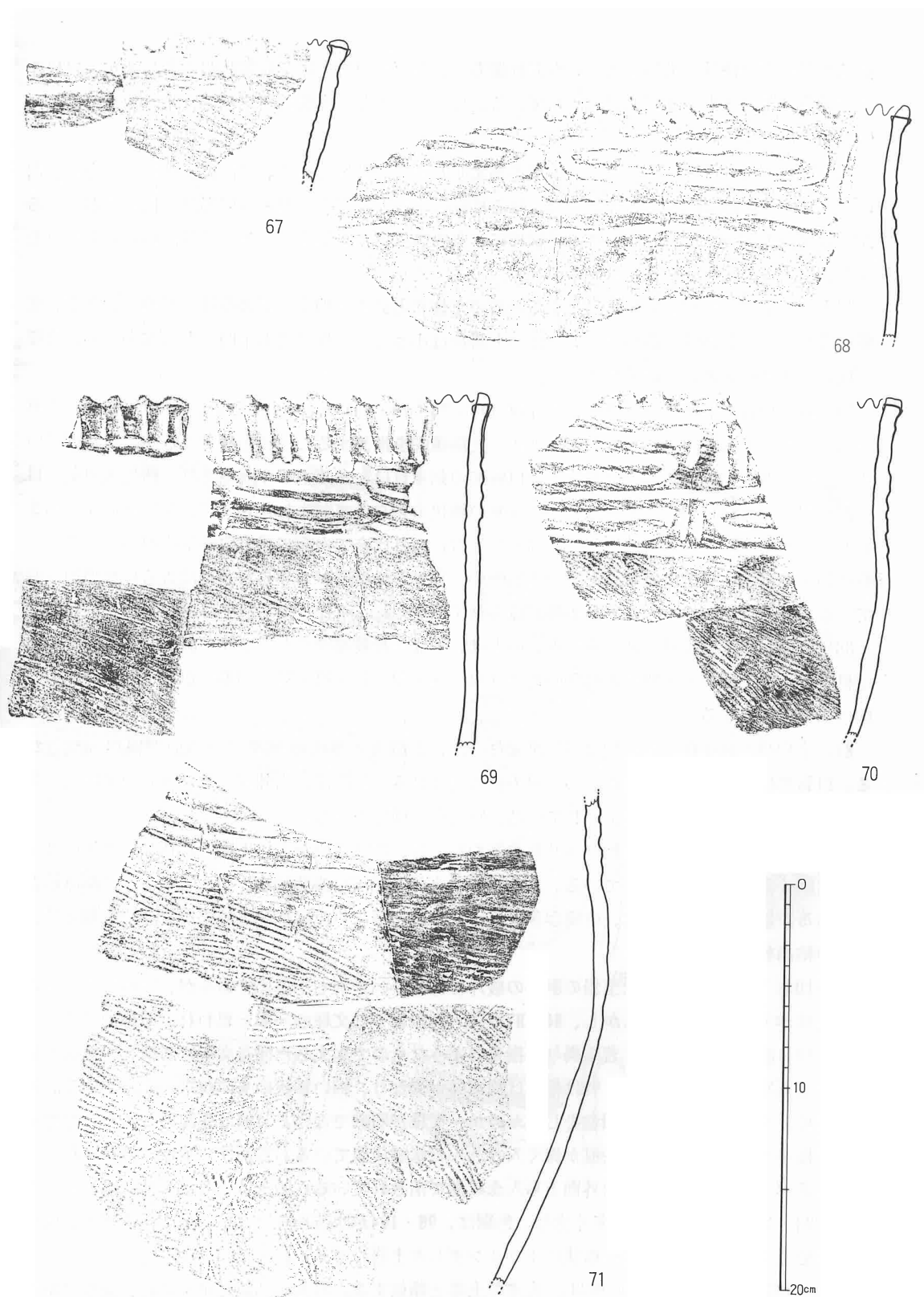
下層は、上層に比較して、包含層も厚く、面積も広いため、多量の遺物が出土した。土器も、その様相が上層とは異なり、中期の阿高系凹線文土器が主体を占め、それに瀬戸内地方の土器が加わる。出土状況は、貝層と同様、著しい粗密や、特殊な状況を示すものもなかった。全体にわたり出土する。

67. 器面は内外面ともやや斜方向の条痕により調整され、口縁部に平行に、二条の指撫で状の浅い凹線文がみられる。また口唇部には、指先大の刻み目が連続して刻まれている。器形は、口縁部から直線的に底部へ続く深鉢形土器と考えられる。茶褐色で胎土に砂粒は少ない。復元口径29.6cmを計る。

68. 口縁部下に、長楕円文とその中に一本の凹線を加え、さらにその下位に二条の凹線が施文されている。口唇部は径7mmくらいの棒状のもので連続した刻み目がつけられている。器面は、内面に横方向の条痕文が残るが、外面は入念に撫で消されている。器形は口縁部が外反し胴部がやや張る深鉢形を成す。茶褐色を呈し砂粒はあまり含まない。口縁部はいびつである。復元口径は28.6cmを計る。

69. 口縁部に平行して4本単位の先端のまがった短い凹線文を配し、さらに口縁部に対し直角になる短線を連続して加える。口唇部の刻み目は、やや斜めに刻まれている。復元口径28.6cmを計り、口縁部が直口する深鉢形の器形を呈する。器面の調整は、内外面ともに条痕が横方向にみられ、外面は、一部撫で消されている。淡茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。

70. 口縁部下に長楕円と直線の凹線文を二段に組ませて施文し、口唇部は、径約6mmの棒状の施文具で連続して刻み目がつけられている。器形は、復元口径29.2cm、口縁部は直口し、胴部はやや



第25図 西和田貝塚下層出土土器実測図 (1)

張る器壁の薄い深鉢形土器である。内面は横方向、外面は斜方向に条痕調整がみられるが、口縁部周辺のみ内外面ともに雑に撫で消されている。外面は灰褐色、内面は茶褐色で、胎土に黒色の細かい結晶を混入する。

71. 口縁部に平行に浅い数条の凹線文を施文した胴部の破片である。器面は、外面は斜方向、内面は横方向の条痕で調整し、底部に近くなるに従い不規則な方向になる。器形は、口縁部が欠けるが、口縁径約30cmを計り、直口する口縁部に、やや張り出す胴部を有する。器壁は薄い。茶褐色を呈し、胎土にはあまり砂粒を含まない。

以上は、下層の黒褐色土から出土する土器の主体を占める凹線文土器の全体の形態、および、文様構成を知りうる良好な資料である。他の土器片は小さく、文様構成も不明なものが多いが、大部分はこの範疇に入ることが予想される。

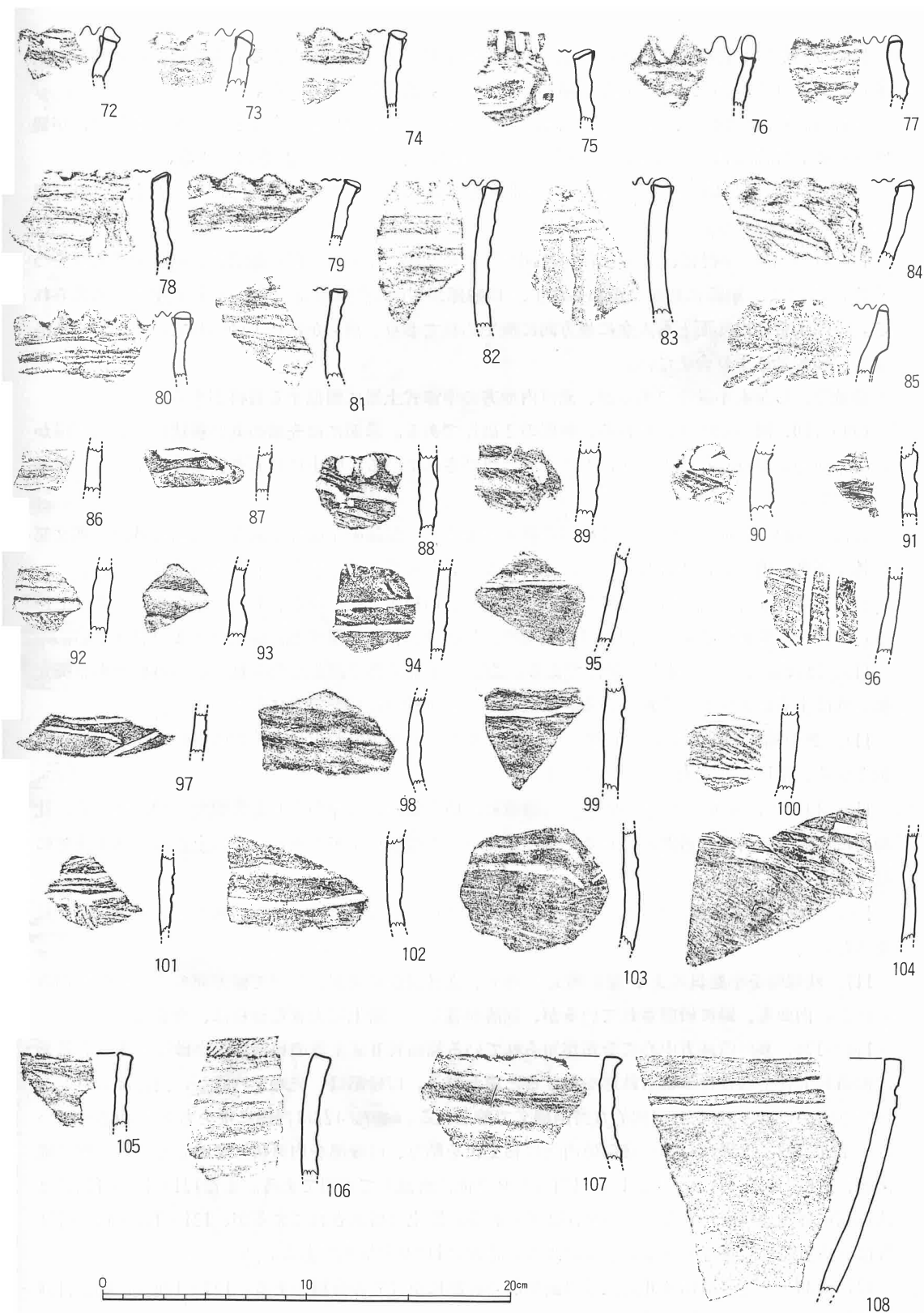
72～83. 口縁部下に浅い凹線で、平行線(73・74・79・83)・曲線(75・81)・口縁に対して直角に施文した土器(78・83)である。全体の文様構成を推測することは困難であるが、第25図のいずれかの土器に類似するものであろう。口唇部の刻み目は、バラエティがみられ、指先大の刻み目(73～74・78～83)が主体を占める。径4mmの棒状の施文具で刻まれた75・77、V字状に深く刻まれた76等がある。器面は小破片(72・73・76・77)以外は全て内面に横方向の条痕がみられる。特に75・78は、口縁部に対し右下りの条痕の後、横方向に条痕がつけられ、75はさらに撫で消されている。外面は全て施文のためか条痕が見られず、撫でにより仕上げられている。しかし、75・78・80はわずかにその痕跡が認められる。胎土は、あまり砂粒を含まないが78・81は、白色の微砂粒が目立つ。色調は、全体的に茶褐色のもの(74・76・78・79・81・83)が多いが72・75は灰褐色、80は黒褐色を呈する。

84. 小片のため文様の規則性は見い出せないが、器面にへら状の施文具で浅い凹線が施文される。口唇部は指先大の刻み目が、やや斜方向に刻まれる。器面は、内外面とも横方向の条痕文で調整されているが、外面は撫で消されている。暗褐色で砂粒を含む。

85. 口縁部に粘土帯を貼り肥厚させ無文帯をつくり、この下位から、先端の鋭利なへら状の施文具で、細く深い沈線を施文している。また、口唇部にも同様な施文具で、深く切るように刻み目が施される。器面の調整状態は、焼成が悪いためか剥落が著しく、観察不可能である。明茶褐色で、黒色の結晶粒を多く含む。

86～104. 以上述べてきた土器の胴部の破片である。いずれも小破片であるが、凹線による直線的な文様が主体を占める。しかし、86・87は68・70のような文様の一部と思われ、曲線的である。また、88・89・90の文様は、若干異り、指先のようなもので施文した凹点文と、凹線文で文様を構成し器壁も厚い。94・96・97・99は他とは施文具が異なり、細い棒状のものが用いられている。98は、凹線施文後、撫でによる調整をしたためか、文様が明瞭でない。104は先端の不そろいな施文具で文様をつけられており、条痕が深く入り込んだ状態に似ている。器面は、条痕で調整されたと思われるが、93・97・99は、内外面とも入念に撫で消されている。胎土は、あまり砂粒を混入しないが、94・100・101は比較的多く含む。色調は、98・104が明茶褐色のほか、102が灰褐色、他は暗褐色を呈する。なお103は円盤状にトリミングした土器片である。

105. 口唇部に刻み目が無い他は、先述の土器と類似する。器面に凹線文がみられ、条痕は撫で消されている。外面は暗褐色、内面は茶褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。



第26図 西和田貝塚下層出土土器実測図 (2)

106. 口縁部は外反し、口唇部は斜方向に、内面は横方向に条痕文が入る。外面は、浅い凹線が六条ほどこされる。胎土は、黒色の結晶粒が混入する。淡茶褐色を呈する。

107. 口縁部は外反し、端部は部分的に 外側へ突出する。内外面とも条痕文を撫で消した跡が観察される。外面は106同様、浅い凹線文が数条にわたり、横方向に施文されている。

以上3点は、口縁部に刻目が無いのみで他の形態、器面調整等は、第25図に示した土器とほぼ同じものと考えられる。

108. 口縁部に平行に、二本の浅い断面U字型の沈線で飾られ、口縁端部は、内外面とも稜をつくる。器形は、胴部に屈曲は認められず、口縁部から直線的に底部へ 続く深鉢形土器と考えられる。器面調整は内外面とも入念に横方向に撫でられており、滑らかに仕上げられている。黒褐色を呈し、砂粒はあまり含まない。

微量で、しかも小破片であるが、瀬戸内地方の中津式土器に類似する資料がある。

109・110. 同一個体と思われる、胴部の2破片である。器面には先端の丸い棒状の施文具で描かれた、曲線文がみられ、内外面ともに入念に研磨されている。胎土には石英質の砂粒を含み、明褐色を呈する。

111. 曲線文と細いLRの二段撚りの縄文で飾られた胴部の小破片である。器面は外面の縄文部以外は研磨、内面には明確な調整跡はみられない。茶褐色を呈し胎土に石英質の砂粒を含む。

112. 口縁端部が、内側に 突出する 形態を呈し、口縁部下に沈線と、RLの縄文をめぐらせている。器面は入念に研磨され、内面は、明褐色、外面は黒褐色を呈する。砂粒はあまり含まない。

113. ほぼ直口する口縁部の 破片である。器面はLRの磨消縄文で飾られる。内外面とも、縄文部以外は滑らかに仕上げられている。灰褐色で、石英質の砂粒を多量に混入する。

114. 磨消縄文土器片であるが撚りは不明である。明褐色で胎土に石英質の砂粒を含む。沈線の状態から、福田KⅡ式土器と考えられる。

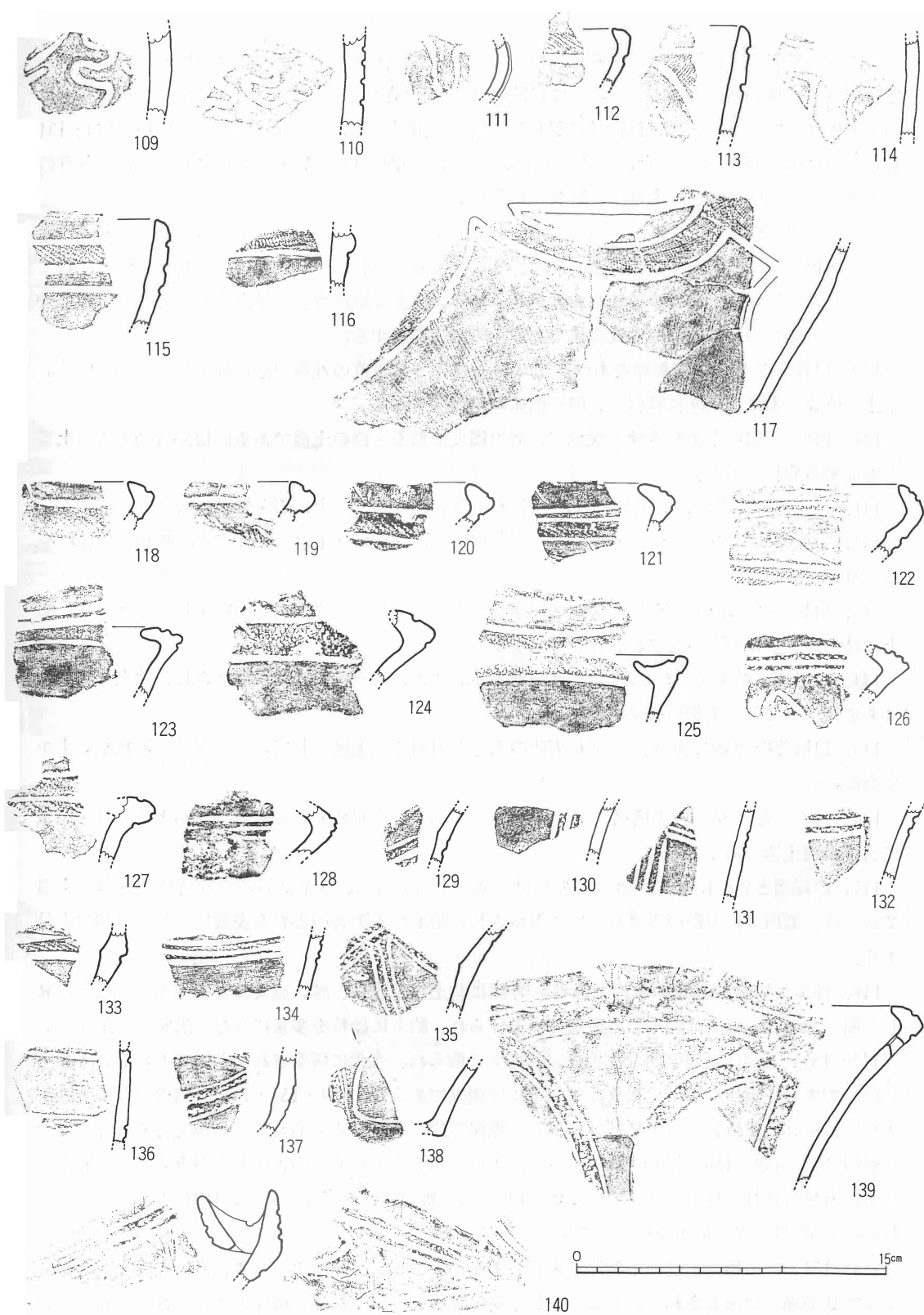
115. 口縁下に3本の 沈線を配し、口縁部に近い2本の沈線間のみRLの縄文で埋めている。沈線内には赤色顔料の付着がみられる。茶褐色で白色の微砂粒を多く含む。この土器は中津式土器にははいらない。

116. 沈線間を擬似縄文で 埋めた土器で、器面は良く研磨されている。黒褐色で、石英質の砂粒を含む。

117. 沈線間を小巻貝による 擬似縄文で 埋め、文様部から底部にかけて縦方向の入念な研磨がみられる。内面も、雑に研磨されているが、剝落が著しい。胎土に大きな砂粒は、含まない。

118～126. 瀬戸内地方中心に分布が知られている福田KⅡ式土器の口縁部の小砂片である。器形は福田KⅡ式土器特有の植木鉢形を呈すると思われる。口縁部は、先端で内湾し、内湾部の外面から胴部にかけて、細く、直線的な磨消縄文で飾られる。また 122は内側に稜をもち 屈曲させている。125は他とは異なり、口縁部の内面に粘土紐を貼り、口縁部を内湾状に形成している。磨消縄文は、118～121・125がRL、122・124はLRで他は磨滅して不明である。また121・122・126には沈線間に赤色塗料を付着させた痕跡が認められる。胎土は精選されているが、121・123・124・126等は石英質の砂粒を混入する。焼成は良く、色調は118が明褐色である。

127～138. 上述の福田KⅡ式土器の胴部から底部にかけての資料である。127・128は口縁部、138は底部の破片である。129・133・135は内側に稜があり、口縁部に 近い部位であろう。文様は全て



第27図 西和田貝塚下層出土土器実測図 (3)

三本沈線と縄文による組合せであるが、136・137は縄文の代りに、アナダラ属の貝の腹縁を連続して刺突する文様が施文されている。特に137は、他が研磨されているのに対し、地文の条痕文を内外面ともに残している。縄文は127・132がR Lの他は不明である。また沈線間の赤色顔料は130・131・132に痕跡が認められる。胎土に砂粒はあまり含まれないが、127・130・135にはわずかに石英質の砂粒を含む、焼成はいずれも良く、茶褐色を呈する。

139. 復元口径は24cmを計る。口縁部から胴部にかけて細いR Lの磨消縄文帯で飾られる。沈線は二本単位であるが、一部(図左側)では、3本沈線と思われ、中の沈線は縄文施文の際つぶれている。また、口縁部下には焼成後の穿孔がみられる。胎土は精選された粘土を使っており、砂粒をほとんど含まない。焼成は硬く瓦器状である。黒褐色を呈する。

140. 口縁部に中空の装飾部をもつ。この装飾部も3本単位の沈線で磨消縄文が施されている。胎土・焼成ともに、139に類似し、同一個体の可能性もある。

141~148. 口縁部を肥厚させ、沈線文、磨消縄文で飾る一群の土器である。125・175もこの土器と類似する資料である。

141. 入念に研磨され、口縁部に浅い沈線が入る。黒褐色で胎土に石英質の砂粒を含む。

142. 口唇部に一本のみ沈線がある。器面は撫でで滑らかに仕上げられている。明褐色で砂粒をあまり含まない。

143. 口唇部に二本の沈線と、焼成前の穿孔が1つみられる。器面は研磨により仕上げられ、胎土には雲母と多量の石英を含む。黒色を呈する。

144. 口唇部に単純化した渦巻文と沈線がある。器面は横方向に入念に研磨され、胎土には砂粒はあまり含まない。茶褐色を呈する。

145. 口唇部を沈線で飾り、全面横方向の入念な研磨で仕上げられている。黒色で砂粒をわずかに含む。

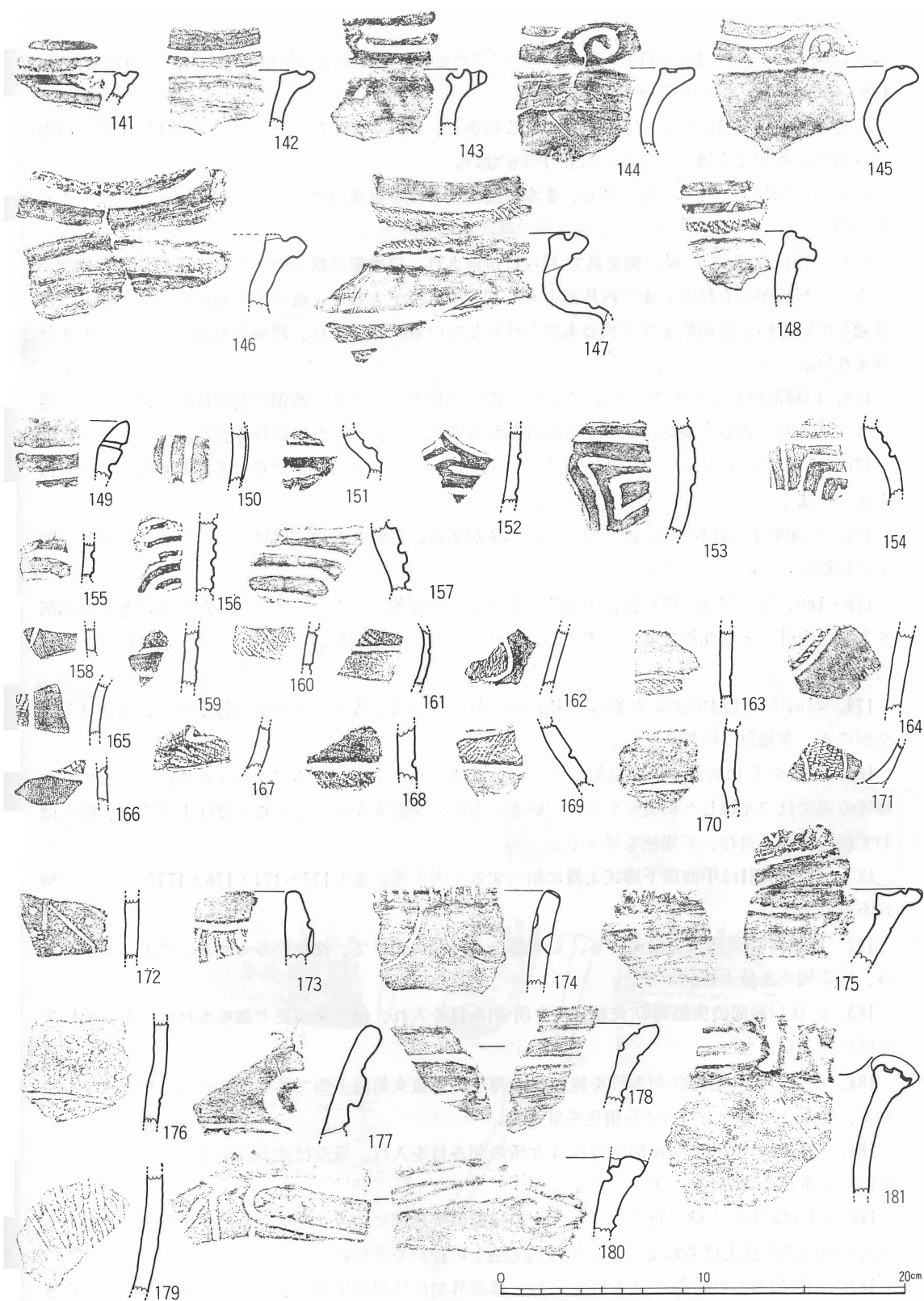
146. 器面を荒い横方向の研磨で仕上げているため条痕文が残る。茶褐色で、胎土に砂粒を多量に含む粗製土器である。

147. 口縁端と肩部にR Lの縄文のある磨消縄文土器である。器形は肩の張る壺状の深鉢形土器であろう。器面は横方向の入念な研磨で調整され、胎土に石英質の砂粒を多量に含む。黒褐色を呈する。

148. 外反気味の口縁部の破片である。外側に粘土紐を貼り、厚い施文様帯をつくり、端部にR Lの縄文がある。横方向の入念な研磨で仕上げられ、胎土に砂粒を多量に含む。黒褐色を呈する。

149~157. 器面は幾何学的な沈線文、曲線文で飾られ、入念に研磨された土器である。いずれも小破片であり、全体の器形文様構成を知るには困難であるが、149・151・153・154の資料から推測すれば、深鉢形の精製土器で文様は、胴部に幾何学的な文様をめぐらせることが考えられる。また沈線間には、149・150・153・156のように、赤色顔料を塗った痕跡のあるものがみられる。胎土はいずれも精選された粘土を使っているが、149は石英質の砂粒を多量に含み、150にもわずかにみられる。色調は152が明褐色の他は全て黒褐色を呈する。

158~171. 磨消縄文土器の小破片である。158~167・171は縄文帯の細さ、器壁の薄さ、底部近くまで磨消縄文が施文されていること等から福田KⅡ式土器の胴部の破片と考えられる。器面はいずれも研磨され、縄文は160・161・163・167はR L、162・165・171はL R、他は不明である。胎



第28図 西和田貝塚下層出土土器実測図 (4)

土は159・160・163・167・170に石英質の砂粒が含まれる他はあまり砂粒を含まない。色調は163・166・167が明褐色他は茶褐色を呈する。

172. 器面を小巻貝を利用したと思われる刺突文、沈線文、擬似縄文で飾る小破片である。内面は赤褐色、外面は茶褐色で砂粒をあまり含まない。

173. 口縁部をわずかに肥厚させ、2本の沈線文の間を短沈線で埋めている。黒褐色で胎土に砂粒を多く含む。

174. 口唇部に先端の鋭い施文具で刻み目が施され、口縁部に同一の施文具と思われるものでハの字状に沈線がみられる。また内外面ともに若干位置をずらして、焼成前の穿孔状のものがあるが貫通していない。器面にはスス状のものが付着している。研磨され、明褐色を呈し、砂粒はあまり含まない。

175. 口縁部の内側を肥厚させ、その接合部に沈線をめぐらせ、端部に刻み目を加えている。器面は、ススが付着し小巻貝による条痕がみられる茶褐色で、わずかに砂粒を含む。

176. 二本の沈線の上に不規則な刺突文がみられ、器面にはススが付着する。茶褐色で、砂粒はあまり含まない。

177. 口縁部下に沈線と浮文で構成した文様がある。器面は入念に研磨され、黒褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

178・180. 同一個体と思われ、明褐色を呈する。口縁部の一部は欠けているが穿孔のある突起部をもち、内外面とも沈線で飾られている。器面は条痕による調整がみられる。胎土に砂粒はあまり含まない。

179. 器面に短沈線による乱雑な文様がみられ、器面は、外面の文様部以外は研磨、内面は条痕文が残る。茶褐色で砂粒を含む。

181. 外反する口唇部上に突起部をつくり、沈線をめぐらす。さらにその沈線間に先端の平らな棒状の施文具で連続した刺突文を施している。器面は条痕文を撫で消すことで仕上げられ、胎土はわずかに砂粒を含む、茶褐色を呈する。

以上、178～181は小池原下層式土器に相当すると考える。また172～174・176・177については型式不明である。

182. 横方向の条痕文を地文とし、口唇部から外側に掛けて、沈線がみられる。胎土に砂粒を含み、明茶褐色を呈する。

183. 波状口縁部の突起部の先端に一ヶ所刻み目を入れ、他は条痕文で調整されている。黒褐色で砂粒を多量に含む。

184. 口唇部に指先大の刻み目を施した、薄手の条痕文粗製土器である。胎土は砂粒をあまり含まず、外面は黒褐色、内面は茶褐色を呈する。

185. 口縁部の突起部の頂部にのみ4ヶ所の刻み目を入れ、器面は横方向の条痕文で仕上げられている。茶褐色で胎土に砂粒を含む。

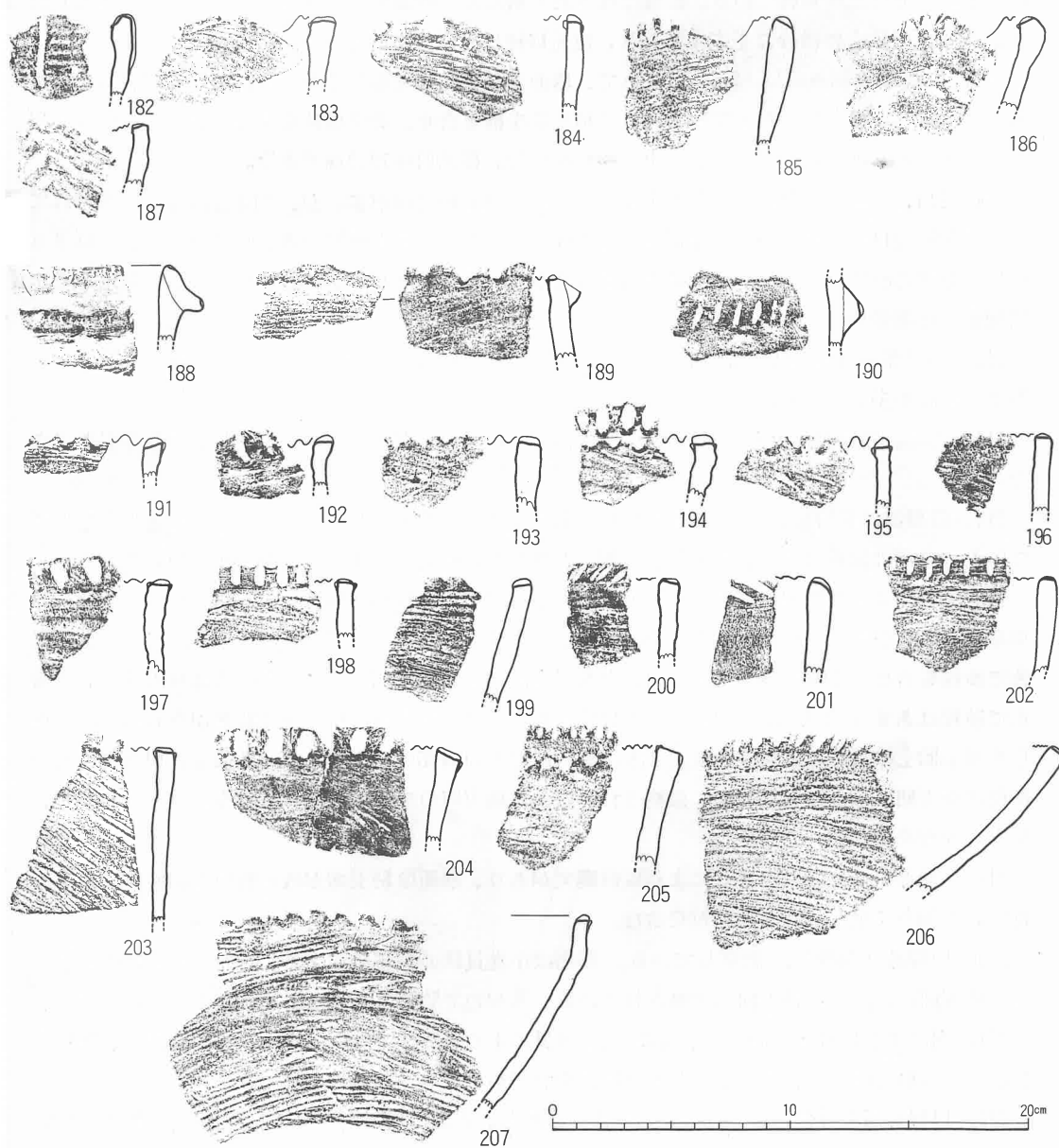
186. 口縁端外面に粘土紐をめぐらせ、口縁部の突起部にのみ3ヶ所刻み目を入れる。器面は条痕文を撫で消し仕上げられている。黒褐色で胎土に砂粒を含む。

187. 山形口縁の口唇部に刻み目を入れ、器面外側には凹線文がある。胎土はあまり砂粒を含まず、茶褐色を呈する。

188. 口縁端部に粘土紐を張り、口縁部と突帯部を形成し、口唇部と突帯部にアナダラ属の貝の腹縁を連続的に刺突する。器面は条痕を撫で消して仕上っている。外面は茶褐色、内面は茶褐色を呈し、砂粒を含む。

189. 口縁部に粘土紐を付け、突帯をつくり口唇部には刻み目が入る。器面は、横方向の条痕文で仕上げ、内面は撫でられている。茶褐色を呈し、砂粒を含む。

190. 刻み目のある突帯の破片である。刻み目は先端の鋭い施文具で斜めに切られている。内面は条痕文があり、茶褐色を呈し砂粒を含む。



第29図 西和田貝塚下層出土土器実測図 (5)

191～205. 口唇部に刻み目を有する土器である。刻み目は大半が棒状の施文具で押さえたもの(191・194・197～199・203・204)であるが、192・193は、先端の鋭い施文具で深く刻まれている。また200は、先端が二つに分かれた刻み目であり、201は口唇部に斜めに連続した刻み目がみられる。器面は横方向の条痕文で仕上げられているが、199・202は小巻貝状の施文具が用いられている。なお197は凹線文が施文されている。198は、突帯の剥落した痕跡が認められる。胎土は砂粒を含む。色調は195・197・201・202が黒褐色204が灰褐色の他は茶褐色を呈する。

206. 口唇部には棒状のもので刻み目がつけられ、器面は小巻貝状の施文具で内外面ともに横方向の条痕文で仕上げられている。形態は残された破片から推測すると、浅い皿状になると考えられる。茶褐色で胎土に微砂粒を多量に含む。復元口径は21.6cmを計る。

207. 口唇部の刻み目は斜めに刻まれて、器面は横方向の条痕で仕上げられているが、外面は滑らかではない。製作にあたって約2cm巾の粘土帯を継ぎ合せ、その痕跡を残している。形態は小型の浅鉢と考えられる。明褐色で、胎土に砂粒を含む。復元口径22.2cmである。

208～214. 全面を入念に研磨した土器である。研磨方向は横が多いが、214は乱雑に研磨されている。208～211は、粘土紐を口縁部にめぐらせ、肥厚し、強調させている。いずれも研磨され滑らかに仕上げられているが、209は外側に条痕文が残る。胎土はわずかに砂粒を含む。色調は210が明褐色の他茶褐色を呈する。

212. 口縁部が内湾気味になり、焼成後の穿孔がみられる。器面は入念に磨かれ黒色を呈する。胎土に砂粒を多量に含む。

213. 器形、器面調整ともに218に類似するがやや口縁部が立つ。茶褐色を呈し、砂粒を多量に含む。

214. 口縁部は直口し、器面は小巻貝状のもので条痕文を施した上から、ヘラ磨きを加え仕上げている。色調は位置により、茶褐色、明褐色と異なる。胎土はあまり砂粒を含まない。

215～218. 条痕文で器面を調整した土器である。器形は口縁部が外反し、胴部のやや張る深鉢形を呈することが想定される。215は条痕文の上から粗く研磨され、内面は撫で消されている。茶褐色で砂粒を含む。216は外面を横方向内面を斜方向に条痕文で調整され、器壁は比較的薄い。黒褐色で砂粒はあまり含まない。217は小巻貝状の施文具で、横方向に粗い条痕調整がみられる。茶褐色を呈し胎土に白色の砂粒を含む。218は波状になる口縁部の破片である。外面は、口縁部に近い部位は横方向、以下は斜め方向に調整され、内面は横方向の撫でで消されている。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

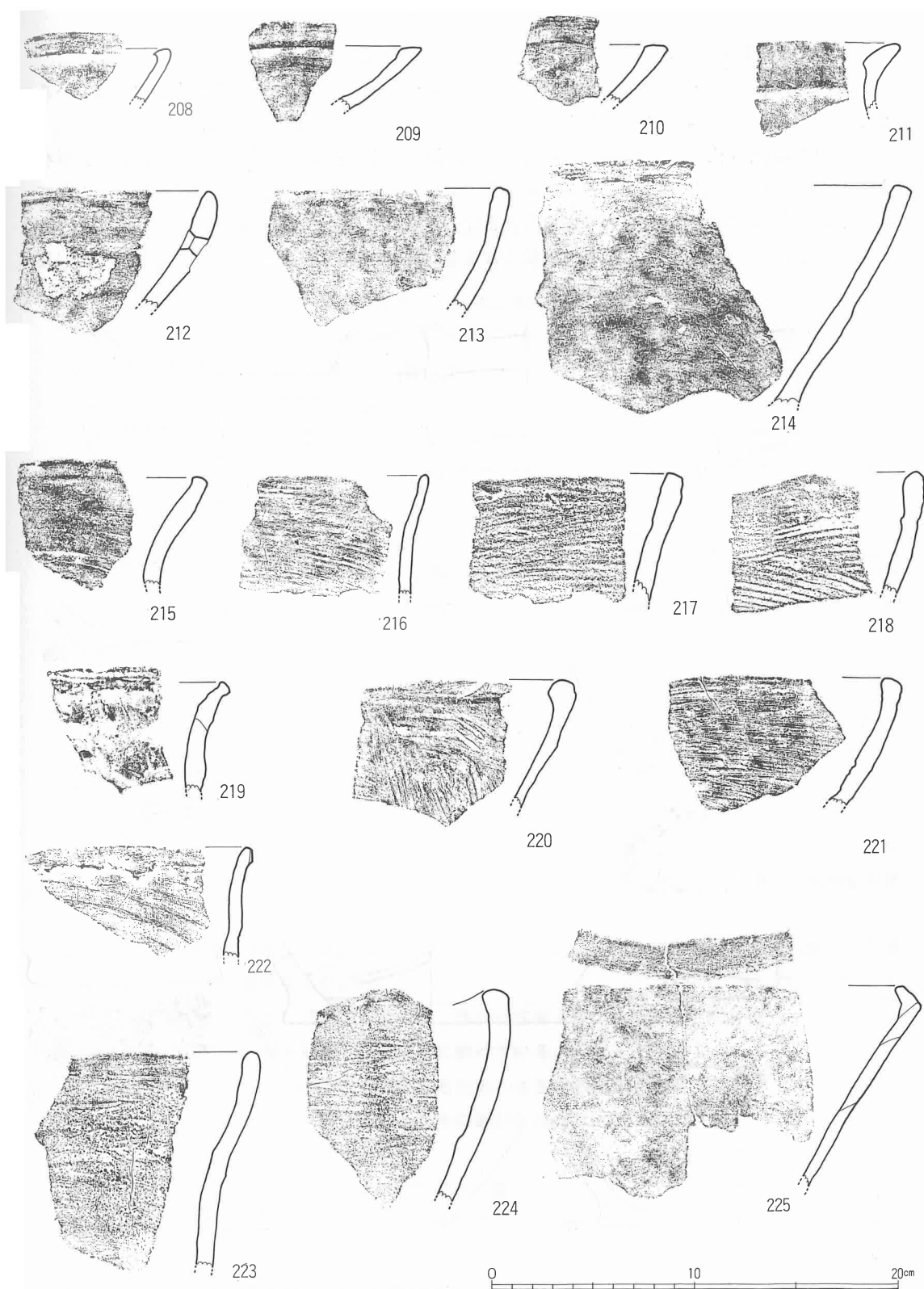
219. 口唇部に横方向の小巻貝による擬似縄文があり、器面は粘土溜が残り特別な調整痕はみられない。黒褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。

220. 口縁端は内湾し、肥厚している。器面は小巻貝状の調整具により、外面は横方向の条痕のあと縦方向に、内面は横方向に調整されている。茶褐色で胎土に砂粒をあまり含まない。

221. 内湾する口縁部の破片で、器面は、小巻貝による条痕文で外面は浅く、内面は深く、調整され、さらに粗く研磨されている。胎土は砂粒をわずかに含み、茶褐色を呈する。

222. 口縁端部を外側に折り返し、口縁部を成形し、器面は斜方向に、指で強く撫で調整されている。胎土に砂粒を含み、黒褐色を呈する。

223. 口縁部が外反する深鉢形土器であろう。器面は横方向に内外面とも条痕文が施され内面は



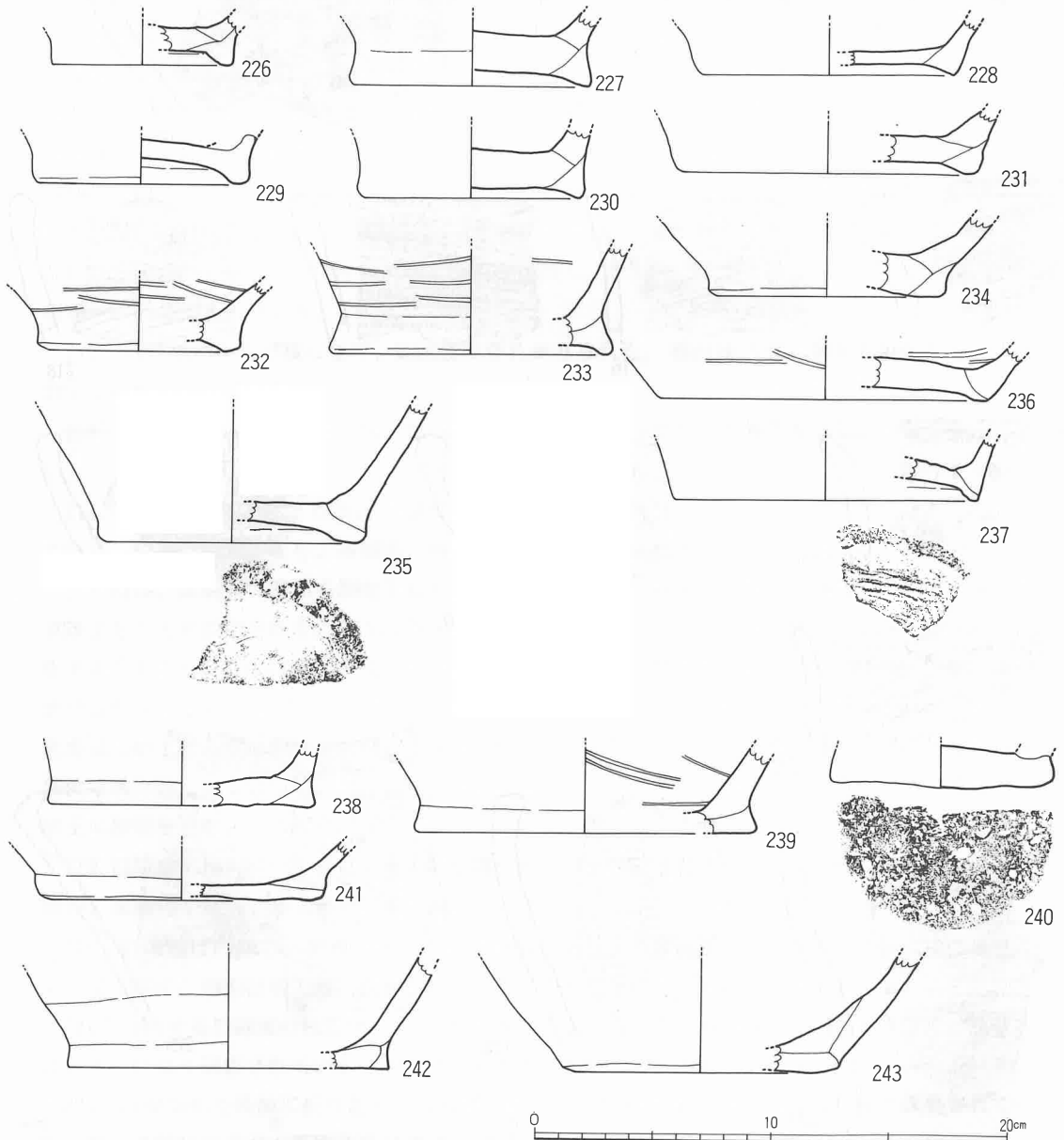
第30図 西和田貝塚下層出土土器実測図 (6)

さらに撫で消されている。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含む。

224. 口縁部は波状になり、その先端はわずかに内湾する。外面は横方向に条痕文が施されているが、内面は不明である。黒褐色を呈し、胎土に砂粒を含みススが附着している。

225. 口縁端部が内湾し、口縁部から底部へ直線的に続く、福田KⅡ式土器の植木鉢状の器形を無文化した形態である。器面は、横方向の条痕調整をし、その後全面にわたり入念に撫で消されている。茶褐色を呈し、胎土に砂粒をあまり含まない。復元口径は28.8cmを計る。

底部は、全て平底ではあるが、揚げ底状になるもの（226～237）、全面が接地面に付くもの（238



第31図 西和田貝塚下層出土土器実測図 (7)

～243)と大きく二形態に分類される。

226. 底径は7.8cmを呈し、内外面とも研磨されている。精製土器の底部であろう。高台状になった部分は粘土紐を貼り、形成している。胎土にあまり砂粒を含まず茶褐色を呈する。

227. 底径は10.6cmを計る。外面は横撫でで調整し、底部端に粘土紐をめぐらせ、わずかに高台状にしている。茶褐色を呈し、砂粒を含む。

228. 底径は10.8cmを計る。器壁は薄く、全面研磨で仕上げられている。内面は器表面が磨消し、砂粒を多く含んだ胎土が露出している。茶褐色を呈する。

229. 底径は9.2cmを計り、底部の成形は、底部端部に粘土をめぐらせ円盤状にしたと思われるが、そのまま剥離している。器面は研磨され、内面黒褐色、外面茶褐色で胎土には砂粒を含む。

230. 底径は9.6cmを計る。内面には調整の際についたと思われる、ヘラ状の施文具の痕跡が残る。外面は粗い撫で仕上げである。胎土には石英質の砂粒を含み、茶褐色を呈する。

231. 底径は13cmを計る。底部は最底部の粘土、底部端と重ねられ、わずかに揚げ底状になっている。器面は横撫でで仕上げられ外面は茶褐色、内面は灰褐色である。胎土に石英質の砂粒を含む。

232. 底径は11cmを計り、器面には横方向の条痕文が残る。茶褐色で砂粒をあまり含まない。

233. 底径は12.2cmを計る。底部端は粘土帯をめぐらせ成形し、わずかに揚げ底になる。器面は条痕が残る、内面黒褐色、外面茶褐色で砂粒を含む。

234. 底径は10cmを計り、器面は外面は縦方向内面は横方向の撫でで仕上げられている。胎土は砂粒を含み、茶褐色を呈する。

235. 底径は11cmを計る。揚げ底状になった底部の接地面にはさまざまな圧痕が残る。器面は全面撫でにより滑らかに仕上げられている。胎土には砂粒をあまり含まず、内面は褐色、外面は茶褐色を呈する。

236. 底径は13.6cmで、底部から胴部にかけて大きく外に張る。器面は粗く仕上げられたままで、内面には横方向の条痕が残る。胎土には白色の砂粒が目立ち、色調は全体的に黒褐色を呈する。

237. 底径は12.6cmで接地面は高台状になる。器面は条痕文を地文とし、撫で消しているがわずかに痕跡が残る。内面は、粗く粘土を削ったままの状態である。胎土には砂粒が少なく、茶褐色を呈する。

238. 底径11cmで全面が接地面になる。器面は、あまり意識した調整方法は認められない。茶褐色で、胎土にわずかに砂粒を含む。

239. 底径14.4cmで内面には条痕を残すが、外面は底部との接合面を横方向に撫でている胎土には砂粒を含み、茶褐色を呈するが、一部黒色に焼けている。

240. 底径9.5cmを計り、全面が接地面となるため、さまざまな圧痕が認められる。また底部は、円盤状の粘土を貼り付け成形しているため、その部分からはずれている。胎土に砂粒は少なく、茶褐色を呈する。

241. 底径11.2cmで、内外面とも、研磨により入念に仕上げられ、底部の器壁はきわめて薄い。器形も他に比較すると、胴部にかけて大きく外に張る。茶褐色で、胎土に砂粒は少ない。

242. 底径13.4cmで、底部との接合部に、巾2cmの範囲で、薄く粘土を横方向に塗り付け、仕上げています。内面は器面が剥落し、砂粒が表われている。砂粒を多く含み、茶褐色を呈する。

243. 底径10.8cmを計る。器面はヘラ状のもので粗く横方向に研磨しているが、全体的にゴツゴ

ツした感じである。胎土は砂粒を多く含み、内面は黒褐色、外面は茶褐色を呈する。

2) 骨角器 (第32図1～6)

西和田貝塚から6点の骨角器が出土した。これまでの東九州の貝塚の調査と比較すれば、決して少ない数ではない。出土層位は4・5が貝層、他は下層の黒褐色土層であり、水路に沿った東壁(土層実測のため残しておいた壁)を除去中に出土したものである。

1. 先端を欠くが残された部分はへら状である。表面はよく磨かれているが熱を受けたためか黒ずんでいる。巾1.1cm厚さ0.3cmである。

2. 両端をわずかに欠く骨鏃である。遺存している全長は3.8cm、最大巾0.5cm、厚さは0.3cmである。断面は楕円形となり、基部は円形に近くなる。入念に研磨された製品である。

3. 先端部が使用のためか、磨耗光沢をもつ。骨片の一部をそのまま利用した刺突具である。基部を欠くが残存している部分は全長4.2cm、巾0.5cm、厚さ0.4cmを計る。魚骨のようである。

4. 刺突具と思われるが、両端を欠くため断定はできない。表面はよく磨かれ、光沢をもつ。断面は三角形になる。

5. 両端を欠くため器種は不明である。割られた骨片を加工しており、裏面も研磨されているが、なお海綿体状組織が残る。また中央部には穿孔途中と思われる凹みがあり、何らかの未製品の可能性もある。

6. 研磨により三角形に仕上げた骨製品である。一部は欠けるが全長4cm、厚さ0.3cmを計り、底辺の巾は約3cmが推測される。器種は不明であるが、一部に穿孔状の加工痕とも思われる跡が残されている。装飾品かと思われる。

3) 石器 (第32図7～12 第33図13～26)

西和田貝塚出土の石器は、貝塚の規模が小さかったためか、量的には多くない。特に、比較的近い距離に姫島があるにもかかわらず、剥片石器が少ない。器種は、石鏃、スクレーパー、石斧、石錘、礫器、凹石等をはじめ、細長い礫の縁片を敲打し扁平打製石斧状に整えた礫石器の一群がある。

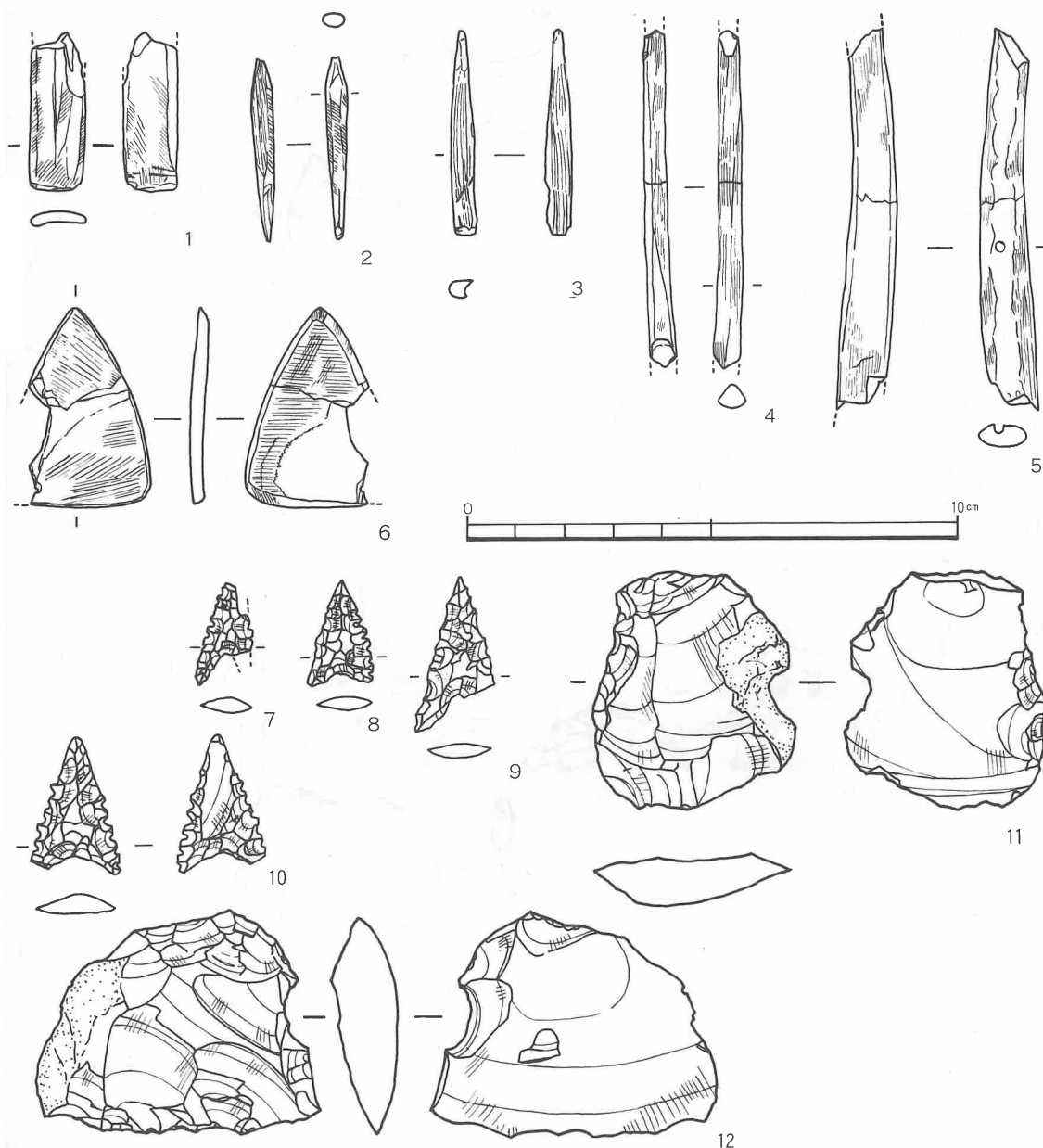
石鏃(7～10) 石鏃は4点のみであるが全て鋸歯状になるか、それに近い形態である。7は先端と片脚を欠くが、先端から両側片にかけて細く、鋸歯状に刃部をつけている。8は全長2.4cm、巾1.4cmで、片方のみ鋸歯状に仕上げられている。9は片脚を欠くが、全長3.2cmでやや大形である。刃部の加工は、鋸歯状とはいえないが、ゆるくくぼむ。10は全長2.8cm、巾1.8cmで、先端部を除き、脚部にかけて両辺ともに鋸歯状に整えられている。また一部には主要剥離面が残る。出土位置は10のみが黒褐色土で他は貝層からの資料である。石質は全て姫島産の黒曜石であるため、押圧剥離で調整された部分は剥離面が不明確である。

スクレーパー(11・12) いずれも姫島産黒曜石製で、11は貝層、12は黒褐色土層出土である。11は縦長剥片の一边を両側から加工し、刃部を鋭角に形成し、主要剥離の打面と、自然面の一部を残している。12は横長剥片を素材とし、プラットホームに対峙する一边を主要剥離面側から、打撃を加え、刃部を形成している。また主要打撃面はきれいにトリミングされている。

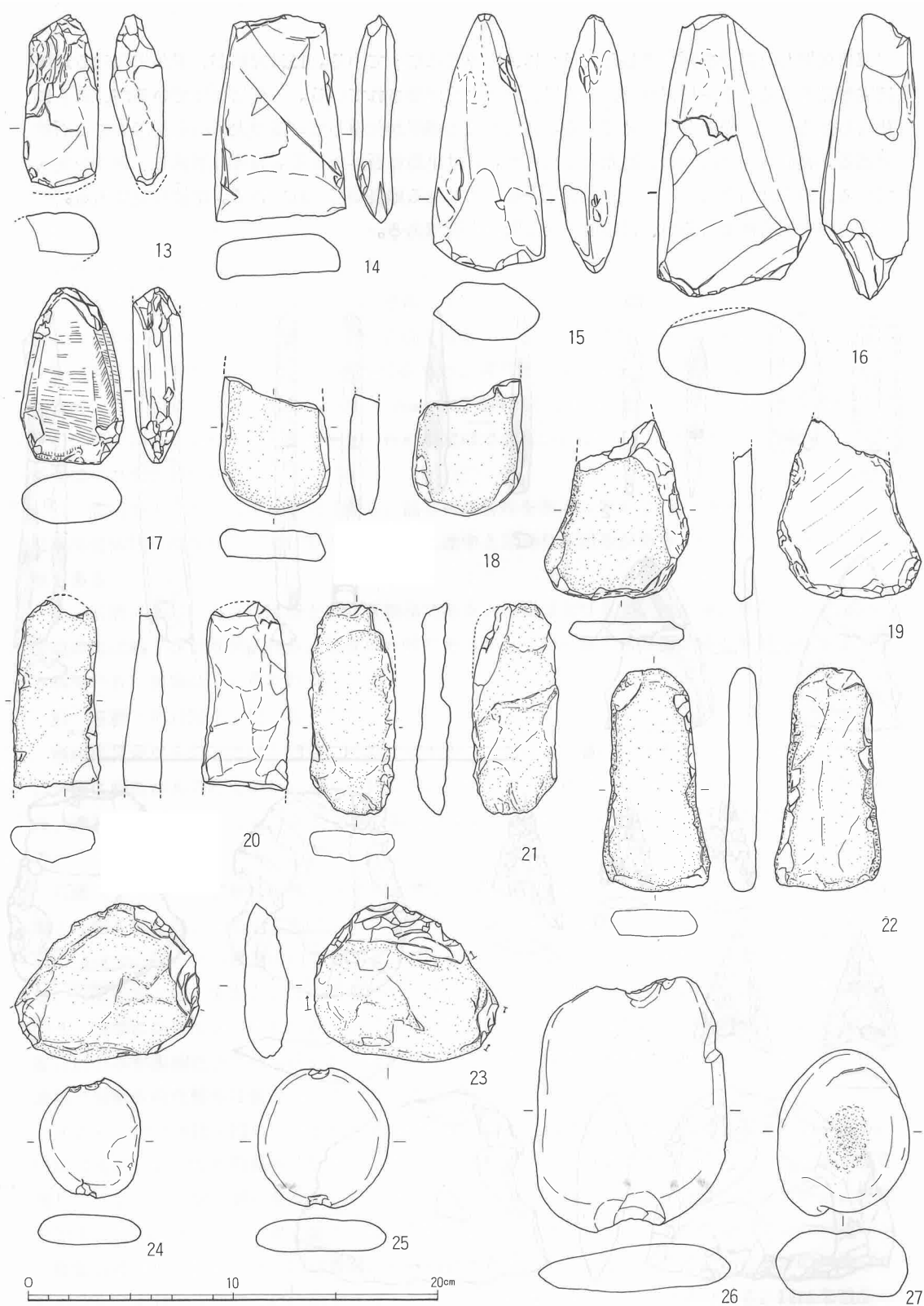
磨製石斧(13～17) 16・17は貝層、13～15は黒褐色土からの出土である。13は石斧の一部分だけの破片であり、刃部周辺のみ研磨され、側片には敲打痕が残る。安山岩製である。14は未製品のためか、または剥落しているためか、研磨面は認められず、わずかに側縁に擦痕が残されている。

刃部は欠損した部分を再利用したと思われる、片刃状になっている。15は刃部がわずかに欠けるがほぼ完形品である。全長12.7cmで、全体にわたりよく研磨されている。刃部は欠けているが、さらに使用したらしく、先端が磨滅している。16は刃部と頭部が欠損しているが大形の重量感のある石斧である。表面も入念に研磨され光沢さえもつ。17は小形の石斧である。刃部は磨滅し、鋭さを失っている。表面は横方向を主体とし、側縁を縦方向に走る擦痕が残されている。蛇紋岩製である。

以上が磨製石斧であるが、17の他は全て安山岩製である。



第32図 西和田貝塚出土骨角器・石器実測図

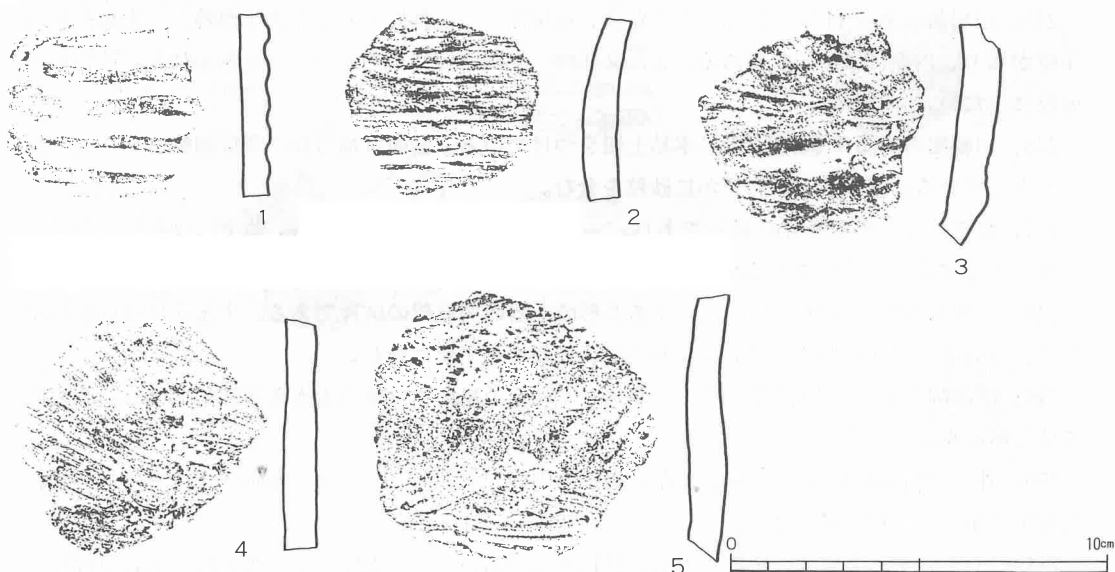


第33図 西和田貝塚出土石器実測図

扁平礫石器（18～22） 黒褐色土層からのみ5点出土した。完形品である22から考えると、扁平な礫をトリミングし短冊形に仕上げている。このため、側縁には敲打又は研磨痕が残る。また、刃部らしい鋭いエッジは認められず、先端部さえ丸くなっている。平面観は扁平打製石斧に類似しているが、鋭利な刃部の欠除、素材が扁平な自然礫であるなど異なる。なお、破片になると自然礫との判別が困難になり19・21は自然礫に近い。18は一部欠損しているが巾5.3cm、厚さ1.2cmを計り、両面に自然面が残り、周辺は敲打により整形され、刃部と思われる先端は鋭くない。19は他とは面若干異なり、形態はいびつな撥形となる。巾5.8cm、厚さ0.8cmで片面は自然面が残るがもう一方のは節理面である。縁片の加工は敲打とチップングが使い分けられているため、片面はやや鋭い。しかし刃部と想定される部位には鋭利さは認められない。20は両端とも欠損するが巾4cm、厚さ1.5cmを測る。片面のみ自然面が残る、もう一方の面は剝離されている。このため断面は楕円形に近くなる。また縦断面を観察すると、刃部に近くなるほど厚くなっている。縁片の加工は、敲打または研磨により整えている。21はあばた状になった自然面が両面とも残るほぼ完形品である。全長10cm、巾4cm、厚さ1cmを計り、両側片は敲打し整形されている。先端は自然面であるがやや鋭くなっている。22は唯一の完形品であり、撥形を呈する。全長10.6cm、厚さ1.2cm、撥形になった先端部は5cmを計る。両面ともに自然面を有し、両側は、敲打、または研磨により整形されている。

礫器（23） 全長8cm、最大巾9cm、厚さ2cmで掌中に入るほどの大きさである。刃部形成のための加工は、2ヶ所に分かれ、加撃により鋭い刃部をつくっている。

石錘（24～26） 扁平な礫を加工した石錘である。西和田貝塚では3点のみであり、25は表採で得たものである。24は下層から出土した扁平な小礫をわずかに加工しただけの石錘である。大きさは5.6cm×5cmで重量は52gである。25は表採品ではあるが、円形の小礫の両端を加工した石錘である。形状は6.5cm×6.5cmで厚さは1.5cm、重量は86gである。26は貝層出土の石錘である。12cm



第34図 西和田貝塚出土土器片利用製品（メンコ）実測図

× 9 cmで厚さは 2 cmを測る。他の 2 点と比較すれば、大型の扁平礫の両端を大きく打ち欠き、加工している。重量は 408 gである。

凹石 (27) 黒褐色土層から出土した、西和田貝塚唯一の資料である。大きさは 8 cm×6.5 cmで厚さは 3 cmと掌中に入る程度である。使用痕は片面にのみ認められる。

4) 土器片利用品 (メンコ) (第34図)

西和田貝塚からは、下層・上層を問わず、土器片を円盤状に加工した遺物が出土している。第34図に示したものが、その代表的なものである。

製作方法は、単に土器片の縁片を細かく打ち欠き円形に仕上げただけであり規格性は認められない。その出土量は加工方法が単純なため、土器片と加工品との区別をすることが一部困難なものがあるため全体を把握できないが、約30点が認められる。

使用されている土器片は、有文、無文、条痕文土器等区別されずに使われている。また、器面には特に使用痕等の痕跡も認められず出土状況も多く、多くの遺物と一緒に出土するという状態である。

このような遺物は、メンコ、メンコ状土製品として、これまでいくつかの遺跡で紹介されているが、用途不明の遺物である。西和田貝塚周辺では、立石貝塚からも出土している。

5) 表採・攪乱層出土遺物

(1) 土器 (第35図)

西和田貝塚出土の遺物は、以上述べた上層の貝層、下層の黒褐色土層の他に、水田下のグライ層からも多量に出土している。しかし水田耕作の際に攪乱し須恵器、瓦器、磁器等新しい時代の遺物を伴う。

244. 凹線文土器の口縁部近くの破片である。凹線文は指先状の施文具で口縁部周辺にのみ描かれ、器面は内外面ともに撫でにより滑らかに仕上げられている。茶褐色を呈し、砂粒の少ない硬く焼きしめられた土器である。

245. 口唇部に刻み目のある凹線文土器で、口縁部はやや外反する。器面は内外面とも横方向の条痕が残り、内面には指圧痕がある。また文様はヘラ状の施文具を使用したと思われる。茶褐色で砂粒は少ない。

246. 口縁部の一部に縦方向に二本粘土紐をつけている。器面は横方向に条痕調整され、一部撫で消されている。茶褐色で、わずかに砂粒を含む。

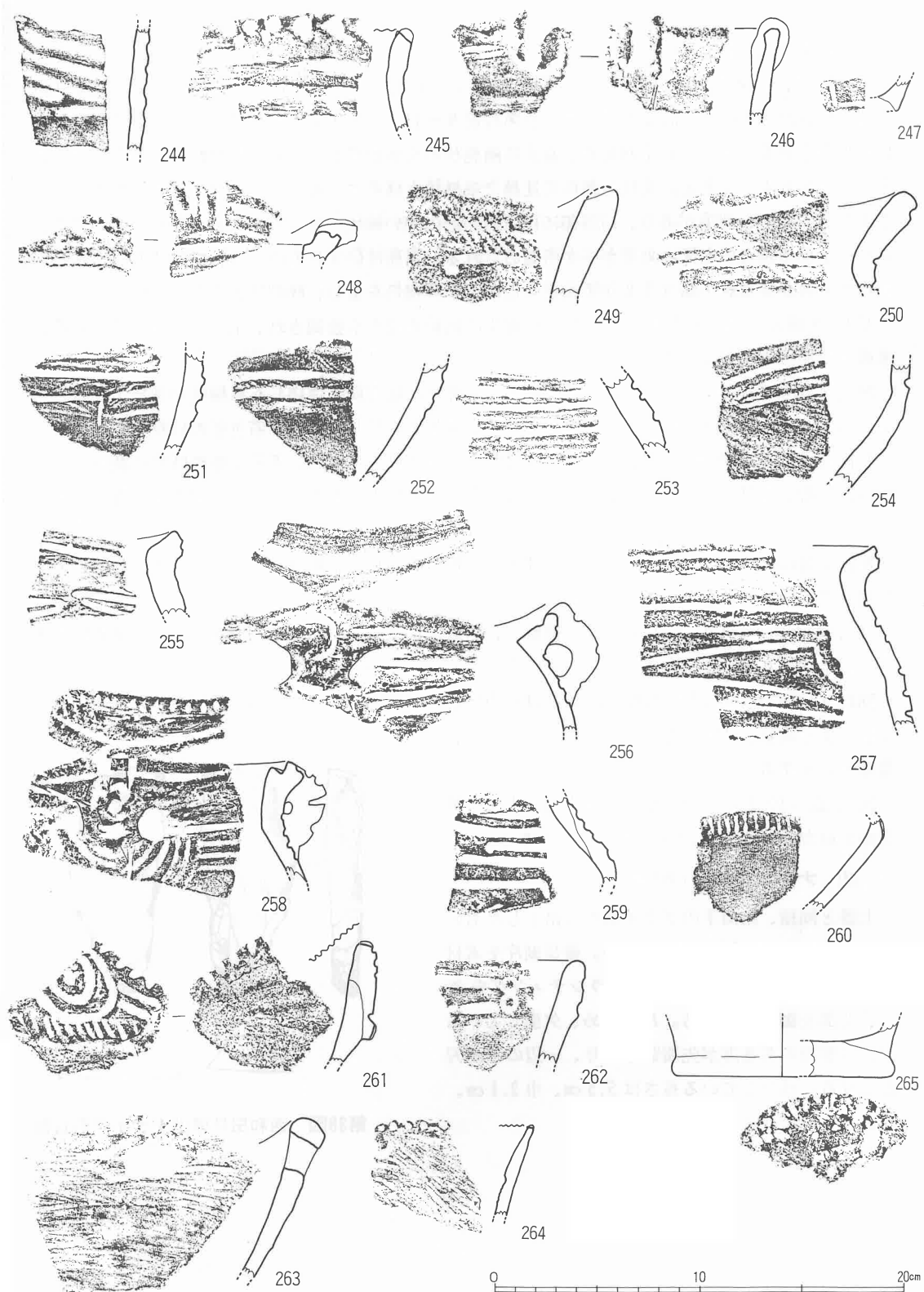
247. 底部に接合する部分の破片であり、一部にRLの磨消縄文がある。胎土に砂粒は少なく、明褐色を呈する。小破片であるが、福田KⅡ式土器と思われる。

248. 口縁部の数ヶ所が外側に突起する器形の土器の突起部の破片である。突起部には刻み目があり、口唇部には沈線がめぐる。明茶褐色で、砂粒をわずかに含む。

249. 磨消縄文土器の口縁部の破片である。沈線文の起結部は強くおさえ強調している。茶褐色を呈し器面を研磨している。

250. 外面は剥落が著しい。外反する口縁部の内面は横方向に入念なヘラ研磨で仕上げている。茶褐色で胎土に砂粒を多く含む。

251～254. いずれも胴部の破片である。251、253、254の器面は先端の細い棒状の施文具で直線的な沈線文が描かれているが、254は、断面U字形の沈線と縄文がある。器面調整は、全て条痕文を地文とし、撫で消されているが一部にその痕跡が残る。254は研磨で仕上げている。色調はいずれ



第35図 西和田貝塚攪乱層表採土器実測図

も茶褐色を呈し、胎土に砂粒はあまり含まない。

255～258、口縁部が短く外反する鐘ヶ崎式系土器の破片である。255は「つの字形」の沈線を基調とした文様が器面に描かれる土器と思われ第22図9～11と同類と考えられる。256は短く外反した口縁部から胴部にかけて把手があり、器面に渦巻状の文様が描れるものと思われる。257は口径の大きい深鉢形土器である。文様は器面に沈線で渦巻状文様をアクセントとしながら描かれている。258も256同様、把手があり、口唇部には断面円形の細い棒状の施文具による連続刺突文がある。また把手部の頂点にも深い刺突が一ヶ所認められる。器面はいずれも研磨されているが、258の内面には条痕が残る。色調は258が明褐色の他は全く茶褐色を呈し、砂粒はあまり含まない。

259、沈線文で飾られた土器である。沈線文の起結点はやや強調され、全体的に直線的である。黒褐色で金雲母を多量に含む。

260、胴部の最大径部が稜を造って張り、その部分に縦方向の連続した単線文が認められる。器面は内外面ともに横方向に入念に研磨している。茶褐色を呈し、胎土に石英質の砂粒を含む。

261、口縁部の数ヶ所が突起、肥厚し、渦巻文、刻み目等で飾る。器面は特に目立つ調整方法はない。灰褐色を呈し、胎土に砂粒を含む。この土器は瀬戸内地方を中心に分布する津雲A式土器に類似する。

262、口縁部をわずかに肥厚させその部分に竹管状の施文具で刺突文、沈線文を施文している。茶褐色で胎土に砂粒をわずかに含む。

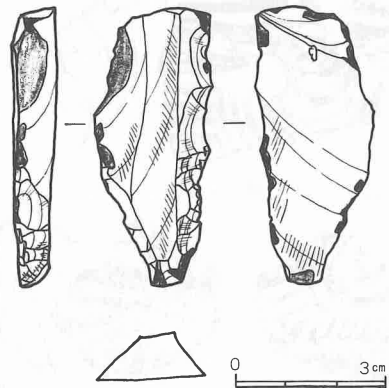
263、器面を小巻貝により横方向に調整し、口縁部には、焼成前の穿孔がある。この穿孔は大きく、把手状になる。茶褐色で砂粒を含む。

264、口唇に細い刻み目があり、器面は斜方向の条痕により調整されている。胎土には砂粒を含み、茶褐色を呈する。

265、底径10.2cmで、全面が接地面となり大粒の縄文の圧痕が認められる。茶褐色で胎土に砂粒を含む。

(2) ナイフ形石器 (第36図)

土器と同様、水田下のグライ層から出土したものである。このため新しい傷が多い。縦長剥片を素材とし、主要剥離面側からのみブランディングを施し、基部を調整している。このため、欠損しているが、打撃面のある方が先端部となり、一辺のみが刃部となる。残存している長さは5.5cm、巾2.1cm、厚さ0.8cmでサヌカイト製である。



第36図 西和田貝塚出土ナイフ形石器

4. ま と め

西和田貝塚は小規模な貝塚である。しかし上層の貝層、下層の黒褐色土ともに多くの遺物を包含しており、層位的な位置関係は、明確であった。すなわち、上層は鐘ヶ崎系土器が主体となり、下層は、阿高系凹線文器が主体となる。特に下層は、これまで希薄といわれてきた、東九州の縄文時代中期の系統を引く土器である。他の遺跡では散発的に出土していたが、今回の発掘で得た資料は、まとまりのあるもので、同一包含層からは、瀬戸内系の土器も出土しており注目される。また上層の土器は、下層の土器と層位的に先後関係が明確であり、宇佐平野周辺の縄文後期の土器編年の鍵となりえた。

石器は、剥片石器が少なく、5点の出土をみた石斧が目立った。いずれも、一部を欠損し、刃部はつぶれている。石錘は3点のみの出土にとどまる。宇佐平野の貝塚群から出土する石錘は、決して多くなく、これまで、植野貝塚・石原貝塚で、それぞれ1点出土しているだけである。注目されるのは、扁平礫石器とした5点の石器である。一部、自然礫の疑いがあるが、撓形にトリミングされた形態は、砂泥性の貝類で構成される貝塚と、かかわりの深いものかも知れない。今後の資料増加に期待したい。

骨角器は、宇佐平野周辺の貝塚からはあまり出土しておらず、これまで、植野貝塚、立石貝塚で貝輪の報告がされているのみである。西和田貝塚出土の6点の骨角器は、骨鏃や装飾品と思われる資料もあるが、他は欠損部分が大きいため器種は不明である。これまで報告例の少なかった、この地域の骨角器であるが量的には少なくないことが予測される。

なお、貝層上面で検出された集骨、貝層中から検出された石皿については、今後検討の余地が残されている。

以上が西和田貝塚であるが、時期的には、後期初頭からこの地域での生活活動が認められ、後期前半期には終了している。また貝層は後期前半期のものである。

Ⅳ 宇佐平野周辺の縄文遺跡

宇佐平野を中心とした周防灘西岸は、起伏の少ないなだらかな地形が続き海岸線も遠浅である。こうした地勢の中で、縄文後期から弥生時代までの間に小規模ながら多くの貝塚が形成されている。これらの貝塚に対する調査は、戦前では樋口清之氏により森・立石・来縄貝塚が、戦後になると鏡山 猛氏・入江英親氏・賀川光夫氏により、豊後高田市森貝塚、中津市植野貝塚が調査され、比較的考古学的調査の進んだ地域となっている。

以下、7ヶ所の遺跡は、これまで報告されたものについては、代表的な遺物をあげ、宇佐平野とその周辺の遺跡について紹介するものである。なお、石器については不明な点が多く、石町遺跡以外は土器中心になっている。

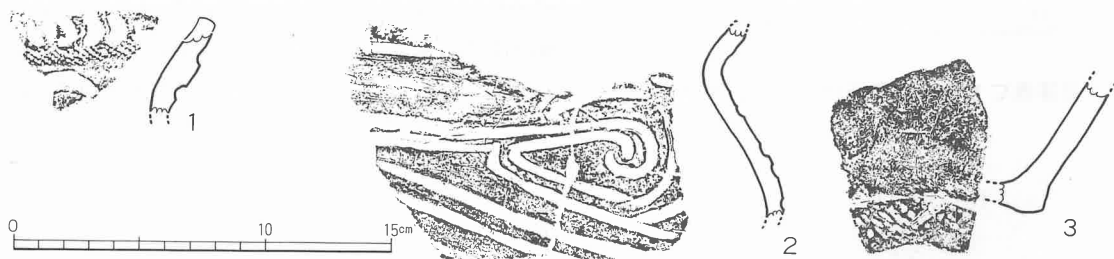
1. 入垣貝塚 (第37図)

中津市大字福島字入垣に所在する貝塚である。昭和42年に刊行された「中津市史」には福島貝塚として紹介されているが、福島は大字であり広範囲な地域を示し、また遺跡保存に力を注いでいる「三保の文化を守る会」が設置している説明板には入垣貝塚と小字名を使用しているため、ここでは改めて入垣貝塚として紹介する。

貝塚は、低丘陵である三保台地の西南端の斜面に形成され、その南方には、犬丸川が東方に向かって流れている。発掘調査は今日まで全く実施されていないが、遺物は周辺の人によって採集されている。(第37図1～3)それによると、1の磨消縄文や、2の入組文のある土器、西和田貝塚で見られた接地面に圧痕のある底部片等があり、貝輪も吉田良介氏により採集されている。

わずかな資料ではあるが、以上の資料から判断すれば、縄文時代後期前半の時期と考えられる。

なお、昭和54年3月、中津市教育委員会により、貝塚周辺の試掘調査が実施され、台地上に貝塚と同時期の有望な包含層が認められた。また、住居跡等の発見の可能性が大きく、今後注目される遺跡である。



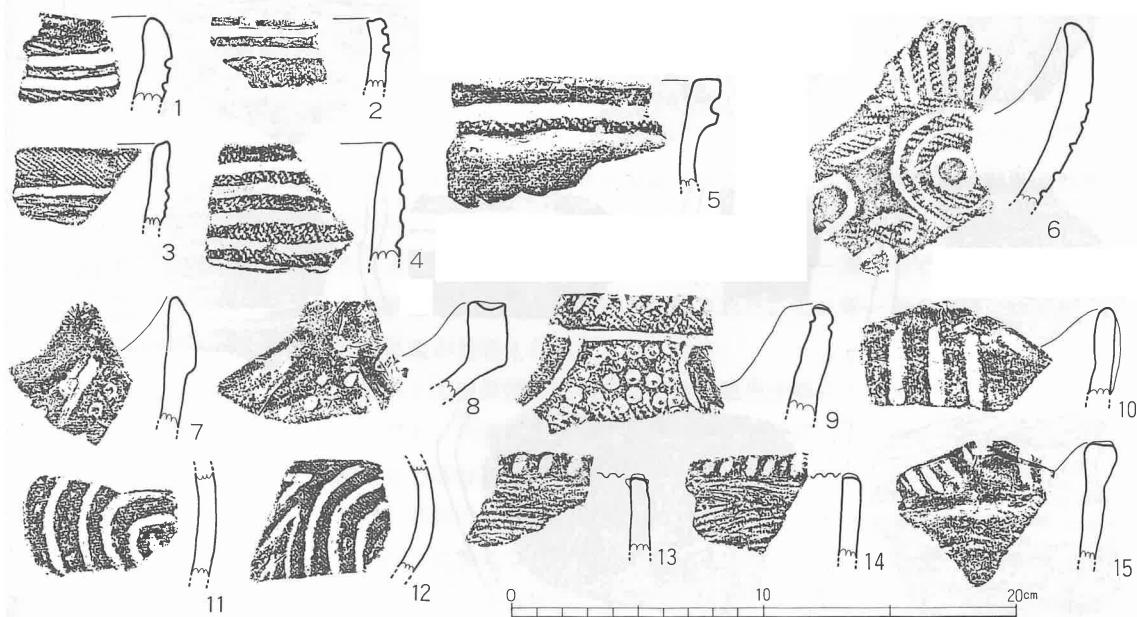
第37図 入垣貝塚出土実測図

2. 植野貝塚（第38図）

中津市大字植野字伽藍1270通称カイガラ坂に所在する貝塚である。中津市の中心街の東方、北から周防灘に向って延びる台地の西辺の斜面に立地し、西方には北流する犬丸川がある。河口まで約2 kmである。調査は昭和31年、賀川光夫氏によって実施され、すでに報告書が刊行されている。それによると台地縁端に南北20 m、巾2 m、それに交差させて東西6 m、巾2 mのトレンチを設け調査し、表土下には約35 cmの比較的貝の少ない濃黒色土層、約50 cmの淡黒色土層、貝層は最大で90 cm赤褐色のバイラン土層の順で土層が堆積していることが確認されている。

遺物は、石器が極めて少なく、石斧、石錘、ともに各一点のみである。これに比較して土器は多量であり、第38図はその代表的なものである。大別すれば、磨消縄文土器、（3～6・9）沈線文土器、（1・2・10～12）条痕文の粗製土器（7・8・13～15）がある。磨消縄文土器の6・9は比較的特殊なモチーフで、6は内湾する口縁部に同心円状の文様、9は縄文部分にさらに竹管の刺突文がみられ、今日までその類例はあまり知られていない。沈線文土器は1・2の条痕文土器の口縁部に数条の平行沈線をめぐらすものや、10のように中期の土器の影響の強い凹線文風のもの、また11・12の入念に研磨した土器等さらに分類がされる。これらは磨消縄文土器同様、時間的な差が考えられる。条痕文の粗製土器は、条痕文のみで全く文様が器面にみられない土器が圧倒的であるが、7・8は9に見られるような竹管の刺突文が施され、13～15は、口唇部に刻み目を有する。

以上の土器は、後期前半の時期には間違いはないが、宇佐平野周辺で見られる土器の中では、比較的獨特なもので、7～9等の刺突文を多用する点等はむしろ周防灘対岸の山口県月崎遺跡の上層土器に類似する。



第38図 植野貝塚出土土器実測図

3. 高畑（中津南高グランド）遺跡（39図）

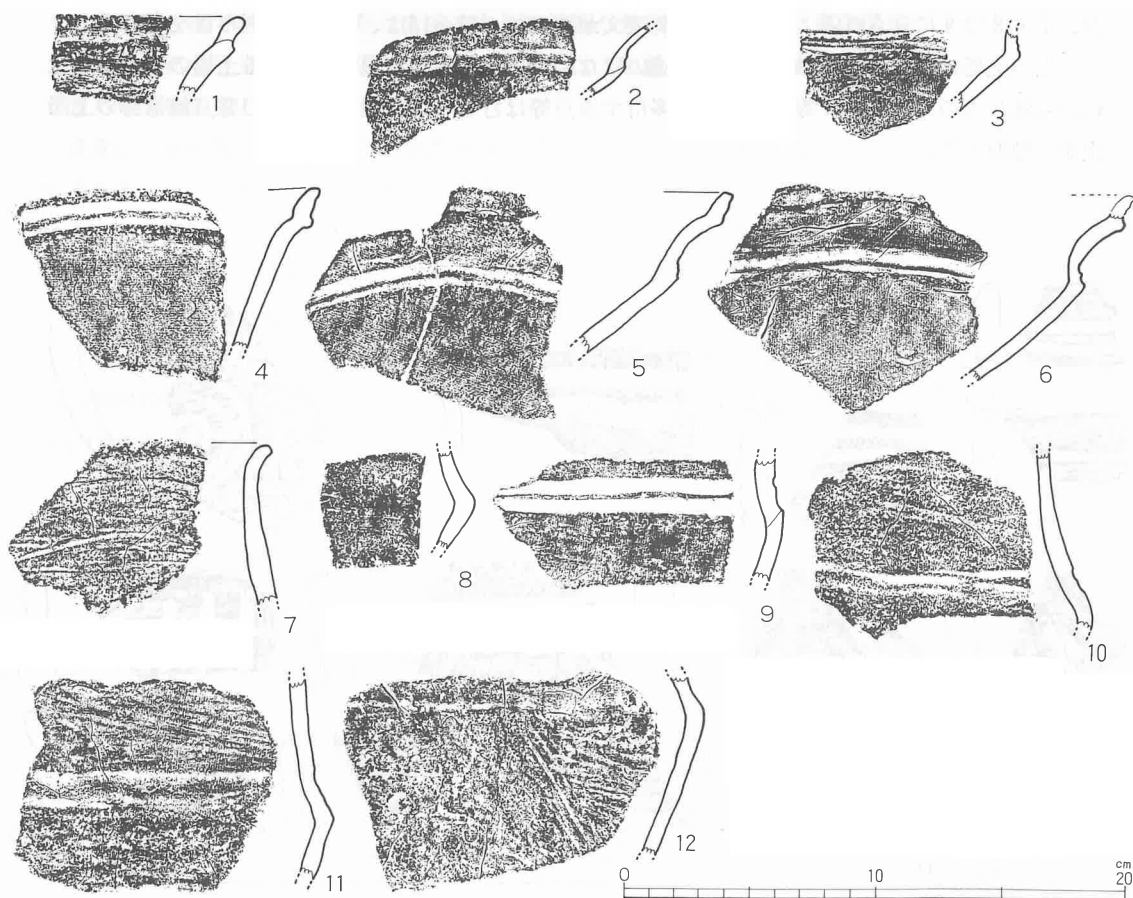
中津市大字中津字高畑に所在する中津南高等学校のグランド内にある。西に接して山国川が北流し、出土地区は本来は微丘陵又は自然堤防上であった可能性が強い。

遺物は昭和24年、グランドの東南隅（現弓道場）に砂場を造るための作業中出土したもので、現在中津南高の図書館で保管展示されている。なかでも2体の土偶は注目される。

土器は現在残されている資料は少なくなっているが、浅鉢と深鉢の2種類に分類される。

浅鉢（1～6）は良く研磨された精製土器である。1は横方向の研磨痕が残り、明褐色で胎土に微砂粒を多く含む。2・3は口縁端を欠くが、頸部に2条の凹線が認められる。2点とも茶褐色で胎土に砂粒を多く含む。4は植木鉢状になる浅鉢である。口縁端部や下位の突出部は磨滅している。復元口径は17cmを測り、内外面とも良く研磨されている。暗茶褐色で胎土に細い砂粒を多く含む。5は復元口径23cmを測り、肩部には2条の凹線がめぐらされ、口縁端部にも2条そのなごりともいえる凹みが残る。6は口縁端部を欠くが、約25cmの口径が推測され、胴部と口縁部にそれぞれ横長の凹点文が認められる。5・6ともに茶褐色で胎土に細い砂粒を含む。

深鉢（7～12）の口縁部の破片は7のみである。口縁端部で外反し、器面は条痕文で調整されて



第39図 高畑遺跡出土土器実測図

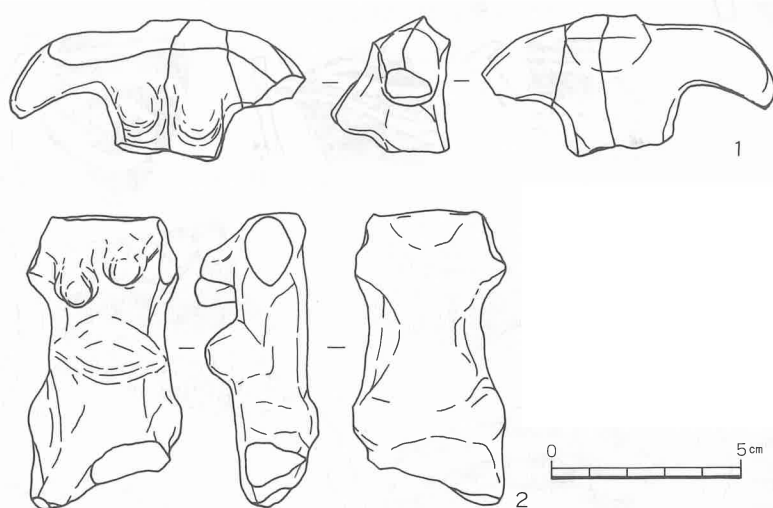
いる。黒褐色で、胎土に砂粒、金雲母が認められる。8は小破片であるが内面にこげ付きがある。9、10は肩部に2条の太い凹線がめぐらされているが、10は雑である。茶褐色で砂粒を多く含む。11、12は同一個体と思われる。肩部に2条の凹線状のくぼみが認められ、器面は頸部をヘラ研磨、胴部は条痕文の上から雑なヘラ研磨で調整されている。灰褐色で胎土に砂粒を多く含む。

土偶（第40図）1は、胴部の部分のみであるが、乳房は写実的であり肉感にあふれるが、腕は抽象的である。背部の首との接合部は粘土の高まりが見られる。また乳房の上位には赤色顔料の付着

した痕跡がみられる。

2は首部、両脚、両腕を欠く。乳房は丸く突出し、腹部も張り出し妊婦を表現している。この土偶も1と同様乳房の上位を中心に、体の各部位に赤色顔料を塗布した痕跡が残されている。

高畑遺跡の時期は、黒色研磨技術の発達や、土器の形態等から判断すれば、後期末と考えられる。



第40図 高畑遺跡出土土偶実測図

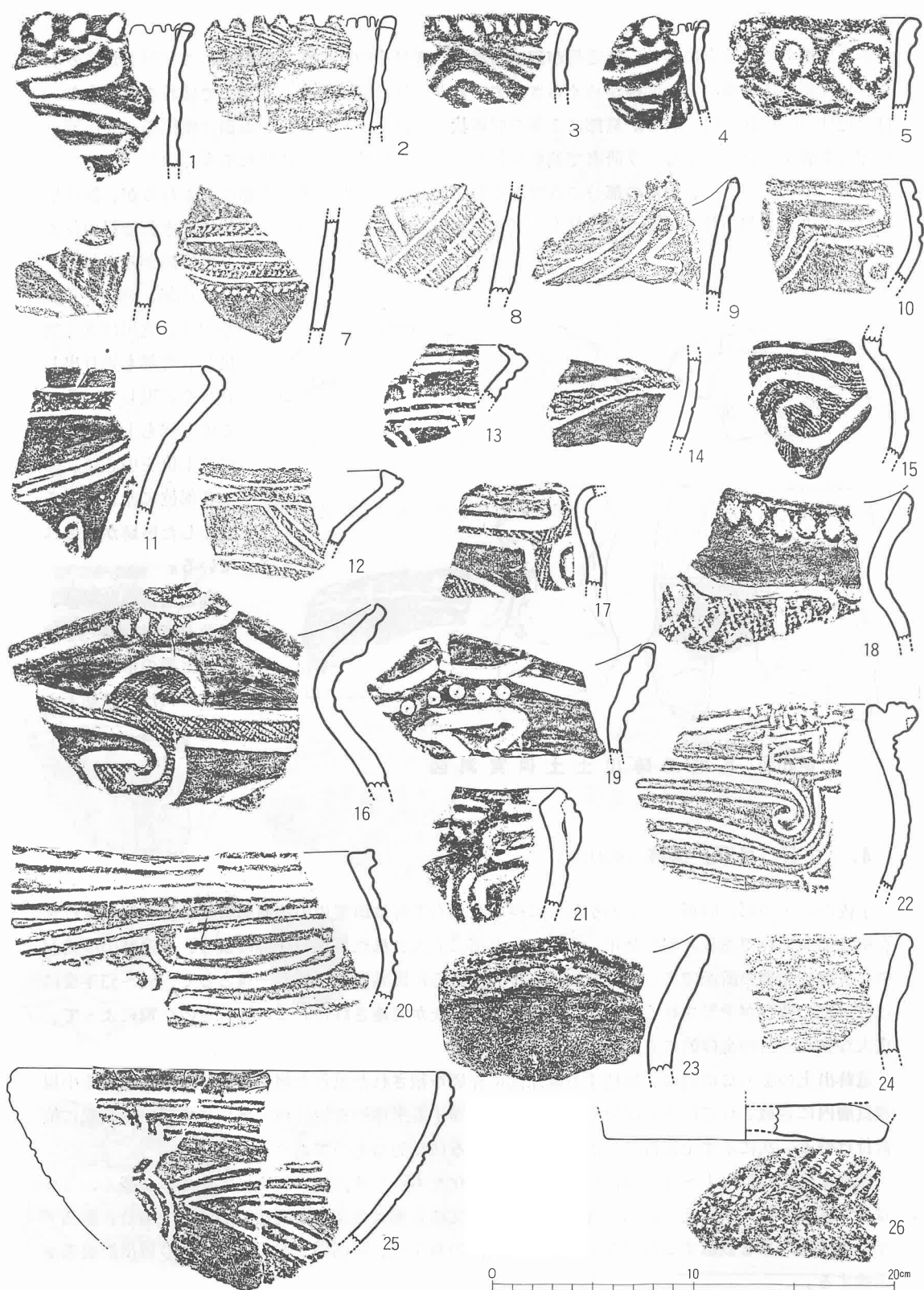
4. 立石（貝塚）遺跡（第41図）

宇佐市の東南部、旧森湾の干潟を前面に控えた立石遺跡は田笛川の氾濫扇状地礫原に展開された有望な縄文遺跡である。昭和46年、遺跡の北端部に形成された貝塚の発掘により、本遺跡の生成が縄文後期初頭期の所産であることを認識し得た。さらに圃場整備事業の一環として、52～53年度には住居跡の残存が予想される南側微高畑地の発掘調査が実施された。これ等一連の発掘によって、広大な立石遺跡の全体的な立地概要が把握された。

遺跡出土の膨大な遺物は、累積する礫原間に充填堆積された黒色土層中と数カ所に点在する小規模貝層内に包蔵されていた。中でも、当遺跡を構成する主体的遺物は縄文後期初頭期～前葉期に位置付け得る。次に示す土器群は立石遺跡を象徴する典型的なものである。

凹線文系土器群（1～5）は口唇部に凹凸の変化をもつサザ波状口縁を呈するものが多く、器壁は薄く波打つ傾向が窺える。口縁部に集約された文様帯部は地文の条痕磨消が顕著であり、胴部下半は条痕地のまま放置する様相を呈す。条痕技法の蘇生は、阿高系土器の中でもより後出的要素を示唆する。

貝殻文系土器（6～8）は沈線間に貝殻腹縁を押捺する。擬似縄文化した文様構成は福田KⅡ式



第41図 立石(貝塚)遺跡出土土器実測図

土器との折衷的様相を暗示するものがある。綾B式土器に系譜が求められよう。

中津・福田KⅡ式土器（9～14）は特徴ある形態を有し瀬戸内系土器を表象する。二本沈線を基調とする充填縄文は端正である。本遺跡出土の中津式土器は僅少であり、凹線文系土器との相対的出土頻度の関係は留意すべき問題点の一つである。

鐘ヶ崎系土器群（15～26）と汎称される一群の中で、口縁部はなまくら反りに立ち上がり華麗な磨消縄文で飾る深鉢形土器は小池原式に酷似する。また、沈線文のみの入組文で施文する口縁部は直角に屈折する委縮したものである。両者には橋状把手を持つものもある。21の把手は装飾化した貼り付けであり橋状を呈さない。一方、深鉢形土器と伴出する鉢形土器(25)は単純なボール状を呈する。その他、上述有文土器に比較して圧倒的出土頻度を呈する粗製条痕文土器がある。26は圧痕が付着する底部である。縄代圧痕等の認められる底部は比較的多く検出された。これ等は編物の種類や特徴を洞察するうえで重要な資料である。

以上立石遺跡を代表する土器群を瞥見したが、これ等は大きく後期初頭期と前葉期に二分できる。初頭期に包括される土器群と前葉期を代表する鐘ヶ崎系土器群の層序的前後関係は、両期の重複するブロックの精査で検討された。一方、両期土器群の分布状態をみると、遺物の密集的に出土する一定範囲が指摘できる。この傾向は鐘ヶ崎系土器の濃密に集中する2つのブロックで顕著であり、円形住居跡の残影を示唆するものと推察された。また同様に、これ等に準ずる分布密度より構成される数個所のブロックが把握されている。

ところで、後期初頭期から前葉期を総括する計8つのブロック（一部重複）^{註1}の分布動態をみると、初頭期と前葉期との配置に統一された方向性が窺える。その配置関係はあたかも無遺物地帯を半円に圍繞するが如き状態を呈している。この様相は馬蹄形集落を彷彿させるものであり極めて注目されよう。立石遺跡は扇状礫原に立地する特異な例であるが、特異地勢を利用した集落構造様式の一端を覗かせている稀有な遺跡である。

註1 宇佐市教育委員会から刊行される53年度圃場整備関係調査概報一立石遺跡の項を参照して頂きたい。

5. 来 縄 貝 塚

豊後高田市大字来縄貝ガウ塚に所在する。南にある西叡山から北に延びる舌状の台地の北端部に位置し、東側には北流する小川がある。この貝塚は古くから知られ、昭和5年の樋口清之氏をはじめ、何人かの研究者によって調査されているが、いずれも大規模なものではない。資料は周辺の収集家等により採集され一部は高田高校の森貝塚の資料に混在している。

遺物は石器についてはあまり知られていないが、土器は磨消縄文のある土器があり、後期前半の時期と考えられる。

現在台地の急斜面下に広がる水田の畦畔に貝の散布が認められる。

6. 森 貝 塚（第42～46図）

豊後高田市大字森に所在する貝塚である。その存在は古くから知られ、昭和5年の樋口清之氏の調査をはじめ、昭和25年には鏡山猛・入江英親氏も調査をされている。樋口氏の調査は、現在でも

貝塚内に建っている安部氏宅の西側斜面を3ヶ所広げたわずかな面積の調査に終り、期間も3日間と短期間だったようである。しかし、多量の遺物、人骨が出土したらしく、また周辺については森貞次郎氏の協力を得て地形図も作成されており、その成果を史前学雑誌第3巻第1号に報告されている。

鏡山・入江氏の調査は、樋口氏が調査された斜面の上の畑を発掘をされたらしく、人骨や多量の土器・石器が出土している。この資料は現在、県立高田高等学校の郷土部が保管しており、今回紹介するのはこの資料である。

保管されている資料は土器が大部分であり、中には来縄貝塚の資料もわずかに混入するという。

土器は磨消縄文土器、沈線文土器、無文条痕文土器の3種類に大別できる。

磨消縄文土器は、残された破片から想定すると、頸部がくびれ胴部が張る深鉢形と、口縁部から直線的に底部へつながる浅鉢形土器の二種類がある。この他、器形は想定困難ではあるが、小巻貝による擬似縄文と太目の沈線で文様を配した土器も見られる。

磨消縄文の深鉢土器（1・2・4～6・9～21）は、口縁部はゆるい波状口縁となり大きく外反し、先端でわずかに肥厚する。また13のように橋状把手をもつものもある。胴部は4・5・6・21の例から推測すると、球状に張ると思われる。文様は太目の沈線と粗い大きな縄文で組合わされ、口縁部から胴部最大径部以下まで施文されている。口縁部の文様は、波状口縁になる突起部の内側まで施文される（11・13・14・17）。11は波状口縁の突起部に、内面から外面にかけてS字状の文様がみられ、14は焼成前の穿孔を中心に同心円文を簡略化した文様で飾られている。17は波状口縁の突起部内側から突起部を巻くように沈線文が施文され、口縁部に沿って続いている。頸部の文様は波状口縁になるため、突起部と胴部の間に空間が生じ、そこにのみ見られる。11・14は縦方向に数本の短沈線を入れ、その間を縄文で埋めている。また17は胴部から磨消縄文を延ばし、頸部にゆるい渦巻文を作っている。胴部は6・21の資料から推測すると渦巻文を中心に大胆な磨消縄文で飾られるようである。器面はいずれもヘラ状の道具で良く横方向に内面まで研磨されており、14・17等は特に顕著である。色調は多くは茶褐色であり、胎土には砂粒をあまり含まない。なお、26は口縁端部を肥厚させ、断面三角形にし、その外面に文様帯を設け、長く延びた頸部には蛇行する沈線による磨消縄文がみられる。他の深鉢より若干新しい様相を帯びている。

浅鉢形土器（7・22～25・29）は7と29を除き比較的単純な形態を呈する。7は波状口縁となり、深鉢形土器の文様構成と類似した文様で飾られる。また29も波状口縁となり、突起部には斜方向に刻み目が加わる。口縁部外面は同心円文を簡略化した文様を中心に口縁部に平行な2本の沈線がめぐらされている。22～25は口縁部に3～4本の平行沈線をめぐらし、その間を縄文で埋めた文様である。24は口径32.6cm、23は口径24.2cmを測る。また23の文様は口縁部に近い方の沈線間のみ縄文がみられる。器面は深鉢形土器同様、内面まで入念に研磨されているが23・25の胴部には、わずかに地文の条痕文がのぞいている。

擬似縄文土器（27・28・30・31）、いずれも同種類の貝により施文しており酷似する。文様は27・28・30のように凹線文と組合わさり、27は口唇部に太い刻み目が入る。31は口唇部に斜方向に刻み目を加え、内外面ともに横方向に施文した擬似縄文帯をもつ。また焼成前の穿孔もみられる。これらの土器はいずれも茶褐色で胎土には砂粒をあまり含まない。

沈線文土器（3・32～52・56）は主として磨消縄文土器の縄文施文を省いたもの（3・43～52）

が主体を占める。しかし、32～42、56のようにバラエティもみられ複雑な様相を呈している。32・33は太目で浅い沈線を、口縁部に対し直角に施文し、33はさらにその下位にも施文している。34は文様構成は前の二者と同類であるが沈線は短かい。35は細く浅い規則性のない文様が器面にみられるが、土器製作の際についた意図的でない文様かも知れない。36・39は蛇行する沈線で飾られた土器であり、26と同時期の可能性が高い。37は条痕文の地文を撫で消した上から細い沈線文が施文されている。38は文様施文後入念に研磨された黒褐色の精製土器である。40は沈線を綾杉状に交叉させ、上位には円形の刺突文を施文している。41は波状口縁になる比較的厚手の土器で、口縁部に平行に沈線文を施文し、一部内面にまでおよんでいる。42は胴部下位の破片であるが、断面U字形の沈線文で描かれた曲線で飾られる。器面は滑めらかに仕上げられている。

磨消縄文土器の縄文を省いた沈線文土器は、磨消縄文同様その器種は深鉢と浅鉢の2種類が認められる。

深鉢形土器(3・43・44・46～50・52)は磨消縄文土器と比較して器面の調整が粗く、条痕文の地文が目立つ。口縁部は46・48～52の資料から観察すると、波状口縁になるものが多く、大きく外反しその端部を肥厚させ文様帯を設けている。文様も磨消縄文土器と同種で内面から外面にかけてS字状文のあるもの(50・52)同心円文の簡略化したもの(46・49)等がみられる。頸部の文様は、口縁部に直角に短直線を数本入れるのみで、やはり磨消縄文土器に類似している。胴部は3・43・44・49の資料を観察すると、磨消縄文土器と同様に渦巻文を中心とした大胆な文様で構成されているが、かなり簡略化した傾向がうかがわれる。3・49は渦巻文と渦巻文の間を三本の平行沈線でつなぐのみで他の文様はみられない。50は口縁部のみに文様が集中し、文様要素は他とは変わらないが沈線は太い点に近くなっている。

浅鉢形土器(45・51)は2点であるが、それぞれ異った文様を構成する。51は口縁部に平行に一本の沈線をめぐらせただけであるが磨消縄文土器の同種の器形の縄文を省いたものに近い。また45は口縁部に渦巻文の一部が見える。沈線文土器は49・50が黒褐色の他、大部分は茶褐色で胎土に微砂粒を含む。56は波状口縁になる土器であるが、器形は不明である。口縁部の突起部の内と外に刻み目状の文様を入れ、八の字状の文様を重ねて描き、それを口縁部に沿って2本の沈線でつないでいる。53・54は口縁部の端部及び口唇部に太い刻み目や押点文を入れたもので54は50との関係がうかがわれる。55は波状口縁の突起部と外面に押点文を入れた土器で他に文様はみられない。57は口唇部と口縁端部外面に先端の鋭い施文具で文様を施している。58は口唇部に刻み目を有し、器面は横方向の条痕文で仕上げられている。59は口唇部に深く太い刻み目を入れ、それに接して外面にやや浅目の凹線文が見られる。60は波状口縁の突起部にのみ4ヶ所の刻み目を有する土器である。器面は口縁部は横方向、胴部は縦方向の条痕により調整されている。

条痕文、無文土器は保管されている資料の中で約80%を占める。ここに図示したものは、代表的な大きい破片のみである。61は外反する緩い波状口縁を成す。器面は横方向に条痕文で調整され、色調は茶褐色を呈する。62の波状口縁は突起部のみ粘土を付け形成し、横方面に撫でて仕上げ、胴部は縦方面にヘラ状の道具で強く撫で付けるように調整されている。63は他の土器片に比較すると際立って厚く、胎土にも砂粒を多量に混入する。口縁部内面には口縁部に沿って二本の凹線文がみられる。茶褐色を呈する。64は胴部のややくびれる深鉢形土器で、口縁部はゆるい波状になる。器面は製作時に撫でながら仕上げた跡だけで他には調整の跡はみられない。この土器も比較的厚く、

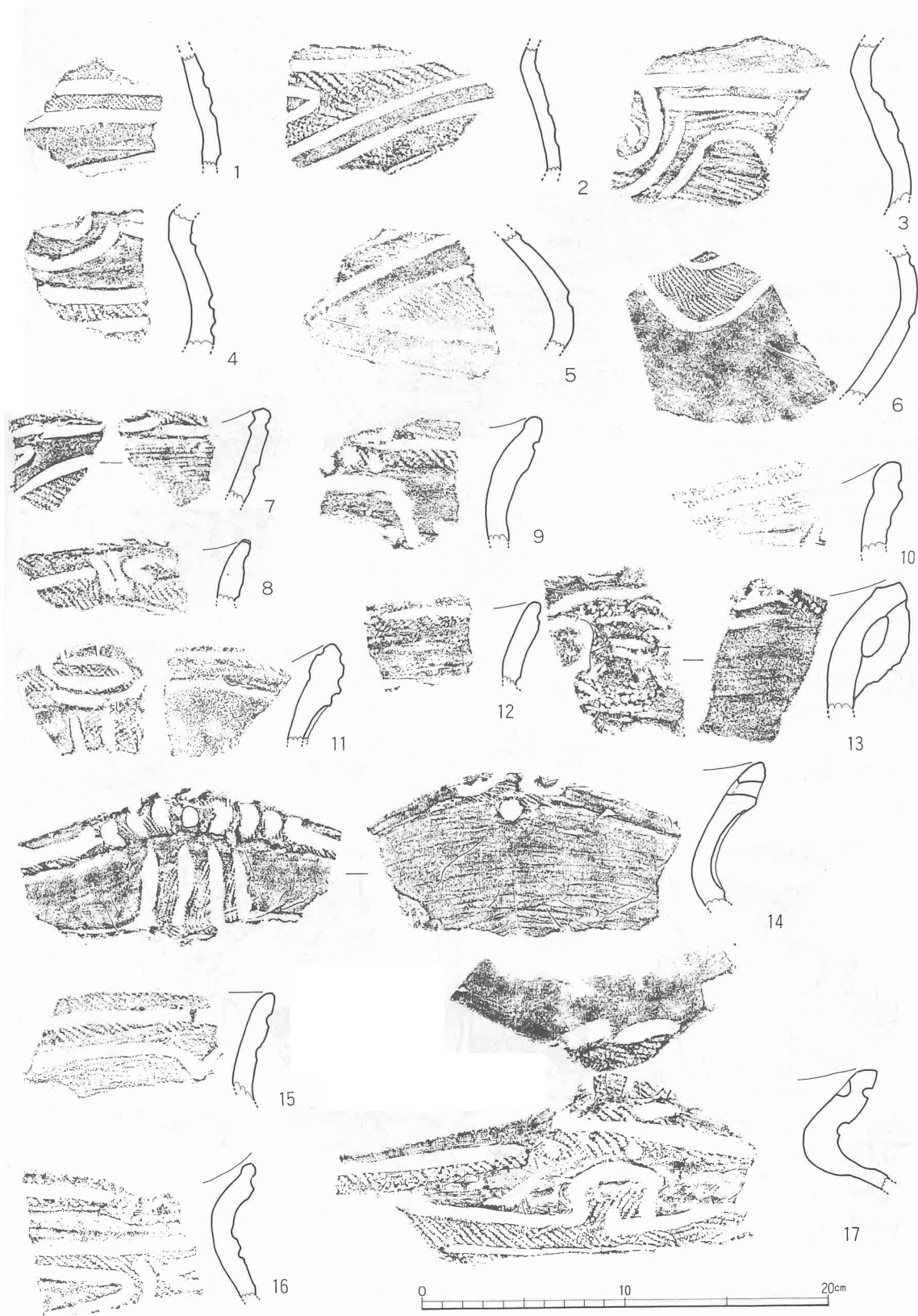
胎土に砂粒を多く含む。色調は茶褐色を呈する。65は復元口径12.6cmの小形の浅鉢形土器である。口縁部は外反し、端部でやや直口気味になる。器面の調整痕は特別なものは見られない。黒褐色で微砂粒を含む。66は復元口径18.2cmの深鉢形土器である。口縁部は直口し、底部へと直線的に続くと思われる。器面は条痕文のあと方向性のない撫でにより仕上げられ、内面は研磨されている。黒褐色で砂粒を含む。67は復元完形になる土器である。口径は31cmで器高は13cmを測る。底部は焼成前の径7cmの穿孔が見られ甑状の形態を呈する。外面は口縁部に近い部分を横方向、それより下位を左下りの規則性のある条痕文で器面調整され、口唇部と底部は撫で消されている。また内面は入念に研磨した跡が観察される。なお、内面には灰白色の硬化した不純物が、口縁部に厚く、底部に近くなるにつれ薄く付着している。68は口縁部が外反し端部は細くなる。外面は全面を規則性のない条痕文で調整され、口縁部周辺はさらに撫でにより条痕を消している。また口縁部にはススが付着している。茶褐色で胎土に砂粒を多く含む。69は波状口縁になる土器である。口縁部は外反し、端部で肥厚し丸くなる。器面は内外面ともに横方向の研磨により入念に仕上げられている。茶褐色で胎土に砂粒を多く含む。70は丸く肥厚した口縁端部が内湾する土器である。器面は条痕文による調整の後、ヘラ状の施文具で、口縁部は横方向、それより下位は斜方向に撫でられている。黒褐色で胎土には砂粒を含む。

底部は2種類のものがある。全面研磨のもの(71・72)と条痕文による調整のもの(73~78)である。量的には後者が圧倒的に多く、前者はわずかである。

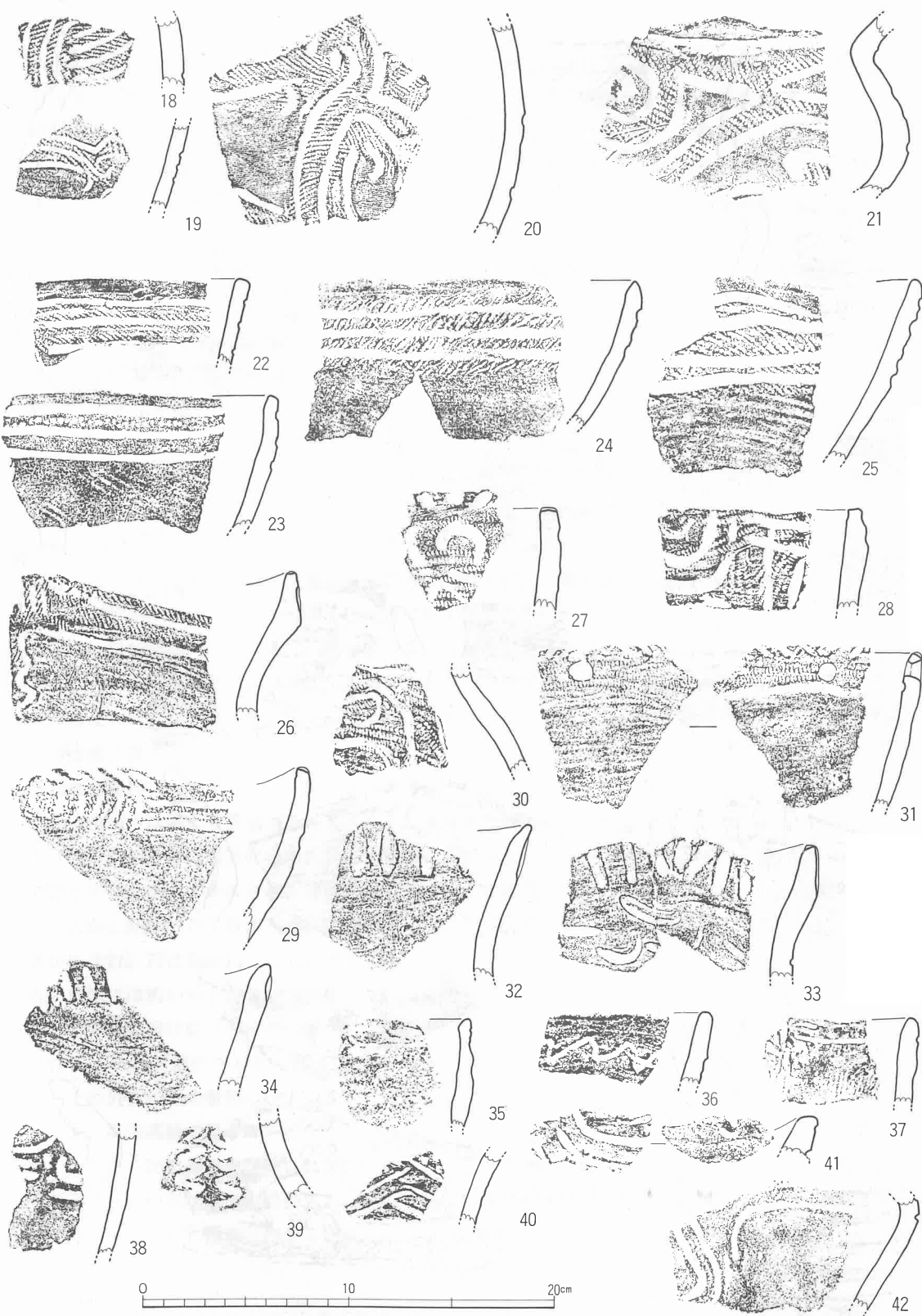
71は底径14.6cmで、接地面はわずかに剝落するが全面を入念にヘラ状の道具で研磨した土器である。胎土に砂粒が少なく、色調は明茶褐色である。72は底径11.6cmを測り、内面及び接地部との接合面は横方向に研磨されている。胎土は71と同様、砂粒が少なく、色調も明茶褐色である。以上の2者は磨消縄文土器等の精製土器の底部と思われる。

73は底径10.6cmを測り、底部はわずかに揚げ底状となる。器面は横撫でを主体とした調整で成形され、内面には粘土の素地がそのまま残る。茶褐色で砂粒をわずかに含む。74は底径14.6cmで、内面は横方向、外面は縦方向の条痕文による器面調整のあと、撫でにより仕上げられている。茶褐色で胎土に砂粒をわずかに含む。75は底径13.6cmで、外面は縦方向に施文した深い条痕文を撫で消したためか、凹線状の文様が残され、内面は横撫での器面調整がみられる。茶褐色で胎土に砂粒をわずかに含む。77は底径12.8cmで、外面は条痕文のあと、撫でにより器面調整されているが、底部に近い部位には粗い粘土の素地がそのまま残る。明褐色で胎土に砂粒をわずかに含む。78は底径14.8cmでわずかに揚げ底状となる。器面は外面を縦方向の条痕で接合部を横撫で、内面は横撫でで調整されている。茶褐色で砂粒はあまり含まない。なお73~78の底部の接地面には縄目状の圧痕が残っており、土器製作の際の敷物の圧痕と思われる。

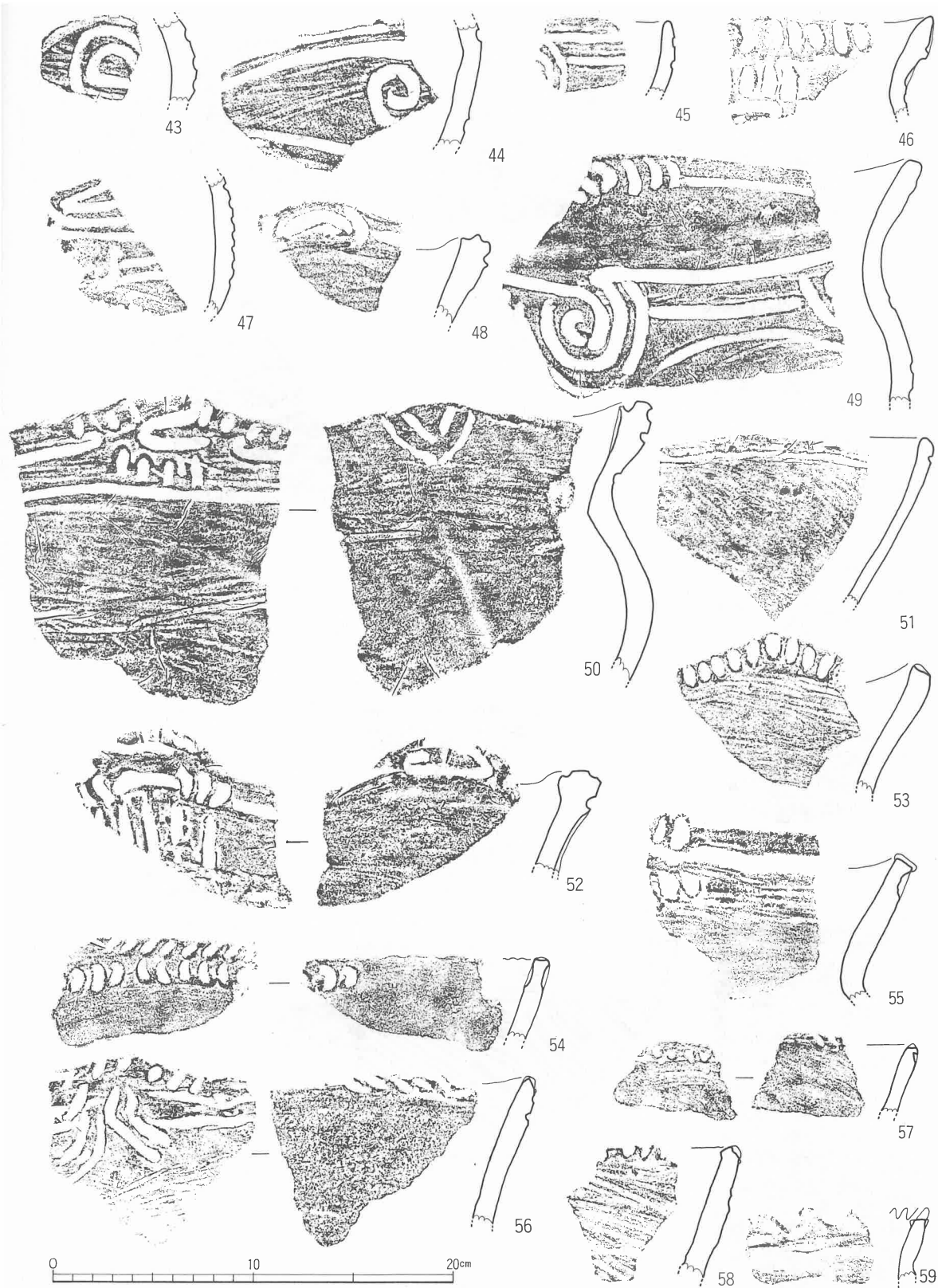
以上、高田高校で見ることのできた資料から、森貝塚の時期を考えると、古い様相を示す59の凹線文土器から26の縁帯文気味になる時期までが含まれるが、主体を占めるのは、磨消縄文土器と、その縄文を省いた沈線文土器である。この時期は、四国では平城貝塚、別府湾沿岸では小池原貝塚と同時期と思われ、西瀬戸内から、東九州にかけての磨消縄文土器の最盛期にあたる。



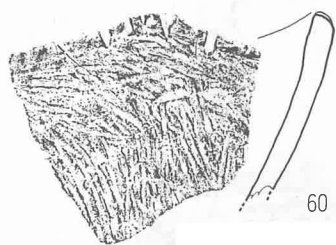
第42図 森貝塚出土土器実測図(1)



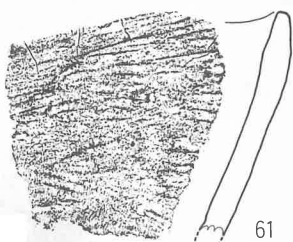
第43図 森貝塚出土土器実測図(2)



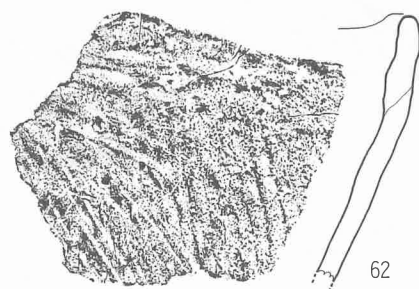
第44図 森貝塚出土土器実測図(3)



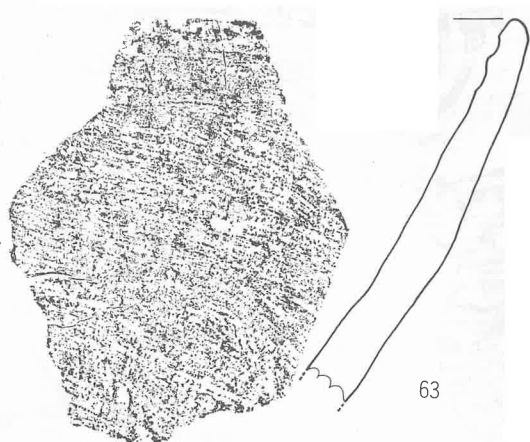
60



61



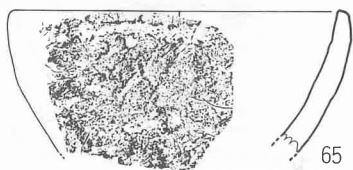
62



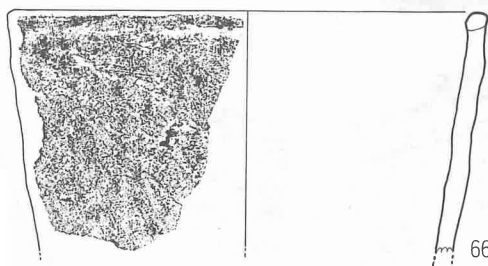
63



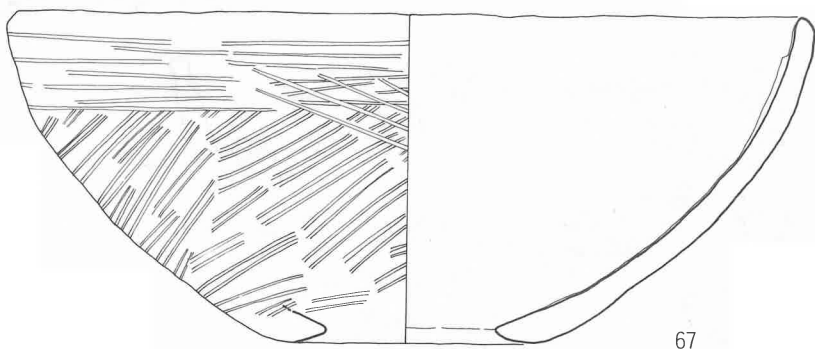
64



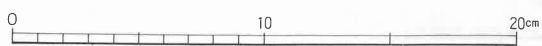
65



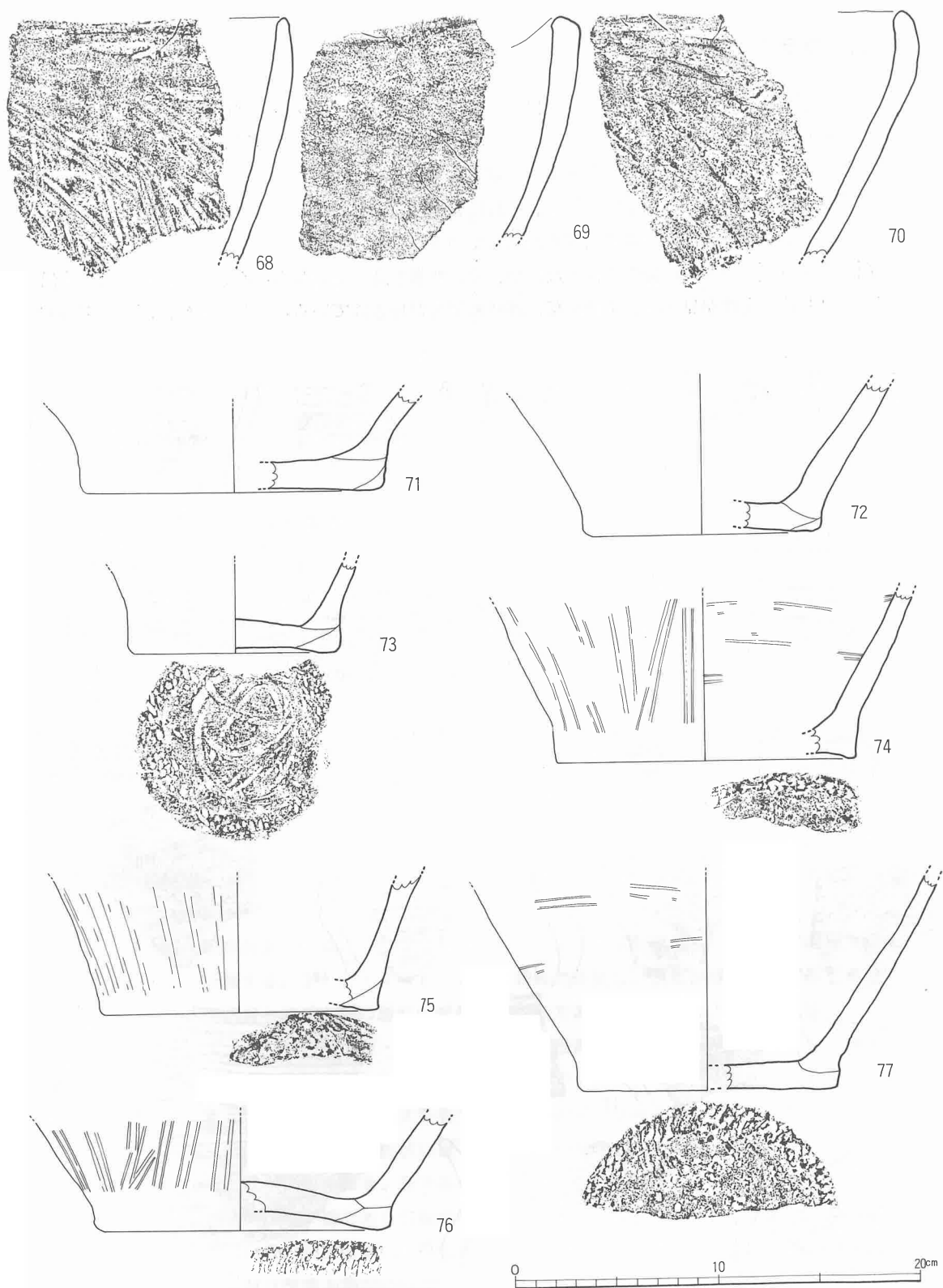
66



67



第45図 森貝塚出土土器実測図(4)



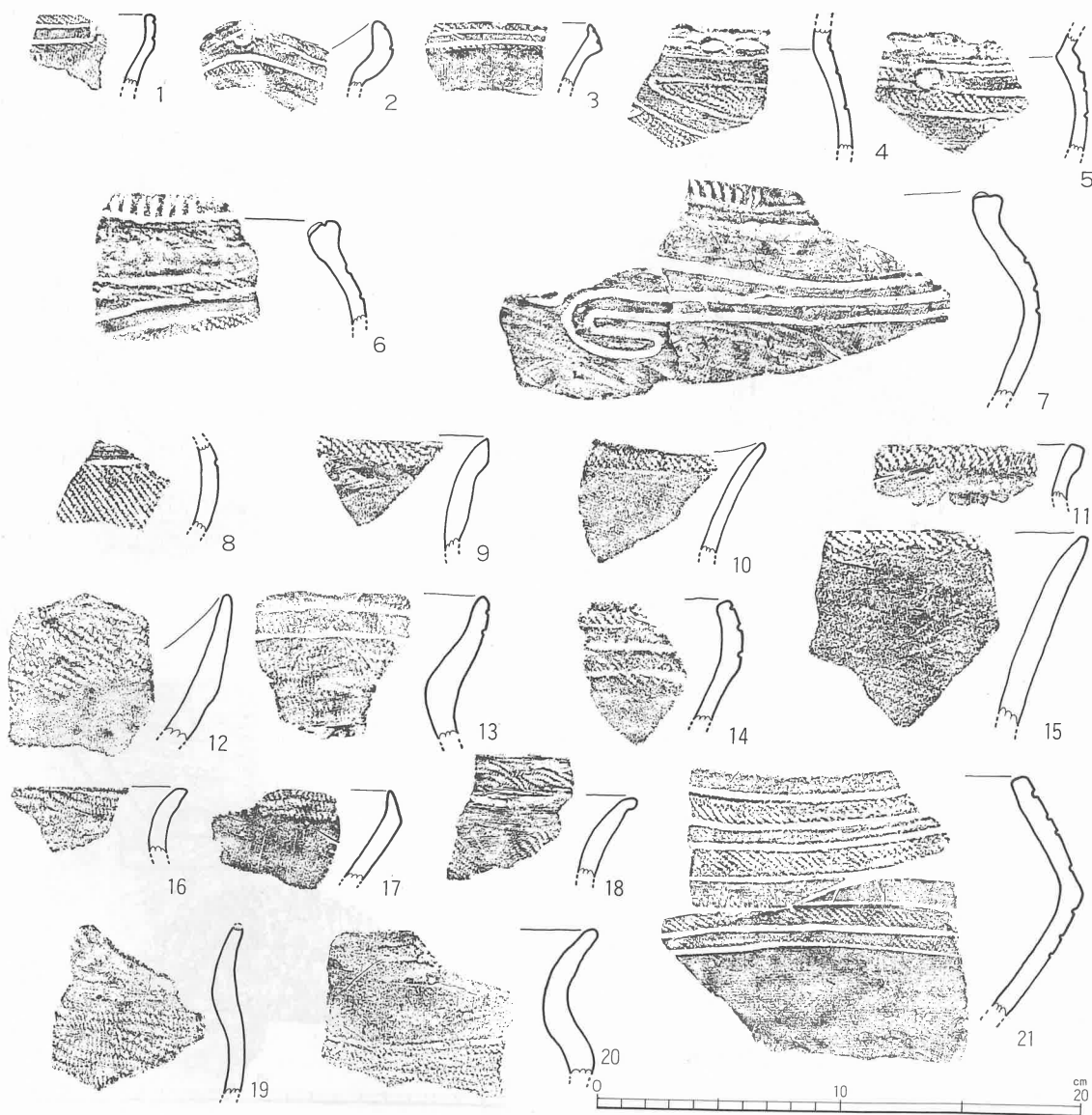
第46図 森貝塚出土土器実測図(5)

7. ワラミノ遺跡 (第47図)

遺跡は宇佐平野の東、瀬戸内海に突き出た国東半島のほぼ中央、東国東郡国東町大字大恩寺字薬叢の富来川南段丘上に立地する。調査は昭和34年1月に賀川光夫氏により実施され、その報告は昭和35年、大分県文化財調査報告書第6集に記載されている。

遺物は、縄文後期中葉の西平式土器と、それに先行すると思われる津雲A、北久根山期の土器が主体を占め、一部縄文前期の甌式土器も出土している。

西平式土器(1～5)は量的には少ないが、その特徴を良く現わしている。2は波状口縁の突出部に三日月状の文様が見られ、4は頸部に連続刺突文が施されている。また5は文様間に円形の刺



第47図 ワラミノ遺跡出土土器実測図

突文を配している。いずれも器壁が薄く、精製された土器である。

6～21はこれまでの研究で、西平式土器に先行すると考えられている土器である。系統的には鐘ヶ崎式土器（6・7）と瀬戸内の影響を受けた土器（8～21）の2者が考えられる。

6・7は鐘ヶ崎式土器の退化したものと考えられ、文様は単純化し、口縁部の一部には刺突による刻み目状の文様がみられる。

8～20は、口縁部と胴部にのみ文様を集中的に配した土器であり、平城貝塚の第5類、瀬戸内地方で彦崎KI式土器としているのに類似する。文様は縄文が主体を占めるが、13・16～20は小巻貝による擬似縄文である。21は胴部がく字状に折れる鉢形土器であるが、口縁部に平行に配された磨消縄文が見られ、さらに報告書によると、同心円文がこれに続いている。

ワラミノ遺跡の時期は、瀬戸内地方の後期中葉に編年されている縁帯文土器（津雲A式・彦崎KI式土器）の影響が強く見られ、退化した鐘ヶ崎式土器を伴うことから、後期中葉の時期が考えられる。

8. 石町遺跡（第48・49図）

遺跡の概要

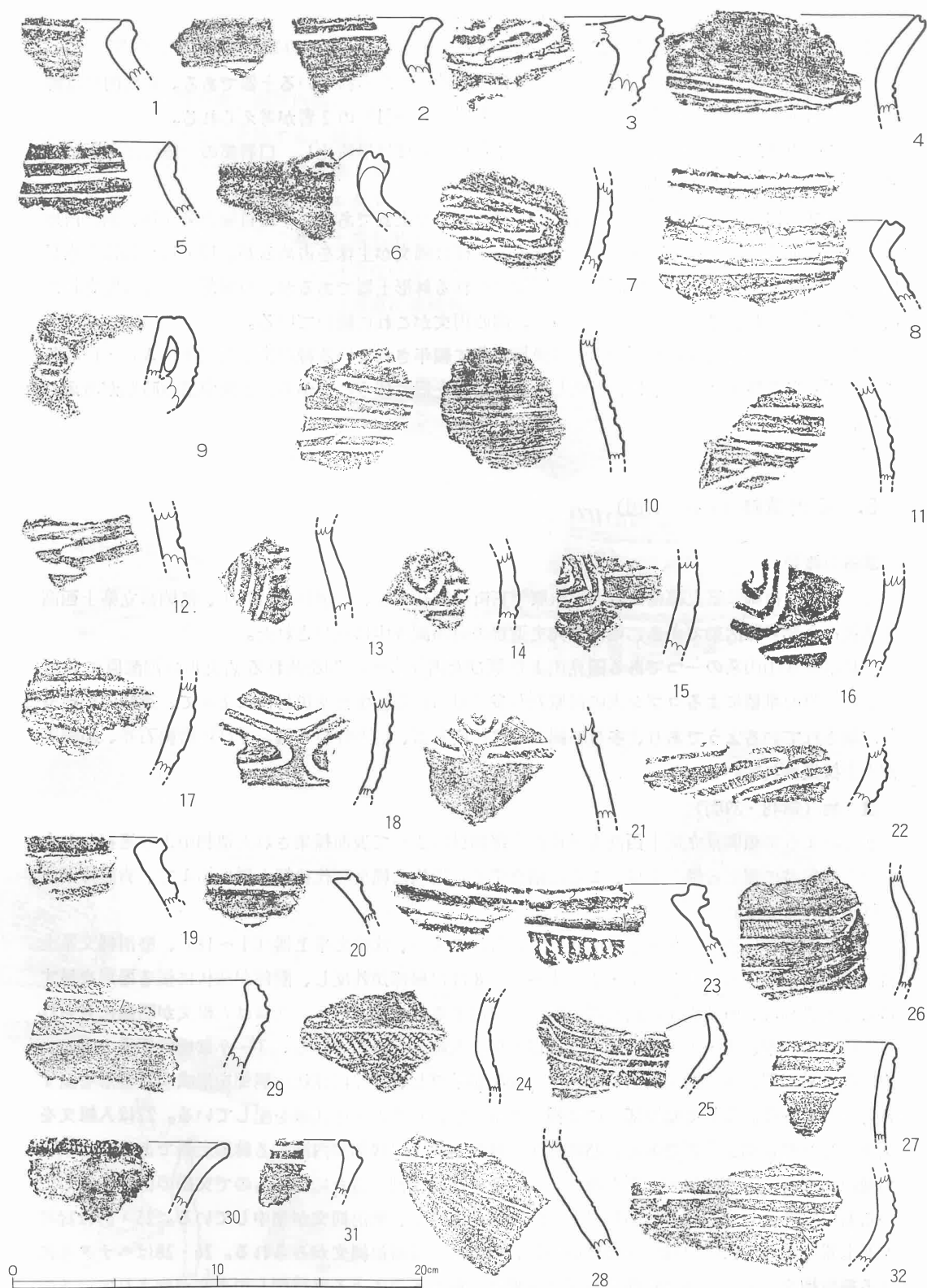
この遺跡は福岡県築上郡椎田町大字水原字石町に所在する。当遺跡は1975年、福岡県立築上西高等学校社会部の部活動である、椎田町先史遺跡の分布調査中に発見された。

遺跡は英彦山山系の一つである国見山より延びた舌状台地の間を流れる岩丸川の氾濫原に位置し、岩丸川の堆積によるコブシ大の河原石が多く見られる。また水田耕作によって、遺跡の大部分は破壊されているようで、多量の縄文時代後期土器、扁平打製石器、並びに磨製石斧、石鏃等が表面採集されている。

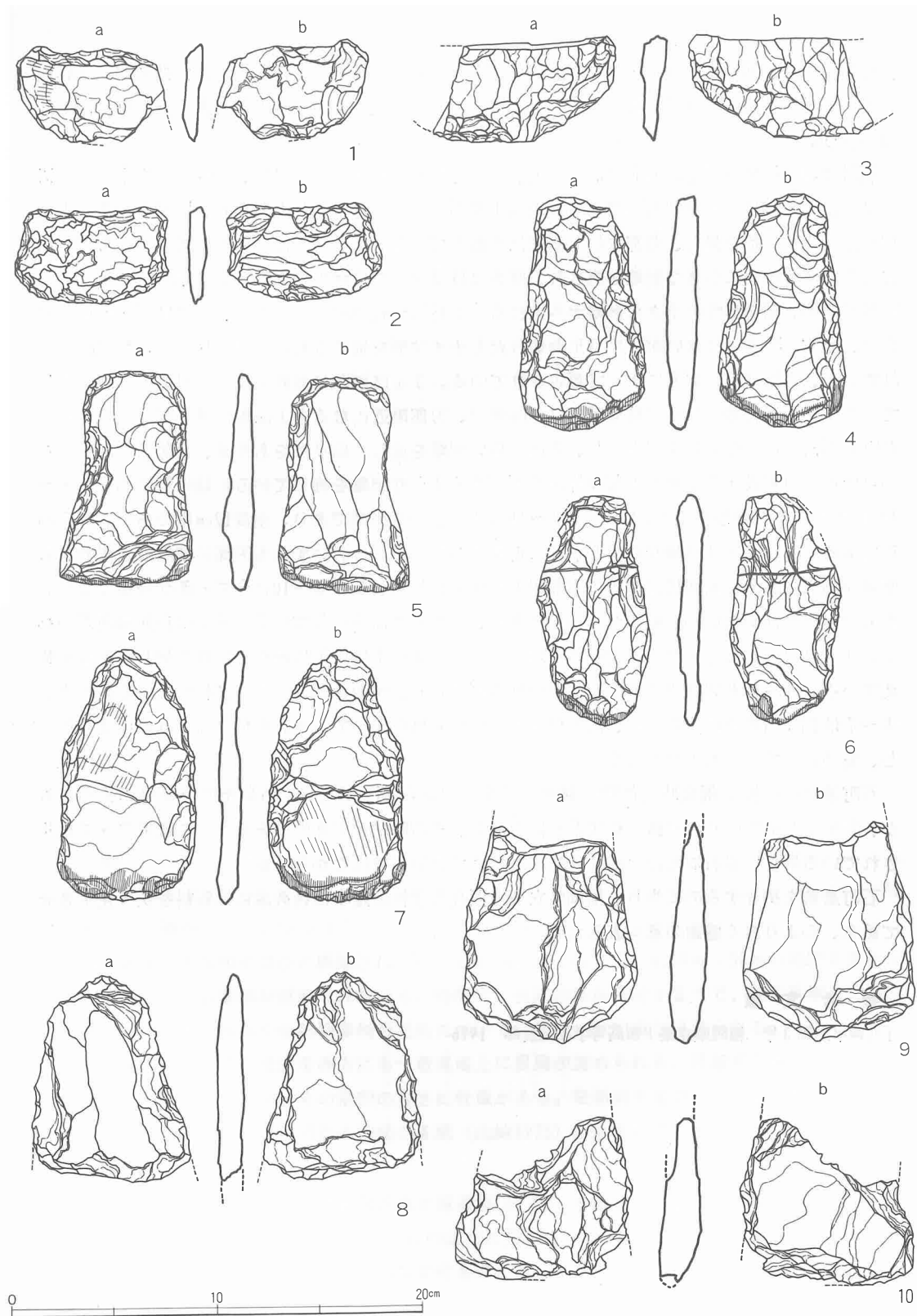
遺物（第48・39図）

前述のように福岡県立築上西高等学校社会部部員によって表面採集された遺物中より選択したものを当報告書に報じる機会を得、ここに紹介する。遺物は縄文時代後期土器に加えて、青磁片が少数採集されている。

土器は縄文時代後期前葉～中葉にかけてのものであり、沈線文系土器（1～18）、磨消縄文系土器（19～29）等に分類する。1・2・4～6・8は口縁部が外反し、胴部が球状に張る器形を呈するものと思われ、所謂鐘ヶ崎式土器の器形に類似するものであろう。文様は入組文が明確に見られる資料がないが、3・7・8・10・11・13～18は入組文が推測される。3・9は橋状把手である。磨消縄文系土器は19・20・23といずれも口縁部が肥厚し、すぐに球状の胴部を形成する器形を呈するものであろう。そして肥厚部分には縄文を施文し、一条の平行沈線を配している。22は入組文を基調とした磨消縄文土器である。25は波状口縁であり、口縁部が内湾する鉢形土器であろう。波状口縁の頂部に三条の沈線が山形を描き、最下条の沈線は押し引きによるもので文様の区画を示しているものと考えられる。29は平縁であり口縁部が内湾し、磨消縄文が集中している。25・29は縁帯文系土器である。27は口縁部がほぼ直口し、刺突による擬似縄文がみられる。26・28はヘナタリによる擬似縄文である。28は頸部と胴部の境界に尖鋭なものによる平行押し引き文が施されている。31は断面が逆「く」の字状の口縁を呈し、二条の平行沈線の磨消縄文が施されている。30は口縁に



第48図 石町遺跡出土土器実測図



第49図 石町遺跡出土石器実測図

縄文が集中し、外反する器形を呈する。32は四条の平行沈線を配し、部分的に擬似縄文が施されている。1～23は鐘ヶ崎式系土器である。30、32は北久根山式土器の鉢形土器であろう。31は西平式であろう。

石器は扁平打製石器を記載した。すべて、緑色片岩を素材とするもので、1～3は石庖丁形石器であり、4～10は扁平打製石斧である。石庖丁形石器の刃部はいずれも外湾し、片刃である。1は切りだしナイフ形を呈し、背部ないし側部は磨滅している。1aの刃部は磨滅している。背部、側部を形成するために小さな剥離が為され、厚さはほぼ均一で7mm程である。2は完形品であり、1同様に背部、側部形成の小さな剥離がみられる。全長7.5cm、幅4.5cmである。3は側部が破損しており、形態は明確ではないが、半月形か切りだしナイフ形を呈するものと思われる。背部は研磨されており、側部は粗い剥離によって形成されている。3aは細かな剥離によって刃部形成が為されている。厚さは背部の附近が最も厚く1.3cm程で、刃部附近になると1cm程に薄くなる。これらの石庖丁形石器は適当な素材を剥ぎとり、それに粗い剥離を施し、扁平性をもたせ、背部、側部を細かい剥離により形成する。また刃部は片刃を形成するような剥離を施している。扁平打製石斧（8～10）はやや大型な撥形を呈し、4～7は8～10に比べ、やや小型であり、全長12cm程であり、幅7cm程である。4・5・7は撥形を呈し、6は短冊形を呈している。いずれも刃部に使用痕と思われる磨滅が顕著であり、断面には片方の刃部附近に挟りが見られる。8～10は全て一部が破損しているため全長はつかめないが、幅は約9cm程であり、主要剥離面を残している。8aは自然面と思われる。9・10は刃部に近くなるほど厚さを増している。4～7は周辺に細かな剥離を施し、形態を整えている。8～10も同様ではあるが、主要剥離面を残し、逆面を剥ぎとり、調整している。一方、4～7は剥片石器的技法により、ある程度の扁平性素材を作っておき、それにa・b両面より加工し、製品にしていくものであろう。

石町遺跡の年代は縄文時代後期の鐘ヶ崎式系土器から西平式土器の時期までの幅が考えられるが、大半をしめているのが鐘ヶ崎式系土器であり、その時期が主体的であろう。これに伴って採集されている扁平打製石器も鐘ヶ崎式の時期と考えてよいのではなかろうか。

石町遺跡を紹介するのに当り、福岡県立築上西高等学校の座小田勉教諭には資料を快く使用させて載き、心より厚く感謝の意を表したい。

参 考 文 献

「紡錘車」第3号 福岡県立築上西高等学校社会部 1976

V 考 察

1. 宇佐平野周辺の貝塚概観

宇佐平野の北に広がる周防灘は瀬戸内海の西端に位置する。山口、福岡、大分の三県に囲まれ、その沿岸部には多くの縄文遺跡が点在する。しかし、その中で貝塚を伴う遺跡は現在まで、九州のみに限られ、特に、大分県中津市の山国川、犬丸川（註1）周辺と豊後高田市の桂川、寄藻川周辺（註2）のいわゆる旧森湾沿岸（東木1927）の二地域に集中する。その実態は、現在までに消滅したものや、未調査のものもあり、時期、規模等、不明な点も多い。自然遺物についても、数ヶ所の貝塚のデーターしかなく（註3）、資料的には乏しい。今回の報告でも自然遺物については、時間と頁数等の制約のためできずに終わった。この項では、立地・形態、遺物では石器を中心に、宇佐平野の貝塚について述べてみたい。

宇佐平野周辺の貝塚は縄文時代後期初頭に突然出現する。それ以前は周辺の山間部にある国東町成仏岩陰遺跡（坂田1972）、山香町川原田洞穴（岩尾・酒匂1964）、本耶溪町粉洞穴（賀川他1978）等で縄文早、前期に貝層が認められるのみである。貝塚の形成される時期は後期前半が圧倒的に多く、14貝塚のうち不明の5貝塚を除き7貝塚が該当する。特に西和田、植野、立石、石原貝塚では後期の時代区分となる中津式土器と、在地の阿高系凹線文土器が出土し、先駆的な様相をもつ。しかし、石原貝塚以外は、後期前半で貝塚形成活動を終了してしまう。

縄文後期前半の貝塚の多くは、台地縁辺の斜面に認められる。中津市周辺の植野貝塚・入垣貝塚・西和田貝塚・垂水貝塚、豊後高田市周辺の森貝塚・来縄貝塚、時期不明であるが入津原・黒松貝塚等は、その代表的な貝塚であり、この地域の貝塚の基本的な形態である。これらは居住区となる台地上には貝塚は認められず、周辺台地斜面に生活廃棄物を投棄したため形成したと考えられる。このため遺跡の範囲は貝塚部のみにとどまらず、台地上も含まれなければならない。貝塚の規模は中津市周辺では植野貝塚、豊後高田市周辺では森貝塚が比較的大きく、地表面で観察される範囲は40m×30m以上ある。これに対し、西和田・入垣・来縄貝塚は数mの範囲内にとどまり、小規模である。貝層内には、貝塚の規模を問わず、多くの遺物を含む。

立石貝塚は、田笛川を中心に展開される扇状地の西部に位置する。約50m×50mの範囲に数ヶ所の遺物集中地区と貝塚部が認められている。時期は、後期初頭から前半までで、他の貝塚と同時期であるが、居住地の選択や生活廃棄物の対処について、異なった配慮が感じられる。

石原貝塚は寄藻川の低湿地を西方にもつ微高地上に貝層が認められる。貝塚形成開始の時期は、他の貝塚と同時期であるが、その期間の長さに特徴がある。晩期前半まで、その活動が続けられ、貝塚の規模は拡大し、山崎純男氏の指摘のⅢ期（山崎1975）のように遺物をあまり含まない純貝層が認められる。

さらに宇佐平野では、弥生時代前期の東上田遺跡（註4）、水崎貝塚（註5）で溝や竪穴内に投棄された状態で貝塚部が検出されている。このように貝塚をもつ遺跡は縄文時代後期初頭から発達し、時期的には規模の縮小や拡大、質的な変化も考えられるが、弥生時代中期以降までその活動が続く。

宇佐平野の貝塚から出土する石器は、これまで刊行されている森、来縄、立石、植野貝塚の報告

書によると、石鏃やスクレーパーをはじめとする剥片石器が多く、他には石斧が目立つ程度である。漁撈活動と直接的な関係を示す石器は植野貝塚の石錘1点のみであり、角骨器の報告例はないしかし小池史哲氏は、これらの点に留意しながらも、森・来縄・立石・植野貝塚の自然遺物の分析を通じて、活発ではないにしろ網漁法の可能性を指摘している（賀川他1974）。さらに賀川光夫氏は、小池氏の分析の結果をふまえ、内湾性網漁業と泥砂性干潟の貝採取を組合せ「泥砂性漁撈」と名付けている（賀川・橋1974）。

今回報告した石原・西和田貝塚では、これまでの石錘の資料に、さらに加えたものであるが、西和田貝塚の2点を除いては大型の礫石錘で漁網錘とするには疑問が残る。周防灘の網漁法もまだ可能性の域を出ない。ただ西和田貝塚出土の扁平礫石器と仮称した一群の石器は他には小池原貝塚の一例のみで、あまり類例はないが、出土遺跡が貝塚という点では注目されよう。西北九州で多く見られる尖頭状礫器のように、貝類採取の道具としての可能性も考えられる。今後の資料の増加を期待したい。

さらに石原貝塚においては多くの姫島産黒曜石を主とした剥片石器が出土している。これらは、石鏃、石匙のほかは定型化したものは少ないが、小型の石核から剥離された不定形な剥片を有効に利用した形跡をうかがえた。これらは、剥片の一部に加工痕をもつものであるが数的には定型的な石器をはるかに上まわるものであり、石原貝塚が形成された生産活動に密接な関係があったものと推定される。すなわち、これらの剥片石器は今回検出はできなかったが、骨角器や木器等の加工に不可欠のものであったろうし、それよりも、魚貝類の調理そのものに直接的にかかわる道具として重要な役割を果たしたと考えられる。

以上、宇佐平野の貝塚について概略的に述べてみたが、狩猟・漁撈・採取活動の対象物である自然遺物の分析が進んでおらず、今後に残された問題は多い。

		大 分 県									福岡県		山 口 県						
遺 跡 名		ワラミノ遺跡	森貝塚	来縄貝塚	立石貝塚	石原貝塚	西和田貝塚	植野貝塚	入垣貝塚	高畑遺跡	浄土院遺跡	石町遺跡	神田貝塚	美濃ヶ浜遺跡	月崎遺跡	与浦遺跡	岩田遺跡	黒島遺跡	
中 期																			
後 期	I																		
	II			?					?										
	III																		
	IV																		
	V																		
	VI																		
晩 期																			

第50図 周防灘周辺の主要縄文後期遺跡

2. 宇佐平野の縄文時代後期の土器

1) 阿高系凹線文土器について

阿高式土器は九州の縄文時代中期を代表する土器である。その研究も戦前から小林久雄氏などにより、有明海沿岸、西北九州で進められ、(小林1935・1939、三森1938)戦後は乙益重隆(乙益1965)前川威洋氏(乙益・前川1969)等に引き継がれてきた。最近では佐賀県坂ノ下遺跡(佐賀県博1975)、熊本県黒橋貝塚(西田1976)、福岡県大道端遺跡(宮内・田中1977)で研究の成果がまとめられ、阿高式土器の終末期の問題について論究されている。特に大道端遺跡では、宮内克己・田中良之氏により、前川氏が指摘した阿高式土器終末期の地域的分解について、さらに深く論じられている。それによると、中期末に阿高式土器は、南九州、有明、八代海沿岸、西北九州の3地域に分解し、後期にそれぞれ、独自の変化を遂げたことを想定している。

ところで、宇佐平野を含む東九州では、これまで中期の遺跡の希薄な地域として知られ、賀川光夫(賀川1971)・前川(前川1969)氏(註6)によりその理由が論じられてきたが、今もって不明な点が多い。

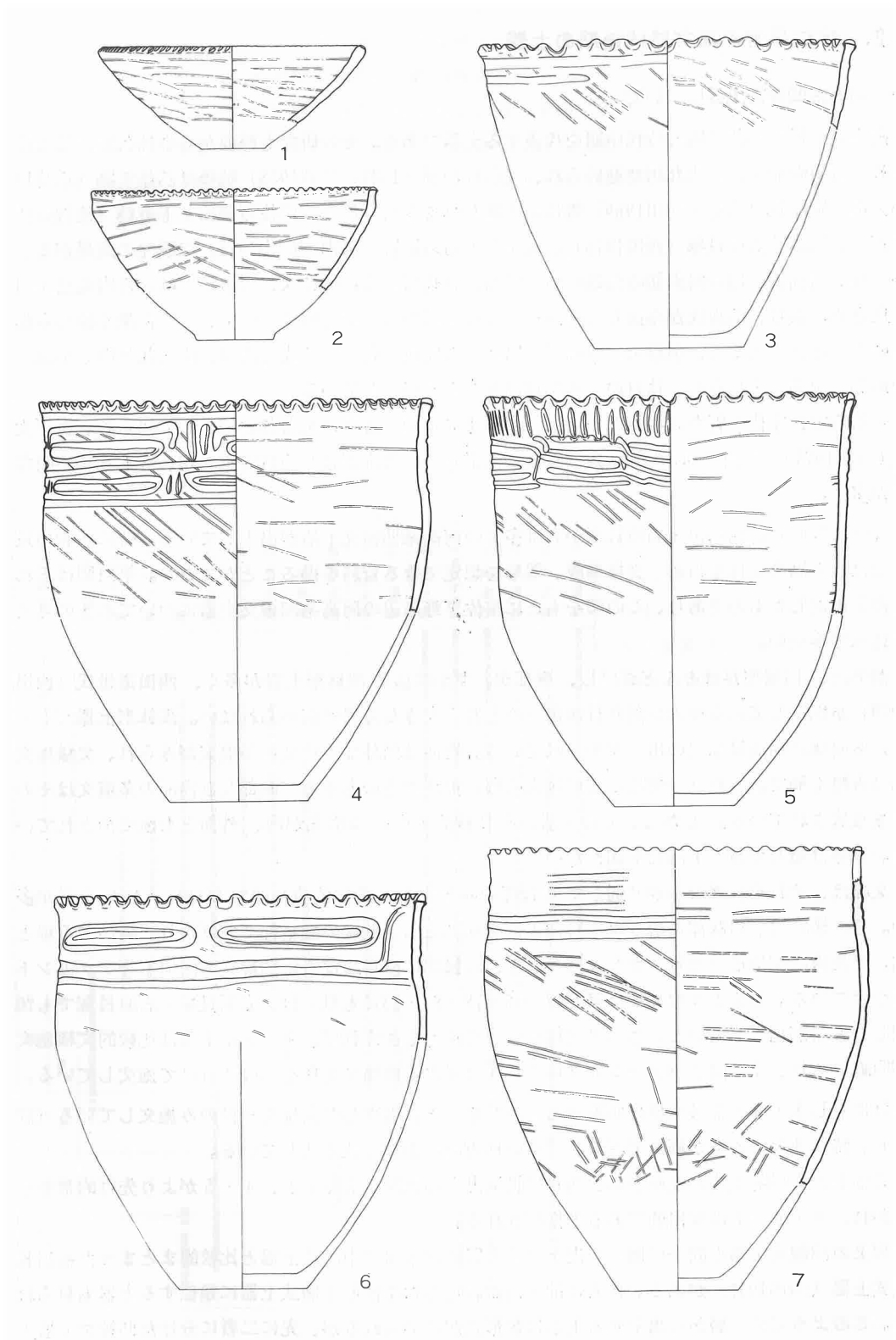
今回報告した、西和田・石原貝塚からは多くの阿高系凹線文土器が出土している。特に西和田貝塚では、下層で主体を占め、文様構成、器形を想定できる資料を得ることができた。第51図はそれを復元想定したものであり、この図をもとに宇佐平野周辺の阿高系凹線文土器について若干の考えを述べてみたい。

器形は、口縁部がほとんど直口し、胴部がわずかに張る深鉢形土器が多く、西田道世氏(西田1978)が想定している熊本県阿高貝塚出土の土器と大きな差異は認められない。浅鉢形土器(1・2)も同様に阿高貝塚での出土が知られている。器面は例外なく地文に条痕文がみられ、文様施文部のみ粗く撫で消され(一部には文様施文の際に消えたものもある)胴部及び内面の条痕文はそのまま放置されている。しかし、6の土器のみ比較的入念に条痕文が内、外面とも撫で消されている。器壁は概して薄く1cmにも満たない。

文様は、それぞれ異なるが共通して口縁部のみ集中し、比較的直線的な単純化された文様が多い。その構成は、口縁部に沿った平行凹線文を基調とし、凹線の起結部で曲げたり、隣接する線と結んで長楕円文を描いたり、または数ヶ所を、口縁部に直角になる短凹線文で区切る等アクセントをつけている。このような文様は第26図の75・78・81・83にも見られ、立石貝塚・石原貝塚でも類似した土器が出土している。さらに文様について検討を加えれば、4・5の土器は比較的文様施文が明瞭であり、4は同じパターンの文様を、5は異なる種類の文様を二段に分けて施文している。これに対し3・6・7は文様に明瞭さと規格性を欠き、退行した文様を一段のみ施文している(註7)。特に3は凹線文が極めて浅く、二条の横方向の指撫で状と化している。

こうした文様施文法の変化から、西和田貝塚出土の凹線文を見ると、4・5がより先行的形態と思われ、3・6・7は後出的であると推測される。

以上の凹線文土器と同一の層から出土する土器には少量の中津式土器と比較的まとまった福田KⅡ式土器(山内1951)がある。さらに前川氏が設定した小池原下層式土器に類似する土器も見られる。このように同一層から出土する土器は数形式が認められるが、先に二者に分けた凹線文土器との関係は把握できなかった。



第51図 西和田貝塚出土凹線文土器復原想定図

これらの宇佐平野の凹線文土器群は、文様要素こそ阿高式土器の系譜の中に求められるが、西九州の南福寺式土器に特徴的なS字状文、三角形のへう割り文等や出水式土器（長谷部他1921）の特徴であるへう状の施文具による直線的な文様はみられない。また南九州の岩崎下層式・上層式（河口1935）とも、地文の条痕文を残す点等共通性は見られるが、文様が異なる。さらに西北九州の坂ノ下遺跡の阿高系の土器とも、文様、器面調整等、異なる点が多い。以上の点から先に紹介した宮内・田中氏の指摘による、阿高式土器終末期の地域的分解に、さらに宇佐平野周辺地域の一様相を加えることができると思われる。

2) 瀬戸内系の土器について

宇佐平野は九州の東北部に広がるため、瀬戸内地方の強い影響がみられる。出土する遺物も、各時代を通じて、瀬戸内的様相を帯びたものが多い。

縄文時代後期の土器は、前半の時期に地域的特色が明確となるため、九州と瀬戸内の土器を区別することは比較的容易である。すなわち、九州には前項で述べた、中期の名残りである凹線文土器があり、瀬戸内地方には、新しい文様施文法である磨消縄文で飾られた中津式土器、福田KⅡ式土器が見られる。九州内で出土する瀬戸内系の土器は、福田KⅡ式土器が圧倒的に多く、その分布範囲も、周防灘沿岸から、玄海灘沿岸、有明海沿岸、九州内陸部まで、南九州の一部を除いて全域に広がる。しかし、これ以降になると九州で成立する鐘ヶ崎式土器が逆に西瀬戸内、西四国、遠くは島根県の崎ヶ鼻洞穴（佐々木・小林1937）まで進出する。また瀬戸内地方には、津雲A式、彦崎KⅠ式土器と呼ばれる、口縁部と胴部に集中的に文様を施文した縁帯文土器（松崎・間壁1969）がある。

今回報告した西和田貝塚では、これまで津雲A式土器と考えられ、周防灘沿岸の山口県岩田遺跡でも彦崎KⅠ、津雲A式土器併行として紹介されている一群の土器が出土している（註8）。第23図13～15、第28図141～148（図版17）の土器である。口縁部の破片が多く、精製の深鉢形土器が想定できるが、全体の器形について検討するには周防灘周辺の資料だけでは乏しい。このため地域的にはずれるが、大分県久住町コウゴー松遺跡（賀川・橋1974）出土の同類の土器（第52図3）から考えてみたい。

この土器は、口縁部を肥厚させ、口唇部に二条の沈線をめぐらす。頸部はしまり、胴部は球状に張る。文様は胴部にも、沈線文がめぐらされ、器面全体にわたり、入念な横方向の研磨で仕上げられている。口縁部の文様については、破片であるため、他の遺跡の資料との比較は困難であるが、形態は酷似している。また胴部の文様、器面調整は、西和田貝塚下層出土の第28図150～157に類似性が認められ、他に植野貝塚（賀川1957）、立石貝塚（賀川他1974）に森貝塚（樋口1931）にも出土例があり幾何学的な文様が想定される。

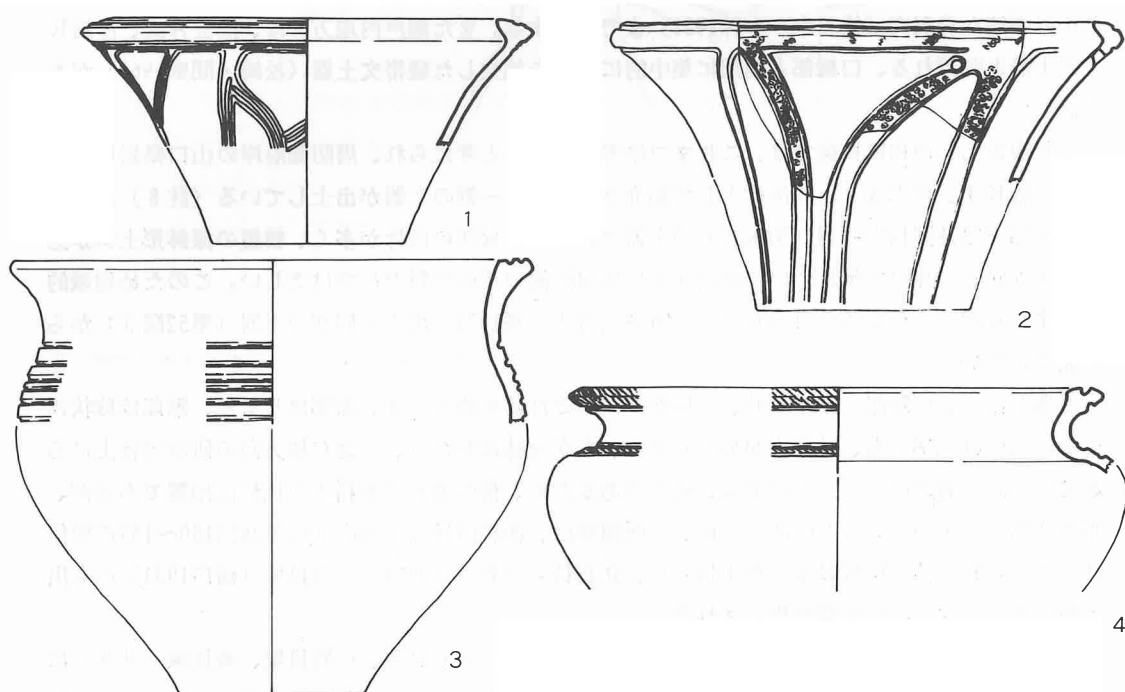
分布範囲は主として周防灘沿岸の岩田遺跡（潮見1960）立石貝塚、植野貝塚、森貝塚（註9）にみられる他、山鹿貝塚（永井他1972）、神田遺跡（山本1978）、小池原貝塚（註10）、コウゴー松遺跡等、瀬戸内系の土器、特に福田KⅡ式土器がまとまって出土する遺跡にみられるが、ひとつの遺跡で主体を占めるほど多くない。

西和田貝塚でのこの土器の出土状況は下層に多く、上層にも含まれる。これまで考えて来たように、津雲A式土器と考えれば、西和田貝塚は新しくなる。しかし、他に新しい要素を持つ遺物の出土はない。また他の遺跡の例からみれば、立石貝塚でも後期前半の土器しか見られず、神田遺跡

の報告書でも後期中葉以降の土器は見られない。こうしてみれば、この土器のみ、津雲A式土器の範疇からはずすか・古式のものと考えた方が良さそうである。

さてこの土器の系譜であるが、口縁部の形態は福田KⅡ式土器の内湾する口縁部にそれを求めれば可能であり、第27図125、第28図143、147の口縁部は中間形態ともいえるし、山口県月崎遺跡（潮見1968）の資料の中にも見られる。また胴部と推定する第28図150～157の土器は、器面を黒褐色、茶褐色で入念に研磨しており、沈線内には、福田KⅡ式土器に特徴的な、赤色顔料を埋める手法が認められる。さらに第52図3の復元想定図の器形は、岡山県高島遺跡（坪井1956）出土の福田KⅡ式土器の深鉢形土器に類似し、両者の強い関係をうかがうことができる。

しかし、口唇部の文様、器形、福田KⅡ式土器に共伴するのか、後出的な形式なのか、また、従来の津雲A式土器との関係など今後の問題としたい。



第52図 瀬戸内系の土器（1. 石原貝塚 2. 4. 西和田貝塚 3. コウゴ-松遺跡） $\frac{1}{4}$

3) 鐘ヶ崎式土器について

鐘ヶ崎式土器は縄文後期、東日本から伝わった、新しい施文技法の影響を受けて成立した九州の磨消縄文土器の代表的なものであり、福岡県 鐘ヶ崎貝塚（田中1936）出土の土器を標式としている。

東九州における鐘ヶ崎式土器の研究は、戦後、賀川光夫氏等を中心に各所で調査した資料をもとに積極的になされてきた。特に昭和36・40年に実施した大分市小池原貝塚の調査ではその成果の集積がなされた感がある。賀川氏は昭和36年の小池原貝塚（註11）出土の土器について層位的に、その前後関係をとらえ、後期初頭から中葉までの間に5形式を設定し、小池原Ⅰ～Ⅴ式としている（賀川1964）。また、昭和40年の調査にかかわった前川威洋氏は、Ⅱ層を上層式、Ⅲ・Ⅳ層を下層式と考え、後期前半から中葉の時期を考えている。これ以後は、その研究に大きな進展はなく、今日にいたっている。

宇佐平野周辺では、来縄・森・立石・植野・ワラミノ遺跡（賀川1960）等、多くの鐘ヶ崎系磨消縄文土器を出土する遺跡が調査されている。この成果を賀川氏は、瀬戸内地方の中津・福田Ⅱ式土器・津雲Ⅰ式土器と対比させ、植野貝塚・森貝塚となる編年観をみせている（賀川・橘1975）。

今回報告した西和田貝塚は、下層に凹線文土器を、上層に鐘ヶ崎式系土器を出土する貝塚で、その堆積も、上、下層から共通して出土する、第23図13～15、第28図141～148の土器があるため、時間をおかず、順次堆積したものと考えられよう。

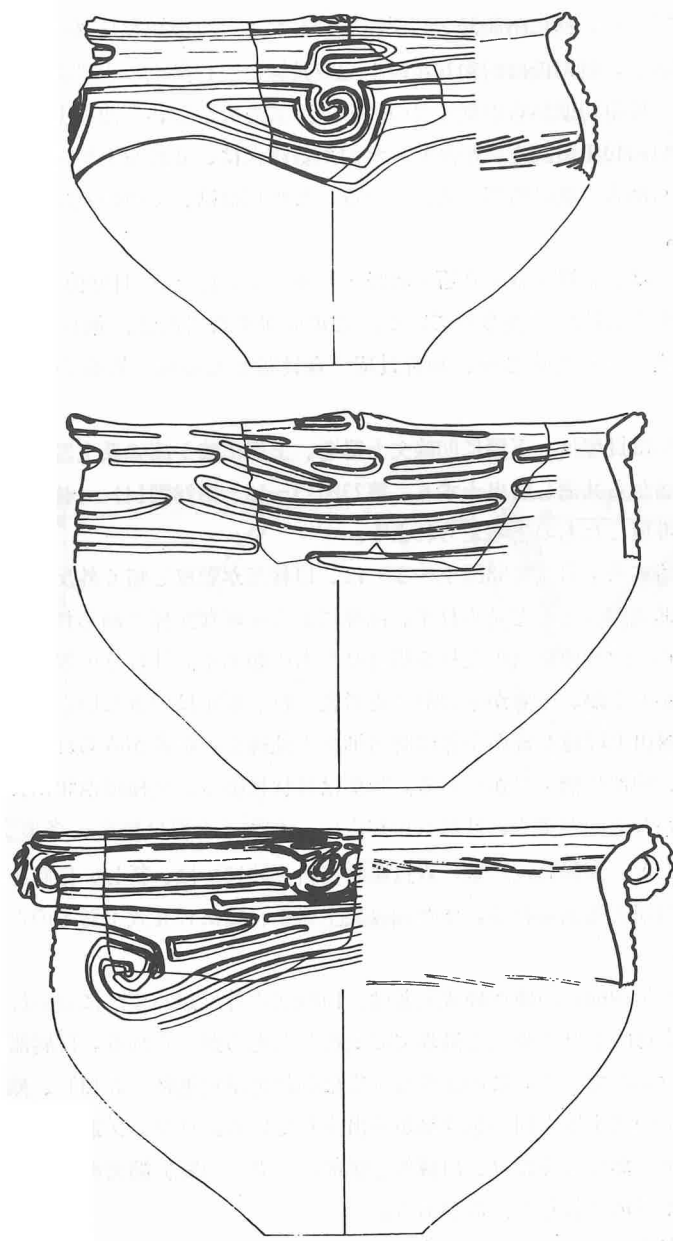
上層出土の鐘ヶ崎式系土器（第53図1～3）は、口縁部が肥厚し短く外反する特徴をもつ。器面の文様には、磨消縄文がほとんど見られず、沈線による複雑な文様で飾られる。また特徴的な文様として、長く描かれた「つ」の字状の文様を組合せたものがある。伴う土器は、福田Ⅱ式土器、凹線文土器の一部があるが、下層からの混入も考えられ、断定はできない。

森貝塚、立石貝塚出土の鐘ヶ崎系土器は磨消縄文と沈線文の両者がみられる。形態は大きく口縁部が外反するため、頸部に無文帯が生じる。胴部は球状に張る。文様は西和田貝塚の土器に比較すると、大胆で大まかなものが多く、沈線も巾が広い。伴う土器は無文、条痕文の粗製土器が多い。以上から考えると、高田高校所蔵の森貝塚の資料（註12）は、新しい傾向をもつ土器を一部含むが、大部分は一時期と考えられる。また凹線文土器や、福田Ⅱ式土器等の古い形式の土器がほとんど見られない。

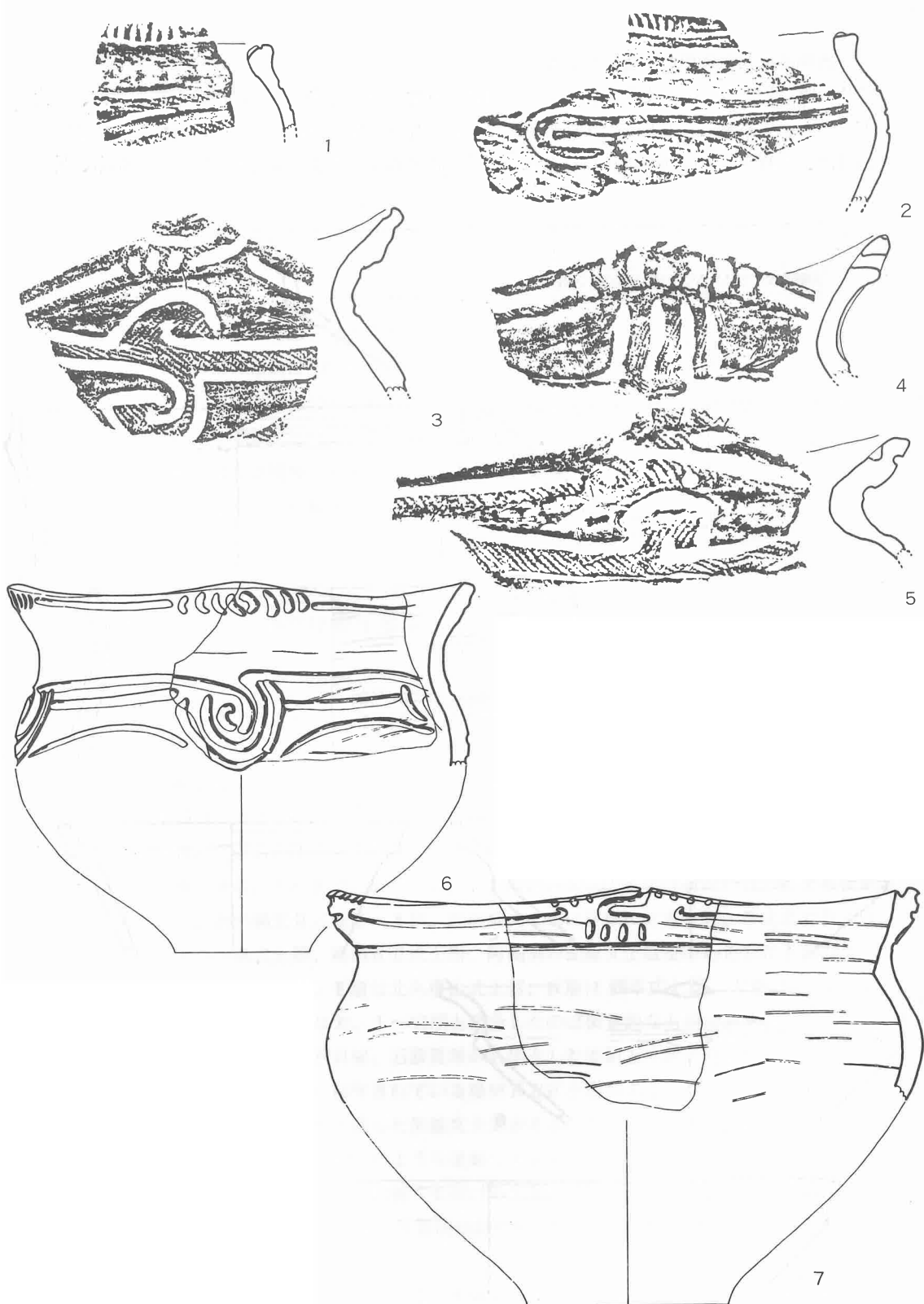
ワラミノ遺跡（賀川1960）の鐘ヶ崎式土器は、口縁部の外反がわずかに見られるだけの深鉢形土器である。文様は直線的な磨消縄文と渦巻文の退化したものがみられる。口唇部には部分的に刺突による刻み目がつけられている。このような土器は朝地町田村遺跡（註13）、熊本県渡鹿貝塚（福田1974）で、北久根山式土器と同一包含層から出土している。ワラミノ遺跡で、同一包含層から出土する土器は、頸部に無文帯を設け、口縁部と胴部に、縄文や擬似縄文を集中的に施文した、瀬戸内地方の津雲Ⅰ式土器に類似した土器がある。

以上が、宇佐平野周辺における鐘ヶ崎式土器の形態、文様の変遷である。これと、東九州で、これまで磨消縄文土器の標式的な遺跡となっている小池原貝塚の土器を前川氏の編年に従って比較すると、小池原下層式土器は、福田Ⅱ式土器と、その影響を受けた三本沈線で描かれた文様のある土器を伴うということから、西和田貝塚下層の一部とはほぼ同期と考えられる。また小池原上層式土

器は、形態的にさらに細分が可能と考えられ、西和田貝塚上層の土器を含み、森、立石とほぼ同時期と思われる。



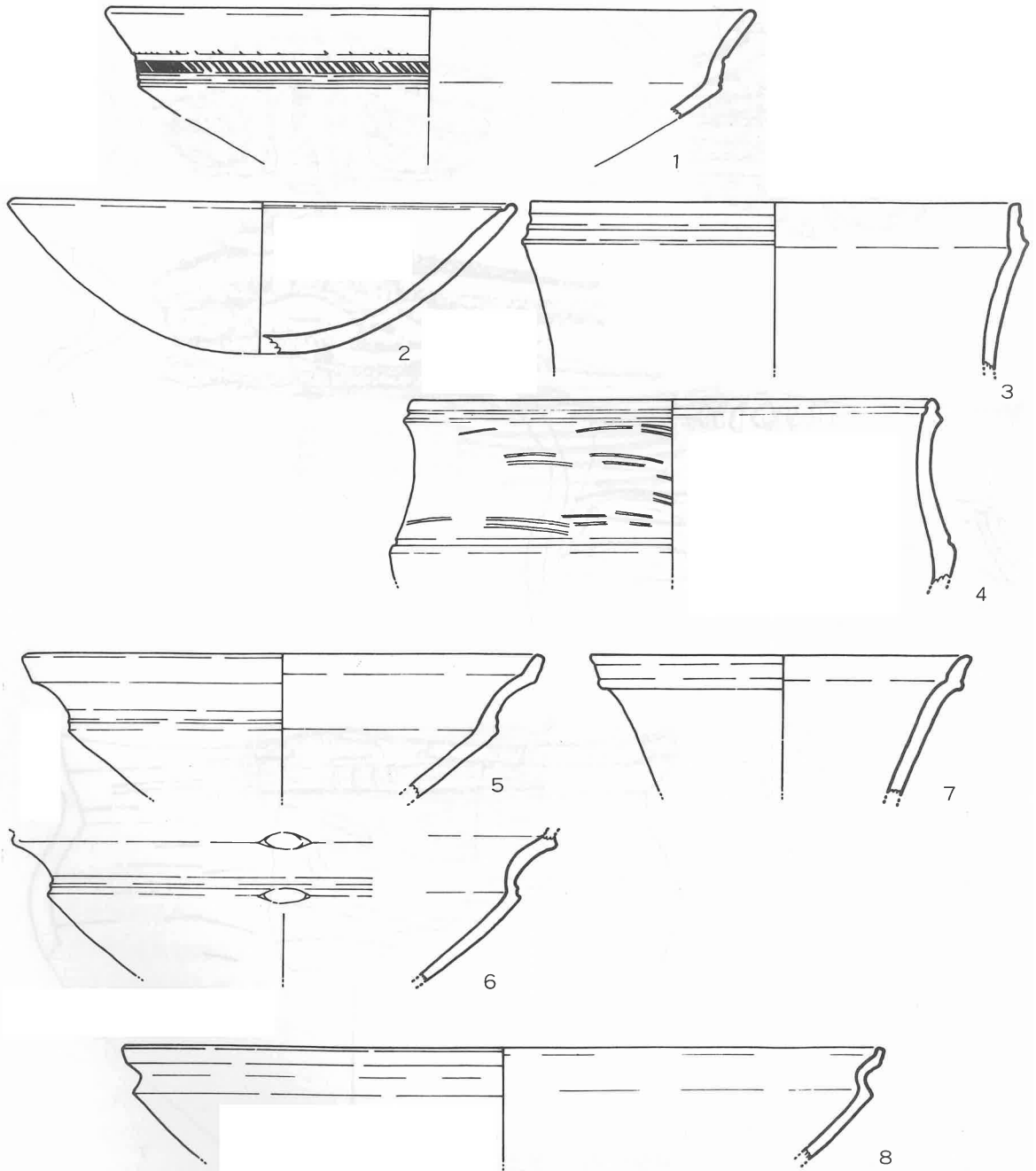
第53図 鐘ヶ崎系の土器（西和田貝塚） $\frac{1}{4}$



第54図 鐘ヶ崎系の土器（1. 2 ワラミノ遺跡 3. 立石遺跡 4～7・森貝塚）拓本 $\frac{1}{3}$ 復原図 $\frac{1}{4}$

4) 後期後半から晩期の土器について（第55図）

宇佐平野周辺における縄文後期後半から晩期にかけての遺跡は多くない。中津市高畑遺跡、宇佐市石原遺跡、立石遺跡と現在まで3遺跡しか知られてない。周防灘の対岸、山口県でも月崎遺跡、岩田遺跡、美濃ヶ浜遺跡（高橋1978）と前半の時期にくらべると遺跡数は半減する。しかも、貝塚



第55図 後期後半晩期の土器（1～4.石原貝塚 5～7 高畑遺跡） $\frac{1}{3}$

を伴う遺跡は、今回報告した石原貝塚が唯一のものといえる。

石原貝塚は後期初頭から晩期前半までの土器が出土し、特に後期初頭と後期後半から晩期のものが目立つ。その傾向も瀬戸内の色彩が強い。1は三万田式土器に特徴的な、羽状文が胴部にあり、九州内では熊本県三万田遺跡（坂本・富田1972）をはじめ多くの遺跡で出土例がある。また西瀬戸内でも、馬取式、福田KⅢ式土器と称されている類似した土器がある。2は、皿状になる土器であるが、1と同様、九州では三万田期以降、多くみられる。3・4は、瀬戸内の色彩の強い深鉢形土器である。3は頸部のくびれが小さく、岩田遺跡第3類の土器と共通性が認められる。4の小型深鉢形土器は九州では類例が少なく、その形態は明らかに瀬戸内地方の土器である。岩田遺跡第4類と同時期と思われ、晩期のものと考えられる。5・6・7は高畑遺跡で二体の土偶を伴って出土した土器である。海岸部の類例は少ないが、内陸部の大野町夏足原遺跡F地区（坂本1977）、宮崎県陣内遺跡第7類（賀川・鈴木1962）、瀬戸内地方の岩田遺跡第3類の土器に類似し、後期末と考えられる。

以上、宇佐平野の縄文後期後半から晩期にかけての土器は、先にも述べたように、遺跡数が減少するため、資料が乏しく、その編年の位置づけも十分なものとはいえない。今後の資料増加に期待したい。

3. 宇佐平野周辺の縄文後期土器編年（附図参照）

東九州の縄文時代後期の編年の研究は、賀川光夫（賀川1965）、乙益重隆・前川威洋氏（乙益・前川1969）により、大分市小池原貝塚の調査以降、大幅に進展し、ほぼその大綱ができあがっている。ここでは宇佐平野と、その周辺に地域を限り編年を試みた。

宇佐平野は、縄文後期前半期の土器を出土する貝塚が多く点在する。中でも、西和田、石原、立石貝塚（賀川他1974）は古い時期から形成されたと考えられ、中期の阿高系土器に、瀬戸内地方の後期初頭に編年されている中津式土器が伴って出土する。この時期をⅠ期と仮称し、以下Ⅵ期までを区分することができる。これまでの研究に対比すれば、賀川氏の編年（賀川1971）による後期磨消縄文Ⅰ式はⅠ期、磨消縄文Ⅱ式はⅡ・Ⅲ期、磨消縄文Ⅲ式はⅣ期に比定され、形式名で言えば、Ⅰ期は瀬戸内地方の中津式土器、福田KⅡ式土器、阿高系の凹線文土器を中心とした土器群で、Ⅱ期は小池原上層・鐘ヶ崎式土器、Ⅲ期は北久根山式土器、Ⅳ期は西平式土器、Ⅴ期は三万田式土器、Ⅵ期は御領式土器となる。なお、Ⅰ～Ⅵ期と区分したのは便宜的なものである。

Ⅰ期は、西和田貝塚下層と立石貝塚、石原貝塚から出土した後期と中期の時期区分となる磨消縄文で器面を飾る中津式土器や次に編年されている福田KⅡ式土器がある。これに対応する九州の土器は中期の阿高式土器の影響を強く残した凹線文土器がある。しかし、中津式土器と凹線文土器の関係を示す、天神山貝塚（前川1974）のような遺跡は現在まで宇佐平野では発見されていない。明確に判断できないが西和田貝塚下層の凹線文土器は施文部位の縮小化、同一包含層から出土する遺物の関係から、一応後期初頭と考える。後期開始期の問題は今後の調査・研究を待たねばならない。

さらにⅠ期には前川氏の編年による大分市小池原貝塚出土の土器を標式とした小池原下層式や、沈線間を貝殻腹縁を連続刺突して埋める宮崎県綾遺跡（田中1962）出土の土器を標式とした綾式土

器等がある。これらの関係は両遺跡とも福田Ⅱ式土器を出土するため、ほぼ同時期と考えられる。以上Ⅰ期は、さまざまな系統の土器が含まれ、さらに細分化は可能である。

Ⅱ期は、北部九州の磨消縄文土器であるいわめる鐘ヶ崎式土器が誕生する。そして、西瀬戸内へ逆に流入する時期である。これまで最古式の鐘ヶ崎式系土器は、東九州の小池原上層式と考えられていたが、西和田貝塚上層出土のそれは、小池原上層式土器とは異なる。しかし、類例が少なく、地域性も考慮し、ここでは、それとは区別しない。小池原上層式土器類似の土器は森貝塚、立石貝塚等で多く見られ、別府湾沿岸の小池原貝塚はもとより、西四国の平城貝塚（鎌木・西田1957）山口県岩田遺跡、遠くは島根県崎ヶ鼻洞窟まで、その影響を受けたと思われる土器が出土している。これは鐘ヶ崎式土器が一つの最盛期を迎えた時期と推測される。

Ⅲ期は、鐘ヶ崎式土器の退行した土器と、瀬戸内地方の津雲A式系土器が伴う時期であり、西九州の北久根山式土器に比定される。しかし北久根山式土器の特徴である逆W字の胎り付け文は、東九州海岸部では出土例がなく、大分県では日田市川下遺跡（穴井1961）、久住町コウゴロ松遺跡、朝池町田村遺跡の内陸部のみである。

鐘ヶ崎式土器の変化はⅤ-2-3)の項でも述べたが、この他、豊後水道沿岸では、もう一つの変化がみられる。つまり、口縁部が矮小化するに対し、長大化する変化である。これは口縁部が大きく外反し、頸部に広い無文帯を生じる。文様は、口縁部と胴部に集約され、渦巻文や同心円文の簡略化したものや、平行沈線文が施文されている。西四国では片粕式土器、（木村1974a）平城上層式土器（犬飼1978）広瀬上層式土器（木村1974b）と呼ばれている一群の土器変化である。この土器は九州でも大野郡大野町夏足原遺跡F地区（坂本1977）、朝地町田村遺跡で出土しており、後出する西平式土器の祖形的な形態を呈している。この変化は、瀬戸内地方、後期中葉に編年される津雲A式土器の直接的な影響と考えることができる。

Ⅳ期の宇佐平野周辺の資料は少ない。しかし周防灘沿岸の遺跡をあげると、福岡県浄土院遺跡（小田1972）、石町遺跡（栗焼1976）、山口県岩田遺跡、国東町ワラミノ遺跡等に出土例があり、西四国の愛媛県伊吹町遺跡（西田1957）からも報告されている。この土器を出土する遺跡は、熊本県西平貝塚をはじめ多く見られるが、一形式だけの単純遺跡は、きわめて少なく、先行・後出的な土器を常に伴う。この傾向は周防灘沿岸でも認められる。分布は九州西北部から、西瀬戸内地方一帯に、Ⅲ期の範囲を踏襲して広がると思われる。

Ⅴ、Ⅵ期になると、Ⅴ-2-4)の項で述べたように、宇佐平野周辺では遺跡数が減少し、編年するには不十分な資料である。最近のこの時期の西九州での編年的研究は、さらに細分化の傾向がある。Ⅴ期の三万田式土器は、磨消縄文系と羽状文系に分けて考えられ（富田1977b）Ⅴ期からⅥ期にかけての渦渡期に新しい形式名が考えられている（富田1977a）。宇佐平野周辺では、瀬戸内地方の強い影響を受けた土器が出土するため、これらとの関係を考慮し、編年をしなければならぬ。

註 1. 中津市周辺には、植野貝塚を中心に入垣貝塚、西和田貝塚、長久寺貝塚、土木貝塚、定留貝塚、山国川の西側には垂水貝塚等がある。

2. 豊後高田市周辺は、森貝塚を中心に来縄貝塚、立石貝塚、石原貝塚、入津原貝塚、黒松貝塚等多数存在する。

3. (賀川他1974)の中で小池史哲氏が、植野、立石、森、来縄貝塚の貝類を分析している。
4. 現在松下電気の敷地内にあり、調査では、溝等の遺構内で貝塚が検出された。
5. 昭和30年の調査で堅穴内に貝の堆積が認められた。
6. 賀川氏は(賀川1971)で火山活動による居住不適地と考えており、前川氏は(前川1969)で船元式土器文化圏に含まれると論じている。
7. 昭和54年2月、北九州市立歴史博物館で行なわれた古文化研究会、第15回の例会で田中良之氏が阿高式土器について発表した際、この1～2段の文様施文について指適を受けた。
8. 山鹿貝塚、神田遺跡、立石貝塚および荒多比貝塚の類似した資料に対し、津雲A式土器として紹介されている。
9. (樋口1931)の報告によると、胴部の大きい破片が出土しており、雷文状になった文様がみられる。
10. 栗田勝弘氏の教示による。氏により表採されている。
11. 文献は(賀川1964)の他にも「みんなの考古学」として小冊子が刊行されている。
12. 昭和25年、鏡山猛・入江英親氏により発掘され、資料の一部は、高田高校に保管されている。
13. 昭和53年11月 朝地町教育委員会により調査され、現在大分県教育委員会で整理中である。なお、縄文早期の標式遺跡である田村遺跡は西側に隣接する。

文 献

- 穴 井 通 照 1961;「筑後川上流の縄文式土器」九州考古学11・12 福岡
- 犬 飼 徹 夫 1978;「平城上層式土器について」古代文化第30巻4号 京都
- 岩尾松美・酒匂義明 1964;「速見郡山香町大字川原田洞穴の調査」大分県地方史34 大分
- 乙 益 重 隆 1965;「九州西北部」日本の考古学Ⅱ縄文時代 東京
- 乙益重隆・前川威洋 1969;「縄文後期 九州」新版考古学講座3先史文化 東京
- 梅 原 末 治 1935;「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」京都府史蹟名勝天然記念物調査報告書16
京都
- 小 田 富士雄他 1972;「浄土院遺跡調査概報」浄土院遺跡調査団 福岡
- 賀 川 光 夫 1957;「大分県中津市植野貝塚調査報告」中津市教育委員会 大分
- 1960;「大分県東国東郡国東町ワラミノ遺跡調査報告」大分県文化財調査報告第6輯 大分県
教育委員会 大分
- 鈴木重治 1962;「陣内遺跡」日向遺跡総合調査報告第2輯 宮崎県教育委員会 宮崎
- 1964;「所謂鏡ヶ崎式土器の層位出土の新例(小池原式の設定)」大分県地方史34 大分
- 1965;「九州東西部」日本の考古学Ⅱ 縄文時代 東京
- 橋 昌信 1967;「小池原貝塚」大分県文化財調査報告第13輯 大分県教育委員会 大分
- 1971;「大分県の考古学」 東京
- 他 1974;「立石貝塚」大分県文化財調査報告第31輯 大分県教育委員会 大分
- 1970;「磨消縄文Ⅲ式の文化—九州における縄文後期の問題」古代学研究57 京都
- 橋 昌信 1975;「コウゴ—松遺跡調査報告」久住町教育委員会 大分
- 他 1978;「大分県杣洞穴発掘調査報告—第1・2次調査」考古学論叢4 別府大学考古学研
究会 大分
- 河 口 貞 徳 1935;「南九州における縄文式文化の研究」鹿児島県考古学紀要第3号 鹿児島

- 鎌木義昌・西田 栄1957;「伊豫平城貝塚」瀬所内考古学 創刊号 岡山
- 木 村 剛 朗 1974a;「高知県片柏遺跡出土の土器」考古学ジャーナル96 東京
- 1974b;「いわゆる広瀬上層式土器について」考古学ジャーナル102 東京
- 1978;「姫島産黒曜石の交易—九州姫島産黒曜石よりみたる西四国縄文期の交易圏—」土佐考古学叢書2 高知
- 栗 焼 憲 児 1976;「石町遺跡」紡錘車第3号 福岡県立築上西高等学校社会部 福岡
- 小 林 久 雄 1935;「肥後縄文土器編年の概要」考古学評論1—2 東京
- 1939;「九州の縄文土器」人類先史学講座第11巻4号
- 佐賀県立博物館 1975;「坂の下遺跡の研究」佐賀県立博物館調査研究所 第2集 佐賀
- 坂 田 邦 洋 1972;「成仏岩陰遺跡の調査」国東町文化財調査報告書 国東町教育委員会 大分
- 坂本経堯・富田紘一 1972;「三万田東原」泗水町教育委員会 熊本
- 坂 本 嘉 弘 1977;「夏足原遺跡」大野原台地の遺跡Ⅱ 大野町教育委員会 大分
- 佐々木謙・小林行雄 1937;「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟および権現山洞窟」考古学8—10 東京
- 潮 見 浩 1960;「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」広島大学文学部紀要18号 広島
- 潮 見 浩 1968;「月崎遺跡」宇部の遺跡 山口
- 帝釈峡遺跡発掘調査団 1964;「帝釈峡遺跡群の調査研究」広島
- 高 橋 慎 二 1978;「美濃ヶ浜遺跡」山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究 周陽考古学研究所 山口
- 田 中 幸 夫 1936;「北九州の縄文土器」考古学雑誌第26巻7号 東京
- 田 中 熊 雄 1962;「綾町尾上遺跡の研究(1)(2)」宮崎大学学芸学部紀要13・14宮崎
- 坪 井 清 足 1956;「岡山県笠岡市高島遺跡研究調査報告」笠岡市教育委員会 岡山
- 東 木 竜 七 1927;「日本内海西域周防灘南部の成因論」地理学評論第5巻1号 東京
- 富 田 紘 一 1974;「渡鹿貝塚」渡鹿遺跡群発掘調査一概要— 熊本県文化財調査会 熊本
- 1977a;「鳥居原遺跡発掘調査報告」熊本市教育委員会鑑熊本
- 1977b;「三万田式土器の文様」九州の原始文様 佐賀県立博物館 佐賀
- 永 井 昌 文 他 1972;「山鹿貝塚」山鹿貝塚調査団 福岡
- 西 田 栄 1957;「宇和島市伊吹町出土の後期縄文式土器」愛媛大学紀要第1部3の2 愛媛
- 西 田 道 世 1976;「黒橋」熊本県文化財調査報告第20集、熊本県教育委員会 熊本
- 1978;「阿高貝塚」城南町文化財調査報告城南町教育委員会 熊本
- 長谷部言人他 1921;「薩摩国出水貝塚発掘報告」京都帝国大学文学部考古学研究報告第6冊 京都
- 樋 口 清 之 1931;「大分県西国東郡河内村森貝塚の研究」史前学雑誌第3巻第1号 東京
- 日 高 正 輝 他 1976;「大分県姫島産黒曜石出土遺跡分布の研究」予報(資料篇) 山口
- 松崎寿和・間壁忠彦 1969;「縄文後期・西日本」新版考古学講座3 先史文化 東京
- 前 川 威 洋 1969;「九州における縄文中期研究の現状」古代文化第21巻3・4号
- 1974;「天神山貝塚」志摩町文化財調査報告第1集 志摩町教育委員会 福岡
- 宮内克己・田中良之 1977;「縄文式土器」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅻ 福岡県教育委員会 福岡
- 三 森 定 男 1938;「先史時代の西日本」人類学先史学講座第1巻13号 東京
- 山 本 一 郎 1978;「神田遺跡」山口県先史時代表採遺物集成ならびに編年的研究 周陽考古学研究所 山口
- 山 崎 純 男 1975;「九州地方における貝塚研究の諸問題」九州考古学の諸問題 東京
- 山 内 清 男 1951;「中津貝塚・福田貝塚」原史文化第3回研究会発表 東京

Ⅵ 総 括

このたび宇佐市大規模圃場整備事業にともなう貝塚の調査にもとずいて、その報告書が作成されることになった。この調査と、報告書作成には二つの重要な問題が含まれていると考える。その一つは、「農業地域の整備に関する法律」にもとづく農地構造改善事業によって、全国的にみても数少ない貝塚を消滅させたことである。埋蔵文化財における重要性は、前方後円墳よりも数少なくなった貝塚の保護に重点がおかれるべきであるにもかかわらず全面的にみて関心は薄い。また貝塚の未発見地は「かくれた遺跡」（西和田貝塚の例）であって、これを開発以前に探索することは困難なことであるが、注意をはらわねばならぬ。第二点は、調査の性格上出土遺物に重点を置き、その分類に最大の注意をはらわねばならない点である。そもそも、縄文文化研究は、土器の分類「編年」に重要な意義を求めてきた。「縄文文化」というよりは、「縄文土器文化」ということの方がより専門的であったこれまでの研究の如く、土器の変化を追うことが第一義とされていた。最近の学術調査でも、より科学的に土器の分類を深めているのが実状であって、その面での本質的な変化はあり得ない。そうした点で、この報告書は、東九州における後期初頭遺跡から発掘された磨消縄文土器の的確な位置づけに焦点を置く結果となった。これをもとに東九州の磨消文文化の発達について祖型追求の展望が開け、東九州特有の性格を明らかにすることができるとすればその目的を達したことになる。その点で本報告書作成の主力となった大分県文化課清水宗昭・坂本嘉弘、宇佐市社会教育課小倉正五の各氏などによってこうした研究の視点が確立されたことは評価しなければならぬ。

さて、本報告の作成にあたって、前述の如く、圃場整備事業の対象遺跡として市域の石原、西和田貝塚の遺物を主に立石貝塚、森貝塚の遺物を整理し問題の作成を試みた。特に森貝塚は、1931年と1950年の2度調査がおこなわれ、それは東木竜七氏の「旧森湾」設定の学史的遺跡であった。この過去の調査は、樋口清之（第1次）、鏡山猛（第2次）の両教授と入江英親氏（1・2次）による調査であった。入江英親氏は、郷里が豊後高田市の名門であって、この遺跡に近く、周辺の遺跡に精通した学者である。ここにその資料をかりて、豊前平野の縄文後期文化の展望をおこなうことができることは望外の喜びである。ここに先輩諸氏の研究成果の実践を書きおいて、本報告を閉じることにした。

さて、瀬戸内海西部一帯の縄文後期磨消縄文文化の研究は、その遺跡の立地点に重点をおいたものでなければならぬ。それは泥海質の海を広くもち、おびただしい浅海性貝類の生棲を基調にした文化であるからである。貝塚から比較的獣類遺骸の少ないこと、粉洞穴など、海浜より離れた遺跡では、ハマグリなどを利用した貝刃器が目立つなど、貝類が生活の重点であったことが理解できる。立石貝塚や石原貝塚では大量のハマグリが堆積し、そのブロックサンプリングの結果では全体の90%に及ぶことを知った。周辺遺跡での貝刃器の出土とあわせて、ハマグリの採取は、保存食糧としても重要な資源であったとみなされる。こうした泥海性広域海浜での生活を磨消縄文文化とみなして、瀬戸内海西部一帯の研究をすすめる必要を痛感する。今後この分野での新しい研究は課題の一つとして興味をひくであろう。

あ と が き

石原貝塚・西和田貝塚を含む瀬戸内地方は、縄文時代後期の遺跡が多く、研究史も古い地域として知られています。しかしながら、宇佐地方を含む福岡・大分県側は、かならずしも十分な調査研究がなされているとはいえません。本報告書には、この地方の関連する主要遺跡についてもその概要を紹介しており、九州と瀬戸内地方の接点という地理的条件からも、縄文研究の進展に少なからず寄与できるものと思われます。

両貝塚の発掘調査の原因となったのは、市内全域を対象に実施されている大規模圃場整備事業であります。この事業を中心とした各種の開発によって、昭和45年以来今年まで、30件を超える緊急発掘調査が行われてきました。しかしながら緊急調査に追われるあまり、報告書の刊行、資料の展示といった調査成果の公開は十分に果されてきませんでした。

別府大学賀川光夫教授、長崎大学内藤芳篤教授をはじめとする調査関係者の努力によって、本報告書が刊行できたことは、その意味で大きな喜びとするところであり、深く感謝致します。

宇佐市教育委員会

社会教育課長 南 正



石 原 貝 塚 遠 景 (東 南 部 よ り)



石 原 貝 塚 近 景 (西 方 よ り)



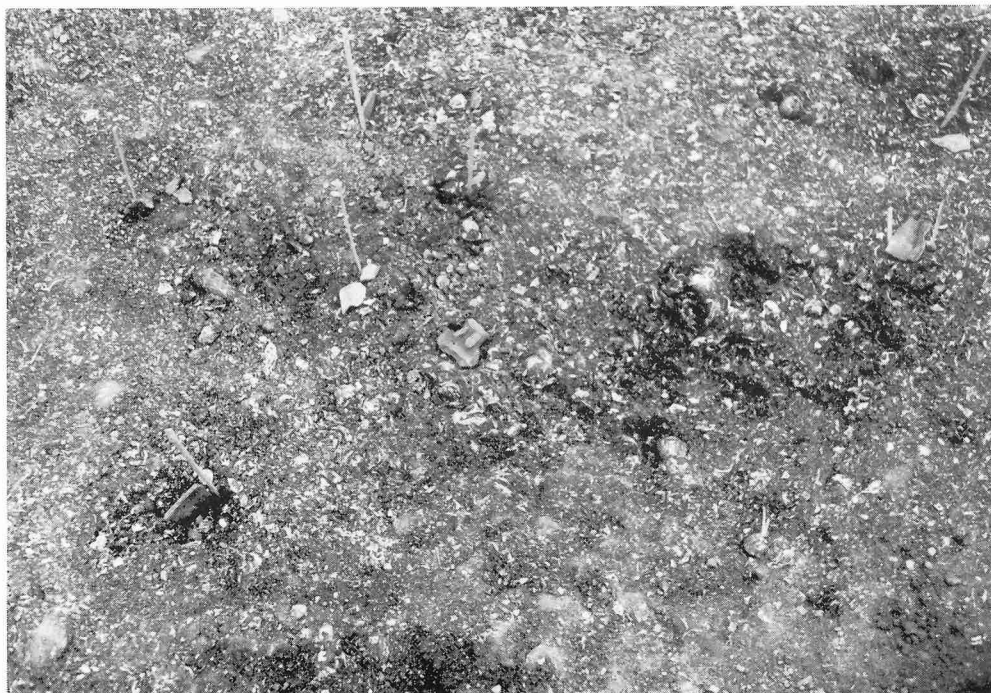
L-15. 16 区土層断面(南壁)



J-16. 17区貝層の縁辺



みかん畑内D区貝層検出状況



第 2 区 遺 物 出 土 状 態



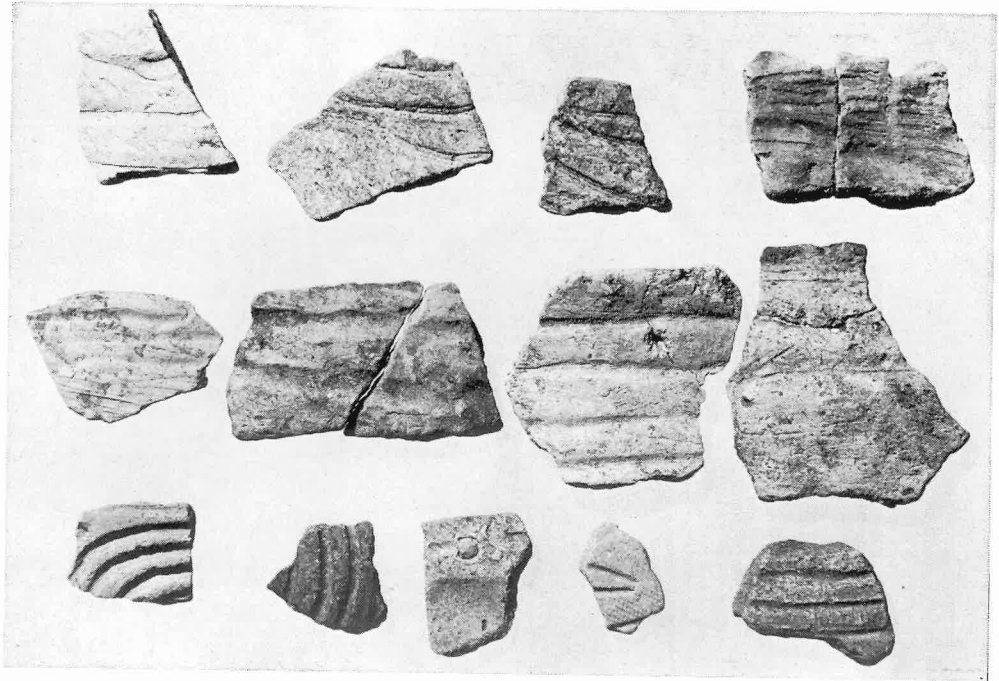
土 偶 出 土 状 態 (第 2 区)



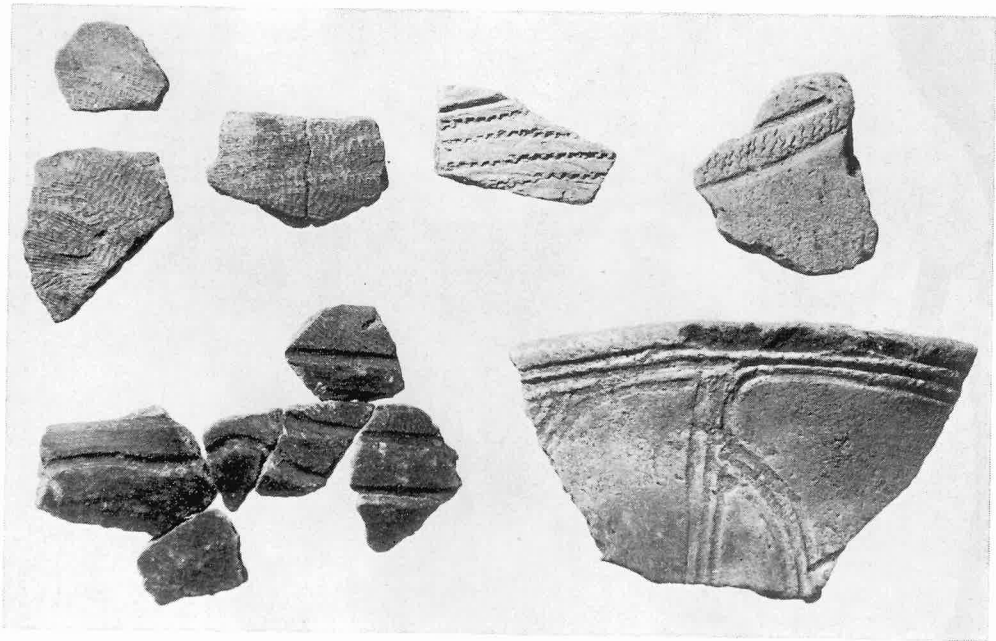
黒色研磨土器出土状態（第2区）



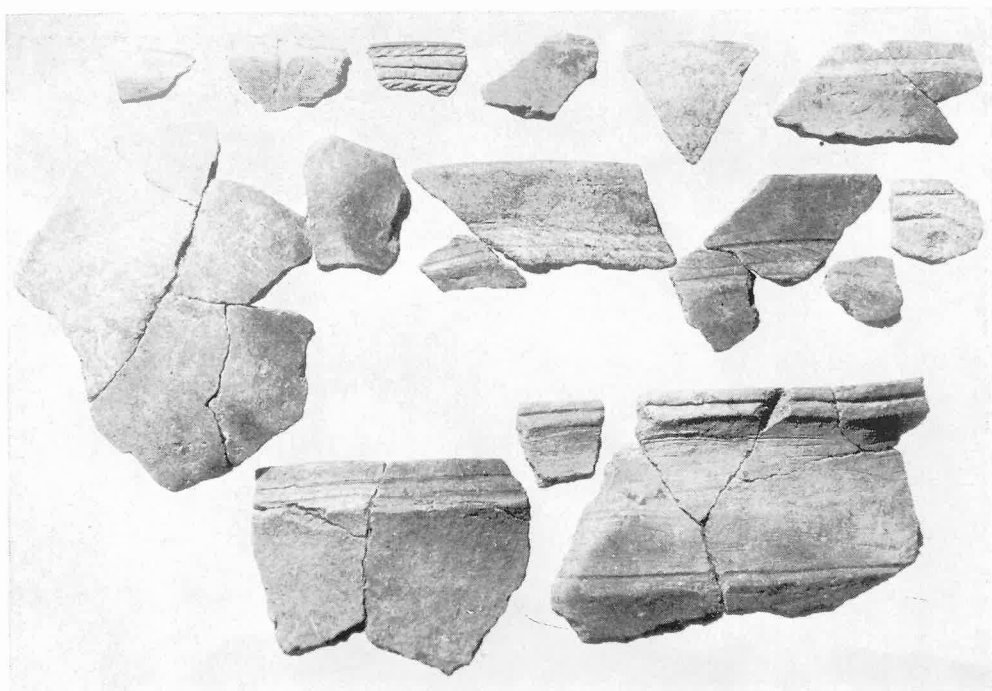
石原貝塚調査風景（現地説明会）



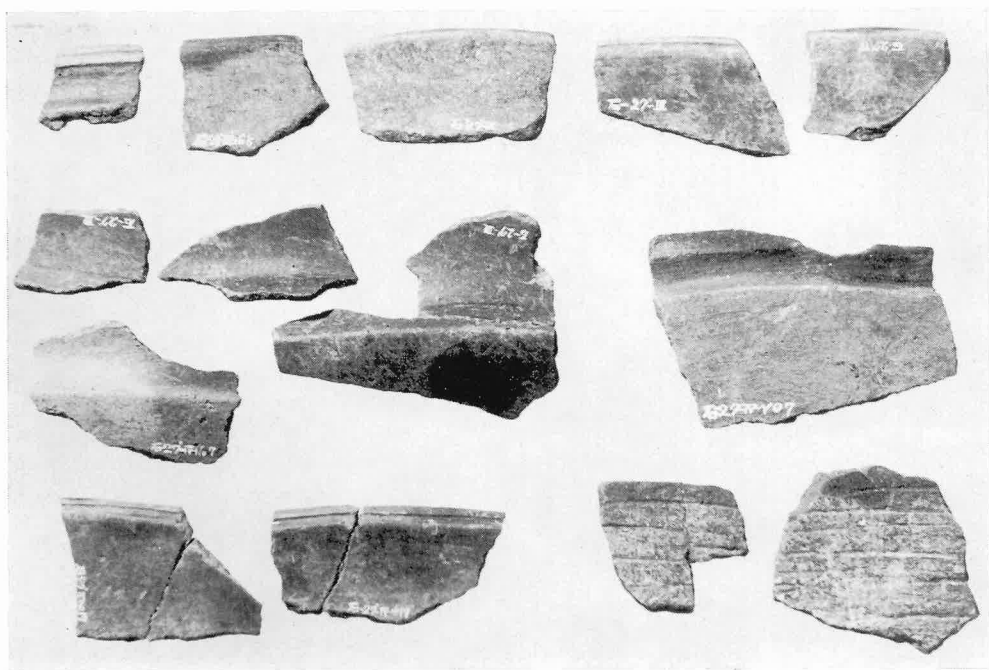
縄文後期前半土器 (1)



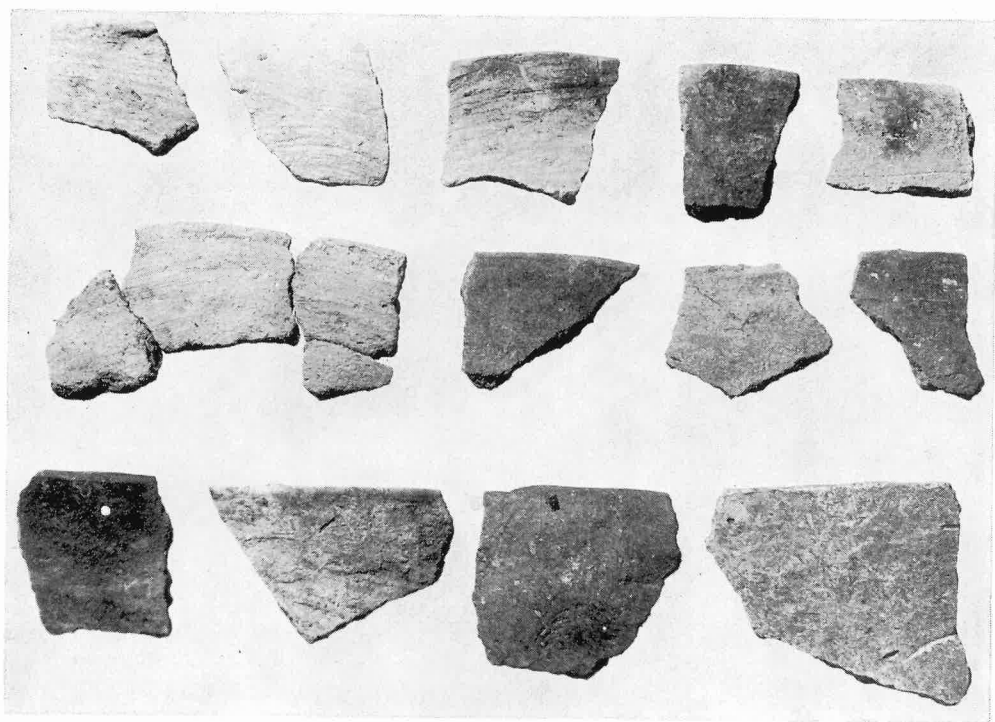
縄文後期前半土器 (2)



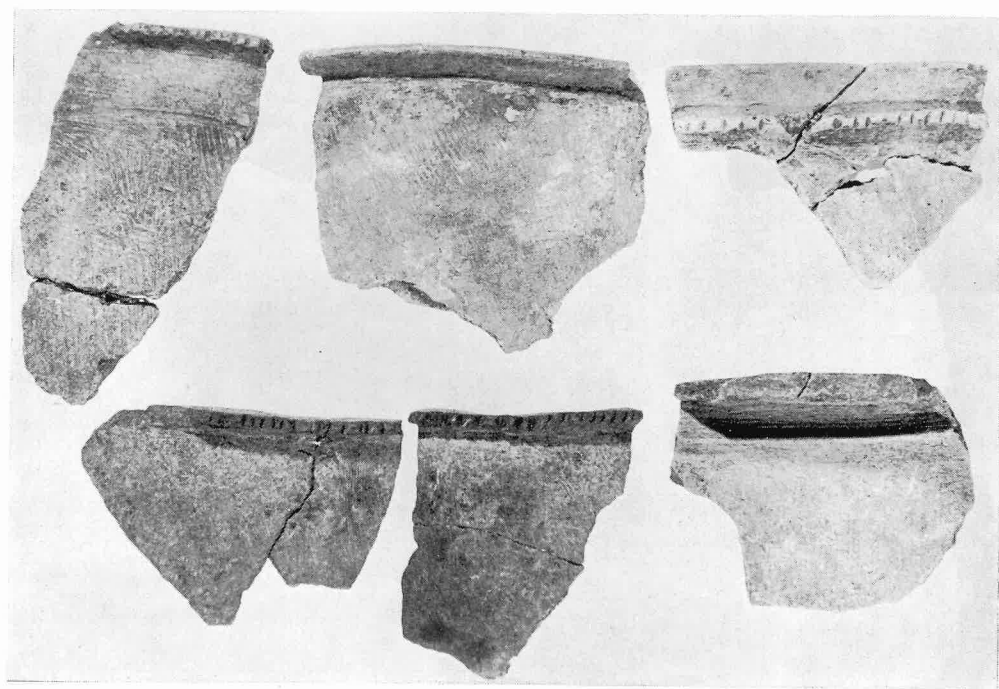
縄文後期後半・晩期土器



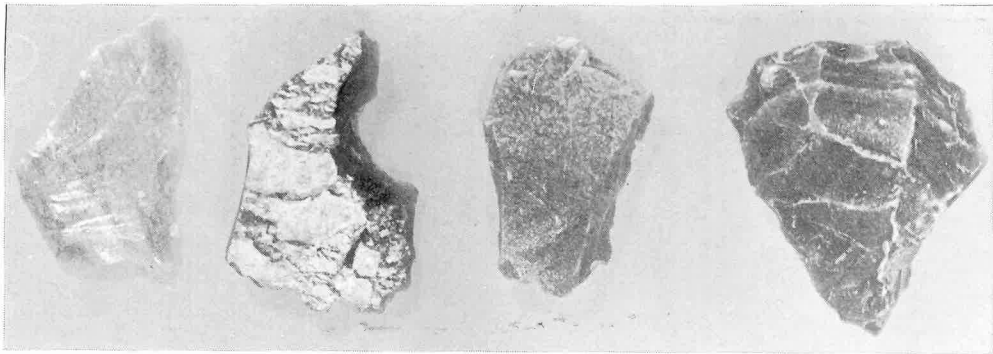
縄文晩期土器



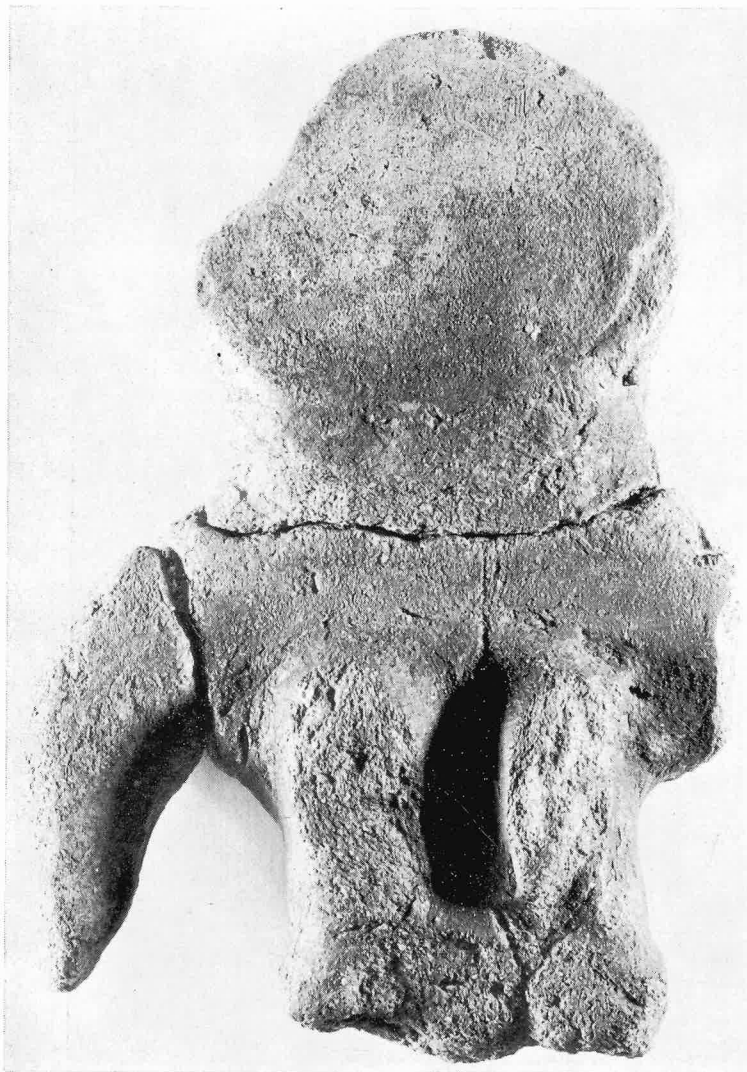
縄文時代条痕・無文土器



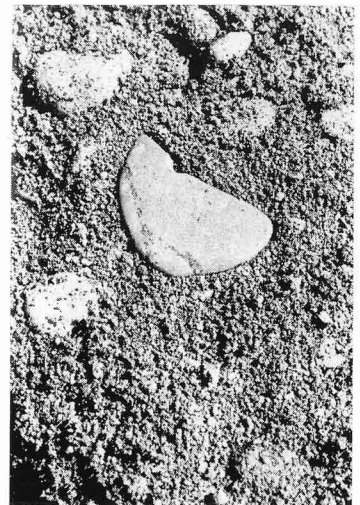
弥 生 土 器



石 器 (スクレーパー 類)



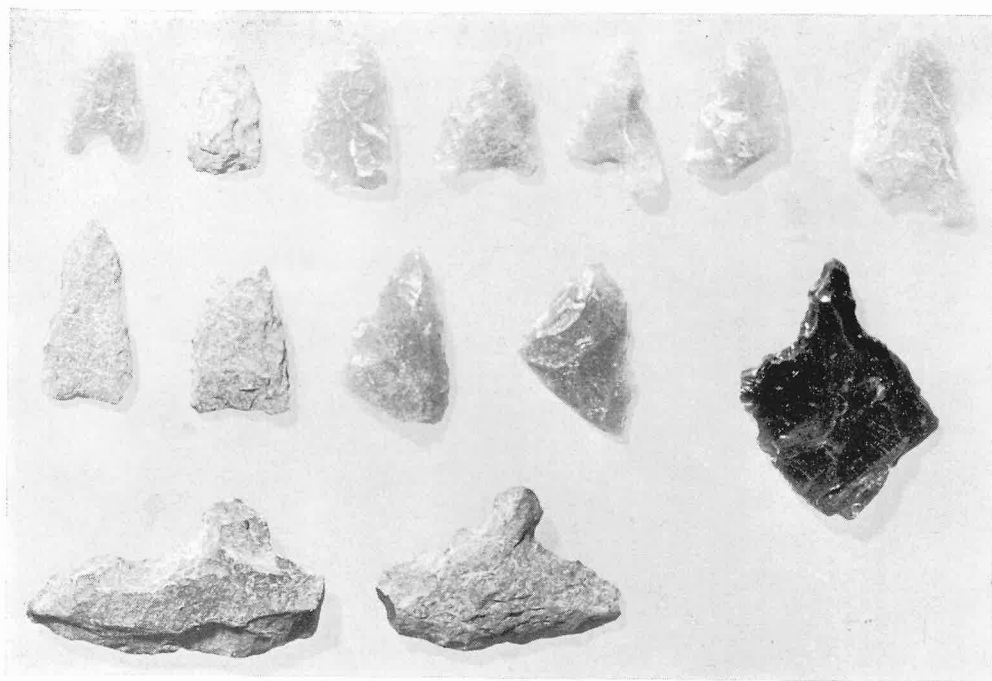
土 偶



玦状耳飾出土状態



尖頭状礫器出土状態



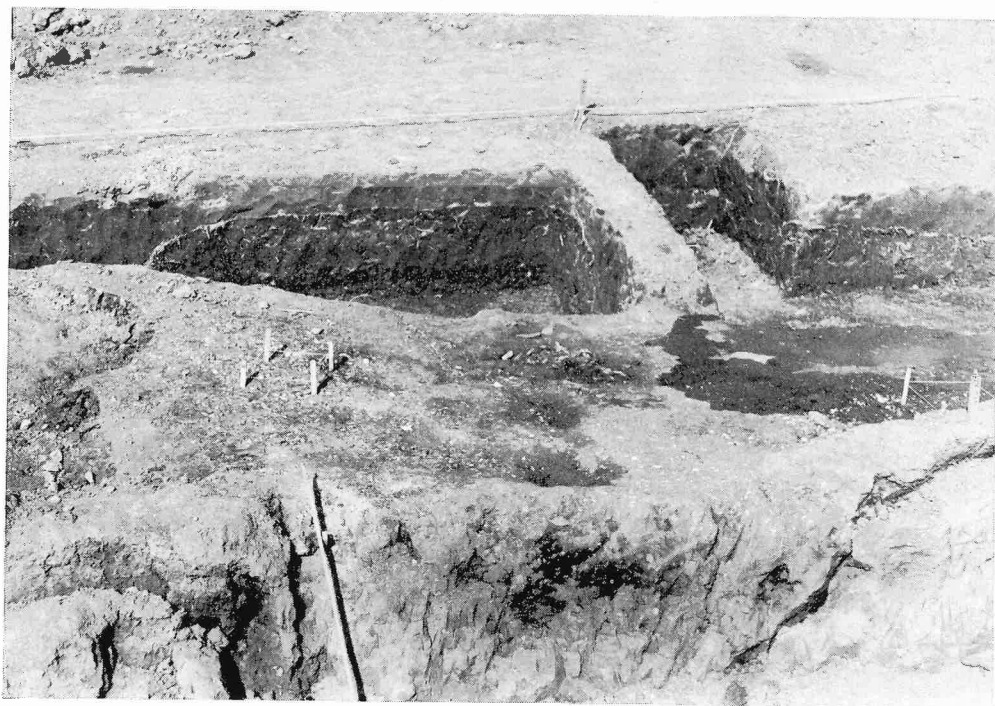
石 器 (石 鏃、石 錐、石 匙)



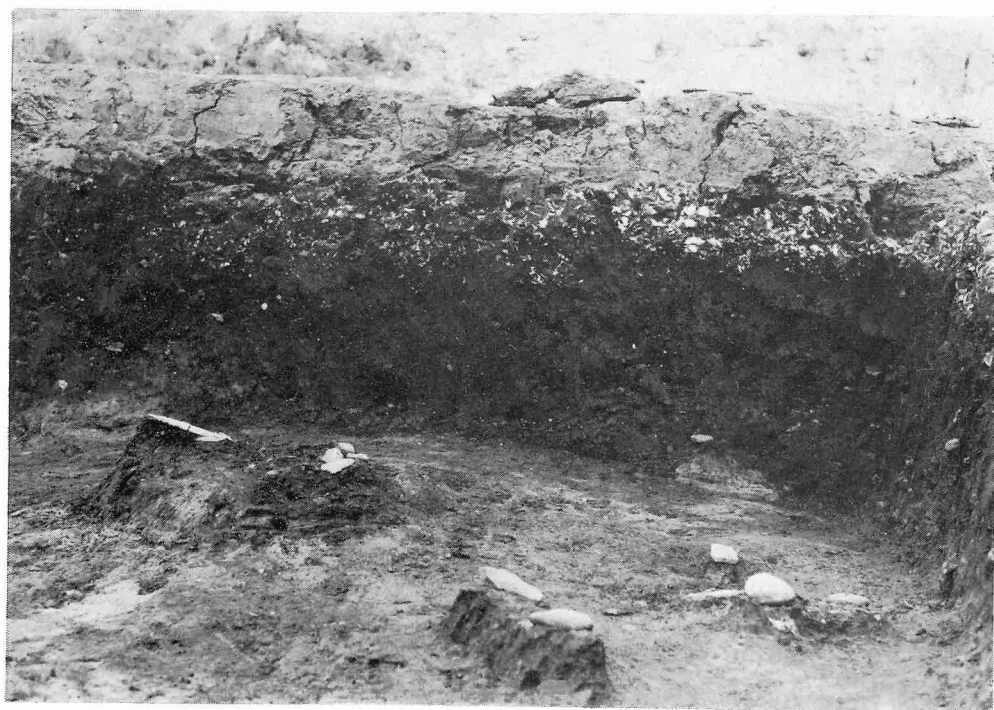
1 号 人 骨 出 土 状 态



2 号 人 骨 出 土 状 态



西和田貝塚全景



西和田貝塚最下部遺物出土状態



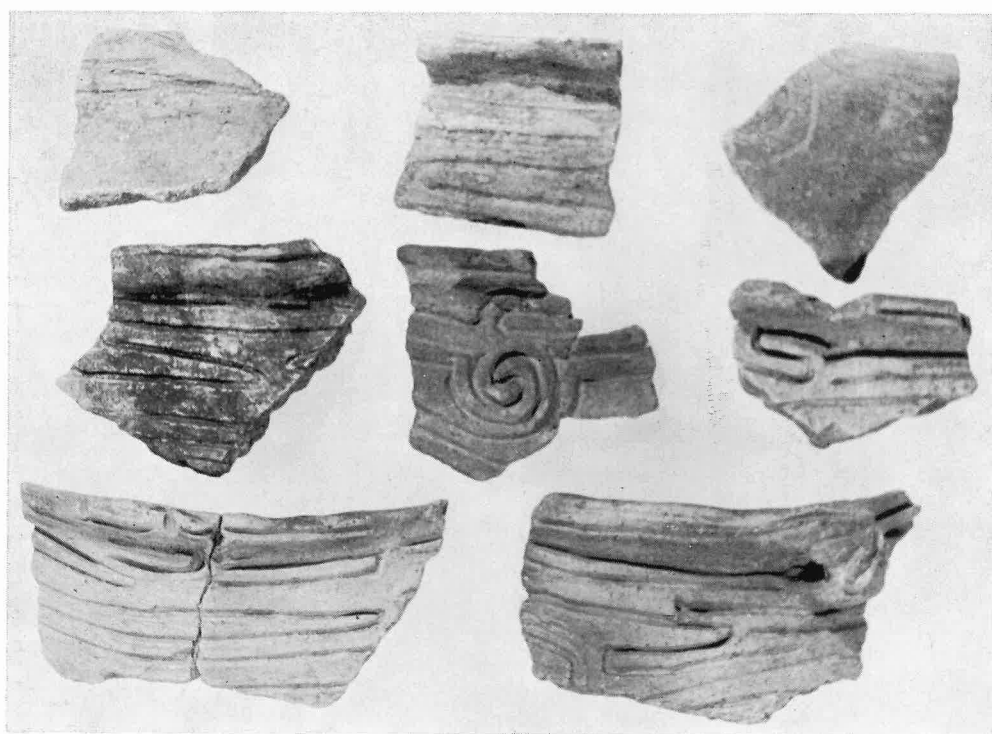
西和田貝塚南北土層断面



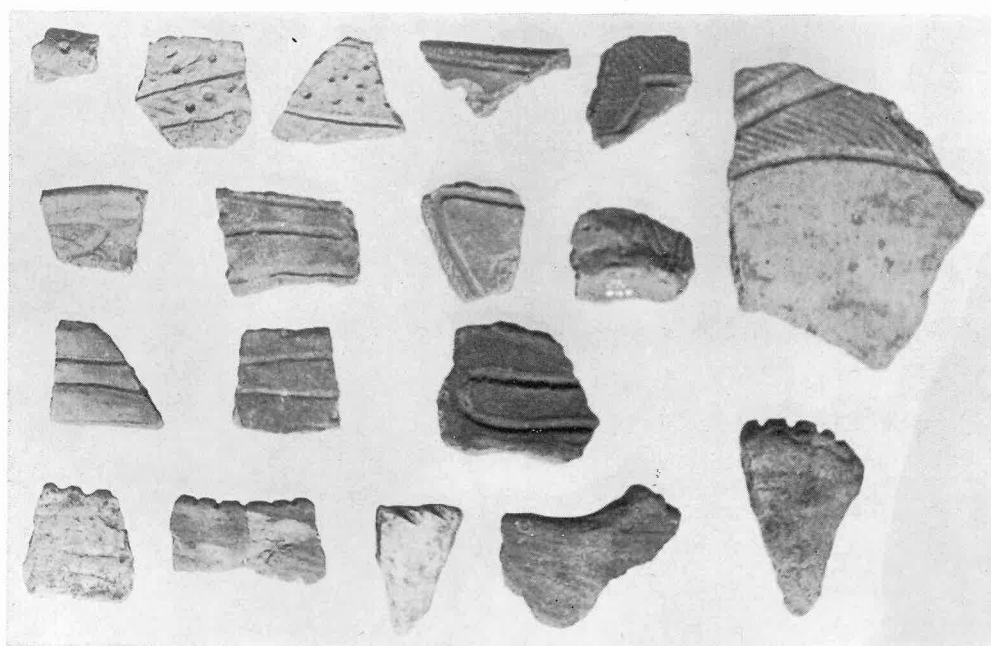
西和田貝塚東西土層断面



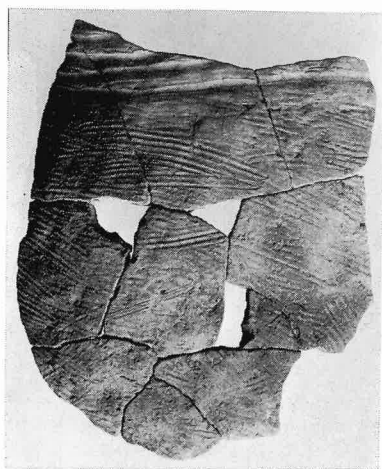
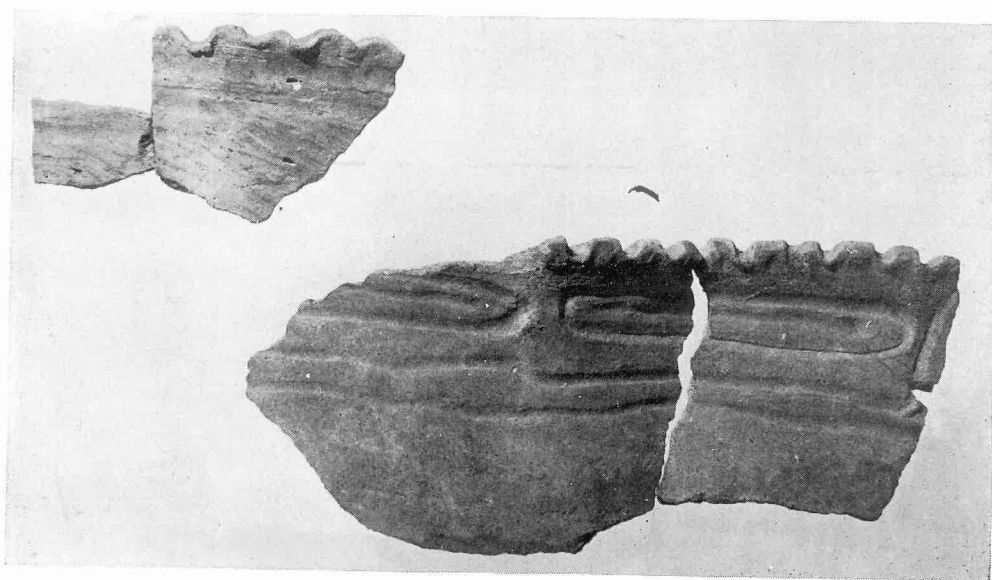
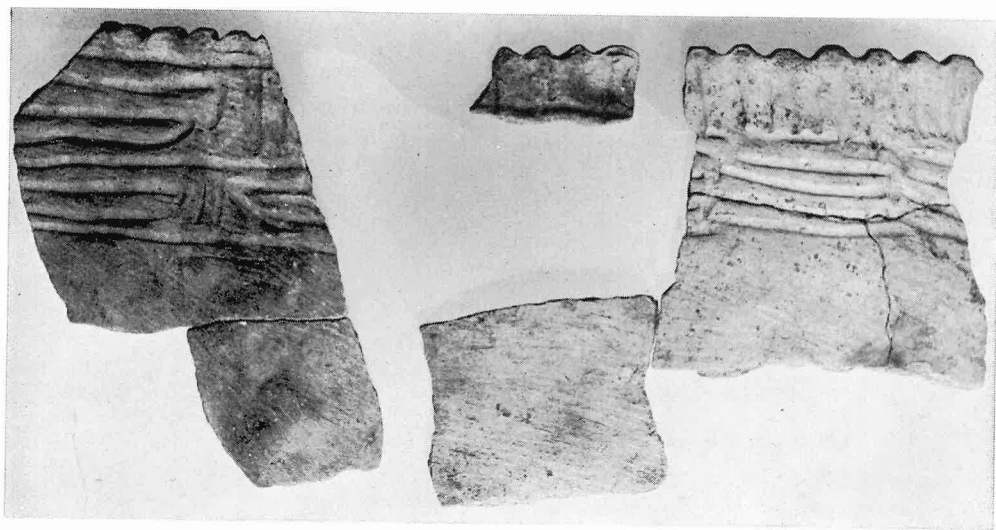
西和田貝塚貝層土器出土状態



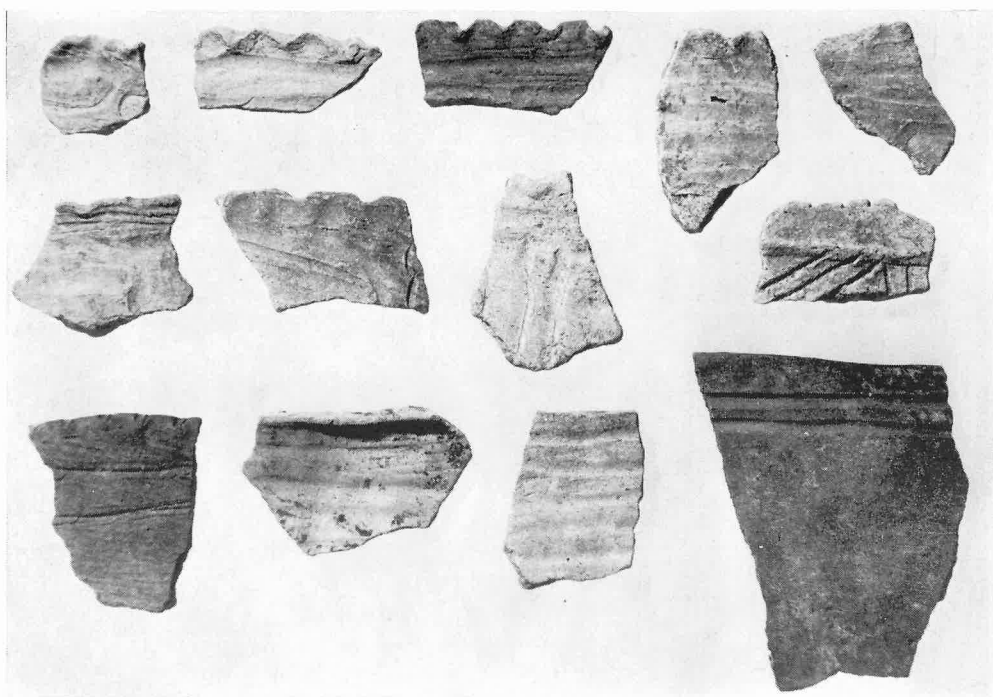
上層（貝層）出土土器 (1)



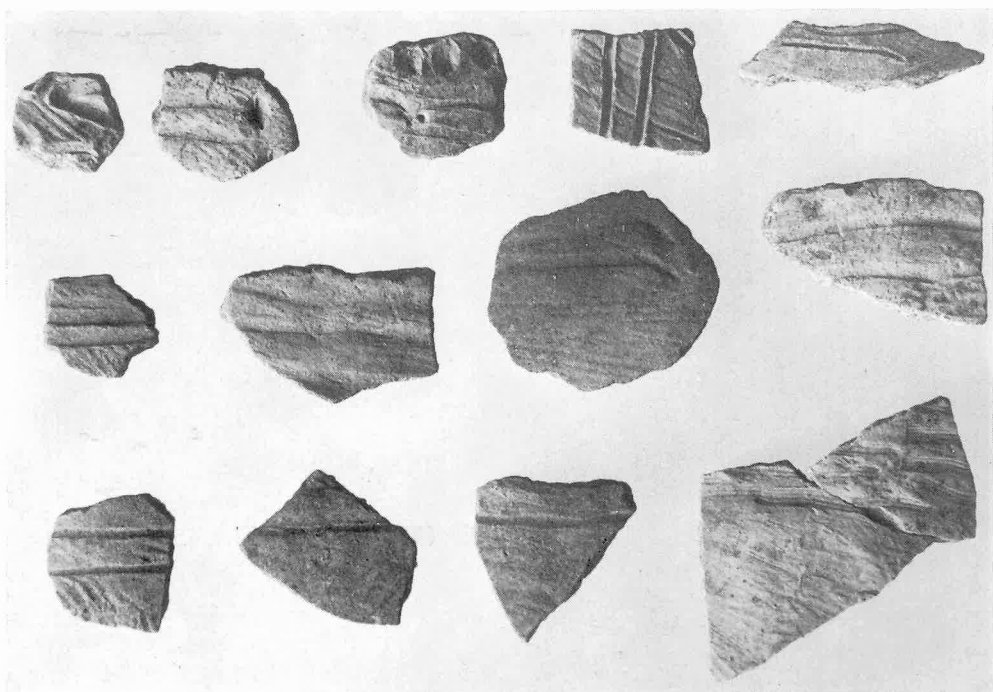
上層（貝層）出土土器 (2)



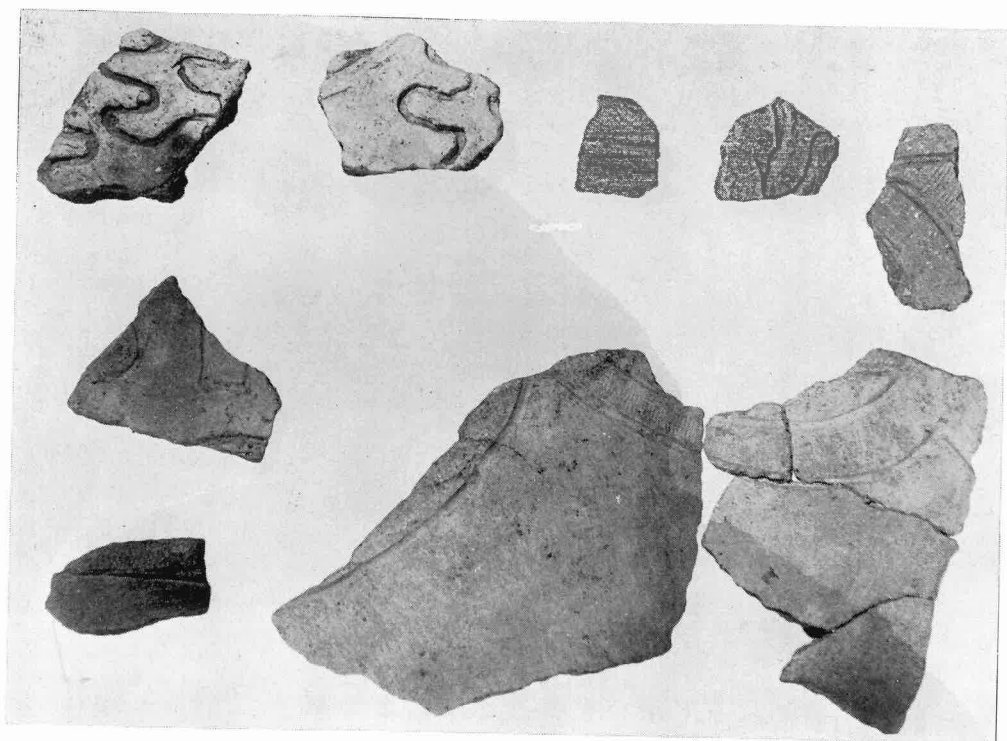
下層（黒褐色土）出土凹線文土器（1）



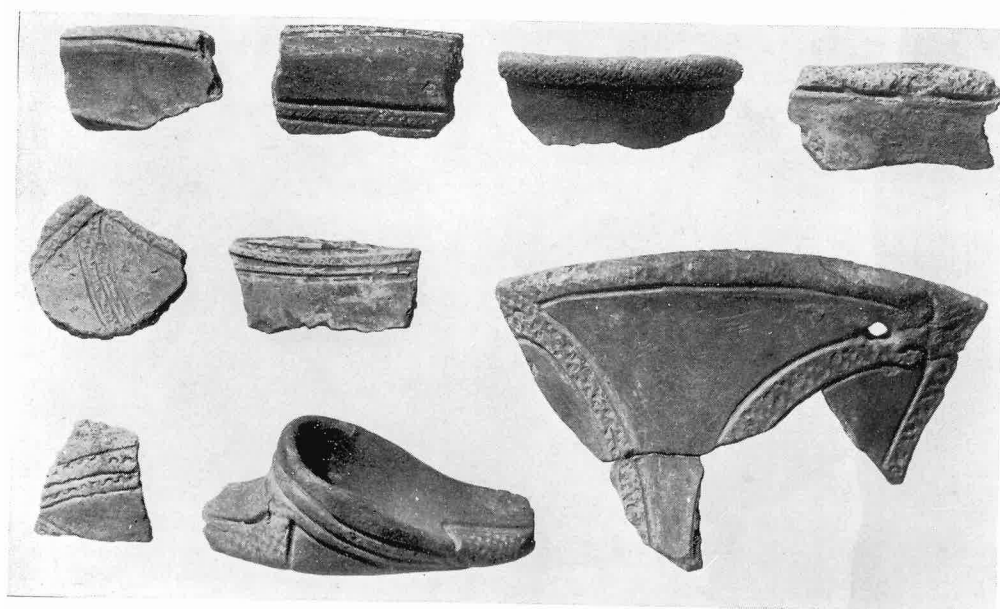
下層（黒褐色土）出土凹線文土器 (2)



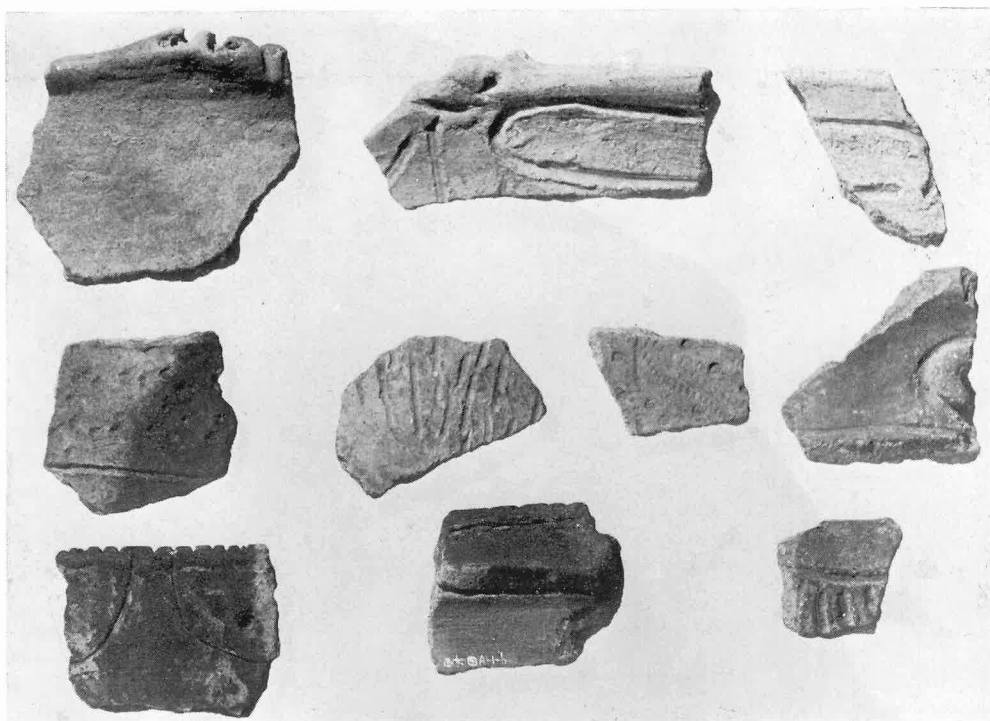
下層（黒褐色土）出土凹線文土器 (3)



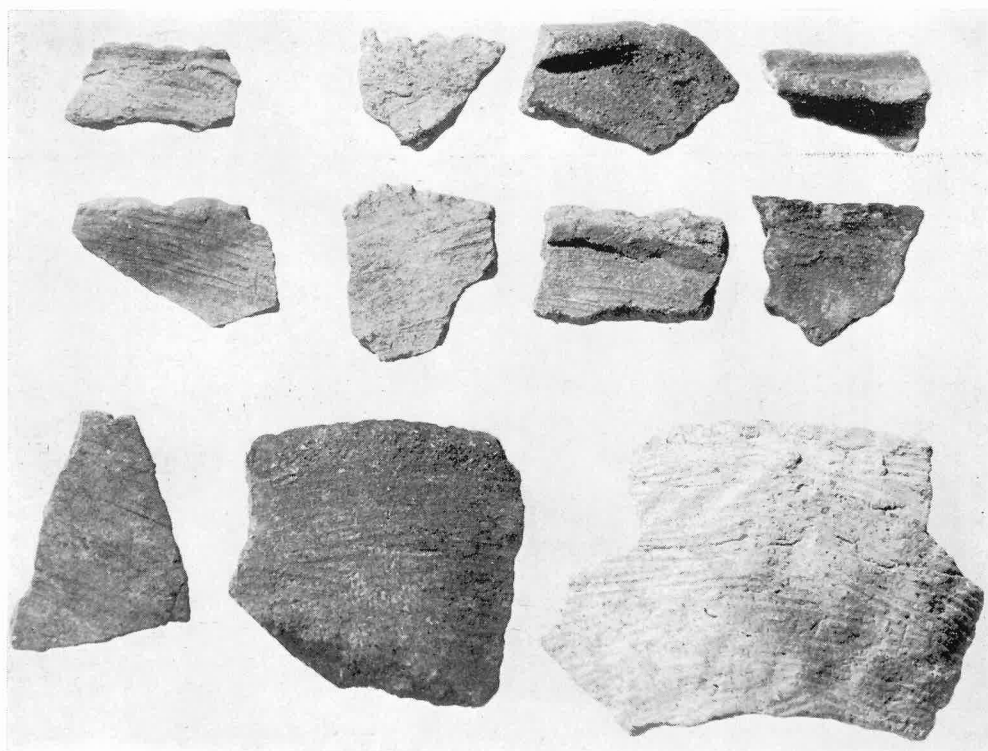
下層（黒褐色土）出土中津式系土器



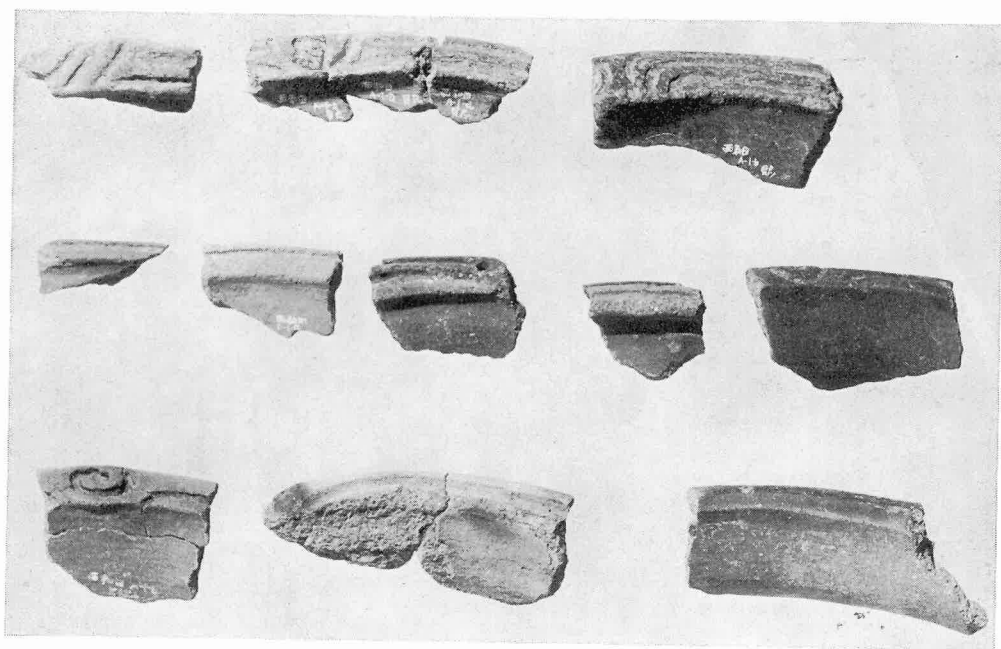
下層（黒褐色土）出土福田KⅡ式系土器



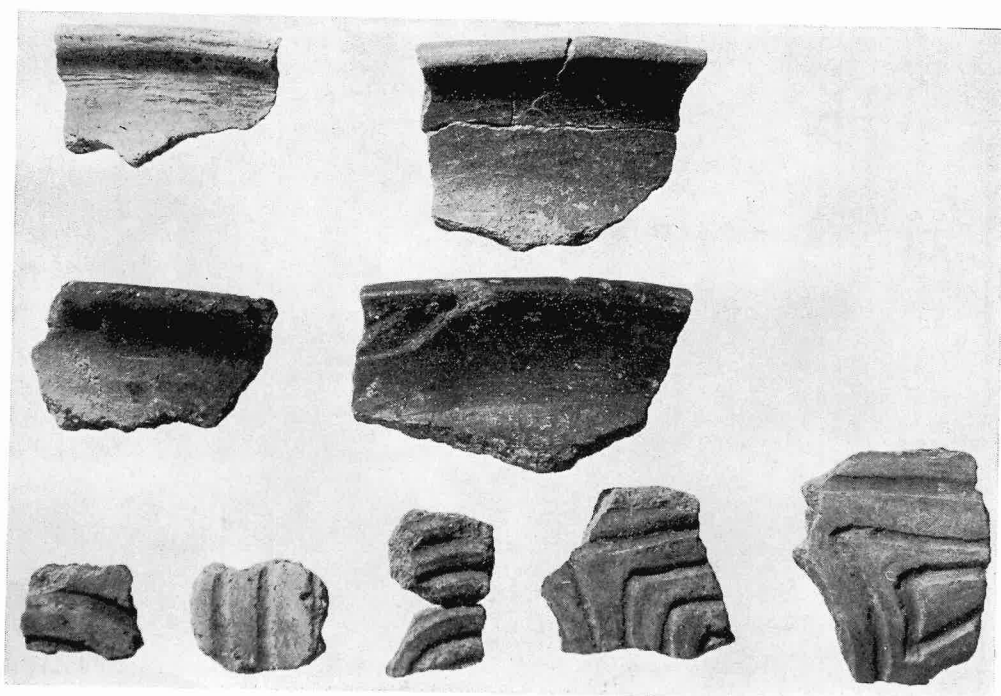
下層（黒褐色土）出土土器



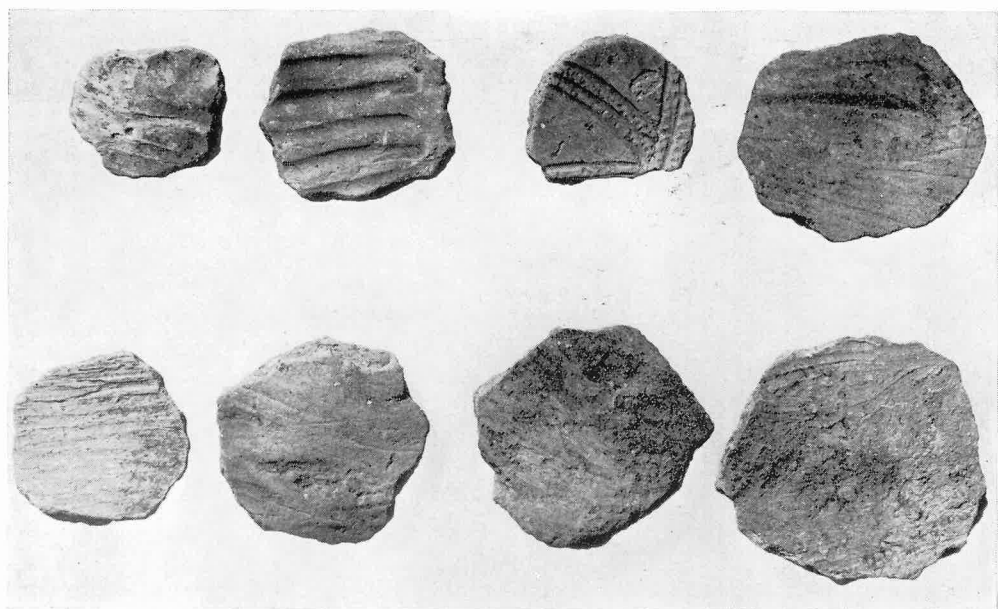
下層（黒褐色土）出土土器



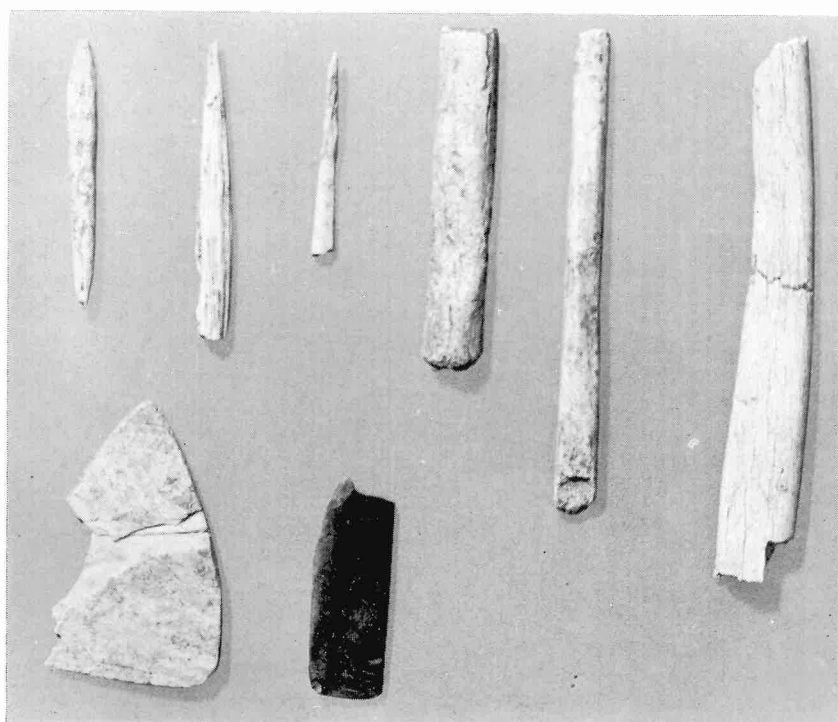
上層、下層出土土器



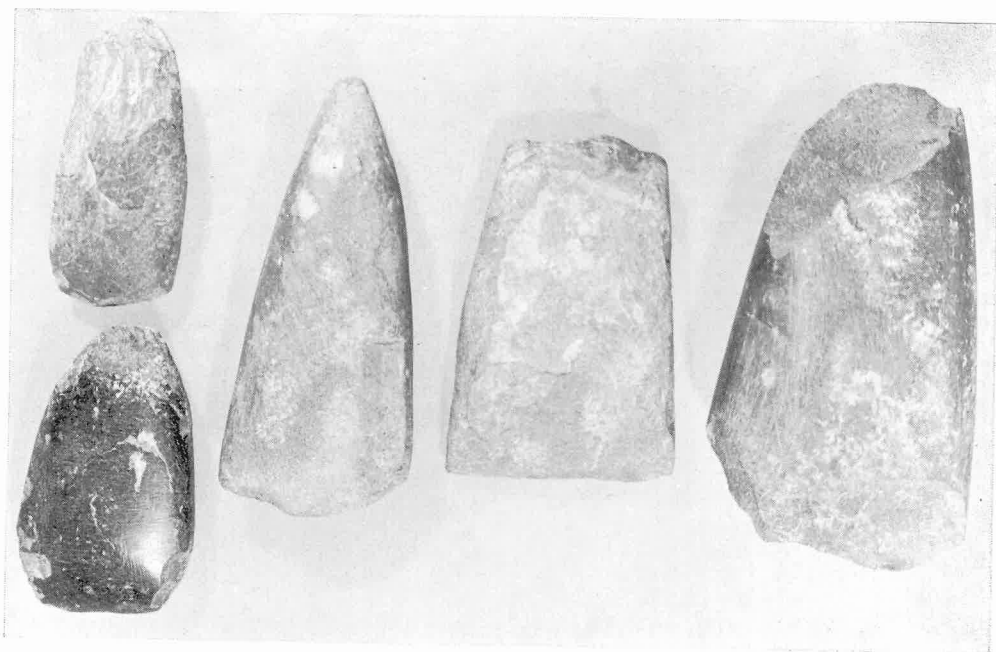
下層（黒褐色土）出土土器



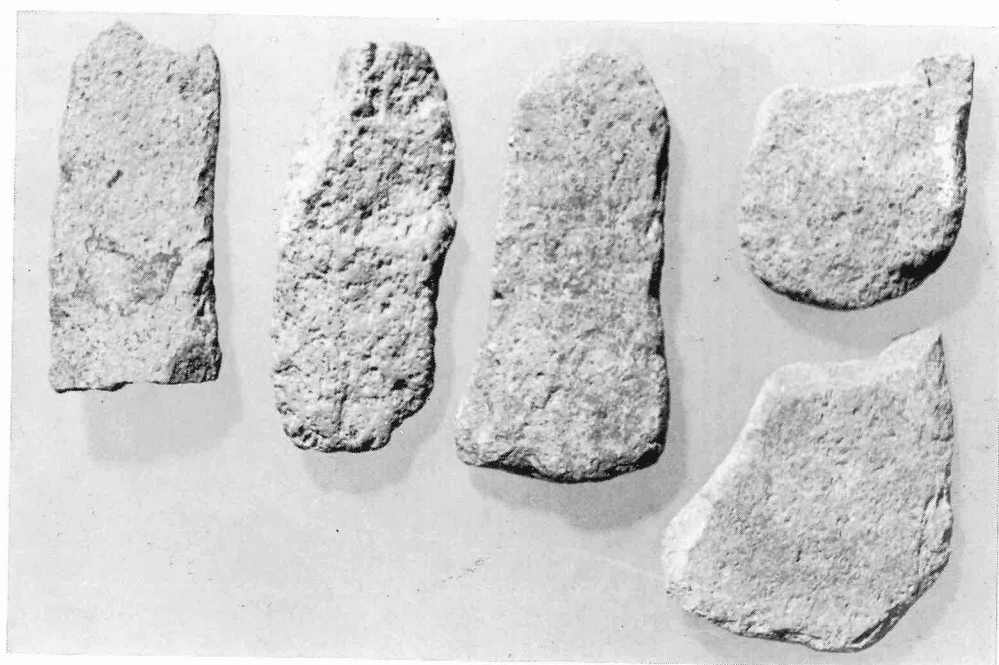
土器片再利用製品(メンコ)



角 骨 器



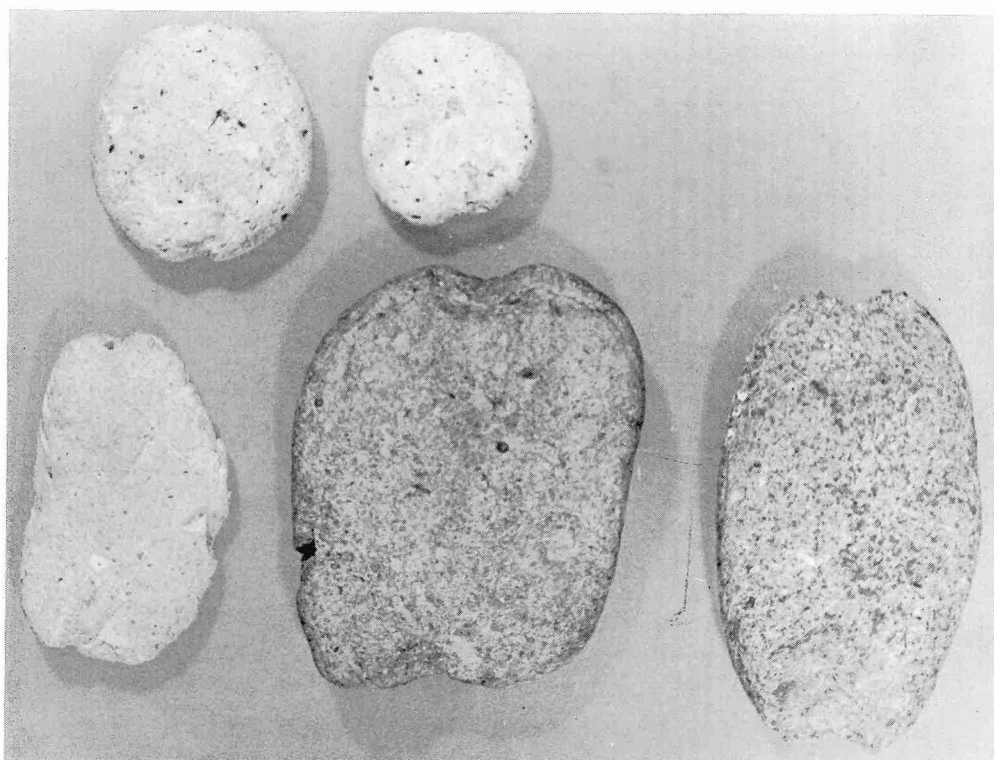
石 斧



扁平礫石器 (下層出土)



石 凹 器 礫

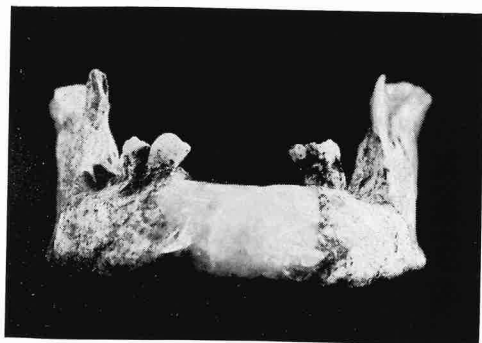


石 錘

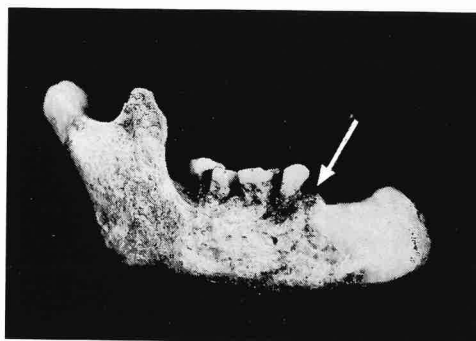
(右端は石原貝塚出土)



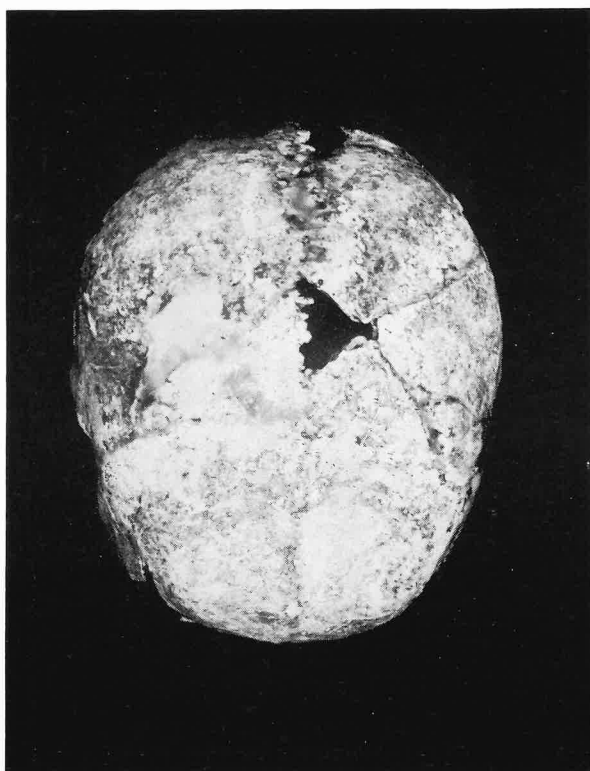
人 骨 資 料



下 顎 骨 前 面



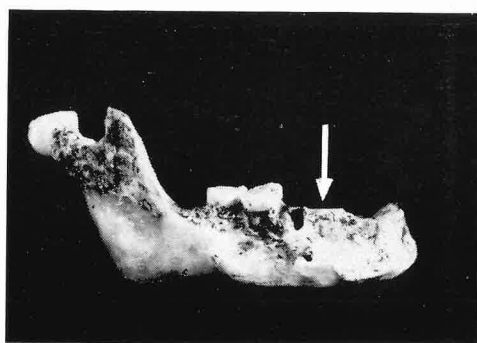
下 顎 骨 側 面（抜歯？）



頭 蓋 上 面



下 顎 骨 前 面



下 顎 骨 側 面（抜歯？）



上肢骨前面



上肢骨後面



下肢骨前面



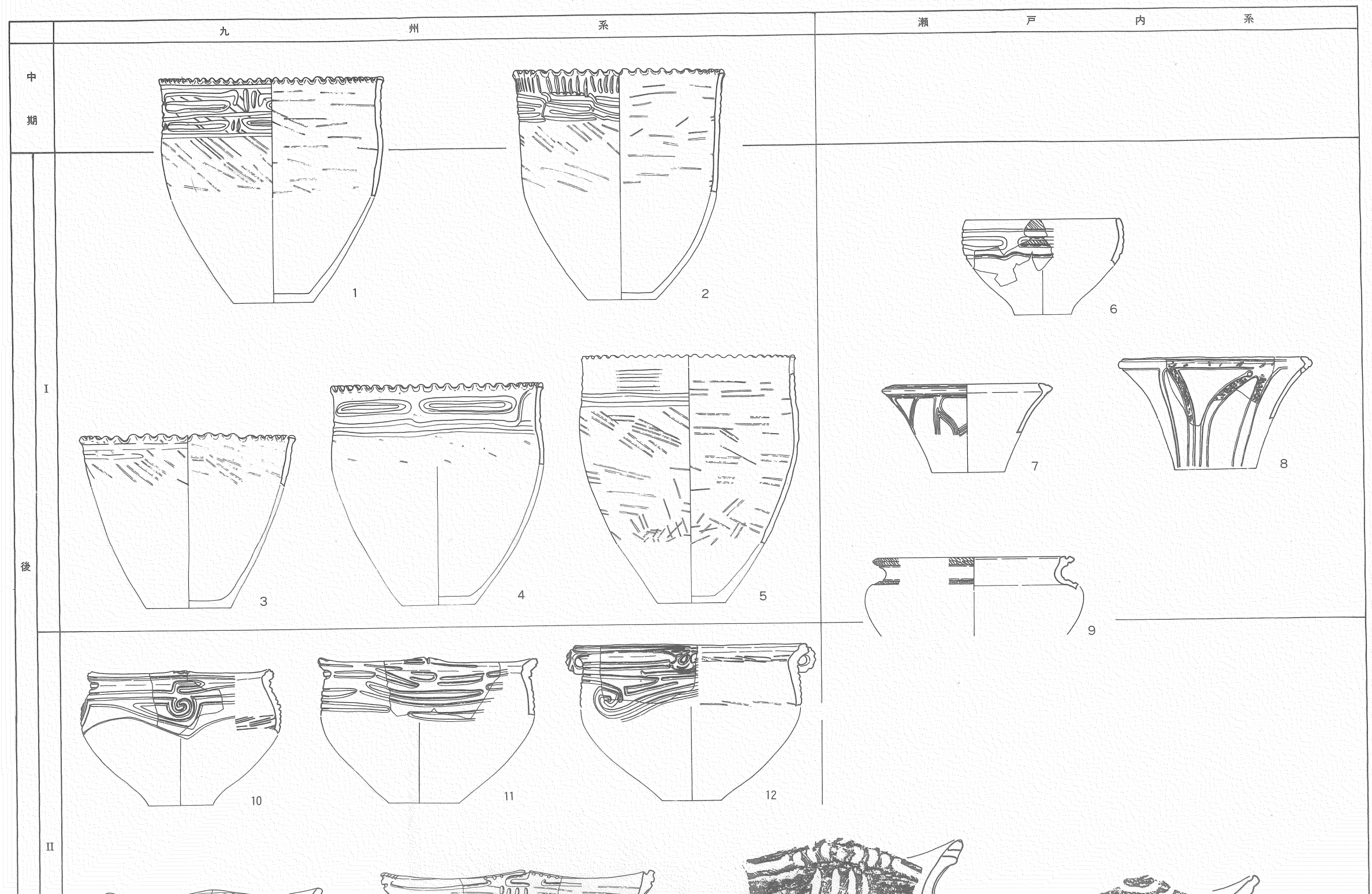
下肢骨後面

石原貝塚・西和田貝塚

—大分県宇佐平野周辺の縄文時代
貝塚の調査—

昭和54年3月31日

発行 宇佐市教育委員会
大分県教育委員会
印刷 明治印刷株式会社



期	II	10 11 12 13 14 15 16 17
	III	18 19 20 21 22 23 24
IV	25 26 27	
V	28 29	
VI	30 31 32 33	
晚	34 35	

西和田貝塚 (1～5・8～12) 石原貝塚 (6・7・28・29・33～35) 森貝塚 (13～16) 立石貝塚 (17) ワラミノ遺跡 (18～27) 高畑遺跡 (30～32) 縮尺 拓本 $\frac{1}{4}$ 他は $\frac{1}{2}$